

貞操逆転世界のおちんぼサムライ～私は彼女ですか？いいえ。あなたもセフレです～【挿絵あり】

たんぼりん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「ねえ、ねえ。よかつたらホ別50で私といいことしない？」そう言つて俺に声を掛ける女性。谷間を惜しげもなく晒しセックスアピールを強調する彼女は立ちんぼではない。立ちんぼをしているのは“俺”なのだ。ここは男女比が1:10になった現代とよく似たパラレルワールド。強姦ではなく“強漢”、痴漢ではなく“痴姦”。性に関する積極性が逆転した世界で女性は性と愛に飢えていた。『付き合ってくれ？』『セフレで十分だろ！このチンポ奴隷が』『結婚してくれ？』『うるせえ！さっさとマンコ出しやがれ』これは魑魅魍魎が跋扈する逆転世界に転生した主人公がズッコンバツコンと腰を振りながら世界もついでに救うお話。最低毎日1話ずつ更新します。

本作品はノクターンノベルズ様にも掲載してそちらは現在45話まで掲載しております。

待ちきれない方はそちらに移動お願いします。

ノクターンノベルズ様

<https://novell8.syosetu.com/n6>

837ic/

作者Twitter

<https://twitter.com/sXkouQbupk>

OikzJ

## 目次

逆転世界で従姉妹丼を謳歌する。

|                  |                |     |
|------------------|----------------|-----|
| 第壹話              | 痴姦にお仕置き        | 1   |
| 第貳話              | サムライ♡          | 8   |
| 第参話              | 男女逆転世界♡        | 27  |
| 第肆話              | 怪異             | 39  |
| 第伍話              | 妖怪王♡           | 54  |
| 第陸話              | デート            | 59  |
| 第漆話              | ランジェリーショップ♡    | 65  |
| 第捌話              | 試着室♡           | 72  |
| 第玖話              | 納〃精〃の義務        | 77  |
| 第拾話              | 性教育            | 82  |
| 第拾壹話             | 搾精看護師 早川美鈴♡    | 87  |
| 第拾貳話             | 誤報             | 99  |
| 第拾参話             | 一つ目鬼           | 107 |
| 第拾肆話             | 救世主            | 114 |
| 第拾伍話             | 抜け駆け♡          | 121 |
| 第拾陸話             | 試練             | 127 |
| 注)【設定】           | 世界観について        | 135 |
| 逆転世界で学園性生活を謳歌する。 |                |     |
| 第拾漆話             | 高校生♡ (すこしだけ)   | 137 |
| 第拾捌話             | タクミ当番♡ (すこしだけ) | 143 |
| 第拾玖話             | 混乱             | 150 |
| 第貳拾話             | 河童             | 155 |
| 第貳拾壹話            | 過去             | 162 |

第貳拾貳話 看護♡

第貳拾參話 謝罪

第貳拾肆話 水泳部

第貳拾伍話 プチ歓迎会

貳拾陸話 インタビュー

第貳拾柒話 白黒撮影♡

第貳拾捌話 ずぶ濡れ♡

第貳拾玖話 セフレ♡

第參拾零話 絶対領域

第參拾壹話 彼女♡

第參拾貳話 位階

第參拾參話 共同戦線

第參拾肆話 天狗

第參拾伍話 武蔵坊弁慶

第參拾陸話 阿呆

第參拾柒話 水泳部会議

第參拾捌話 寝取り♡

第參拾玖話 妖刀

第肆拾零話 契約

逆転世界で過去を謳歌する。

第肆拾壹話 ビデオエッチ♡

肆拾貳話 妖狐

第肆拾參話 本家と分家

第肆拾肆話 狭間

第肆拾伍話 母

第肆拾陸話 ぬらりひよん

第肆拾漆話 姉妹

第肆拾捌話 京都事変

第肆拾玖話 匠

幕間

第伍拾零回 契り♡

搾精看護師の1日

逆転世界で沖繩を謳歌する

幕間 逆転世界の美容院(再)

第伍拾壹話 プール♡

第伍拾貳話 九尾

第伍拾参話 通告

第伍拾肆話 遠征討伐

第伍拾伍話 鉄梨

第伍拾陸話 お仕置き♡

第伍拾漆話 連続絶頂♡

第伍拾捌話 話し合い

第伍拾玖話 勝負

第陸拾零話 ヒント♡

第陸拾壹話 愛

第陸拾貳話 怪我の功名

第陸拾参話 爆乳♡

第陸拾肆話 団欒

第陸拾伍話 海坊主

第陸拾陸 凶刃

467 461 455 445 438 433 423 418 414 408 401 396 390 384 380 368 356 344 338 332 327 322 316



逆転世界で従姉妹丼を謳歌する。

## 第壹話 痴姦にお仕置き

ガタン。ゴト。ガタン。ゴトン。

早朝のOLひしめく通勤電車。 電車の車輪がレールの継ぎ目に乗り上げるたびに聞き心地のよい音が車内に響く。

「はぁ……はぁ……」

もはや身を翻すことも出来ないほど人が密集した車内。

耳元に女性の吐息が掛かった。

現在、俺は痴姦を受けている。痴漢ではない。

尻をやさしく撫でられていたのはかれこれ5分ほど前の話。

今乗っている電車は特急であり、次の駅までは20分かかる区間を走行している。

その区間に入るやいなや、控え目だった手つきが、まるで猛獣のように俺の臀部を揉みしだくように変わった。

そして今、本丸を攻めようと背後から手が伸びて俺の下腹部へと添えられた。

トンネルに入り俺は窓の反射を使い痴姦ちかんに興じる女性の姿を覗き見る。

窓越しに映った女性は紫色の頭髪をボブカットし、年齢はおよそ20代後半。

表情はどこか疲れてはいるのだろう。隈が目立つ。

しかしながら顔立ちはまさに美形であり、

背中に押し付けられる胸部からはかなりの大きさの持ち主であることが伺えた。

ツツツツ。

爪を立てズボンの上からチンポに指を這わせる。

「……はぁ……はぁ」

絶えず艶めかしい息を吐く彼女は躊躇することなくズブリと俺のズボンの中に手をつ突っ込んだ。

「——ッ……おつきい……」

彼女の行為にとうの昔に隆々と勃起していたチンポを触った彼女は一瞬『ヒュツ』と息を漏らし、感想を漏を述べる。

「……きみ……お姉ちゃんにお尻触られて……おちんぼ勃起させるなんて……とんでもない」ビツチ」だね」

もはや俺の耳にキスをするかと言わんばかりに口を近づけて言う彼女の声に俺はピクリと体を震わせた。

亀頭の近くを握り若干の力を込めて前後にこすりあげる。

シュツ、シュツ。

「……それに……かつ、ターい♡……」

にぎにぎとサイズと硬さを確かめるように力を込めて、抜いてを繰り返す。

「……いいよ……イっても……」

彼女はどうかやら相当の痴姦の使い手らしい。

びくびくと腰を震わせる俺の限界を悟ったのかそう耳元で呟き、手の抽挿を早めた。

……シュツ……シュツ……シュツ

密集する電車の中で、人知れず美女にシコられるというシチュエーションに。

ついには我慢できずにそのまま精を吐き出した

ビュルルルルルルルル!

「……えっ……うそ……」

パンツの中で暴発する精液がまるでホースから吹き出す水のように勢い止まることなく吐き続け、彼女の手を汚していく。

量に驚いたのか、手を抜こうとした彼女の手を俺がガシリと掴み尚も精を吐き出し続けた。



“次はあく〇〇。次はあく〇〇駅でございます”

丁度、次の停車駅到着の事前アナウンスが車内に響く。

「お姉さん、一緒に降りてくれますか？お姉さんもオマンコしたいでしょう？」

ぐちよぐちよに濡れたパンツに不快感を覚えながらも、俺の肉棒は  
いまだ隆々と勃起している。

扉が開く寸前に俺は彼女の手の拘束を外して耳元でそつと呟いて、  
俺はまだ綺麗な方の手を掴んでドアが開くと同時に外へと駆けだ  
した。

最近改装された真新しい駅のトイレ。

空いていた優先トイレに彼女を放つてガチャリと鍵を閉めた。

「お姉さんのせいでパンツぐちよぐちよだよ。ちゃんと綺麗にしてく  
れるよね？」

正面から見る彼女は、やはり美しい顔立ちに、ブラウスからは、は  
ち切れんばかりの乳房をその存在を主張していた。

「……………え……………あの……………え……………」

今まで痴姦してきた相手に逆に誘われるという展開は初めてなの  
か、彼女はあうあうと言いながら混乱しているのが手に取るようにわ  
かった。

「ほら、俺のチンポ、きれいきれいしょ？」

カチャカチャと自らベルトを外し、濡れて気持ち悪くなったパンツ  
ごと一緒にその場にずり下ろした。

「……………っ……………うそっ!」

吐精をばかりなのに、いまだ、天を突くように勃起したチンポを見  
て彼女は目を丸くした。

“男性は連続での射精ができない”

これはこの世界の常識である。

それこそ、一度射精すれば人によっては1週間勃起することもない  
ような世界なのだ。

もちろん例外は存在する。

「ほら、早く綺麗にして、ほら」

凝視しながらも固まる彼女の肩を無理やり抑えこみその場に座らせて口元にチンポを近づけた。

「ほら、ザーメン臭いでしょ、ニオイかいでみて」  
ゴクリ。

やや呆然としていた彼女が目の前に突き付けられたチンポに唾を飲み込む音が俺まで響いた。

……スン……スン……スン

鼻を鳴らしてザーメンの匂いを嗅ぐ女性。

目は爛々と輝き、今にもパクリと啜えこみそうな雰囲気醸し出す。

「舐めたい？」

彼女に問うと彼女はコクリと頷いた。

「どうしようかな」

ニタリ顔をしてチンポを利き手で握り、そのまま彼女の顔にムチのように振り下ろした。

——パチン——

彼女の頬とチンポがぶつかり合う乾いた音が響いた。

「うーん。でも痴姦するような女性だしな」

——パチンツ！パチンツ！パチン——

何度も彼女の顔目掛けて振り下ろす。

時には鼻に、瞼に、チンポが当たるのを気にせず振るう俺に怒ることもなく、むしろ愉悦の顔を浮かべながら彼女は魚のようにパクパクと口を開いては閉じてを繰り返す。

「うん。やっぱり舐めさせてあげない。だからお姉さん鏡に手をつい

てお尻突き出して」

俺の言葉に彼女は「…………え…………」と言葉を漏らした。

「早く言う通りにして。じゃないと警察に突き出すから」

冷たい声音で告げると、一瞬顔を青ざめて、のそりと立ち上がり、洗面台に手を突き尻を俺に向けて突き出した。

まるで桃のようにピンっと上を向く尻をひと撫でしてから俺はスカートをめくりストッキングに爪を立てた。

ビリイッ！

「——ッ！な、なにを…………ッ！」

言葉をあげる彼女に「わかってるでしょ？」

とニヤリと笑いパンツをズラし、無理矢理マンコへ

チンポを突き立てた。

「イッ！ッ！」

ぬぷり。すでに十二分に濡れていたのか、全くの引つ掛かりもなく、啞えこむマンコの具合を確かめるようにゆっくりと腰を前後させた。

…………ぐちゅ…………ぐちゅ…………ぐちゅ

結合する箇所からくぐもった音を漏らる。

「おちんぼ気持ちいい？顔やばいよ？」

鏡越しでみる彼女の顔は口から涎を垂らして鼻息が荒い。

「でも、これはお仕置きだから」

前方に突き出した胸を服越しに掴みあげて抱き寄せた。

「——あっ〃…………お、おくに…………はいって…………」

上半身を起こした影響で、グポリと彼女の子宮口を押し拡げながらついにチンポが最奥へと到達する。

「いい？お仕置きだから絶対にイっちゃだめだよ。イったら警察に突き出すからね」

首をブンブンと横にふり俺の言葉に不可能だと告げる彼女に「じゃあ、警察だね」とほほ笑みを浮かべてそのまま腰を前後に打ち付けた。

パンツパンツパンツ！

「——イッ ツ——む、無理です！、あッ！……だ……だめッ！……おねがッ！……いッ！」

腰の動きに身体を震わせる彼女は奥を突くたびに、限界が近づくことを告げた。

ガブリ。

「——イッ ツ!!!」

イかせないように彼女の肩を力いっぱい噛むと鏡越しで彼女の顔がゆがんだ。

「我慢ね。我慢。ほら、もう少しで射精イくから」

パンツパンツパンツ！

「イッ！痛いです！っ……あっ！だめッ！ンンッ！ご！ごめんなっ！さいッ！」

再度彼女の肩にかぶりつき、腰を抽送を早めるとすぐに射精感が訪れ

俺はそのまま無遠慮に彼女の奥へと吐き出した。

びゅるるるるるるるる。

「あゝあッ！」

自身がいく前に射精されたことを理解し、声をあげる彼女の膺がまるでもう一回と言わんばかりにぎゆうぎゆうと締まる。

「……ああ、で、出ちゃった、……出ちゃったよう……」

瞳に涙を浮かべる彼女を無視して俺はズボっとそのまま引き抜き、トイレットペーパーで体液を拭った。

「おしおきだからね。これに懲りたらもうお姉さんは痴姦しちやだめですよ」

まるで絶望するように抜いた瞬間あたりと地面に腰を下ろす彼女になぜか罪悪感を覚えて俺は「じゃあ特別だよ」と笑顔を浮かべた。

「あーんってして」

生気の失った顔をあげて、口を開いた彼女にチンポを挿入してそのまま放尿する。

「……ンツ……ゴクツ……ゴクツ……ゴク」

彼女は目を見開き驚きを浮かべるも口内に発射された尿を喉を鳴らして飲み込んだ。

「どうせ、犯罪者さんは小便も好きなんでしょ」

ニヤリと醜悪な笑みを浮かべながらジャバジャバと彼女の口内へと放尿しきった後、最後に「これあげるよ」

と精液に濡れたパンツを投げ渡す。

「ふう、気持ちよかった。ありがとね」

やや呆然としている彼女にそう告げて、優先トイレを後にした。

## 第弐話 サムライ ♡

先の電車にて痴姦女ちかんおんなを成敗した後、電車を乗り継いで近辺では一番の繁華街の駅前です마트フオンを弄る。

「相変わらず物騒だね〜」

画面に映し出された事件 《輪漢》に關わる記事を読みながらふとそんな言葉を漏らした。

前世での俺は周りに嫌われるタイプの人間だった。

《天邪鬼》と言えば想像がつかだろう。誰かが意見を述べれば反対のことを述べて議論を混乱させる。

そんな俺に対して周りは一歩距離を置くようになり気がつけば友人、恋人、家族は消えていた。いや元々家族は居なかったか……。

そんな俺は事故に遭い死亡して気がつくところの、

《日本によく似た世界》へと転生していたのだ。

よく似ている世界ではあるが前世の常識は通用しない。

例えば――

「ねえ、ねえ。よかつたらホ別50で私といいことしない？」

スマートフォンをいじる俺の前に、誰かが歩み寄って立ち止まる気配を感じた。

同時にかける声。

顔をあげ、その声の主に視線を送る。

緑色の髪を肩あたりまで伸ばし、胸元をザツクリと開いたドレスシャツに短めのスカート履いて肌色成分が多い20代後半あたりの美女が俺の顔を満面の笑みで覗き込みながら話しかけてきた。

「……」

返事を返すことなく、俺は彼女の顔から足先にかけて視線を動かし、チラチラと視界に入る谷間に視線を戻す。

「もしかして50じゃ足りない?」

やや前傾姿勢を取り谷間を更にアピールする美女に

俺は「50で良いですよ」と愛想笑いを浮かべて言葉を返した。

『立ちんぼ』である。

彼女がではない。立ちんぼしているのは「俺なのだ」。

「マジ? やったあ!」

喜色満面でその場でぴよんと跳ねる女性の乳房がブルンと揺れる。

そう、俺が転生した世界とは、何を隠そう男女の貞操観念が逆転していた世界だったのだ。

これは人口における男女比率が

1:10

という途方もない乖離かいりが巻き起こした逆転現象である。

故に性に関する事項は前世と真逆となっている。

“痴漢”ではなく、“痴姦”

“強姦”ではなく、“強漢”である。

女性は日々、男性とセックスすることを夢想し、

日夜、美貌を磨く。

もちろん、この世界でも売春・買春はどちらも犯罪である。

俺は今、ナンパにあっているだけであり、

目の前の立つ緑髪の巨乳もあくまでナンパが成功して喜んでいるに過ぎない。

という“設定”である。

気持ち良い思いをし、美人を抱き、お金おしづかいももらえる。

一味ひとあじで3度おいしい状況に思わず笑顔がこぼれる。

「じゃあ、いきましようか」

女性の腕をつかみ、彼女の気が変わらないうちにスタスタとホテル

へと足を進めた。

「いや、ダメ元で言ってみただけどまさかOKもらえるなんてびっくりだよ」

どうやら気が変わる心配はいらなさそうだ。

手を引く俺の後ろで明るい声音が届く。

「あ、ところでさ、お兄さんいまいくつかな？」

17歳くらいに見えるけどさすがに中学生とかいうわけではないよね？」

言葉通り、彼女は年齢を確かめなるべく俺の前へと移動して顔を覗き込む。

進めていた足を止めて俺はほほ笑んだ。

「秘密です。もちろん美男局とかじゃないので安心して下さい。」

俺の笑顔にやや訝しげな顔を受かべる彼女の手を肉棒へとあてがった。

「ほら、お姉さんとエッチすることが楽しみでもう硬くなり始めるでしょ？」

俺の言葉を確認するように目を見開きながら優しく手のひらを添わせる彼女。

「男女がムラムラしたらセックスをする。そこに年齢は関係ありませんよ」

そう言葉を切って、彼女の腕を強引にひっぱり再び足を進めた。

“ 16歳未満の男子との性交は犯罪です！ 最低でも実刑10年以下の懲役が課せられます”

” No more! 男児売春”

ホテル街へと入ると電柱の至るところにそんなポスターを見かける。

「ホテルのこだわりとかありますか？」

俯きながら歩く彼女に好みはないかと問うと「え、う、うん、どこ



でもいいよ」と歯切れの悪い返事が返ってくる。

「じゃあ、ホテル代は俺がもちますのであそこに行きましょう」

立ち止まり、正面に聳え立つ宮殿のようなラブホテルを指さした。

「え、いいよ、悪いし、それにあそこ高そうだよ」

昼間ながら人気の少ないラブホテル街。

周囲にはピンク色の看板が爛々と輝き、彼女は肚をくくったのか、顔をあげて提案を拒否する。

「いや、俺がそこに行きたいって行つたのでホテル代ぐらいは出しますよ」

ニコリとほほ笑み、ウイंकをすると彼女が一瞬「・・・ウツ」と苦しそうに息を吐いた。

「・・・じゃ、じゃあ、お願いするわね」

どこか申し訳なさそう表情を浮かべていたが無視して俺は入口をくぐろうとした時

「キヤーーーーーー!!!」

女性の叫び声が近くで響いた。

そのすぐ後の今度は違う声音で『怪異だ!』『鬼が出たわよ!』と続く。

「——えっ!?鬼ツ!?危ないわ!!」

先ほどまでオロオロとしていた女性は俺の肩を押しして壁へと追いやった。

壁ドンである。

「隠れてー!」

胸を俺に押し付けながら顔をきよろきよろと動かし警戒する彼女。押しつぶされるように形を変える彼女の乳房を覗きながら俺はその場で舌打ちを漏らした。

「えっ(っ)めんなさい」

俺の舌打ちに彼女は誤解するように身体を離して謝った。

「違うよ。(っ)めんね。すぐ戻るから待っててくれる?」

離れてしまった乳房に俺は内心ショックを覚えつつ、彼女の腕からニユルリと逃げ出した。

「——あつー！ちよつとー！危ないわよー！」

俺の腕を掴もうと伸ばした手が寸前で止まった。

「え、おサムライさん？」

ネックレスをブチリと引き抜き彼女の目の前に突き出す俺を見て固まった。

「お姉さん。護ってくれようとしたんだよね？ありがとう。

ちよつとドキッとしてしたよ。

少しだけ出てくるけどちやんとここで待っててね」

掲げる五芒星のマークを口を開いて呆然とする彼女に「いつてきます」と短く告げて俺はその場から駆け出した

ビュンツッ！

風となり視線に映る景色が次から次へと切り替わる。

現場はどこだ。先の悲鳴の距離は近かったはずだ。

ホテルが密集する区画の間を駆け回るも特定には至らず、視点を変えようとホテルの屋根目掛けて跳躍してあたりを見渡した。

「あそこか・・・」

先ほど、立ちんナンバ待ちほしていた広場にピタリと視線を見据えて呟いた。

ナニカを中心に放物線を描くように距離をとる群衆。

中心に立つナニカの足元には逃げ遅れたのだろう。

2人ほどの骸むくろが転がり、所々身体のパーツが食い破られたように欠損していた。

「鬼ではなくて”青坊主”だな」

中心に立つその種族名を呟きながら観察を続けた。

凡そ、3mを超える筋骨隆々な青い体躯。

前世でいうとゴブリンを彷彿させる見にくい顔つき

手には一本の人間の腕を掴み上げ、骨付きを食べるようにむしやりと頬張っていた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

そんな化け物が不意に雄たけびを上げた。

「キヤーー!」「どけてくれ!!」「邪魔だ!どけろ!」

声に触発されるように至る所で叫び声が上がった。

正に恐慌状態という有様に俺は短く息を吐いて、化け物との距離を測る。

直線距離でおよそ100m。

ホテルの屋根から見下ろすように立つ俺に奴はまだ気が付いていない。

「たくっ、お前ら〃怪異〃は交尾しねえからわからねえーだろうが。お預け食らう俺の身にもなれってんだよ」

悪態をつかずにはいられなかった。

折角の美女とのセックスを邪魔された。

アイツが現れてなければ、すでに挿入まではいかなくともエレベーターの中で貪り食うようにキスをしていたはずだ。

やや勃起していたチンポも今やすっかり機嫌を損ねるようになり、を潜めている。

手にずつと握っていた五芒星のペンダントに俺は〃氣〃を送りこむ。

するとムクムクと掌で何かが膨張するような感触を覚えてすぐ、ペンダントは日本刀へと形を変えた。

いまだにヤツは、いや、〃怪異〃と呼ばれる青坊主は俺に気が付いていない。

「ごちとらエサを目の前にして〃待て〃させられてんだ!さっさと逝けや!!!」

ふくらはぎに力を込めて青坊主目掛けて飛んだ。

ビュンツ!

放たれた矢のように一瞬でトップスピードで青坊主に近づき、そのまま袈裟切りに斬り裂いた。

斬ツ!!!

「ギイヤッ、アアアアアアアアアア!!!」

肩から二つへと別れ、口のある方が叫び声をあげながら地面へと鈍い音を立てて崩れ落ちた。そして光の泡となりやがて消滅した。

「おサムライ様だツ!!!」

「サムライ様が〃怪異〃を祓ったぞ!!」

「おサムライさまぁー!!!!」

シャボン玉のような泡がきらきらと空に舞い〃怪異〃の脅威が去ったことに気が付いた群衆の一人が俺を見つけて声をあげると、伝播するように周りから歓声が上がった。

「ありがとうございます!!!」

俺を囲うように取り巻く群衆は感謝の言葉を告げるので笑顔が浮かべ手を振って応える。

「キヤー——!!!」先に聞いた叫び声とは違う黄色の声援が場に響いた。

そんなアイドルのような扱いに俺は愛想笑いを返しながら、その場を後にした。

「ごめんなさい。待ちました?」

現場から離れ、追っ手を撒くように遠回りをし、時折走り、建物を飛び越えてラブホテルに戻るころには、結局30分は経過していた。

ホテルの入り口で体育座りをしていた女性は俺の声に気づいた瞬間、

ガバつと音を立てるように顔を挙げ目を見開いて一瞬固まった。そんな状態に俺は「大丈夫だった?」と声を掛ける。

「い、いえ!だ、大丈夫ですツ!!お、おサムライ様こそ、ご、ご無事ですかツ?」

別れる直前とは違う態度に思わずプつと噴き出した。

「大丈夫ですし、そんなに恐縮しなくてもいいですよ」

ペロリと舌をだしおどけた表情をうかべて、俺は彼女の手を引きやつとこき、目的のホテルに入った。

「あ、あのお、おサムライ様だとはしらず、ほ、本当によろしいんでしようか?」

おずおずと確認の言葉を告げる彼女に俺は「勿論」と返して微笑む。

彼女が恐縮するのは俺が“サムライ”呼ばれる職業に就く者だからだ。

先に出てきた青坊主を含めて今世は前世と違い“怪異”と総称される鬼や悪魔などの妖怪が頻繁に現れて人間を害する。

今世の人類の歴史はそういった怪異との争いの上で成り立っている。

そして人間の対抗手段がサムライを始めとした退魔師と呼ばれる者たちであり、

その中でも男性しか就けない“サムライ”は退魔師の象徴として多くの一般市民は敬い、当然のごとく敬意を払う。

加えてただでさえ少数派である“男性”が自らの命を賭して戦う

ことからアイドルに並ぶ人気を誇っている。

彼女のおどおどした様子を無視するように俺は入口のすぐ横に設置されたいくつかの部屋の特徴を挙げた液晶から一番高そうな部屋をタップし、壁側に設置された誘導パネルに従い黙々と歩を進めた。

「あ、あの、ほ、本当に私なんかがおサムライ様と、その、シてもよろしいのでしょうか？」

もはや畏れに近い感情を表情に出し、そんなことをのたまう彼女に俺は

「良いって言ってるでしょ？早くいくよ」と告げて腕をグイッと引つ張って彼女を引き寄せた。

「次、めんどくさいこと言ったら、それこそ“逮捕”するよ？いい加減肚をくくってセックスを楽しもうよ」

俺は退魔師に与えられている警察と同じ“逮捕権”をちらつかせた。

もちろん警察と同様の逮捕権ではない。

退魔師に与えられているのは怪異の討伐（封印）を邪魔をする市民に対してのみ認められている逮捕権であるが、嘘も方便である。

しかしながらその文意はどうかや効果こうか靦面めいめんなようで、一瞬表情が揺らいだと思ったら次の瞬間にはコクリと力強く頷き、決意を表明するように俺の腰に手を回してより密着してきた。

その様子に思わず笑みを俺は溢して、そのまま最上階の一室へと向かった。

高級ラブホテルの最上級と思われる室内にはいくつもの部屋が存在し、はては小さいながらプールまで設けられていた。

そんなホテルにテンションがあがった彼女はしばらく部屋の探索をした後に、ソファアーに座りお茶を飲んでくつろいでいる俺の正面に立ち、「今日はよろしくお願いします」とやや真剣みを帯びた表情を浮かべながら彼女は俺にペコリと頭をさげる。

「こちらこそよろしくお願ひしますね。えーつとずっとお姉さんって呼ぶのも変ですし、なんとお呼びすれば？」

俺の問いに彼女はキリつとした表情を浮かべて、

「城ヶ崎亜美じょうがさきあみと申します。おサムライ様」と言葉を返す。

「あ、おサムライ様」って呼ばれるのは好きじゃないので、普通に俺のことはタクミって呼んでください」

俺は、今世での名前を彼女に告げると亜美さんは「畏まりました！」と返事を返した。

「あ、それと敬語も様とかの敬称も不要です。最初会ったときみたいに砕けた口調の方がうれしいかな。折角これからセックスするのに堅苦しいのは楽しくないし」

俺の言葉の“セックス”という言葉に彼女はピクリと肩を震わせて「わ、わかり・・・分かったわ。た、たくみくん」と一部言葉を詰まらせながらも答える。

「あ、もしよければ横に座ってよ。亜美さんのことと聞かせてほしい」

俺は彼女の緊張や堅苦しさを解くために座っているソファアの横をポンポンと手をたたき彼女を招いた。

(サムライってだけでめんどうだな)

そんな感想を心根に抱くも表には出さないように俺は愛想笑いの仮面を被る。

「では、あ、じゃあ横にいくね」

亜美さんはそう言っておずおずと俺の横に座ってから「フー」と長い息を吐いた。

「緊張してる？」俺の言葉に彼女は「ええ。少し」と短く言葉を返す。

「よかったらタバコ吸っても大丈夫ですよ。俺タバコの臭い嫌いじゃないですから」

俺の提案に体をクンクンと嗅ぎ「臭うかしら？」と聞く彼女に「気にはなりませんけどね」

と笑みを浮かべる。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言つて亜美さんは慣れた手つきでタバコに火をつけ、その場でフウーと息を吐いた。

「ありがとうね。それで私のことよね」

タバコに口をつけたことでもいくらか落ち着いたのか。

よそよそしさが無くなりぽつぽつと自身について語ってくれた。

曰く、歳は27歳であること。

仕事は外回りの営業をしており、今日は商談だったこと。

商談も無事に終わり今日で今月の営業ノルマも達成してその解放感から立ちんぼを買おうと銅像前をうろちよろしていた時に俺を見つけたこと。

会社での営業成績はトップを独走し、お金には正直あまり困っていないこと。

処女ではなく、いままでに何度か買春をしていること。その他様々な話をした。

会話の合間で「だからホテル代も私が持つわよ」と言ったときには俺から丁重にお断りをする。「たくみくんは変わっているわね。ここまで女性の話を聞きたがるのも会話をしたがるのも私にはあまり経験がないわ。おサムライ様だからってことではないわよね?」と口にする。

この世界では男性が圧倒的に少ない為、男は基本的に我が強くわがままで高圧的である。故にここまで男性と会話したこともほとんどなく、買春の時は部屋に入るまではそれなりに言葉を交わすも、いざ部屋に入りお金を渡すと、『じゃあ、さっそく挿入しましょう』と時短に走るのが多いと言う。

「あ、そうだ。お金、お金」彼女はそう言つて鞆に手を伸ばし、やや分厚くなった銀行の封筒を俺に差し出した。

「はいっ。50万円。一応確認して」そう言つて封筒ごと渡された俺は一旦中身の一部だけ封筒の口から出して、すぐさまそれを戻した。

「確認しなくてもいいの?」亜美さんは首をかしげて俺に問う。「はい。亜美さんが俺を騙そうとは思えないので。あつ、もし多めにチツ



プとか入れてるならちゃんと言えましょうか？」とイタズラっぽく笑う

俺の言葉に彼女は「入れてないわ。でも今からでも入れられるなら追加で入れたい気分」と応えるので「では、大丈夫ですね。あとチップは不要です。俺も楽しむので」と言葉を返した。

「じゃ、じゃあ、今度は良ければたくみくんの話も聞きたいわ。私ばかり話しちゃったし、それにおサムライ様のお勤めについて聞いてみたかったの」

亜美さんの言葉にいたずらっぽい笑みを浮かべて彼女の胸に手を伸ばしながら耳元でつぶやいた。

「それはピロートークでお話しますよ。もう俺、我慢できないので」  
彼女に告げて俺は亜美さんの「見て」と言わんばかりに主張している谷間の間に手をズボッと差し込みブラジャー越しにやさしく揉んだ。

「あッ」

亜美さんは短く声をあげて一瞬だけ体を震わせた後、快感に身をゆだねるように目をつぶった。

「大きいですね。Hカップくらいですか？」

片方の乳房でさえ、手のひらに収まりきらないボリューム感に俺はサイズを確認すると、彼女は身をよじりながら「Iカップ」だと返事をした。

「大きいですね。あ、良かったら上着脱いで下着姿見てもいいですか？」

俺の提案に彼女は「わかったわ」と返して、その場で立ち上がりブラウス脱ぎブラジャー姿を俺に見せつける。

「スカートも脱いでくれると嬉しいかな」

俺の追加の注文にもコクリと頷いた彼女はジーツとチャックを下ろしそのままストンと脱いで下着姿となった。

「綺麗な下着ですね」

俺の言葉通り、彼女の下着は上下セットの黒をベースとし、所どこ

ろに白いフリルをつけ光沢のあるサテン生地で大人の魅力を全面に押し出していた。

「それに・・・Tバックですか」

俺は、彼女の背後に回り、臀部を確認すると、そこには生地が尻の間にしか存在せず、ブリッツと桃のように鍛えているのかわかる張りをしていた。

「も、もしかしてTバックは嫌い？かしら」

俺の反応に不安を覚えたのだろう。そんなことを聞いてくる亜美さんに俺は「いいえ。好きですよ」と応えて彼女の臀部にパチンと軽くたたいた。

「ンツッ！」

その衝撃に反応するように彼女は短く声をもらしてから「なら、良かったわ」と答えた。

「ちよつと失礼しますね」

俺は、彼女にそう告げて、そのまま後ろからブラジャーのホックを外し肩紐を脱がせてそのまま背後から抱きしめる。

「アツ。は、恥ずかしいわ」

胸を押しつぶすように、いや、胸ごと彼女の感触を確かめるように抱きしめる俺に彼女はそう答えるも抵抗するぞぶりは全くない。

「これから、もっと恥ずかしいこと一緒にしましょうね」

俺は彼女にそう言って大きく実っている乳房を下から掬い上げるように持ち上げて重量感を確かめる。

「ンツッ。」

亜美さんは体の力を抜いて、俺に身体を預けるように背もたれた。

ムニユ、ムニユ、ムニユ。

27歳らしく、10代の子と比べるといくらか柔らかくなった乳房は俺の指はズブズブと食い込ませながら、縦横無人に形を変える。

10代の鞠のように張った胸も良いが、大人へと成長しスライムのような柔らかさを持つ胸も良いものだ。と胸を揉みながら考えごと

に興じていると、亜美さんから名前を呼ばれて俺は「ん？」と返事を返した。

「ンッ。気持ちいいわ。ンッ。でも、良かったら乳首も触ってほしいの。ずっと切なくて」

そう言つて俺の指を彼女は自らの乳首へと移動させた。

コリッ。

「ンあッ！」

コリコリに隆起した乳首に手が触れた瞬間、彼女は短い嬌声をあげて天を見上げた。

コリコリコリ。

やや大き目の勃起した乳首をつねったり、はじいたり、つまんだりといじくる度に亜美さんは嬌声をあげて身をよじる。

「亜美さん、ちよつとこつちへ行きましょう」

正直、彼女の肩越しでみる乳首も後ろから揉みしだく感触も楽しいが正面からじつと見たいという欲望に負けた俺は、彼女の腕を引き、先んじてベッドに腰かけて手を広げて「おいで」と彼女を誘った。

亜美さんは俺の希望を察してコクンと頷いてからベッド上がり、座る俺の太ももを跨つてそのまま腰を下ろして両手を俺の首に回した。「綺麗ですよ」なにがとはあえて彼女には言うまい。

肌色の乳房に挿す一輪の桜色。

巨乳にふさわしい大き目な乳輪の中心にツンツと勃起した乳首はぱんつと膨らんでいる。

あむ。

啞えずにはいられないと俺は彼女の乳首の片方を頬張り舌先をちよろちよると動かした。

「アアアンツ!!!」

啞えこみ舌を当てた瞬間、亜美さんは身をのけぞってびくりと身体

を震わす。

ちゅー、ちゅー。

彼女の反応なぞなんのそのと、俺は赤子のように吸い付き、時折ア  
クセントとして甘噛みしたり、舌をはじいたり、その大きな乳房を  
堪能する。

もちろん空いているもう片方の胸も併せて揉み、指ではじき、勃起  
した乳首を指先でつつみ、センズリをこくようにシユツ、シユツ、と  
さす。

「そ、それ、ヤバツ、イ。き、気持ちいい、いッ、オーツッ！」

亜美さんは俺の膝の上でガクガクと腰を引く付かせ、ビクッ！ビ  
クッ！と肩を震わせる。

「いイききほうほうふふええふふかか? いいいいふふええふふよよ。

ふ乳い首ふでえで、フびいゆついつてふくえだふさあい」

口を離すことなく彼女に存分にいつてくれと伝える。

「ンツッあり、がとつ、イクね、ンっ、アッ、イク、イク、イクイク、  
イ、ン、オーツッ!!」

快感に身をゆだねてすぐに、ビクビクビクビクつと腰をガタつかせ  
た後、

下腹部からシャーッと液体を漏らし、いったこと証明をするように  
俺のズボンに体液を付着させた。

「あっ。」

気が付いた時にはもう遅い。

乳首から口を離し気の抜けた声もだすも、彼女は俺のことなどで  
気にすることなく、

ジャバジャバとその場で体液を噴き出し続け、出し切った後も、し  
ばらく腰をガタガタと震わせていた。

「いっぱい出ましたね」

尿ではない。その体液の正体は潮である。

この世界では男性がいく際に精液を射精するのと同様に、女性もイ  
くときには潮を噴出するのだ。

人によつてはサラサラとしたり、粘り気を持っていたりと千差万別だが、

どうやら亜美さんは前者だったらしく、俺のズボンを始め、ベッドには水たまりを描いていた。

「う、うん、気持ちよく・・・て、ツ!!!」

ハアハアと肩で息しながら言葉を返しながら最終的に自分が俺のズボンを濡らしたことに気が付き、目を見開き背筋をピンっと伸ばし言葉を詰まらせる。

「あ、あの、ご、ごめんなさいっ」

間髪入れずに謝る彼女に俺は

「いいですよ。放っておいたら乾くでしょ。あ、でも確かに濡れて気持ち悪いんで脱がしてもらってもいいですか？」

と言うと彼女は「ええ、ええ！分かったわ!!」とやや食い気味に答えて、

一旦俺の膝から退いたので、俺もベッドから出て立ち上がった。

亜美さんもまた、脱がせやすいようにとベッドから降り、地べたに膝をつけて正面に俺のチンポがあるであろうポジションへと移った。

「そ、それじゃあ脱がすわね」

亜美さんがゴクリと唾を飲み込みベルトに手を伸ばしてカチャカチャと音を立てながら外していく。

それが終わると、チャックを下ろし、ボタンを外す。

息をすることを忘れているのか、彼女の眼を完全に見開いていた。

「えと・・・じゃあ」

彼女は喉を鳴らして指をパンツの両端に引っ掛けてそのままゆっくりと脱がした。

バチンッ。

下ろされるパンツにより無理やり下を向けられた隆々と勃起したチンポがパンツの引っ掛かりから解放された瞬間、元の角度に戻ろうと勢いよく俺の腹部に張り付きそんな音を立てた。

「す、すっぴんっ」

また唾を飲み込む音が聞こえた後、彼女はまじまじと俺の勃起したチンポを見開いた目で凝視してそんな感想を漏らした。

「ほら、呆けてないでちゃんとキレイにして」

亜美さんのサラサラとした潮の影響で俺のチンポはテカテカと水気を帯びて光っていた。

「は、はいッ！今、キレイにしますねっ」

何故か敬語に戻った彼女は、また「すごい」と言葉を漏らしてパクリとチンポを啜え込んだ。

「ちゃんとカリ首にも舌を這わせてね」

俺の言葉通り彼女ははむはむと啜え込みながら器用に舌をカリの溝に添うようにグルリと回す。

「んっ」

思わずビクリと腰が引けてしまった俺に彼女は啜え込んだまま微笑みながら「気持ちいいひもふいいふえふか？」と口を動かすので、その刺激で再度腰をビクリと震わせながら俺は亜美さんの頭を撫でて「うん。気持ちいいよ」と答えると彼女はクシヤツと目を細めてからジユポジユポと頭を前後に動かし始めた。

ジユポッ。ズボッ。じゅポッ、ジュルルル。

吸引をしながら頭を前後に動かしてチンポについた自身の体液を舐めとる。

やがて、右手でチンポを優しく包み、シュツシュツとさすりながら空いた手を自身の下腹部へと伸ばした。

「ジユポっ、んっ」。ジユポ、ジユるるる、んんっ！」

ある意味器用にチンポを吸いながら時折嬌声を漏らす彼女に俺は

「舐めながらオナニーするなんて亜美さんはスケベだね」と言うと彼

女は

「ふああい。ふえっふいふあんふえふ」と応えた。

そこには意地でもチンポから口を離さないぞ！という意思を感じる。

「ああ、エツチだね。んっ。亜美さんはえっちな女の子だ」

俺が肯定すると彼女も「ふあい」と言葉を発しながらそのまま更に大きな音を立てて吸引する。

スボボボボボボボ。ジュル。

「ごめんね。一回このままイかせて。大丈夫。俺続けて射精できるから。ちやんとこの後セックスしよ」

そう言つて俺は彼女の頭を両手でガシつと掴むと彼女はコクリコクリと頭を縦に動かす。

「一緒にイこう。亜美さん」

俺の言葉に再度コクリと頷いた後、彼女の左手自慰をしている手の肩の動き早めてクチュクチュと音を立てる。

脊椎から射精感がこみ上げて俺は彼女の喉奥を犯すように彼女の頭をグイつ、グイつと前後に動かした。

グポツ、うツ、ゲコツ、げうこつ。

喉奥に無理やりチンポをいれるせいでカエルの鳴き声のような音が響くが、もはや寸前まで訪れた射精感に抗えずラストスパートとばかりに、今度は彼女の頭が動かない逃げないように完全にロツクして、行き止まりなど気にせず喉の更に奥を目指して腰を振るう。

「ああ、イクよっ！亜美さんも一緒にイこうッ！」

ゲコつ！グゲツ！ごっ！ゴツ！

「ああ、イク。射精るッ！」

びゅるるるるるるるるるるッ

ブシャーーーーーー！！！！！！

喉奥へと射精すると同時に亜美さんもまんこから潮を噴き出した。

ゴキュツ！ゴキュツ！潮を噴き出しイっているであろうに彼女は器用に喉を鳴らして吐き出された精を受け止める。

もつとも喉奥に完全に差し込んでいる為、彼女は俺の平均よりだいぶ多い精液も苦もなく飲み続ける。

やがて射精の勢いもぴゅ、ぴゅつと断続的なものへと変わる頃には

彼女の潮の勢いも弱まりやがて止まった。

「ブハっ！ゲホっ、ゲホッ、ごほっ」

最後まで出し切った俺は彼女の頭の拘束を解いて、ズルんつとチンポを抜くと亜美さんはその場でよだれを垂らしながらせき込んだ。

「ありがとう。気持ちよかったよ」

せき込む彼女の頭を撫でて俺は感謝の意を伝えると、亜美さんはせき込みながらもコクコクと首を振る。水たまりを気にすることなくペタンと尻をつけながらせき込む彼女をみて、嗜虐心しぎやくしんをそそり、吐精したばかりのはずのチンポにグググと力が入った。

ゴホっ。ゴホっ。ゴホっ。

その後も何度かせき込みながら呼吸を整えるのを待ち、やがて落ちて着きをだして顔をあげた彼女の眼や、鼻や口からはさまざまな体液を垂らしていた。

「亜美さん。立って」

俺は彼女の腕を引っ張って強引に立たせ、そのままベッドへと押し倒した。

「さあ、続きをしましょう」

俺はそう彼女に笑みを浮かべながら告げると、彼女はヒツつと短い声を漏らしたあと、コクリ、コクリと頷いた。



## 第参話 男女逆転世界♡

「ちゅっ。レロっ。ちゅっ」

ベッドに寝ころびぬちやぬちやお互いの唇を貪る。

唾液に塗れようも、もはや厭わないほどに俺も、彼女も性欲が爆発していた。

亜美の口内へと舌を這わせて右手で乳房を揉み、左手を彼女の下腹部へと手を伸ばす。

彼女も負けじと舌を絡めつつシユツ。シユツ。つと俺のチンポを上下にさすった。

「亜美さん、いっぱい出してのにマンコからネバネバしたのが溢れてくるよ」

びしょ濡れなったTバックを早々にはぎ取り

彼女のクリを避けつつ、大陰唇と小陰唇の溝に指をそーっと這わせた。

膣穴からドクドクと溢れる愛液を指に絡ませ、くちゆくちゆとわざとらしく音を立てた。

「んッ、た、タクミキンツ、せ、切ないで・・・すッ！」

腰をヒクつかせ、チンポを握っていた手をギュウつと締まる。

「ん？なにが切ないの？大丈夫。ゆっくり、ゆ〜っくりほぐしていきますから」

にやりと口角を上げて笑う俺に彼女はフルフルと首を振った。

「く、クリトリスっ！クリトリス触ってください!!!」

悲痛な叫び声に

「え〜、どうしようかなあ〜」と勿体ぶって答えながら俺は唇を離して彼女の股の間に腰を下ろした。

「おまんこ、ひくひくしてるよ」

パクパクと膣口が、まるで呼吸をするように開き、透明な液体を吐き出していた。

「キレイだね」

亜美の乳首同様に桜色をした秘部。

毛を脱毛しているのか、無毛な恥丘に手を添えてながら思わず感想を漏らす。

「ちよつとビラビラが大きいかな？」

俺の言葉に亜美が両手で顔を覆い「恥ずかしい」と宣うも、足をM字に開き、早く触つてくれと言わんばかりに腰を左右へ動かす。

見やすいようにさらけ出す彼女のクリトリスが包皮を突き破るかのように赤くパンパンに腫れあがっていた。

レロオ〜。

舌先を硬くどがらせ、俺は彼女の鼠径部を愛撫する。

「アアッ!!!」

瞬間。

ビクリと身体を震わせたあと、顔を俺に向けて彼女は叫んだ。

「うそ、ウソウソウソ!? 私っ!!! クンニイツ! されてる・・・ッ!!!」

決してクンニではない。

まだ鼠径部しか舐めておらず、これかた行うのが正しくクンニなのだが、

亜美の視点を考えるとマンコを舐めているように見えなくもないのだろう。

驚きの声をあげた彼女も、やがてチロチロと訪れる刺激が鼠径部のみであることに気づくと、

切なそうな声をあげて俺の名を呼んだ。

「だーめ。いっぱい我慢しよ」

俺は彼女を制して、せめて手は握ってやろうと彼女に差し出しながら愛撫を続ける。

舌先から感じる甘しよっぱい彼女の味を楽しみながら俺は執拗に鼠蹊部責めた。

左足の付け根を下から上へ3度舐め上げ、今度は逆側の付け根を舐め上げる。

「アッ、アアッ！アッ、アッ、アッ、アッ」  
それだけで彼女は妖艶さとは真逆な声をあげながら腰を震わせていた。

レロリ。

十分に彼女を焦らしたあと、舌をつけたまま移動し、ビラビラの外側も愛撫する。

ビクンツ！

やはり鼠径部とは違う強烈な快感のようで彼女の腰が跳ねた。

首を曲げ、ビラビラを甘噛みし、時には吸い付き感触をひとしきり味わい、

さあ、クリトリスへと舌を移動させるも陰核に触れる間際で引き返し、ぐるりと周囲を巡回させる。

「…………お、…………おねがい…………しますっ！、ク、クリを！クリを舐めてください!!!」

肩を上下に振るわせて荒い息を吐く彼女に俺は微笑みだけかえして、そのまま彼女の肛門付近を舐める。

「…………お願いっ!!い、イきたいの!!お願いしますっ!!」

執拗にピンポイントを避ける愛撫にもはや絶叫するように声をあげる亜美の膣口は

完全に開いて滝のような愛液を溢れ出し、シートにシミを作っていた。

頃合いだろう。

俺はパクリと隆々と腫れあがるクリトリスを口に啜えて、舐めるところとなく吸い上げる。

——ジュルルルルルル！——

「あ、ああああアああああ、ああああああああああああああ」

彼女が龍の咆哮のような絶叫を挙げると同時に

“ビュ”“ウ”————ツッ！と音を立て潮が俺の顎を

濡らす。

その勢いは強く、跳ねたしぶきが目に入りそうになり、思わず尿道

に口をあてがい、

そのままゴクリゴクリと彼女の潮を嚙下する。

「ウソツッ！お潮！お潮飲まれてるツ!!」

俺が味わっていることに気が付いた亜美はそれさえも快感なのか、さらにビュツッ！びゅっつ！と短く潮を噴き出した。

やがて、勢いも完全にとまり、ハアハアと彼女の息遣いだけが部屋に響いた。

「まだ、出るよね」

膣口に指をズブリと挿入し、くの字に曲げて彼女のスポットに指を当ててクイツ、クイツと彼女のお腹の方へと指を押し上げる。

「あッ！アッ！ま、マッて！ウソ！アッ！」

びゅっ！びゅっ！びゅっ！びゅっ！

膀胱を押し上げるたびに噴き出す彼女に俺は微笑んで更に指の動きを速める。

「あッ！あッ！あッ！あッ！あッ!!、むッ！リッ!!こ、壊れりゅっ！あッ！」

逃げるように腰をあげて体液を噴き出しながら喘ぐ彼女。

「ほら、もっとイけるよ。ほら」

俺の言葉に否定をするように首を振る彼女を無視して尚も指を動かした。

「——まッ！……てエ！わ、わらひの!!んっ！わらひのお、おまんこッ！おッ！壊れッ！じゃ、あッ！アッ！アッ！アッ！」

もはや消防車よろしく吐き出される体液がベッドを超えて壁まで吹き飛ぶ。

「お〃、お〃お〃 おおおお〃、お〃お〃 ツお〃 ねがい〃 いいいいいいいい!!!」

「ごべんじやい〃 いいいいいいいい!!!」

「……んあ〃、……お、おねがい……し……!!ま……す、ほ、ほんとおツッ！にいい!〃、し、し、死んじやいます……」

クロスの色を変え、壁掛けのテレビにもしぶきを吐き出す頃には呼

吸が弱めて涙を流していた。

「いいよ。じゃあ一回抜くね」

「ンゴツ!!」

抜いた瞬間、それさえも快感へと変わっているのか。

まるでジュゴンのような声を漏らしてからその場で脱力をした。

「よっこいせ。ちよつと失礼しますね」

亜美さんには悪いが正直まだ終わってない。

俺のチンポをすでにバキバキに、鉄のように、硬くなり、尿道からもタラタラと、がまん汁をこぼしている。

正常位の体勢で彼女の膣穴に切っ先をあてがい、一気にズブリとそれを差し込んだ。

「ンガああ”””」

瞬間、亜美さんの声が漏れ、無意識なのか膣内をぎゅゅと締めあげる。

生で感じる彼女の具合に挿入れたばかりなのに射精感がこみ上げてきた。

「ごめんね。すぐに行くから頑張って」

もともと限界だったのだ。

パンツ、パンツ、パンツ

「オゴツ!グッ!グッ!」

最奥を突くたびに彼女は声をもらしながらもぎゅゅと膣内の力を込める。

「ああ、気持ちいいよ。亜美さんっ!」

その力強さにはやくも限界を感じた俺は、ブルンブルンと前後に暴れる彼女の乳房を握り、更に腰を打ち付けた。

「ごおっ!!グッ!グッ!!グエツ!!グッ!」

「射精くよ!!!亜美さんツ!!なかで受けとめて!!」

「グッ!グッ!グッ!グッ!ゴおツ!!」

もはや、くぐもった喘ぎ声しか出さない彼女だったが、呼応するように限界まできつく締めあげる膣内に

俺はそのまま精液を吐き出した。  
びゅるるるるるるるるるるっ！

「ぐっっ！」

勢いよく子宮に叩きつけられる精液に彼女が顔を歪めてそんな声を漏らした。

「はぁ、気持ちよかった」

ゴポリ。

長い吐精を彼女の奥で味わいチンポをぬくとそんな音を立てた膣口から多量の精液が溢れだす。

「はい。キレイにしてね」

俺は白目で口を開いて気絶している彼女の口にチンポを突き立て、カリについた泡をこそぎ落した。

「ああ、これ弁償かなあ？」

幾分か綺麗になったキレイになったチンポを引き抜いて壁をみて苦笑いを浮かべた。

クロスの一部だけ完全に色が濃く変わったいたのだった。

「いや、本当に冗談でもなんでもなく、危うく死にかけたわ  
そういつて亜美は気だるそうベッドに寝転がり、タバコをふかした。

「お水はちゃんと飲んで下さいね」

嘔き出した潮の量を思い俺は脱水症状を心配し、彼女にスポーツ飲料を手渡した。

「ありがとう。いただくわね。…ところで私、どれくらい気を失ってた？」

彼女の問いに俺は「うーん」と唸ってから「2時間くらいですかね」と言葉をつづけた。

「・・・そうよね。本当にごめんなさい。あなたの時間を奪ってし

まっつて」

申し訳なさそうに顔をゆがめながら謝罪する亜美さんに俺は首をフルフルと横にふった。

「気にしないでください。俺も映画をみながらぼーつとしてただけですし、なんなら今日はここに泊ってもいいかなって思ってるんで」

「そうなの、それなら良いんだけど・・・あっ！」

彼女はビクリと体を震わせて言葉を詰まらせたあと、その場から飛び起きてソファアに置いていた携帯に飛びつきおもむろに電話をかけ始めた。

「申し訳ありません。城ヶ崎です。ええ。ええ。ちよつと先方でトラブってて連絡遅くなりました。・・・ええ。はい。・・・あっ、契約自体は問題なく・・・。え？そのままですか？分かりました。ありがとうございます。・・・はい。それではお疲れ様です」

時間として2分程度電話をした後、彼女は携帯から耳を話してこちらに振り向きほほ笑んだ。

「もう今日は直帰していいってさ。これで約束通りピロートークができるわね」

と言っつて彼女はベッドに舞い戻るようにその場からジャンプしほほ笑んだ。

「あ、忘れてなかったんですね」

俺の言葉に「もちろん」と短くも快活に返事を彼女は返した。

「それで、タクミくんはおサムライ様でまだ15歳で、16歳には今年の12月になると・・・、バチバチの犯罪者じゃない。私」

そう呟いて彼女はガクつと肩を落とす。

「まあまあ、お互いが黙っていれば大丈夫ですよ」

俺はそう言っつてうなだれる彼女の頭を撫でてはげますと、彼女は甘える猫のようにグイっつとこちらに頭を近づけた。

「ちなみに、おサムライ様はみんなそうなの？」

亜美さんは首を傾げて問うが俺も質問の意図がわからず同じように首を傾げる。

「えーっと、私の周りには『退魔師』をはじめ『おサムライ様』なんて周りにいないからんだけど、みんな、たくみくんのように女性に優しく性欲も強いのかしら？タクミくんは2連続で射精<sup>1</sup>したじゃない？」

彼女の問いに俺は「ああ」と頷いて逆に問い返した。

「優しいと思う？」

俺の言葉に亜美さんは「そうよね。優しくはないわよね」と頷いた。「でも性欲は普通の男よりも強いと思うよ。それこそ性欲が強い人こそが退魔師として強いつて言われているし」

俺の言葉に「どうしてかしら？」と彼女は疑問符をうかべた。

「サムライは『精氣』。陰陽師や結果師は『源氣』と呼ばれるオーラを使つて戦つてて、そういった『氣』つていうのは命の源、活力、生命力や精力が元になってるから強い退魔師は総じて性欲は強いよ。それこそサムライに限つて言えば俺みたいに1日で3〜4度射精できる人はいないけど、1日に1〜2回は時間をおけば射精できるみたいだし」

俺の言葉に彼女は「それって聞いてもよかつたやつ？」と一瞬間を置いてから問うと俺は「ああっ……一応守秘事項ね」といつて唇に人差し指を立てて『シー』つと彼女にジェスターを加える。

「はあ。そうでしょうね。そんな話は初耳だったわ」と言つて彼女は軽いため息を漏らした。

「まあ、でも、陰陽師と結界師の一族はそれを知っているし、男性でもサムライの要素を認められると学校で真つ先に習うことだから」と告げると彼女は「それも守秘事項よね？」と胡乱気な目でこちらをみた。

「うん。一応ね。一応」

俺の言葉に彼女は「はあ」とまた短い溜息をもらした。

「それで、おサムライ様の素質を検査するのがあの『精検』ね」と言葉をつづけたので俺はこくりと頷いた。

『精検』正式名所は男子統一精液検査である。

国内に住居をおく男子が12歳になる年の5月5日に全国の自治



体で行われる精液検査である。

これは男子を各都道府県の指定された支部にて一斉に行われる精液の検査であり、

提出された精液をもとにランク付けをし、一定の検査基準を満たしたものは翌年度、強制的にサムライの養成機関へと「軟禁」され最低3年間、最大で6年間にわたり拘束お勉強される。

俺はそれをなんとか最短の3年で修めて先月。2月の中頃に卒業して、晴れて「下級」サムライを叙任して自由の身となったのだ。

「なんか頭の痛くなる話ばかりでお腹減って来ちゃったわ」

彼女はそういつて部屋に置かれた食事メニューがあるファイルを持ち出してぺらぺらとめくった。

「うん。俺もなにか食べたいかな。食べてゆっくりしてからまたエツチしようよ」

俺の言葉にページをめくる手を止めて彼女は口をポカーンとあけてこちらに顔を向けた。

「あ、私も一緒にここで過ごしていいのね・・・」

彼女の言葉に「もちろん！ご飯食べて休憩してから、後は朝までバチボココースだよ」

俺の言葉に彼女はひくひくと頬をひくつかせてから

「ほどほどにお願いね。じゃないと本当に私のおまんこ壊れちゃうから」

と返すので「大丈夫！ちゃんと加減するよ！」という俺の言葉に「ほどほどよ。お願いね・・・」と弱弱しく言葉を返した。

「嘘つき!!嘘つき!嘘つき!嘘つき!!!」

四つん這いになり、両手でシーツをぎゅつと握りしめ、顔をブルブル横に振りながら亜美さんは叫ぶ。

力一杯握りしめた手は白くその力強さを物語る。

「アッ!ッ!ッ!壊れるッ!嘘つきッ!壊れちゃうッ!!!嘘つき!嘘つき!!!」

パンパンとバックから腰を打ちつけ彼女は俺と同じタイミングで絶頂しガバリと身体を起こして背筋を弓のようにならせたあと、バタリと顔からベッドへと落ち、本日何度目かの気絶を果たした。

俺も俺とて都合6回目の吐精に流石に倦怠感を覚えてピクピクと打ち上げられたマグロのように跳ねる彼女を無視して何度目かのシャワーを浴びた後に、寝る用にあえて残しておいた真新しいベッドに亜美を運んでそのまま床に着いた。

「はあ、精液でお腹が張ることもあるのね。私知らなかった」

翌朝、ホテルのルームサービスで頼んだ朝食を食べ、眩しい朝日を浴びながら駅へと向かう道中、子鹿のようにカクカクと彼女は歩きながらそんなことを宣った。

彼女の言う通り亜美さんの下腹部は大食いをした後のようにぷつぷつと膨らみ、俺は「まあ、多分普通は張ることはないですよ」と気休めにもならない言葉を伝えた。

「当たり前よっ！あんなにぴゅっ、ぴゅっ、いや、あれはもはや『ビュルル』よ!!」

あんなにビュルルルル出してからも続け様にビュルル、ビュルル出来る人間なんてエロ漫画の世界の話よ!!」

とやや怒気を孕めて言う彼女に俺は「確かに」と短く呟いた。

ふと横を歩く彼女が「あっ！」と短く言葉を発した。

「んっ。」

俺は立ち止まり亜美さんの方へと顔を向けると彼女は下を向いてまま「ナプキンから漏れたみたい」とやや顔を青ざめて呟いた。

どうやらあまりにも彼女の子宮に貯めすぎた精液が歩くことで漏れ出て、ナプキンを侵食し、それでも尚、受け止めきれず、

彼女は「ほんとに出しすぎよッ！」と俺の肩をコツンと叩いた。

そんな彼女に俺は「ハハハ」と愛想笑いで誤魔化してまた歩を進めるのであった。

「じゃあまたエッチしたくなったら今度はチャットで誘いますね」

俺と亜美さんの家は反対方向であり、俺たちはホームでそんなやりとりを交わした。

「普通は立場が逆じゃないかしら？」

彼女の言葉に「気にしない。気にしない」と俺は返して続けた。

「あ、それと次からはお金は不要です。おれがやりたい時にやらせてもらうだけですし、そっちの方が都合がいいので。でもでも会う時は美味しいご飯とか奢ってくれと嬉しいですよ」

「いや、全くもって全てがおかしい……。まあ、いいわ。私も昨日、今日でなんとなくあなたが規格外なことは理解したつもりだし。それにしても、連絡するする言ってそのまま放置はしないでね。あなたのせいで私のおまんこの形変えられちゃったみたいなの。恐らく他の男のチンポなんて今さら挿れてもきつとガバガバよ。」

はあー。

ため息を漏らしながら答える彼女に俺はクスリと笑った。

「じゃあ、電車来たんで俺はお先に失礼します。身体壊さないように大事にしてくださいね」

俺の言葉に「壊してなくても結果壊されるわ」と返すので「それがいいんじゃないですか」とだけ告げてやってきた電車の乗り込むフリフリ。

電車の扉が閉まり走り出す中、俺は窓から彼女に手を振ると亜美さんは苦笑いをしながら手を上げて答えてくれた。

「とりあえずセフレゲット」

俺は空いていた座席に座り、呟いて頬を吊り上げた。

彼女は悪くなかった。

この世界、女性の数が圧倒的に多数の社会では男性を勝ち取るために美人へと進化した為、美形な女性が多い。

亜美はその中でも中々の美人であり、巨乳であり、大人としての余裕を感じる。

軟禁状態から卒業して早、1ヶ月。

やや暴走するように性に耽っていた中で俺は初めて『その後』の約

束をした。

そして再来週には高校生活が始まる。

前世で学生時代を不遇に過ごした俺は、再度青春を取り戻す為に養成機関を最短の3年で卒業したのだ。

“あんなどこ”に最大6年とか気が狂うと断言できる俺は今、こうして自由に女が抱け、セフレを見つけることが出来た達成感に感慨深く感じ、その場で顔を伏せてクツクツを笑った

俺の人生がやっと好転し始める。そんな風に思わずにはいられなかったのだ。

## 第肆話 怪異

最寄駅よりから歩いて5分。

京都の中心である京都御所の一角に俺が住む家がある。

比較的広大な土地に建てられた日本邸宅と呼ばれる家の門扉を潜り、俺はガラガラと引いて開けるタイプの玄関を開けた。

「ただいま」

「遅いッ！」

土間に入り言葉を発した瞬間に怒声が返ってきた。

「一体今日もどこ行つてたの!？」

水色の瞳を三角に吊り上げ、大きな胸部を突き出すように仁王立ちし、銀髪のツインテールをした女性に短く「討伐」と答えて無造作に靴を脱ぎ捨て廊下を歩く。

「嘘でしょ！昨日も、一昨日もその前も、帰りが遅かったじゃない！そんなに毎日野良の怪異に出くわすわけないでしょ！」

ガミガミガミガミ。

まさにそんな形容詞が当てはまるほどに矢継ぎ早で行われる詰問を無視して、居間の隅に置かれた仏壇の前に座って手を合わせた。

心身深いツインテールもその間は空気を見て押し黙る。

仏壇に置かれた写真は合計6人。年齢はバラバラで一番若いもので8歳。一番上で行くと100歳を超える。

「ただいま。母さん、姉さんたち、あとばあちゃんたち」

全員に声をかけて俺は帰宅のこと、昨日今日あったことを彼女達に心の中で報告する。

もちろんセックスのことはかいつまんである。

もしそんなこと知れば母さんと姉さんは怒るだろうか？

叔母は間違いなく『賀茂家の男子とした恥ずかしい』というだろう。しかしなんとなくだが祖母や曾祖母ひいばあちゃんは「あらあらまあまあ」と言つて撫でてくれる気がする。

心の中で報告を終え、その場から立ち上がると待つてましたと言わんばかりに背後に立っていた女性からの追撃が始まった。

「うるさいなあ。蒼佳姉は?」

堪えかねて思わず悪態をつき、目の前で騒ぐ女性の姉について、所在を問うも、どうやら『うるさい』と言われたのがよほど嫌だったのか、もはや発狂するように女性は怒り狂って叫び声をあげた。

はあ、本当にうるさい。

思わずそんなことを口から出しそうになり慌てて言葉を飲み込んで目の前の女性にジトリとした目で観察する。

サラリとした銀色の髪を両サイドに結え、青色の瞳に整った顔。陶器のように白い滑らかな肌に突き出た胸部を持つ彼女。

前の世界であればもはや女神と崇められるような美貌の持ち主であるが、その性格は短気で喧嘩っ早く、すぐに手が出るじゃじゃ馬娘である。

彼女の名は賀茂碧理。

俺の従妹にあたり、年齢は同じ15歳である。

「ッ!!アタシはねえッ!賀茂家の者として恥ずかしくないように……」

その後も、ガミガミと目を吊り上げながら説教垂れる彼女を無視して冷蔵庫よりお茶を取り出しぐびぐびとおおった。

「碧理も懲りないねえ」

ポリポリと首を掻きながらRPGゲームよろしく常に背後に付き纏う彼女に告げると『はあ』と大きな溜め息が返ってきた。

「アタシだって好きでガミガミ言っているんじゃないわよ!アンタがいつもほつつき歩いているから賀茂家を代表してッ……ッ!!」

喋る彼女の唇にキスをし俺は彼女を黙らせる。

「ンッ、そ、そんなのでッ。ちゆ、ンッ、ご、ごまかせ、られ、んッ、ないんだからあゝ」

先程まで釣り上げていた青色の瞳はまたたく間にトロンと目尻を下げ、怒気が見ると無散していく。

「ちゆ……ずるい……レロ……こんなに、されたら……れるお……怒れない……じゃない」

舌を入れた瞬間は歯を閉じることで侵入を防いでいた彼女も気が

つけば俺の口内のにゆるりと舌を入れ込み身体を擦りつけて首元に両腕を回した。

……レロ……チュ……クチャ。

「朝からお盛んね」

不意に背後から声が掛かると先ほどまでト口顔で唇を貪っていた碧理がその場からバツと離れた。

「お姉ちゃんっ!?!」

「あ、おはよう。蒼佳姉」

碧理はその場であわあわと

「こ、これは違うの!!私はタクミにちゃんと云ったのに、タクミがいきなりキスするから」

と矢継ぎ早に応えようと

「アンタも本当に懲りないわねえ」と碧理に言ってから俺の元へと歩み寄った。

「今日も討伐で朝帰りねえ。おサムライさんは随分と忙しいことで。」  
そう耳元で言つて、菩薩のように慈愛の満ちた笑顔に思わず背筋に寒気を覚えた。

碧理と同じ彫刻のように整った顔に銀色の髪をサラリと腰まで落としたストレートヘア

姉妹よろしく白魚のように白い肌に盛り上がる胸部は彼女愛用のルームウェアからブルン谷間を覗かせる。

「もし、良ければ今日当たり私もいかがかしら?」

サワリ。

抱きつくように密着して俺の下腹部にそつと手を添えてそんな提案を出す彼女に、

「う、うん。考えておきます」と答えてすぐ退散するようにそつと身を離して食卓の<sup>自分の席</sup>定位置に腰を下ろした。

「あら、残念。私が直々に立てなくなるまで抜いてあげようって言つてるのに」

ペロリ。

流し目で艶めしく自らの舌を舐めてほほ笑む彼女に思わず金玉が

ヒュンッと縮こまるのを感じた。

彼女たちは俺の従姉妹に当たり、俺を含めて3人が現存する陰陽師の名家と呼ばれる賀茂家の全員である。

そしてそれぞれが対怪異を生業としていた。

俺がサムライ、蒼佳が陰陽師、碧理が結界師と見事に棲み分けた3人1組スリーマンセルでチームを組んでいる。

退魔師は3人1組スリーマンセル、4人1組フォーマンセルを組むことが多いとされ

加えてそのまま一緒に住み寝食と共にするのが一般的である。

そのため、というか昔から共に暮らす関係もあり、俺の養成期間を終えて先月より晴れて賀茂家チームが結成された。

ちなみにその中で長女の蒼佳に至っては賀茂家当主でもあり

加えてチーム唯一の“中級”に区分される第一戦級の陰陽師であつたりする。

年齢は俺の8歳上の今年で23歳と大人の魅力あふれる女性だ。

そんな大人のエロさを醸し出す彼女の誘いにタジタジとなるのは理由がある。

“性欲が強いものこそ退魔師として強い”

とされるこの世界で、名家と呼ばれる賀茂家、とりわけ“稀代の傑作”と称される蒼佳は正しくサキユバスであり、

この世界でも性欲過多な俺でさえ骨抜きにされる。

そしてもちろん碧理も姉ほどではないにしてもサキユバス見習いといった具合に二人して責められた際には次の日には腰がガクガクと震え、立つことが困難になることも珍しくない。

「まあ、私も別に今からとは言わないわ。今日は“みんな”の命日でもあるのだし、夜には祝詞のりとをあげるから今日は外出を控えてね」

席に座る俺に視線を送りながら話す彼女はそう言つて碧理のそばによつて彼女の頭を撫でた。

「貴方もほどほどにね。感情が激しい結界師は術に影響を及ぼすわよ」

優しく微笑みながら碧理を諭す蒼佳に



彼女は「アタシはタクミ限定に気が短いのよ」と答えて唇を尖らせた。  
「それが一番危険なのはわかるわよね」

目を細めて答える彼女に碧理はビクリと肩を震わせた。

「また私たちの目の前で第二のぬらりひよんが現れてたつくんを襲つたらどうするの。その時に気が動転して結界張れませんでしたってことにならないようにも、気をつけなさい」

蒼佳のことばに碧理は「わ、分かってわよ」と俯き、応えようと

「ふふ、信頼しているわ」とほほ笑みぽんぽんと碧理の頭を優しく叩いてキツチンへと朝食の準備へと向かった。

残されて碧理は俯きながら俺の対面の席へと座り意気消沈を表していたので「まあ、そう気にするな。碧理なら大丈夫だよ」と励ますと、

「元はアンタのせいでしょ!!」と突っ込みを返された。またプリプリと怒りを表した。

「そういう所だぞ」と俺は喉まで出かかった言葉を飲み込み「ごめんごめん」と彼女に謝罪をするのであった。

---

「蒼佳姉の膝枕は世界イチだよ」

俺はそう言っただけで彼女の滑らかな太ももに頬をつけ、彼女の膝を優しく撫でる。

時刻は日も暮れ夜の帳とほりが下りる午後8時。

すでに命日の祝詞も上げ、3人そろって晩ごはんを食べてしばらく、俺は蒼佳の膝を枕にソファーに寝転がり耳掃除をしてもらった。

「それ、一昨日ぐらいに碧理にも言っただわよね?」

俺の頭上から声を返す彼女は「ふふふ」と微笑んで俺の耳に優しく

綿棒を当てがい、カリカリと耳垢をほじくり返す。

「言つてたかもね。でも今の気持ちも本当だし、もうそれで良いんじゃない?」

俺の言葉に蒼佳は「本当に適当なんだから」と微笑み

「はい。こつち側終わり。反対向いてくれる?」と優しく耳元で囁いた。

ぐるり。

俺はその場で寝返りを打つように身体を反転させて彼女の腹の方へと顔を向けた。

クンクンクン。

「ちよつと、なに嗅いでるのかしら?」

鼻を鳴らしてたことに目ざとく気づいた蒼佳はほじる手を止めて俺に問いかけた。

「ん。いや別に。ただの本能というか。いい匂いだなって思っただけ」

実際風呂から上がったばかりの彼女からはフローラルな香りを発しており、シルク生地の上着のシヨートパンツ。特に股の間の匂いを強く感じた。

「それに眼福でもあるしね」  
ペラリ。

彼女の太ももの隙間を指で引っ張りその中を覗く。

年上の彼女らしい黒の総レースでできた下着がチラリと見えて思わず俺はゴクリと唾を飲み込んだ。

「こーら。そんなことしていると鼓膜破れちゃうかもでしょ?」

俺の行動に彼女はそう言葉を返す。

「おお、怖い怖い。それは気をつけないと」

彼女の言葉に大袈裟に俺は手をあげて降参のポーズを取る。

「冗談よ。でも見たいのは下着で良いのかしら?」

そう呟いて彼女がシヨートパンツの裾から指を突っ込みぐいっと引っ張り、中身を見せようとした瞬間。

“ キュウン！キュウン！キュキュキュキューーー！！！！

退魔庁より配布されたスマートフォンから緊急時に発せられる警戒アラームが家中に鳴り響く。

「……しようがないわね。耳掃除はおしまい。行くわよ」

引っ掛けていた指を離し俺の頭をポンポンと叩き合図を送る彼女に不承不承と顔を上げた。

「そんな顔してもダメよ。続きは返ってからね」

器用にウイंकをする蒼佳に俺は「はあく」とため息を就いてその場から起き上がった。

「タクミツ！お姉ちゃんっ！」

ボタンツ!!

入浴中だったらしく、頭にバスタオルを巻き全身ずぶ濡れで恵まれた肢体を惜しげもなく披露するように全裸の碧理がブルンつと乳を揺らして入ってきた。

相変わらず白魚のように真っ白の肌に桜色の乳輪。毛のひとつもない下腹部が視界に入り思わず俺のチンポがピクンと反応する。

「ええ、緊急討伐司令だわ。私は詳細を本部に確認するから、たつくと碧理は準備出来たら私のところに来て。」

その後すぐに出動するわよ。」

全裸の妹を前にしても毅然と指示を出す蒼佳にさすが『中級』陰陽師だと舌を巻きつつ、俺たちは急いで討伐の準備を始めた。

『それで位階や場所は？』

全身黒のボディースーツにスーツと同じ黒一色のコートに着替えた俺は同じく黒色の狩衣（陰陽師の和服）に着替えていた蒼佳と合流する。

「位階は報告によると第六位階の妖怪でここから現場まで車で20分ほど行ったところみたいね」

蒼佳は俺に今般の緊急指令の怪異の情報が表示したタブレットが差し出された。

怪異には驚異度を示す第一〜第十までの位階と呼ばれるランク付けがされており、驚異度が強いものほど数も大きくなる。

第六と言えばそこまで強いランクでは無いため今回の緊急サイレンに俺は首を傾げた。

「対応していたサムライが2組消失したそうよ」

蒼佳の補足に俺は更に首を傾げるものだった。

「それはもはや支部の占いが当てにならないってことじゃないか？」

俺の言葉に蒼佳はコクリと頷く。

蒼佳をはじめとする陰陽師には怪異における役割は実に様々であり、支部に務め討伐を主としない者は怪異の位階や、顕現場所の占いが含まれるのだが、それは時として当たらないこともままある。

これは高位階の怪異には稀に力を隠すなにかしらの技能があるからとされ、低位階ではほとんどの中するそれも高位階の場合はままたれるのだ。

もちろん本部（退魔庁）もそれについては散々言及していることである。

「準備できたわッー！」

バタンッ！

その時白い巫女装束を羽織った碧理も合流しあらかたの報告を聞いた後、俺たちは蒼佳運転のもと現場へと急いだ。

「現在 対象は中級結界師が張る結界内になんとか取り込めている状態です」

車の中に設置された無線が支部からの連絡を告げる。

「了解。現在現場の小学校からおよそ500m西。到着後に討伐に移ります。どうぞ」

「こちら、本部。了解した。健闘を祈る」

無線が切られ車内に沈黙が走る。

「命日に緊急討伐とかついてないわね」

蒼佳の言葉に後部座席に座る俺と碧理がコクン、コクンと頷いた。「まもなく現着よ。碧理は結界構築の用意。たつくんは準備出来てる？」

蒼佳の指示に「もちろんだ。いつでもいける」と抑揚なく答えると彼女は「頼もしいわね」とルームミラー越しに微笑んだ。

「あそこで降りるわよ！」

運転席の蒼佳は前方、小学校の正門を指さして、後部座席のスライドドア開閉のボタンを押した。

風を切りさく音が車内に響くのを気にせず、彼女はそのままサイドブレーキを引き上げながらハンドルをグルンと回した。

キキキキイイイイイイ！！

タイヤがロツクされ地面と擦れる音を立てながら正門に横付けされた瞬間に俺は車から飛び出し現場であろう校庭の中心を目指す。

正門付近には何人かの民間人が首から先をなくした状態で倒れ伏し、すぐ近くには巫女装束を来た骸も転がっていた。

正門を囲うように建てられた左右の建物からはもうもうと炎を上げており、まさに地獄絵図といった様子を表していた。

報告によれば結界師の健闘によりぐると学校を覆うよう張る薄ピンク色の結界が空高く展開されているが、感じる気配から、その限界が近いことを察した。

「たつくん！校庭はあっちからいけるみたいよ！」

追うように後続する二人のうち、蒼佳が東を指さしたので頷き指示された方向から俺たちは校庭へとむかった。

「鶴か」

校庭につき、中央で横たわるサムライの服を着た骸の下腹部を啄む“ソレ”を見つけて俺はその正体をつぶやく。

クマほどの体躯を持ち、サルの顔面、タヌキのように長い胴体、手足は虎のような斑ら模様を描いてそこから突き出た鋭い爪。

尾にへびをフラフラと生やしたソレは一般的に鶴ぬえと呼ばれる妖怪である。

そして鶴ぬえがふと咀嚼をやめてこちらに気づいた。

又チャああ

口元にべったりと付着する血をきにすることなく醜悪な笑みを浮かべる鶴ぬえに思わず嫌悪感を感じながら腰に佩いた斬魔刀を抜刀して正眼に構えた。

“斬魔刀”

怪異を斬ることが出来る刀の一種であり、日本刀に陰陽師の源氣とサムライの精氣を当てた刀。

これ以外にも先の討伐で使ったネックレスタイプの式神剣なども一般的だが、あれは使い切りのため、こうして準備できる時には専用で打たれた斬魔刀を持ち込むのがほとんどだ。

「クキョキョキョキョ」

距離を取る俺に視線を合わせて不意に首をカタカタと震わせて笑い出した鶴はその場で“翼”を広げた。

バサリ。

そう、鶴は単純な獣の妖怪ではない。不気味な体をもつソレの背中にはイヌワシのような漆黒の翼をもち、今それが大きく開かれた。

「碧理、奴は飛ぶぞ。足場を頼む」

「分かってるわ!」

後方から遅れてやってきた碧理に声をかけ、蒼佳には「一瞬だけでもいいからヤツを拘束してくれ」と指示を飛ばす。

退魔師とチームの攻撃戦術はチームそれぞれ異なる。

しかしながら、幼少期より共に暮らし鍛錬を続けてきた俺たちはほかの成りたて退魔師パーティーとは違い、1ヶ月の中で他の追隨を許さないほどに討伐実績を積んできた。

その主たる戦術とは、俺を主軸におき、結界師が俺の足場を作り、陰陽師が対象の動きを封じる。

本来対象を拘束・保護する結界を、足場として展開させ、サムライの俺が精氣を使い圧倒的な肉体能力でもはや前後不覚と思われる多方向的な動きをして対象を討伐する。

その為には俺と息の合う碧理の結界術。時として俺のサポートを行うこれも息の合った連携のできる蒼佳の陰陽術の為せる、俺たちだけの特有の戦術である。

バサリッ!バサリッ!

「飛んだぞ!!碧理 角<sup>カク</sup>だ!」

俺の言葉に碧は「ええ」と息を合わせて俺の目の前に四角い桜色の結界が展開させた。

「角!角!角!角!かーっく!!!」

俺の目の前に階段のように角度をつけて展開させる10センチ角の結界。それに飛び乗りまるで走るように俺は空を駆ける。

「掛けまくも畏き蛇<sup>ヘビガミノミコト</sup>神尊。我が源<sup>みなもと</sup>を触媒にその御力を貸し与え給へ。無匹蛇繩」

詠唱を唱えて蒼佳の腕か大蛇の蛇へと代わり口を開いて羽ばたいた鶴に向かって飛び掛かる。

バサリ、バサリ

飛び掛かる大蛇に翼をはためかせ、縦横無尽に鶴はかわした。

「絶対、これ第六位階じゃねえだろ」

そもそも飛行能力を持つ怪異は総じて討伐難易度が跳ね上がる。それこそ足元どころがる退魔師の骸の数がそれを肯定している事実<sup>マコト</sup>に思わず俺は舌打ちを漏らした。

「キョギョっ!!」

ブワンツ。

空を飛ばたく鶴が猿の顔を見にくくゆがめて翼をひときわ大きくはためかせるといくつもの羽がナイフのように地上に立つ彼女たちへと降りかかる。

「お前の相手はおれだろうッ!」

足元の結界から強制的に身をひるがえして羽の射線に割り込み俺は刀を振るつた。

キンキンキン

弾丸を打ち落とすように刃に羽があたる瞬間、火花をいくつも飛ばしながらすべてを打ち落とす。

“ サムライとはもはや人間に区分されるような存在<sup>モノ</sup>ではない”  
いつかテレビでみた退魔師の解説者の言を思い出す。

『退魔師にはそれぞれの役割があり

陰陽師や結界師はそれぞれが術を行使しますが

サムライはただひたすらに刀を振るうだけです。

しかしながら、彼らは100mを3秒で走りますし、10mの壁を跳躍します。

さすがに空を飛ぶことはできませんがそれでも10mをも跳躍する人間はもはや人間と呼べるでしょうか?』

ブウンっ!

足場のなかった空中から突如ステージのように長方形の結界が出現し、俺は空中で身を反転させて着地と同時に鶴に再度飛び掛かる。

「ナイス! 碧理ッ!」

視線を鶴に見据えてたまま、絶妙なサポートをした彼女に賛美を送り、俺は眼前へと迫った鶴に向かって刀を振り下ろした。

ヌプリ。

刀が鶴の肩から斜めに入る瞬間、スライムを切るような手ごたえの無さを感じながら俺はそのまま鶴を両断する。

「クケケケケケ」

斬られ、斜めに両断される鶴は、気味悪く笑った。

「キョー! キョツキョキョ!!」

分断された鶴の断面からニョキニョキと形を変えて、サイズが半分になった2頭の鶴となり、高笑いをするので、俺は思わずニヤリと口角をあげた。

フシャー!!!

二体の鶴をもともせず一匹の大蛇がやつらを拘束せんと雄たけびを上げながら巻き付いていく。

「捕まえた。あとはよろしくね。碧理」

蒼佳は、にやりと口角をあげて妹にバトンタッチすると碧理もちゃんと頷き右手で印を組み詠唱を始める。

詠唱の最中、逃げようと藻掻く鶴に

「もう離さないわよ」と応える蒼佳も印を結び、ぎちぎちと蛇を締めあげる。

「肆方を護符する四色の神よ

空蟬に現る災いを



結び、堅まり、拘束せよ

封印結界 “獄”

角はと違う黒い結界が鶴を、蒼佳が顕現した蛇ごと困んだ。

「分裂することぐらい想定済なんだよおッ!!!」

ギチリ。

刀を握る腕にいくつもの筋を起たせて俺は体中から精気を噴出させそれを斬魔刀に集約させた。

「成仏しやがれっ！ 破魔の剣」

銀色の刀が精気を纏い白色の刀身へと変わり、あたりに栗の花の匂いが漂いはじめる中、俺は鶴に向かい幾千も斬りかかる。

斬ッ！斬！斬斬斬斬斬斬斬斬斬ッ！

肉体を無理やり高速化させ、まるで早送りのように刀を振るい、サイコロステーキよりも更に細かく結界ごと切り刻む。

刻まれた欠片がポワポワと泡沫に変わりはじめ、最後にはその場からシャボン玉をのような泡だけとなった。

「お疲れ様、タクミ」

結界を足場に地上に降りた俺に走り寄りながら碧理が俺にねぎらいの言葉をかける。

「ナイスアシスト」

ぽんぽん。

彼女の頭に手を載せると彼女は猫のように目を細める。

「蒼佳姉もナイス拘束だったよ」

もちろん、蒼佳にも同じように俺はねぎらいの言葉を伝えて同様に彼女の頭を撫でた。

「アタシたちに掛かればこんなものねっ！」

討伐に、撫でられた頭に、気分を良くした碧理からそんな言葉が漏れると

蒼佳は「油断しないの。いつ私たちが彼らと変わらない保障はないのよ」

そう言つて足元に転がっている骸を見つめながら窘めた。

「まあ、とりあえず本部には討伐完了の報告をするわね」

蒼佳はそう言ってスマートフォンを袖から取り出し電話をかけ討伐の終了を報告した。

「家に帰ったらお母さんたちに報告しないとね」

運転席に座る蒼佳がコーヒーを啜りながら、感慨深げに言葉を漏らした。

「ああ」「そうだね」

俺も、碧理も思うことは同じで彼女の意見に同意して窓へと視線を移した。

サムライとなり初の命日に怪異 “妖怪” との一戦。

10年前を思い出し沸々と心から憤怒がこみ上げて自然と拳に力が入った。

「タクミ…」

横に座る碧理がそつと俺の名を呼んで拳の上に手を重ねた。

「…ありがとな」

先ほどまでこみ上げていた怒りの感情はふっと夢散し感情が落ち着き俺は彼女の頭を抱き寄せた。

「ううん。いいの。タクミが大丈夫なら」

ぐりぐりとこちらに身を預けてさらに重なるかのように頭を寄せる碧理に俺はやさしく頭を撫でた。

「ちよつと、後ろであまりいちゃつかないでね」

席を挟んでハンドルより手が離せない蒼佳が恨みがましそうに軽口を叩く。

「帰ったら、ちゃんと私も労ってね」

蒼佳の言葉に俺は「さつき途中までだったしね」と家での膝枕のことを思い出しながら言葉を返した。

これから待ち受ける試練を分かっているながらも、どこまでも俺の下半身は正直なようだ。

チンポが心と同調するようにムクムクとそそり立つのを感じなが

ら、再度視線を窓へと向ける。  
空はまだ暗く、朝日が昇るのはまだ先であった。

## 第五話 妖怪王♡

ジユルルルルル…レロ…ちゅ…ふふ…グボグボ…

夢見心地の中、下腹部より断続的に訪れる刺激に俺は不意に目を覚ます。

…グポツ…ズボツ…ズボツ…ジユルルル

ローションをかき混ぜるような粘り気のある液体が乱舞するようにぐもった音が部屋に響く。

「ん。蒼佳姉?」

見知った天井が視界に入り、ここは自室だと瞬時に理解した後、俺は己の下腹部を見てその犯人の名を告げた。

「レロ…チュ…あ、起こしてしまったかしら…ごめんなさい…おちんちん苦しそうだったから」

レロリ。

勃起したチンポを咥え込んでいた蒼佳と目が合い俺が起きたことに気がつくくと妖艶に微笑んで彼女はペロリと裏筋を舐めた。

「もう…出しつくたよ」

昨日の討伐後に、家に戻るなり姉妹丼を楽しむことになったのが遥か昔に感じるほどに俺の身体は疲れ切っていた。

いつも、最初は俺が優勢なのだ。妹の潮を浴びながら姉のまんこの具合を確かめる。

姉の乳房を吸いながら妹のパイズリで柔らかさを楽しむ。

しかしながらそんなことを二、三度する頃には立場は逆転し2人はサキユバスへと変わる。

蒼佳のマンコに射精をした後、彼女はそれを抜くことを許さずそのまま強引に腰を振り第2射目をせがむ。

その間も碧理は毛のひとつない秘部を俺の口に押し付け、腰をグリグリと動かし何度も潮を俺の口内へと浴びせる。

そんなやりとりを何度もした後、もはや6回、7回と搾精された後

に、記憶の最後では蒼佳のパイズリフェラでイカされた後にそのまま激しく亀頭を擦られ「私たちがばかり潮を噴くのは忍びないわ」とやや恐縮した顔を浮かべてそのまま潮を吹き出させると「アハハハハハ!!」と口角を上げて潮を浴びて喜ぶ姿を見た後に記憶が途絶えているのだ。

「こ、これは疲れマラって言って…ンツ!!」

もはや込み上げる射精感は一瞬でその後ドロリと吐き出る精液を彼女はそのままグビグビと啜え込みながら嚥下する。

「嘘はダメよ? おちんぽがミルクピュッピュッしたいって辛そうにしてたから」

パアッと精液を飲み切った後口を離して妖艶に微笑む彼女の横には全身が体液でガビガビとなり口を開けて気絶するように眠る碧理の姿が視界に入った。

(どうやら俺が気絶した後に奴の餌食になったのだろうか)

男の少ないこの世界で女同士の姦通はもはや常識であり、俺が気絶した後に標的を帰られた碧理の姿を思い浮かべて思わず合掌を心の中で行う。

「まあ、そろそろ私もお腹一杯になったし今日はこれぐらいにしてあげる」

俺の亀頭にチュットとさも愛おしそうに接吻をして微笑む彼女に俺は思わず『ほっ』と一息をついた。

「そ、それはよかった。じゃあ俺はトイレに…」

そう言っただけで身体を起こそうと力をこまるとそれ以上に強い力で肩を抑えつけられた。

「別に行かなくてもいいんじゃない?」

爛々とした目つきで抑えつける彼女に俺は「え?」と言葉を返した。「ここで出せばいいじゃない? 私が全部飲んであげる」

口をぱかりとあけてアピールする彼女を見て俺は天を仰いだ。

その後、<sup>飲尿プレイ</sup>ごつくんをした後、<sup>サキユバス</sup>テンションが上がった悪魔により逆ごつくんプレイを強制的にさせられ、ついでとばかりにもう一度バ

キームフェラにより強制搾精されるのを俺は光をなくした目つきでただ眺めていた。

「眠れないの？」

体中の体液を落とすために、蒼佳とシャワーを浴びて再びベッドへと戻った後、

体は鉛のように重く疲れ果ているにもかかわらず、訪れることのない眠気をごまかすようにグルンと寝返りをうつと、添い寝をしていた蒼佳から声が掛かった。

「うん。なんとなくね」

曖昧に彼女の問いに俺は返して蒼佳が寝る反対側で寝息をたててすやすやと眠る碧理の頭を撫でる。

パリっ。

噛みに付着した精液か愛液かもはやわからない何か乾いた感触を指先から伝えてきたので思わず手を引いて、蒼佳の体で拭うように彼女を抱きしめて指先を背中に擦り付けた。

「……あれから10年ね」

彼女の豊満な谷間の間に顔を押し込む俺の頭をそつと撫でる蒼佳がふと口を開いた。

「……妖怪王 “ぬらりひよん”……」

ギシリと蒼佳が歯を食いしばったの谷間越しにわかる。

今から10年前、突如として京都に表れた怪異の名はぬらりひよん。妖怪の王と言われている第十位階の化け物である。

ぬらりひよんは京都に出現を占いにより予言していた退魔庁は祖母と叔母の上級陰陽師他、特級のサムライなどを十二分に派遣し、これの討伐にあたるべく京都御所にて待機した。

しかしながら、その暴風を止めることはできず、被害は甚大。その戦いにより祖母は死亡したとされている。

その後、ここ賀茂家に飛来していく様を見た叔母が、戦場から離脱し合流。

母や曾祖母に加えて当時お手伝いさんでもあった曾祖母の元バ

デーと共に迎撃に当たるも、結果的にその襲撃に生き残ったのは、俺と、蒼佳と碧理。そして曾祖母だけだった。

そんな曾祖母も俺が12歳になった歳、それこそ母たちと同じ日に亡くなったの今日である。

相対した怪異は違えど、妖怪である鶴ぬえにいろいろと考えさせられるのもまた事実だ。

「大丈夫。蒼佳姉と碧理は俺が守るよ」

震え始める彼女の背中をそつと撫でると彼女はぴたりと震えを止める。

「ふふ、普通はそのセリフ、女が男に言うべきなのでけれど」

顔を見上げるとほほ笑む彼女の顔が視界に入った。

「まあまあ、細かいことは気にしないで」

彼女としばし見つめ合ったあと、俺は蒼佳の唇にそつとキスをする。

「……ちゅ。……ありがとうね。たつくん……あら、また勃つてきちゃったわね」

裸で密着し唇を重ねているのだ。下腹部は彼女の腹にピタリと当たり、むくむくと再び起き上がり始めていた。

「もう、さすがに今日は無理だよ。生理現象だし仕方ないよ」

彼女を制すためにも俺は先に先手を打つと、

「ええ、さすがに今日はこの辺にしておいてあげましょう」とほほ笑んだ。

「その代わりにだけど、おちんちん握ったまま眠ってもいいかしら」

蒼佳の提案に俺は「プツ」と吹き出した。

「それ、普通は〃手を握っても〃って言うところですよ」

俺の言葉に彼女は「まあ、まあ、細かいことは気にしないの」と先にしたやり取りをデジヤブさせて手を伸ばした。

「あなたも寝るときによく私たちのおっぱいをしゃぶって寝ようとするでしょ？それと一緒」

そう言つて「ほら、おっぱいでちゅよ」と赤ちゃん言葉は発しながら片乳を持ち上げ俺の口元に桜色の乳首を向ける。

標準的な乳輪に対して彼女の乳頭がすごく小さい。

もはや尖っているという表現が正しい彼女の胸に俺はかぶりついてそのままちゅーちゅーと吸い上げた。

「ンッ、こ、こ、こ、舌を転がさないよ。またエッチしたくなるでしょ」  
そう言っただけで彼女は俺の頭を優しく撫でながらチンポを握っていた  
手にぐつと力を込めたのであった。



## 第陸話　デート

チュチュチュチュチュ

窓の外から鳥のさえずる鳴き声を聞こえ俺はゆっくりと瞳をあげる。

「——ツツ……身体いてえ……」

どうやら蒼佳の乳房をしゃぶりながら気が付けば眠れていたらしい。

俺は全身を遅う筋肉痛に思わず顔を歪めながら上半身を起こした。

「碧理に蒼佳姉は……さすがにもう起きてるか」

ベッドサイドに置かれた置時計はすでに13時を指しており、どうやら俺だけ昼過ぎまで惰眠を貪っていたようだ。

「あ、タクミー…おはよー!」

手すりを頼りに痛む身体にムチを打ちながらリビングへと向かうとソファアーに寝転がりテレビを見ていた碧理が俺に気づいて満面の笑みを浮かべる。

彼女はいつもプリプリしているわけではない。

機嫌のよい時(特にセックスをした次の日)はとりわけ機嫌はよく、そのままぴよんとソファアーから身を起こして俺のそばにテトテトと歩みよった。

「だ、大丈夫? なかなか……しんどそうね」

昨日の強制顔面騎乗を強要していた彼女とは打って変わって足を引きずる俺の腰に手を回してかいがいしく俺をソファアーへと導く。

「……イテテテ……蒼佳姉さんは?」

碧に彼女の所在を問うと退魔庁も支部に昨日の報告をしに行つたと回答があり俺は「そうか」と返してソファアーに背を預けて深く息を吐く。

「ふー——」

俺の顔を心配そうに覗く彼女に「なにか飯ある?」と聞くと「カツプラーメンくらいなら」と彼女は返した。

「カップラーメンは、気分ではないかな」

俺の言葉に「買い物してからであればアタシ作ろうか？」と碧理が言うので俺はこの際、ついでに用事を済ませることを思いつき彼女に告げた。

「来週から高校に通う準備でいろいろ買い物にいくか……?」

俺の言葉に「え?!いいの!？」と碧理はやや大き目な声をあげて形式上は俺の身を案じているが青色の瞳はすでに期待に満ちていた。

「ああ。どうせ今日、明日には行くつもりだったしな。それなら外で飯を食うついでに買い物も行こう」

俺の言葉に彼女は満面の笑みを浮かべて「うんツ！」と元気よく返事をした後「準備するから30分、いや!15分頂戴ツ！」と言って風のように去っていった。

「さて、俺も……っ。準備しますか……」

よっこいせ。全身を襲う筋肉痛に加えてひどく重い腰をトントンと叩いて俺も自室へと戻った。

「いらっしやいませー……」

俺は碧理を連れて、京都の繁華街にあるファミリーレストランへと訪れていた。

「ねえ!ねえ!タクミはなに食べる?アタシはね!パフエ食べたい!!」

対面に座る碧理はるんと見るからに機嫌よくメニュー表を指さしてほほ笑んだ。

あの短い時間で彼女は簡単ながら化粧を施し、わざわざ着替えており、トップスはタートルネックで両肩と谷間だけなぜが生地が存在しない灰色のセーターにデニムのホットパンツという前世の思春期男子が見れば卒倒するような恰好してプロポーションの良さを全身より醸し出している。

くるくるとおなじみのツイントールを指に巻いてほほ笑む彼女に俺も思わず笑顔が零れた。

「ん?どうしたの?」

不意に笑った俺に碧理はきよとんとした顔をし首を傾げたので俺は「なんでもないよ。かわいいなと思っただけ」そう言っただけ彼女の頭を撫でると碧理は顔を赤くしながら笑って返した。

「俺はこれにしようかな」

そう言っ指さしたのハンバーグプレート。ここのファミレスでは至って王道のメニューに決めて店員を呼ぶインターホンを押した。「お待たせしましたあー。ご注文をお伺いします」

結果的に昼のピーク時を避けた来店になったため、インターホンを押すとすぐやってくる店員。

彼女もまた、碧理と同様、というかこの世界の女性は総じて巨乳が多く、目の前にいる青色髪の店員さんも制服のブラウスに胸下からしかないエプロン。いわゆる乳袋を強調する制服を来て笑顔で注文を取りに来ていた。

「あ、ハンバーグプレート大盛と、こっちのパフェを下さい」

俺がメニュー表を指さしながら店員さんに微笑んで注文をすると彼女は一瞬「ヒュッ」と息を吐いてから笑みを浮かべてメニューを復唱する。

「ドリンクバーが付いておりますので、ご利用の場合はあちらをご利用下さい」

そう言っペコリと頭を下げ超ミニ丈のスカートから腰をフリフリと振りながら席から離れる。

「むう〜」

店員さんに「ありがとう」と告げて手を軽く振っていると正面から不満げな声をあげる碧理が頬をフグのようにプクくと膨らましていた。

「どうした?」

「タクミはいつもそうやって女の子に優しくする」

「拗ねてます」と顔に出す彼女に俺は『ははは』と乾いた笑いを浮かべた。

この世界では女性に優しくする男性は稀有な存在である。少数である男性を女性はどうしても立ててしまうため、多くの男性が高圧的

になってしまいうちでの俺の行動は“周りを誤解させる”ということらしい。

「嫌いか？優しいのは？」

俺の言葉に碧理は首を横に振って答える。

「嫌いではないよ。イヤではあるけど」

そう言っただけで更続けた。

「タクミの良いところは誰にでも優しくして横柄じゃないところってのは私たちが一番知ってるもん。でも折角二人してデートしているのに他の女性に優しくされるのはイヤでもあるけど……でも優しくないタクミもイヤかなあ……」

言葉尻がどんどん尻すぼみし、最終的にその場で首をかしげる碧理に「難しいな」と返した。

「あ、でもさっきの店員さんはタクミのタイプっぽいし、警戒はしておくれね！」

ふと思いついたかのようにそう言っただけでやりと口角をあげて悪戯っぽい笑みを浮かべる彼女。

「参考までにそう思った理由を尋ねても？」

「おっぱいとお尻が大きいから」

(バレテラ)

どうやら、完全に俺の趣味は碧理に把握されているらしい。

その後、しばし歓談をする頃には注文した料理が届き俺たちはそれに舌鼓を打ったのであった。

ファミレスで食事を終えた俺たちはそのままの足で近くのショッピングモールへと訪れていた。

その理由というのも別に高校に入るからと言って買わなければならないものなどは思い浮かばず、とりあえず複合施設に行けば、なか欲しいものが見つかるんじゃないかという安直な理由で訪れたわけだが。

「あつ！あつち見たい！タクミ！いくよ！」

「あ、あその服もおしゃれなの！」

「アタシここのブランドも好きなの！」

と結局は碧理の私服ショッピングへと様変わりしていた。

「ところでタクミは服買わないの？」

もはや目的を違っている碧理の言葉に俺は思わず苦笑いを浮かべた。

「服はべつにないかな。こだわりとかないし」

そう言つて彼女の前で手を広げて「どうだ」と言わんばかりにアピールする。

無地の黒いパーカーにデニムの長ズボン。そしてスニーカー。すべて某有名な服の量販店で購入したシンプルイズベストの俺の一張羅である。

「……タクミっていつも思うけど地味よね……」

ジト目をして碧理が俺の恰好を見てからそう呟いた。

「そうはいつでも、派手すぎる格好もなんとなく好きになれないし、お店も少ないからね」

俺はそう言つてこの世界での男性服のすくなさを暗に彼女に告げた。

例えば、このモールでさえ、男性を専門とするショッップなど2割あるかどうかである。

尤も、ファッションにそれほど執着のない俺からすればどうでもよいことだが。

「まあ、……地味だけどそれが良いものタクミなんだけど……なかなかある。ねえ！なにか買いたいものはないの？」

うーんと首を傾げた後彼女はそう言つて俺に問いかける。

「どうやら自分の買い物に付き合わしすぎてどこか思うことがあつたのだろう。」

「うーん。それじゃあ、あそこ行ってみよ」

俺の提案に碧理は「……あそこって……」と呟いた後、コクリをうなずいた。



## 第漆話 ランジェリーショップ♡

「い、いらっしやいませー!!」

ショップの店員さんが予期せぬ男の来客に上ずった声で歓迎の言葉を発した。

「そ、それで……なにが欲しいのよ……」

先ほどから碧理はどこか落ち着きを失い、頬に赤みがさしている。

「まあ、俺自身が欲しいってわけじゃないんだけどね」

俺の言葉に「当たり前でしょ!……ここはランジェリーショップよ!」

と強めの口調で俺に詰め寄る。

ランジェリーショップ。

前世の知識と同じ、女性用の下着専門店である。しかしながらいくら男女比が逆転していても、

いくら女性の肉体の早熟が早いこの世界でも

15歳の女性が入るには若干敷居が高いであろうショップで俺たちは物色をしている。

「碧理に着てほしく……俺好みの下着……」

そう言うと彼女は「わかったわよ!」と更に顔を赤らめながら店内に陳列された下着を物色していく。

「それでどれがいいのよ」

恥ずかしいのか小声で俺の好みを訪ねる彼女に首をかしげてしまふ。

「うーん。出来れば流行りとかも聞きたいし。店員さーん」

俺は手を挙げて店員を呼ぶ。

「いらっしやいませ。お客様。本日はどういったものをお探しでしょうか?」

偏見が入ってしまうがさすがはランジェリーショップで働く店員さんである。

出るところが出で引つ込むところは引つ込んでおり、ピタつとボデーラインが出るような薄手のワンピースを来てそのスタイルを

主張している。

「この子にかわいい下着をプレゼントしてあげたいんですけど、流行とかよくわからなくて……。教えてもらっても良いでしょうか」

俺の言葉に鷹揚に頷いた店員さんは

「そうですね……」と漏らした後に、陳列された下着をいくつかピックアップした。

「最近の流行りって言えばコレと、コレと、ああ。アニマル柄も流行りでございます。それにコレ。あとはコレ、くらいでしょうか？」

「流行りものって多いんですね」

予想していた店員さんのピックアップの多さに思わずそんな言葉が漏れると彼女は「そうですね」と笑顔で答えた後、つづけた。

「女の子はいつだって男の子に喜んで貰える為にデザインや形に拘りますから。」

そう言っって顔を赤らめる碧理に「そうですね？彼女さん」と告げると

碧理は「え……えええ！——そうよ!!」と何故か、どや顔で俺を見た。

「ただ、サイズがありますか？」

どや顔の彼女を無視して俺は店員さんに彼女の胸にあるサイズについて問う。

碧理は今年16歳になるが、その胸部は平均よりも膨れており、今店員さんが持ついくつかの下着は恐らく入らないだろうと簡単に予想できた。

「これらの見本はあくまで平均的なバストサイズのもですから。もしよろしければお客様のバストサイズをお伺いしても？在庫を見て参ります」

店員の言葉に碧理は小声で「……Hの……55……です」と応えて茹でタコのように顔を赤らめた。

「では確認して参ります」

そう言っって店員はバックヤードへと消えていく。

「恥ずかしすぎて……。死にそうよ……」

碧理がぼそつとそう呟くので俺は思わず苦笑いを浮かべた。



すぐに店員さんがバックヤードから戻ってきた。

顔には笑顔を浮かべており碧理に向かつて

「Hカップ以上であれば今は全体的に在庫に余裕がありそうですので一度、お胸のサイズを測りませんか？」

ああ、なるほど。と思わず納得する。

前世でも「ブラジャーのサイズは適正に」とよく言われていたのを思い出し、碧理に変わり俺が

「よろしくお願いします」と応えると彼女は「なんでアンタが答えるのよ！」とキレの良いツツコミをして、店員にドナドナと試着室へと連れていかれた。

カーテンで遮られた空間の前に俺は立ち、彼女たちのやり取りに耳を傾ける。

「お客様、綺麗なお胸ですね」

「……あ……ありがとうございます……」

たどたどしい碧理の姿がありありと想像でき、思わずクスリとその場で笑う。

「お客様……大分背中にお肉が逃げています。こうやって肩甲骨からお肉を……持って行って……カップにおさめると……はい。これが本当のお客様のお胸のサイズですね！」

恐らく店員による肉を胸に集めるといったことをされたのだろう。

時折、碧理の声が

「——えッ……ちよ……そこまで!?!……うそ……」という言葉が漏れ出た。

「でもこれって……」

「——はい！お客様は“H”カップではなく“J”カップですね！」

と店員の覇気の良い声が試着室より聞こえた。

思わずのその場で『A・B・C』と順番を数えてしまうのはもはや本能だろうか。

「せっかくですのでお客様の胸を彼氏さんにお見せしましょう！」

「——え!?!——ちよ!——まッ!——」

カシャンッ!

制止する彼女の言葉を無視して開かれたカーテンには上半身だけブラジャー姿となっている。

店員さんの辣腕により寄せられた碧理の胸部はもはやバインとミサイルのごとく突き出しており、思わず俺は唾を飲み込んだ。

「いかがでしょうか？お客様」

店員が俺に感想を求めるので俺は思わず「大きいですね」と素っ頓狂な感想を述べると碧理の

「――殺してくれえー!!――」

と叫び声が店内にこだました。

「それではお客様は〃 Jの55〃 を中心に探すとして、一応流行はこれらでございますが、お二人の好みとかはいかがでしょうか？」

店員によりガウンを渡された碧理はそれを被り俺の顔を見た。

「ここまできたらどうとでもなるわよ！アンタの好きにしなさい！アタシの好みはタクミの好みですもの」

そう宣言する彼女に店員は「愛されていますね」と優しく微笑んで続けた。

「ではお客様はいかがでしょうか？もっとキラキラしたものが良い……とか、黒色が良いとか、なにかお好みはございますか？」

店員の言葉に俺は「うーん」と首をひねり考えてそれを伝えた。

「Tバックが好きですね。ほら、碧理ってお尻もプリっとして綺麗なので」

聞かれもないのに答える俺に彼女は顔を赤らめて「なに言ってるのよ！」と声を荒げた。

もはや、俺の目的は恥ずかしがる碧理をいじめるプレイへと変わっているのだ。

「確かに。彼女さんスタイルが大変よろしいですし、Tバックもお似合いでしょう。……であればこちらなんていかがでしょうか？」

「……ちよ……それもはや丸見えじゃない……」

店員が差し出した下着は、黒い総レースのランジェリー。胸元にはやや大きなチャームが施され、秘部のみが見えないようにやや厚めの生地で護っていた。

「いいですね……でも、やっぱり着ている姿を見てから決めたいのでいくらか彼女に試着させてもよろしいでしょうか？」

俺の提案に「畏まりました。それでは私は店内におりますので何かあればなんなりとお申し付け下さいませ」

そう言つてペコリを頭を下げてその場から退散する。

俺は残されたいくつかの下着を手に碧理に微笑みかけた。

「さっ、着替えようか」

俺の表情をみて彼女はどこか顔が引きつっていた。

「じゃあさっそくだけどこれに着替えてくれるかな」

俺は先ほど店員さんがピックアップした総レースの下着を彼女に手渡した。

「……本気？……」

彼女が恐る恐るといった表情で俺に問うので笑顔で「もちろん」と返すと彼女も諦めたのか

「わかったわよ……」と試着室へと戻っていった。

「ど……どうかしら……」

カシャン。

音を立てて碧理が下着姿でその場に立つ。

試着前からわかつていた通り、黒のレースで仕立てられた HALF カップのブラジャー。

谷間が零れんばかりに主張しており、よく見れば碧理の大きな乳輪が若干顔をだしている。

谷間の中心にがゴールドのアクセサリーが爛々と輝いており、それが大人の魅力を引き出している。

もちろん、胸ばかりではなく、鏡で映る彼女の臀部はまさに T バックらしくプリっとした臀部を放り出していた、

「いいね!!すごい似合ってるよ!いつも以上に綺麗に見える!」

俺は笑顔を浮かべてより近く見る為に顔を近づける。

「ん?ちよつと乳輪が出てるね」

ツンツ。

「——ン……こちら……タクミっ!」

指ではみ出た乳輪をついた瞬間彼女はビクリと体を震わせて俺を睨んだ。

「ああ、ごめんごめん。ついね。つい。」

俺はわざとらしく答えながら彼女の肩を掴んでそのままグリッと反転させる。

「……なにをするのよ……」

俺の行動に警戒する彼女。しかしながら店内ということとで声量を落とす彼女に

「せっかくだしTバックもみたいから」

と適当な理由をつけて、彼女の秘部を覗くべくその場でしゃがみこむ。

「碧理、壁に手をつけてしゃがみこんで」

ここまで来ると碧理も俺の行動におおよその検討がついたらしく、普段の彼女らしく従順に俺の言う通りに鏡に手を付けて尻を突き出した。

「やっぱり、溢れてる」

よく見えるようになった彼女の菊門から陰核に掛けてのライン。

股ぐらより太ももへツツツと伝って愛液が流れ落ちていた。

俺はそれを指で掬ってペロリと舐める。

甘いような、しょっぱいようなどこかムラムラとしてくるような味を口内で感じながら、彼女のクリトリスに向かって指をピンつと放った。

「——あっ!!!ンッ!!!」

自らの二の腕を噛み彼女はその場でビクンと震えると次の瞬間ピチャピチャと太ももを伝い試着室に染みを作っていく。

「イクの早すぎだぞ。碧理」

ひとしきり震えた後にその場でへたりこむ彼女の耳元でそう呟いた。

「……も、もつとお、もつと、してください……」

いつものように狂犬じみた表情は完全になりを潜め、そこには目をトロンとし、口から涎を垂らす発情した雌犬が俺に懇願していた。

## 第捌話 試着室 ♡

カシヤン。

試着室のカーテンを閉める。

「どこを？」

1m四方の狭い室内で俺は碧理と距離を詰めて見下ろして尋ねる。

「…………お…………おまんこ…………アタシの…………おまんこ…………もつといじめて…………え…………」

彼女の言葉に応えるように俺は微笑を浮かべて、マンコへと手を伸ばした。

——グチヨリ——

指先にぬるぬるとした感触を感じつつ、そのまま彼女のクリトリスをつねり挙げた。

「——ンツ!!!——アあ”」

ジヨボボボボボ。

矯正を挙げて、その場で失禁をする彼女の耳元へ口を近づけ告げた。

「試着室でお漏らしなんて、碧理は本当に”いやらしいね”」

それだけで彼女がビクンツ、ビクンツ!と腰を震わせ放物線を描くようにカーテンや、壁に尿をぶっかけていく。

「あーあ、この後の掃除が大変だし、店員さんには”お漏らししました”って謝らないといけないね」

すでに足元はびちやびちやになりマットの色が変わっている。

あたりには若干ながら尿の臭いが漂う様に、俺は店員さんへ心の中で合掌した。

もつともこの世界は、性交には比較的寛容であり公共の場で公開セックスすること以外ではあまり怒られることもないのだ。

むしろ、「あの子はセックスできたのね。羨ましい」程度の扱いであり、折角男子が発情したなら、『思う存分中出しして子ども作ってください!』と言った風潮の方が強い。

もつとも、賀茂家は姉妹ともピルを欠かさず飲んでいたので今は、

妊娠することはないが……。

「……ハア……ハア……ハア……。た、タクミい……ちゆう……チューしてえ……」

放尿が落ち着いた彼女は顔を近づけ口を開いて舌をだらんと垂らす。

俺は、碧理と同じように舌を垂らして重ね合わせた。

“面”を意識してより接着するように舌が重なり合う。

碧理が好きなキスの一つである。

そのまま舌を絡めながら彼女の頭が逃げないように腕でロックして猛獣のように彼女の唇を貪る。

「……ハア……しゅ……しゅき……しゅきい……ンツ……たく、タクミい」

息をつく暇さえ与えずに俺は彼女の口内を蹂躪するところには、彼女が肩を震わせながらぎゅつと腕を回して顔を更に蕩けさせる。

「お……おちんぽ……おちんぽ……ください……アタシの……お、おまんこに……タクミのおちんぽ……挿入れて……下さい」

クネクネと腰を俺に擦り付けておねだりする彼女に俺も我慢の限界であり、そのままズボンを抜いで濡れないように壁に掛けて、

抱き合う体勢のまま、彼女の膣内へと突き立てた。

「——クツ——うううううー！」

ズブリと抵抗もなく根元までくわえ込んだ彼女は唇を噛んで息をひそめる。

ぬちゅん。ぬちゅん。

さすがにいつものようにパンパンと打ち付けるわけにはいかず、俺はゆっくりとなるべく音をたてないように腰を前後にふるった。

「ああ♡……きもちい……きもちい、きもちい……おちんぽ……きもちいいよ……」

抽送に声を漏らす彼女は徐にブラジャーを脱いで、俺へと突き出す。

「……噛んで……下さい……思いつきり……アタシの、お、おっぱい……かじりながら……イってください……」

差し出された桜色の大きな乳輪にぷつくりと膨らんだ噛みやす  
そうな乳頭。

俺は“J”カップの乳首に口を添わせて、望み通り

“ガチリ”

と噛んだ。

「……………シンンッ——!!!……………もつと……………もつと強く……………つよ、クツ!!!」

要望通りにもはや噛み切らんばかりに力をこめると彼女はビクリ  
!ビクリ!と体を震わせた。

……………ぬちゃ……………又チャ……………又チュ……………

徐々に射精感がこみ上げて時折俺の腰がブルルと震え出し限界が  
近いことを彼女に告げる。

「……………くび……………首を……………」

彼女の言葉に俺も笑顔で頷き彼女の首元に手を伸ばして無遠慮に  
締め上げた。

「……………ぐっ……………」

息を詰まらせると同時に、膣内<sup>な</sup>がチンポをもぎ取ろうとせんばかり  
にギチリ、ギチリと締め始めた。

「……………射精<sup>イ</sup>くよ。膣内<sup>な</sup>で受け止めてね」

苦しそうに眼を細める彼女が小さくコクリと頷いたのを見て、俺は  
手の力を更に込め

もはや、周りを気にせずに

——パン!——パン!——パンッ!——

と腰を彼女に打ち付けて、そのまま精を吐き出した。

“ビュルルルルルルルルル”

昨日、あれだけ搾り取られたにも関わらず、俺のチンポから感じる  
射精感は長く、そして強い。

ゴポリ。

長い射精感が収まり、そのまま彼女から引き抜くと、奥深くに出し  
たにも関わらず、ドポリ、ドポリと精液が下へと零れた。

その頃には、碧理を絞めていた手を外しており、彼女はその場でペ  
タンと座り込み



すうー、はあーと過呼吸を直すかのように息を吐いては、吸ってを繰り返す。

「おい、まだ俺のチンポ綺麗にしてないだろう?」

呼吸を整えて休む彼女に俺はそう告げて、座り込む彼女の口へ、グポリ と挿入すると、彼女は啞えこみながら

「ほごめんなさいふんなふあい……はむ……」

と謝罪をしながらかいかいしく、俺のチンポに吸って体液をこそぎ落とす。

「良い子だね」

カリ首を、裏筋を、舌で器用になめとり、そのままグポリと喉を開いて根元まで啞えこむ。

息は荒く、目からは涙を流していた。

そんな彼女の頭を優しく撫でて俺はほほ笑んだ。

「あ、ありがとうございますー!」

店員がやや顔を赤らめながらペコリと頭を下げ俺たちを見送った。

あの後、碧理により綺麗にされたチンポをしまい、

俺は店員に「弁償します」と告げていくつかも下着と、一緒にお金を包んだ。

店員もそこは察しがついていたのか

「ありがとうございます。清掃などはこちらでしますので、彼女さんを大事になさって下さい」

といってやや、赤らめた顔をクシャッと微笑んで答えた後に

「あ、でももし試着室に精液が残ってありましたら、拝借させていただきます」と告げた。

持ちつ、待たれつなのだ。

男性の希少性から女性全体へと渡る精液はもちろん少なく、彼女の提案に俺は「もちろん」と返す。

その後は、顔を下に向けて、恐縮しきっている碧理を連れて再度、店

員に謝罪をしながら店を出たのだ。

「碧理はほんとうにドMだよね」

その後、モール内のベンチに座り自動販売機で購入したドリンクを飲みながら彼女へとほほ笑みかけた。

「……」

彼女は恥ずかしそうに赤い顔を下に向ける。

「いつもはツンデレなのに、どうして二人きりでエッチするときだけはあんなに素直になるの?」

そう。姉の蒼佳でさえ知らない碧理の真の性癖は生粋のドMである。

「……………うる……………さい……………」

「ん?ごめん?なんて?」

小声でぼそぼそと言葉を漏らす聞き取れず俺は再度問い直す。

「……………うるさい!うるさい!うるさい!!!知らない!知らない!このバカ!馬鹿タクミ!ド変態ビッチ!!」

碧理は声をあげてその場から立ち上がりビシッと指を突き立てる。

「タクミのアホー!」

そう言っ、逃げるようにトイレへと駆けこんでいく背中を見ながら俺は微笑みを浮かべて見送った。

## 第玖話 納精の義務

「督促状？」

「ええ、たつくんにですって」

朝、蒼佳から俺に郵便が来ていると聞きどんな書類かと思うと葉書の中央にデカデカと「督促」と書かれていた。

「俺、なんか滞納してたっけ？」

あまりにも身に覚えがないので家主たる蒼佳に尋ねるも

「知らないわ。中身までは見てないもの」

という回答があり「そりゃあ、ごもつとも」と返して俺はペラペラと仰ぎ見る。

「……あ……」

督促の横には「納精のうせい」のお願いと書いてあり、俺はあることを思い出した。

「あれ、サムライって納精免除じゃなかったっけ？」

「ああ、納精の督促だったの。というより納精で督促状が来るのね」

そう言っつて蒼佳は苦笑いを浮かべた。

この世界では体外受精による試験管ベイビーが一番メジャーな妊娠方法である。

それを支えるのは男性による精子ドナーの提供であるわけだが、男性の性欲が総じて低い為、任意に精液提供を促してもあまり効果が見られなかったことから20年前より（精通した13歳以上の）男子は強制的に月に一度精液を精子バンクに提出する義務が生じるように法律が変えられた。

故に「納精の義務」である。

悔しく話すと長くなるが俺は13歳の頃からサムライ養成機関のため、一度も納精をしたことがないのだ。

故に蒼佳に「どうすれば？」と問うも、

2人して首を傾げた後に出たことは市役所へ行くということだった。

「行つてきまーす」

あまりのめんどくささに俺はため息をつきながら家を出た。

「はあ、 〃精液バンク 〃ですか……。」

「はい。納精の際はお手数ですが精液バンクへの出頭をお願いしております。

ここから一番近い所ですと……、ここですね。現在地より歩いて5分程度のこちらに精液バンクがありますので詳しくはそちらにご確認下さい」

市役所の受付に立つ女性に地図を用いてそんな説明を受けた。

「本当に訳の分からん世界だ……」

「ん？申し訳ありません。聞き取れませんでした」

俺の独り言に受付の女性が反応するので、

「あ……ごめんなさい。独り言です」と返して、

俺は地図を頼りに精液バンクを目指した。

転生して16年。未だこの世界に慣れないことも多い。

再認識させられるような気分だった。

「おはようございます。本日は 〃納精 〃ですか？それとも 〃猷精 〃ですか？」

「……ん？……ごめんなさいもう一度お願いします……」

聞き覚えのない単語に思わず再度聞き返すも受付嬢は先のセリフを繰り返すだけで、

俺は最終的に 〃納精 〃の督促状がきた。 〃訳あつて今回が初めてだ 〃というのを伝えると受付嬢は

「畏まりました。それでも 〃納精官 〃より説明を受けて頂く必要がありますのでこちらの番号でお呼びしますのでおかけになってお待ち下さい」

ぺこり。

頭を下げる彼女に俺もぺこっと頭を下げて待合室のベンチに座る。

いざたどり着く前は精液バンクという字面からどこことなく精液臭  
そんな病院のような場所予想していたが全然違っていた。

むしろ近代美術館のような装いで建築された施設内はテレビで紹  
介される大手企業のオフィスのように清潔感が溢れていた。

「36番でお待ちのかたあー…8番準備室にお願いします」

アナウンスが俺の番号を呼び出す。

「初めまして。私 納精官の橘日和ひよりと申します」

殺風景な、どこか保健室を思い浮かべるような室内に通され、女性  
がペこりと頭を下げる。

「あ、よろしくお願いします」

「賀茂匠様は……おサムライ様で、今日が初めての納精ですな……」

彼女はタブレットを操作しながら切長の目を細めた。

「では、簡単に納精についてご説明致します」

そう言ってテレビに一つの映像を抽出した。

……ほうほう。ふむ……なるほど……

映像はおよそ30分程度流れるも簡単に言えば納税が単純に精液  
にも適用されるということだった。

納める精液の量や、ランクに応じて税金もいくらか免除になるらし  
く、おまけに〴〵ふるさと納精〴〵なるものも存在しており思わず舌を巻  
く。

「いかがでしたでしょうか？何か不明な点がありますでしょうか」

納精官の橘が俺に確認を問うので俺は気になったことをいくつか

質問した。

一つ、納精と献精の違いについて

一つ、精液のランクについて

一つ、精液の提出、搾精方法について

俺の質問に彼女はニコリと笑顔を浮かべてパンフレットを俺に差  
し出す。

「まずは納精と献精の違いですが納精は先の映像の通り月に一度、こ  
こ精液バンクに出頭頂き〴〵処置室〴〵にて搾精した精液を納めてもら  
うものです。

そして献精ですがこちらのパンフレットの方が分かりやすいかと思われます」

そこにはデカデカと

〃献精のおねがい〃

とタイトルが書かれ、四コマ漫画で献精について記されていた。

可愛らしいポップな男の子がフラスコを掲げて精液を提出している四コマだ。

発行元は日本〃白十字〃という機関らしい。

「それで精液のランクでございませすが賀茂様は〃甲欄〃でございませす」

「……………ああ……………なるほど」

橘の〃甲欄〃ということに俺が合点が行く。

俺は12歳の年の5月5日に行われた〃精液検査〃、通称、〃精検〃の結果、サムライになったのだ。

そして精検には5段階の評価がなされ、

甲<乙<丙<丁<戊の5段階にてランク付けされて甲と判断された精液の持ち主のみがサムライ養成機関へと行くのだ。

どうやら、その評価をそのまま引き継いでいるらしい。

「甲の方ですと納精された精液1mlにつき、所得税が5,000円減税措置をされます。

最終的に所得税を全て減税されると翌年の住民税からも控除されますし、それに上限はございませせん」

橘のセリフに俺は思わず前世の〃年末調整と住宅ローン控除〃の関係を思い出す。

今回は上限がないそうなので似て非なるものだが…………。

「ですので男性は毎年の確定申告を税務署に行って頂く必要がございませすのでご注意下さい」

ペこりと橘はまた頭を下げた。

「最後に搾精方法や提出方法ですが、納精・献精はいずれもここ〃精液バンク〃で搾精頂きます。

一般的にはこの搾精器とコンドームを使って頂き…………」

そう言つて彼女は透明色のオナホールをこちらに差し出した。

「精液バンクにあります。〃処置室〃でマスターベーションし、射精した精液をそのまま提出頂ければそれで終了です」

最後に「他に何か質問はありますか？」と言う彼女に俺は首を振つて「ありがとうございます」と頭を下げると橘は鷹揚に頷いてから「では、施設のご案内などはここに常勤しております。〃看護師〃にお任せ致します。

この中から選んで頂けますか？」

と言つていくつかのクリアファイルを渡された。

……ん？……

疑問符が頭に浮かぶが、何処かにワクワクとしている自分を認めて、とりあえずは1人の女性の資料を指差した。

「早川ですね。この者についてはまだ〃看護実習生〃になりますが……畏まりました。それではこちらに呼びますので、その後の詳しい説明は彼女よりお聞き下さい」

ぺこり。

ピンつとはった背筋を90度に曲げて彼女は部屋から出ていった。

1人、室内に残されてどこかソワソワ、ドキドキする姿に俺は前世の風俗を思い出していた。

## 第拾話 性教育

「は、はじめまして。わ、わたし〃実習生〃の……は、早川 みすず 美鈴で、  
でしゅ」

部屋に入つて来たのは、目元を隠すように黒い前髪を垂らした〃T  
he 文学少女〃然とした女性だった。

「よろしくお願ひします。賀茂 匠といひます。早川さんはまだ学生  
さんですか？」

俺の質問に早川は自身の大きな胸に手を添えて

「は、はひゅ。今月学校を卒業……しまして、来月からここで働きます  
ので……きよ、今日からここで実習生として働いておりました」

緊張からなのか、カミカミと喋る彼女に温和な笑みを浮かべて俺は  
手を差し出した。

「……はえ？……」

キョトンと首をかしげる彼女に「よろしければ握手をしましょう」  
と告げると、恐る恐るといった様子で、彼女は俺の手を両手で包み込  
んだ。

「それで、納精官の方からはナースさんに施設の案内等をしても  
らつてということだけど……」

俺の言葉に彼女は「……うツ……はい、が、がんばります……」と  
自信なさそうに答えた。

「も、申し訳ありませんッ！」

結果としてまだ実習生であり、本日が初めてだった彼女に精液バン  
クの施設内の紹介は難しく、最終的に施設の地図の記載がある館内の  
手引きをもらうことになった。

そして〃処置室〃に入った俺に向かって彼女は早々に土下座をか  
ます。

「気にしないで下さい。どうせこれからは月に1度は来るんですか



ら、来月案内してもらえれば俺は大丈夫ですよ」

俺の言葉に彼女はぶわっと目に涙を貯めて「エグ……エグツ……」と嗚咽を漏らす。

(それにしても……)

地面にペタリと女の子座りをする彼女を俺はまじまじと観察した。

水色を基調としたミニ丈のワンピース型のナース服。

膝上まで隠した薄い白のオーバーニーソックスは、フチはレース調にあしらわれており、この制服を考案した者に内心喝采を送る。

前髪から時々覗く、薄茶色の瞳。口元にポツン存在するほくろ。そして突き出た胸部。

なにかから、なにかまでこの文学少女を彩るアイテムに思えてしまう。

「ところで、搾精の手順なんだけど……」

観察もほどほどに切り上げて俺は彼女に搾精について問おうと声をかけると早川は俯いていた顔をあげた。

「……さ、搾精は……ま、まかせて下さいッ！ちゃんと朝、先輩に習いましたからッ！」

真剣みのある表情に俺は内心「大丈夫じゃないんだろうな」と他人めいた思いを浮かべながらほほ笑んだ。

「……えーつと……それで……この搾精器にローションを付けた陰茎を入れて……前後していただければ……大丈夫です！」

早川は覚えたてのセリフをそのまま言うように透明のオナホール片手に告げた。

「陰茎ってなんですか？」

「ふえっ?!……え、……あの……学校で習ってない……ですか？」

予想外な質問だったのだろう。俺の問いに目を丸くして問い返す彼女に俺は首を横に振った。

「すみません。……3年間、サムライになるために養成機関で軟禁されてましたから……」

俺の言葉に早川は「……そっか、……そうですよね……おサムライ様であれば……その期間は性教育の授業は……受けない？」

自分で言っておきながら彼女は言葉の最後に疑問符を浮かべるので俺は「はい。そうなんです」と合いの手を差し出した。

もちろん。嘘である。サムライの養成機関といえども13歳〜長くて18歳まで男子を集める場所なのだ。

当然中学校のような授業もあり、性教育も受ける。

しかしながら、退魔師、とりわけサムライについては口を閉ざしかちなので俺はあたかも

「なにも知らないんです」ムーブをかわしてこのプレイを楽しむことにした。

「……えつと……あの……じゃあ、お、教えますので……セクハラとかで訴えないで……下さいね？」

恐る恐るといった具合に彼女が尋ねるので俺は「よろしくお願いします」と笑顔で答えた。

「……えつと……陰莖っていうのは……お、おちんぼのことです……」

「ごめんなさい。よく聞こえなくて」

尻すぼみとなる彼女に俺はもう一度と伝える。

「……え、……あ、のですねえ……お、お、おちんぼ……です」  
きゅ〜つと音を立てるように一気に顔を赤らめる女性。

「ああ、おちんちんのことですね。あんまりおちんぼって言い方しないので、すみません」

俺はにやりと笑いながら「なるほど！なるほど」と言う。

「あ、でもそれで、早川さん風に言うとその『おちんぼ』をその手に持っている透明な奴に入れると搾精できるんでしょうか？」

もはやセクハラしているのは俺なのだが、この世界で俺の行動を戒めれる存在は居ない。

「……あ、あの……この、さ、搾精器はですね……その、膣を「膣ってなんですか」……っ!？」

被せるように聞く俺に彼女はあうあうと狼狽しだした。

「あの、ほ、本当はわ、わかっていらっしやいますよね……？そ、その上でからかって……いますよね？」

羞恥に濡れて、やや恨みがましい目をする彼女に俺は至って真剣な顔つきで

「ごめんなさい。本当になにも知らなくて……実は、俺……そんな自分には恥ずかしく……悲しくて……」

グスン。

わざとらしく鼻を鳴らすと彼女は「わわわわわわ、ご、ごめんなさい。疑ってしまって……。忘れてください！わ、私がちゃんとお教えしますので、……。ね？」

歩みより俺の曲げていた背を優しく撫でる。

(ちよろい)

そんなことを思いつつも「あ、ありがとうございます」とわざと言葉を詰まらせて俺は彼女に感謝を告げた。

「えっと、ち、腫ってというのは、お、おまんこのことです……」

そして文学少女による性教育が再開された。

「おまんこって女性の性器のことですよね？どうして女性の性器がでてくるんですか？」

「……そ、それは、ですね……精液を取るには……お、おまんこが一番良いと……されているものですから……」

「なんで一番よいのでしょうか？」

「なんで!?……え、えと、なんででしょうか?……うーん。でもせ、せ、セックスの時に、おちんぼをおまんこに入れて、そこで射精すれば……あ、あかちゃんが出来ますから……きつとその時に男性が混乱しないように、こうしておまんこの形をしているのでは、ないでしょうか?」

「……なるほど……セックスはしたことがないので俺にはわかりませんが、ちなみに早川さんはどうですか?」

「え、ええっ!?あ、あの……ないです……」

どうやら彼女は処女らしい。

「なんとなく……ですが、手順はわかりました。要するにその搾精器におちんちんを入れて射精すればいいということですね！」

ああ、だからローションとコンドームですか」

元から理解しているので今さらではあるが、俺は彼女に「理解できませんでした！」と言わんばかりにそう答えた。

「ほッ。よ、よかったです。そ、それでは、私の方では、い、以上になりますので、搾精が出来ましたら、あそこのインターホンから呼んでいただけますか？」

そう言っつて壁に取り付けられたインターホンを指さして彼女はいそいそと部屋を出ようとするので俺は、彼女の名を呼んでそれを止めた。

「あの……パンフレットには必要であれば搾精看護師に搾精を頼めると書いてあるんですけど……お願いできますか？」

俺の言葉に早川は目を見開いて口をポカーンと開けてその場で固まった。

第拾壹話 搾精看護師 早川美鈴♡

私は酷く混乱していた。

目の前の黒髪の少年。

それこそ街中であまり見ることの出来ない程に整った容姿を持ち、先の会話ややり取りからも、こんな根暗な女に優しく接してくれる。まさに漫画の中の王子さまのような男の子からの提案に言葉が詰まる。「……………もう一度……………」

あまりにも現実離れた提案に未だこれは夢じゃないかと思いき返すも彼から返ってきた言葉は

「早川<sup>わたし</sup>さんに搾精をお願い出来ますか？」

という言葉だった。

(うん。夢だわ。これ。間違いなく夢だわ)

私は彼の言葉にいまは夢の中だと決心してするも、はて、何処からが夢なのかと首を傾げる。

全くもって自慢ではないが私は小さい頃からモテない。

スポーツも出来ず、ユーモアのセンスもなく、ただ読書と勉強を生きがいにしている私は、所謂「陰キャ」と同級生や、学校の男子に陰口を叩かれ育った。

そんな、過去を見返すべく国立の東京大学看護学科に入学して、ここ精液バンクに4月より入社が決まっている。

精液バンクで働くことは一般人の私たちからすれば誉れでありきっと同級生たちが知れば地団駄を踏んで悔しがる程度には上級国民の地位にあたる。

しかしながら今日体験での実習の際、朝イチより先輩から告げられた事實は

「搾精看護師なんて周りは羨ましがるけど、実際美味しい思いが出るなんて思わないことね。

そもそも男性が私たち女に頼るなんてことは起こらないし、搾精の現場なんて見ようものなら次の日にはセクハラで訴えられて職を失

うわよ」

という、救いようもない現実だった。

あれ？結局どこからが夢なんだっけ？モテなかったことも夢なのかしら？

じゃあ、この夢から覚めれば私はきつとモテモテに

——パシン——

試しに強めの力で自分の頬を叩いて私はその場で悲鳴をあげた。

「——夢……じゃないッ?!?!」

ジンジンと痛み、熱を帯びる頬の感触に私はここが現実だと理解する。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

私の奇行を案じるように向かいに立つ少年。賀茂様がこちらを心配そうな目を浮かべていた。

「し、失礼いたしました!!!」

私は彼に盛大に謝罪を告げると彼は「大丈夫ですよ。顔をあげてください」と優しい声音で囁いた。

「それで……早川さんにお願いできますか？」

目の前に立ち、後光が差すように光を放つ王子様に私は、「よ、よろこんで」と言葉を返した。

王子様はどこまでも私に優しくかった。

まるで慣れているように「それじゃあ、あそこのベッドに一度座りましょうか」と

私をリードし座らせると、横に彼も腰を据えた。

かぐわしい男子の匂いが私の鼻腔を刺激し思わず子宮がキュンと疼いた。

「早川さんのそれは制服ですか？」

王子様たくみ様が私の服装を指さして質問を投げた。

どうやら、彼はここの制服が気に入らないのだろうか。

確かに全体がピチっとしている服装で露出も少ない。

アピールできるところは露出しアピールしようと昨今流行っている露出の多い服装も

この制服はミニスカートにニーハイソックスを履かされて、谷間も露出するタイプではなく第一ボタンまで締めるように規定されている。

きつと彼はそんなこの制服が嫌いなのだろう。

そう思うと、当初は水色で露出はすくないけど可愛い！と思ったソレも途端に今すぐ脱ぎ捨てたくなってしまう。

「……はい。制服となっております。一応、色はほかにも種類はあるのですが……あ、あと、このソックスも履くように規定されているので……すみません、ダサイ……ですよ」

思わず全身を隠したくなる感情が私を襲い、身を縮めて私は答えた。

「ん？ダサイですか？俺は好きですよ？」

——好き!!!

私も、この制服好き!!!

王子様の言葉に私は先ほどまで考えていたことは彼方へと飛ばし、気が付くとどこか自信があふれてきた。

「折角なんで、早川さんのこともつと知りたいので自己紹介をしましよ」

王子様はなぜここまで優しいのか!!!

その後、私たちは、いくつかの談笑をしながら、互いに自己紹介しあう。

もちろん今まで男子と話したことがなく、おどおどと言葉を詰まらせる私に王子様は怒りの感情を表すこともなく、ニコニコとほほ笑みながらうなずいていた。

ああ、好き。

私の心は王子様でいっぱいになり、今まで勉強を頑張ってきたよかったですと心底思うのであった。

「じゃあ、お互いに緊張もほぐれてきたみたいだし、はじめましょうか」

王子様たくみ様はそう言つてベットから立ち上がり、ベルトを外す。ゴクリ。

思わず、私は生唾を飲み込みその様子を凝視する。

いままでインターネットでしか見たことがない“おちんぼ”を私は今日見ることが出来るのだ。

それも王子様たくみ様のを！である。

そうだ。王子様たくみ様のおちんぼなのでもはや“おちんぼ様”と呼ぼう。

心の中で決心するころにはタクミ様はそのままストンと一気に服をずり下した。

「……これが……」

現れた“おちんぼ様”はだらりと下を向いており思わず私は首を傾げた。

もつと天を衝くような隆々とした姿を想像しており、その予想に反してだらりとこうべを垂れるそれに

頭の中で『???』と疑問符があふれ出た。

「これを勃起させてからコンドームを着けるんだよね？」

タクミの言葉に身体に電撃が走った。

そうだ!!!勃起だ!!!“おちんぼ様”は勃起をしていないのだ!ん?でも勃起していないのにこの大きさ?あれ?……こ、こ、こ、これ!

勃起したらどれだけ大きくなるの!?

私は思わず言葉を失いその場で黙り込んでいると王子様たくみ様が「勃起させてくれますか?」と尋ねる。

「ふえ?ふあ?エえっ!……あ!……はい!、あ、でもどうすれば……」

彼の言葉に背中をびしりと立てて応えるも私には勃起するためになにをすればいいのかすぐには思い浮かばない。

「触ったり、舐めたりして勃たせてくれますか?」

王子様たくみ様の言葉にゴクリを喉を鳴らした。

「は、はいっ!」

返事を返して伸ばした手を寸前のところでぴたりと止めた。

だめだ!もし私が触つて、手に付着している細菌が“おちんぼ様”



に悪さをすれば、搾精した精液に支障がでる！それは、搾精看護師として許されない!!

私は、断腸の思い、それこそガキリと歯を食いしばり手を戻し、彼に告げた。

「さ、触れません。もし触って提出いただいた精液に私の細菌が付着していた場合、何人もの妊娠を希望する婦女が悲しみます!!!ですので勃起してコンドームを着けるまでは私は！搾精看護師として触ることができません!!!」

珍しく詰まることもなく言えた自分の言葉に自ら驚く。

「……そっか……」

そして王子様たくみ様は私の言葉を聞いて、まるで“おちんぼ様”のように首をもたげた。

ぎゅううう

その様子に心臓を握りしめられるような息苦しさを感じ数瞬。

王子様たくみ様は顔をぱつとあげて「じゃあ、いいや。それなら上着脱いでよ」おっしやられるのであった。

「……こ、これでよろしいでしょうか……?」

あまりの恥ずかしさに私の顔は羞恥に羞恥を重ね、肌全体に血色ばむのを感じる。

もちろん、搾精看護師として初の実習であったため、今日の下着は一番の勝負下着であるし、ムダ毛処理も手を抜いていない。

しかしながら男性の前でワンピースタイプのナース服を脱ぐということは、

身に着けているのは上下のセットアップの水色の下着に、白色のニーソックスのみである。

いままで、散々“コミ障”と言われた育った私からすれば、もはや文字通り顔から火が出そうになるほど恥ずかしかった。

「かわいい下着ですね」

そんな恥ずかしさも彼に褒められると途端に嬉しくなる。

「あ……ありがとうございます」

よかった。どうやら彼好みの下着だったようだ。

水色3分の2カップのブラジャー。

全体は水色のサテン生地であるが、谷間側は白いレースが編み込まれ、間にチャームが垂らしている私の渾身の下着だ。

しかしながら本当の決め手はパンティーにある。

ブラジャーと同じように真ん中は白いレースが編み込まれたフェイクではない紐パンである。

バック側は総レースであり、お尻の谷間を透けさせる。

彼もそれに気が付いたらしく、

「へえ。ほんとうに良いね。可愛くてエロいよ。ほら、このヒモなんて今にもほどけそうに……あつ」

「——えっ!?!……」

ハラリ。

彼が紐を引っ張った瞬間、紐パンの片側は外れて、下腹部を露出させる。

「——キャツ——」

私は、恥ずかしさのあまりその場にしゃがみこんで目を瞑った。

「……ごめんなさい。まさか本当に紐だとは思わず」

王子様たくみ様はそう言って私の頭を撫でた。

「……い、いえ……わたしこそすみません……」

彼の手の感触を味わいながらも、これ以上男子に気を使わせるわけにはいかないと私は彼の正面に身体をひねって目をあげた。

「ですので、賀茂様はき……に……な……さ……」

絶句した。

感動した。

言葉を失った。

目の前には “バキリ” と血管を浮かしながら隆々と猛けるまさに “おちんぼ様” が龍のように顔をあげていた。

「早川さんの反応がなんかエロくて、勃っちゃいました」  
言われなくてもわかる。

完全に勃起した“おちんぼ様”はAVでみたどのチンポよりも長く太く、そして堅そうに存在を主張している。

もはやエロ漫画でしかお目にかかれぬその立派な男根に私はもはや目を離すことができなくなった。

「本当は、フェラとかしてくれたらうれしいんだけど、だめだよ……じゃあ、授乳手コキしてよ。その搾精器を使って」

ジュニユウテコキ？なんだその魅惑の響は。

未だおちんぼ様から目が離せない私を王子様たくみ様が無理やり立たせてベッドへと座らせる。そして彼は私の膝に頭を載せてローションと搾精器を私の面前に突き出した。

「俺が早川さんのおっぱい吸うから、早川さんはソレを使って手コキしてよ」

もはや、あれよあれと王子様たくみ様にリードされ気が付けば私はローション、搾精器を両手に全裸で彼を膝枕していた。

「——はっ……ごめんなさい……ちよつと、気を失ってしまいました……」  
私は顔を下ろして膝に寝転がる彼に視線をおくると、彼はいま、まさに私の乳首に口を当てようとしていた瞬間だった。

「あ、正気に戻りました？」

そう言つてほほ笑む彼に私は再度謝罪を告げる。

「大丈夫です。それより戻ってきたなら続きをお願いしますね。俺は早川さんの陥没乳首を吸いだしますので」

「——ッ!!——」

忘れていた。なすがままにされていて完全に失念していた。自身の乳首が両方とも陥没していることを。

“ 陥没乳首女子は、もし男性とセックスする際は必ず自分で勃起させて引つ張りだすこと。男性は陥没乳首をきらいます”

どこかのファッション誌に掛かれていたフレーズが瞬時に思い浮かび私は、自身でひっぱりだそうと彼を止めようとしたとき、

——あむっ——

「ンあッ!!!」

全身に雷が落ちた。

彼に啜えられただけで今までに感じたことのない絶頂を感じ、そのままベッドに水溜まりを作る。

「早川さん、敏感なんですね」

「シー—と音を立てて嘔き出す潮に膝で寝転がる彼が気がつかないわけがない。」

しかし、そんな発言さえもはや快感へと変換されて私はその場で腰を打ち付けた。

「はは、暴れないでください。乳首吸えないじゃないですか」

王子様たくみ様はそう言つて私の乳首の吸引を再開させる。

「—あゝっ！—イツ—アアンツ！……き、きもちいいンツ  
”——”」

ちゅーちゅーと赤ちゃんのように吸う彼を可愛らしいと感じる暇もなく断続的に訪れる快感の波に私は手に持っていたモノを落として、

彼の頭を掴み訪れる快感に身をゆだねるようにビクン！ビクン！を体を震わせた。

——チュポントツ——

「——ンガツ!!」

彼が口をすぼめてひよつとこのような顔をして乳首から口を離すころには、乳首は完全に顔をだしていた。

「これでちゃんと出てきたね。それより早川さん、俺の搾精もすすめてほしいな」

彼の言葉にゼーは—と全身で呼吸しながら私はこくんと頷いた。

「あ、コンドームは自分ではめるね。慣れてないだろうし」

そう言つて彼は器用にコンドームを自身のおちんぼ様に装着して私に笑顔を向ける。

「じゃあ、搾精、お願いしますね」

出しすぎた潮の影響に、乾く喉をこらえながら私は頷いて落とした搾精器とローションを取り出して穴に注入していく。

「……い、いま……らしくに……して……さしあげます……ね」

自然と口から出た。

男性にイかせてもらえる女性がどれほどいるだろうか。

この世で希少で、優しくて、かつこよくて、可愛くて、国を守るおサムライ様。

そんな彼にすでにバキバキと勃起し、早く射精したいだろうに、私はイかせてもらった。

搾精看護師として、いや、女として、私は決心を固めてそのままローションがあふれる搾精器を彼の亀頭にあてがいニユプリと挿入した。

「あつ……」

お辛かったのだろう。搾精器がおちんぼ様を啜えこむ瞬間、彼は艶めかしい吐息を漏らした。

「……気持ち……良いでしょうか……」

ヌプリっ。ヌプリッ。

上下にこするように動かしながら彼に問うと、彼は表情を歪めながら私の頭を撫でた。

「き……きもち……いいよ……ンッ」

ビクリ。

腰を震わす愛しい王子様たくみ様の姿に思わず膣からジュワリと愛液があふれるのを感じる。

「そのまま……早めて……いいよ。お、俺は……おっぱい、吸うね」  
パクリッ。

再度訪れる快感に思わず「——クツ——」声が漏れるも、私は女の矜持でそれを耐える。

……ちゅ……れろり……ちゅううう……れろれろ……

絶えず訪れる乳首からの快感に私は小刻みに腰を動かしなら手の抽送を止めない。

“ 散々我慢させてしまったのだ!!わ、私は!!絶対に彼をイカせる

!!!”

激しく上下に動かくことでヌプリヌプリという音から

——ぐちゅ——ぐちゅ——ぐちゅ——

としたより粘りのある音を立てた。

「……ちゅ……う、早川さん……イ、イきそう……」

私のおっぱいをしゃぶる彼が口を離して限界を告げる。

「——イって、イって……射精<sup>イ</sup>つてええええええ!!——」  
再度王子様<sup>たくみ様</sup>が私の胸にしゃぶりつきいまままで以上に吸引を強めるので、堪える私も思わず声を強めてしまう。

「——ウッ!!!」

ビュルルルルルルル!

搾精器を握る手のひらになにかが通り抜ける発射されるの感じ、私は手の動きを緩め、そして止めた。

「はあ……はあ……はあ」

彼が吐息を漏らしてから告げた。

「気持ちよかったよ。ありがとう」

ちゅっ。

私の乳首にキスをする彼を見てやり遂げた達成感が心を満たした。

「……イ……いけました……か?」

念のために確認すると彼はコクリと頷いて身を起こした。

「……あぁっ」

手に持つ搾精器からおちんぼ様が抜けて思わず私はそんな声を漏らすも、ゴムの先端に溜められた精液の量に二重に混乱する。

「——え!?あの——え?、だ、大丈夫ですか!!!」

事前学習でみた搾精後のコンドームのふくらみと違い、パンパン膨らんだ彼の精液溜まりに、

私はなにか誤って彼のを傷つけてしまったのでないか?どこからかローションが混在したのではないか?と混乱を隠せずにいると彼は

「ああ、大丈夫ですよ。俺、平均より少し精液が多い体質らしいですから」

精液!?これがぜんぶ、ぎざぎざ、ザーメンなの!?えっ!!少しどころじゃないでしょ!!いや、平均を知らないけど、ウソッ!!

「……おちんぼ様……」

なにからなにまで遅しい。

思わず口にすることがなかったセリフがふと口から洩れてしまっ

た。

「はい。じゃあこれ提出しますね」

チュポン！

ゴムを上につ張るように外して入口を結んで彼は笑顔でソレを渡してきた。

ズシリ。

手渡されたソレはもはや金貨のようにずっしりとその重量を主張していた。

「ところで……」

未だ唾然とする私に彼はニイと笑ってから

「綺麗にしてくれませんか？口で。搾精が終わればもういいですよね」と言って私に近づいてまた笑った。

「あ、ありがとうございますございましたあー！！！！」

彼、匠様を精液バンクの玄関で見送る。！！

あの後、いちやらぶエロ漫画での伝説的なプレイ“お掃除フェラ”を体験させてもらい、少しでも話すことができたのだ。

「はあく。おいしかった。」

思わず彼の味を思い出して私はペロリと唇を舐める。

いくら残滓といえども口内で感じた彼の味を私は生涯忘れないとここに誓おう。

加えて彼は去り際に『来月もよろしく』と言って去ったのだ。

来月も『お掃除フェラ』ができるのであれば私はいくらでも頑張れる気がしたのだ。

「……一回、クチュろう……」

彼の味を思い出し一時止まっていた愛液が再び蓋を外したように

あふれ出すのを感じて私はそのままトイレへと向かうべく踵を返した。

1時間後、先輩にそのことがバレて私は

『実習一日目でラッキーをゲットしたあげく勤務中にクチユリオナにクチユリオナ、潮でトイレの一室を水浸しにした強者つわもの』として、以降地味に肩見せまい思いをするのだが、それはまたのお話。



## 第拾弐話 誤報

「碧理は？」

ポカポカと春の陽気を感じながら俺はいつものように蒼佳の膝を枕にテレビを眺めて所在を問う。

「いつものお菓子教室よ」

フアサリ。

俺の髪を手櫛で好きながら蒼佳が答えた。

「そっか。あいつも好きだね」

俺の言葉に「そうね」と言つて微笑む彼女の顔は優しい。

碧理は週に2回から3回程度、趣味のお菓子作り教室によく出かける。

そう言った場合は基本無趣味な俺と読書が趣味な蒼佳2人だけの時間である。

「あ、そういえばこの前碧理とデートに行つてたでしょ？」

尚も髪を撫でる彼女は微笑んでいる。

「あの子だけじゃないわ。今度は私とデートしてくれるでしょう？」

目元をわざとらしく拭う様も、似合ってしまう彼女に俺は「いいよ。どこに行きたい？」と問いかける。

「そうねえ。遊園地とか？」

予想だにしない提案に俺は目を見開いた。

「蒼佳姉、人混み嫌いだろう？」

そうなのだ。彼女は騒がしい所を嫌う。てつきりカフェや図書館などを想像していたところに急に遊園地と言われてそんな言葉を返した。

「なんとなくぱーって遊びたい気分になるのよ。こんなにお天気がいいと……」

そう言つてソファから縁側を覗く彼女に「それは分かるけど」と言葉を返す。

「なにかしら？遊園地は嫌い？」

俺の反応に思う所あったのか彼女は逆に問い返すので首を横に

振って否定した。

「嫌いではないけど……蒼佳姉さんが途中で疲れるのが目に見えてね」

そう言って俺が笑みを浮かべると「それもそうね。」と彼女も微笑み返した。

「そうとなると、私の行きたい所と言っても……あ」

「ん？見つかった？」

思い出したように口を開けた彼女は今度はそれまでと違う悪魔サキユバスの笑みを浮かべて答えた。

「ホ・テ・ル・♡」

彼女がそう告げた瞬間、ついこの前聞いたばかりの

緊急討伐司令のサイレンが部屋に響いた。

「……なんか、蒼佳姉の膝枕のたびに呼ばれる気がする……」

思わず思ったことを口にすると思わず「ほんとにね」と短く吐いた。

「それならもう膝枕はしないでおこうかしら？」

戯わどけた表情で結んだ彼女に俺は首をブンブンと振って否定するのであった。

「碧理は？」

デジャブではない。

戦闘服に着替えて再度蒼佳と合流して碧理の所在を確認したのだ。

しかし、彼女は首を横に振って答えを返す。

「連絡はついたけど時間が惜しいわ？とりあえず私だけで向かいましょう」

緊急討伐司令とは誰かが討伐を失敗した時、もしくは野良の怪異が現れた時のどちらかだと相場を決まっている。

故に初動が何より肝心であり蒼佳は狩衣に着替えながら俺にタブレットを投げ渡した。

「……不明……？」

画面にはただ一言そう書いてあり思わず口にあけて読み込む。

「ええ、どうやら最初は低級の妖怪。〃枕返し〃と予言されたらしいのだけど、いざ討伐に行ってみれば〃ヒトガタ〃だったらしく第一次及び予備隊は全滅らしいわ」

蒼佳の言葉にゴクリと俺は唾を飲み込んだ。

怪異の中で〃ヒトガタ〃に区分されるそれらは総じて位階が高く、狡猾で、乱暴なのだ。

二足歩行で歩き、人語を理解し話す知能まで持っており、故に〃ヒトガタ〃と区分されている。

「俺のバイクで行こう」

ヒトガタであればもはや猶予はない。

故に彼女にも最速のために提案すると「ええ。頼むわね」と短く返して最後に足袋を履いた。

「これ被って」

愛用のバイクに寄って俺は蒼佳にフルフェイスのヘルメットを投げ渡す。

「ありがとう」

蒼佳もそれを受け取るとカチャカチャとヘルメットを被ってバイクの後部座席へと跨った。

——ブブブブブブオオオオオオオオン!!!——

まるでスーパーカーのようにマフラーから排気音を上げる俺の愛機。

通称——黒バイ——である。

警察のバイクが白バイと呼称されて赤色灯を灯すことが許されているがそれは退魔師も同じである。

しかしながら、差別化のためなのか、退魔師に与えられるバイクは総じて色が黒一色であるために、黒バイと呼称される。

ただ、サイズ感は白バイの2倍。それこそワンボックス並みの車長であり、武器や医療器具。はては着替えをいれるポケットが存在するソレがあげる排気音はまさにフェラーリなどのそれである。

「捕まってる」

彼女の返答を待つことなく俺は右手のアクセルをブンツと回して

現場へと急行する。

あたりには黒バイからこだまするサイレンの音が鳴り響いていた。  
「あそこね」

平日の昼下がりに。一般道路を時速100キロのスピードで飛ばしていた時、後ろに座る蒼佳が前方を指差した。

場所は京都駅近くのショッピングモール。

そう。それこそ先日碧理と一緒に買い物にいった場所からモクモクといくつかの煙を立たせていた。

「京都退魔庁 第参地区所属 中級陰陽師の賀茂蒼佳です」

「同じく下級サムライの賀茂匠です」

前回の鶴との戦いとは違い今回は白昼の繁華街である。

すでに騒ぎに駆けつけた警察が周囲を警護しているため、俺たちは警戒線を張り、立哨りっしょうしている警察官に退魔師の証明となる五芒星のペンダントを見せて所属を名乗る。

「お疲れ様です」

目の前に立つ婦警がそういつてピシリと敬礼をとる。

「状況は？」

蒼佳の声に婦警は「はっ！」と短く返事をした。

「現在モール内では逃げ遅れた民間人も多く、30分ほど前には別のおサムライ様達がこの救助のために中に入りましたが未だ事態は解決に至っておりません。」

本官らは上の指示により現在モール周辺の警備に準じ、中の解決には退魔庁がことに当たるよう指示を頂いております」

「民間人ですか…人数はどのくらい？」

「申し訳ありません。数多くとしか、今はお答え出来ません」

婦警の言葉に蒼佳はため息を漏らす。

退魔師を2度、退ける怪異の討伐と同時に民間人の救助も必要となる。  
る。

そしてその数は不明という事態に俺も彼女同様ため息を吐きたくなるのをなんとか堪えた。

「碧理が居ないのが痛いわね」

ただでさえ人手が欲しいこの状況に蒼佳が漏らした。

「大丈夫。今、向かってるだろうし」

そうであって欲しい。

そんな願いを込めながら俺は蒼佳に蒼佳に答えた。

討伐における結界師の役割は怪異の封印の他に “守護” するとい  
う役割も併せ持つ。

故にこうして民間人が取り残されている状況では必要不可欠な彼  
女はいないのだ。

討伐を主にするサムライとバランサーの陰陽師。

手駒は圧倒的に不足していた。

「式神を使いましょう」

蒼佳は一枚のお札を袖口から出して地面に置いた。

「起きなさい。水魚」

札を中心に出現した五芒星。

紫色の光を発して1匹の水色の鯉が地面を跳ねてまた地中に潜る。

「私たちを守護しなさい。」

地に向かいそう彼女が告げると返事をするように鯉は顔を出し  
ピュツと口から水を俺と蒼佳に吐いた。

ビシヤ。

水鉄砲の容量で掛けられ一瞬にしてずぶ濡れになるので思わず「も  
う少し、なんとかならないかな」

と苦笑いを浮かべて言うも

「無理ね。低級式神だもの」

と蒼佳は微笑んだ。

これは式神によるマーキングの一種である。

水魚は地面に潜りながらマーキングをした対象の周囲を周回し危  
機より守る。

そう言った意味もあるが、まだ3月の段階で全身ずぶ濡れになるの  
は酷く憂鬱な気分へとさせるが、

もはやそうは言ってもらえない。

「行くうか」

切り替えて俺たちはモール入り口へとそのまま歩を進める。

婦警が「ご武運を」と言ってみ送るのを手を上げて答えるのであった。

「大丈夫ですか?」

「あ、ありがとうございます。あの!まだ私の娘も何処かに……」

モール内の店舗の一つ。アウトドアショップにて見つけた民間人を保護した俺は彼女に施設内で1番の広場になるフードコートへ誘導し、一旦その場で待機を告げる。

建物に入りすでに15分。

保護した民間人は多く、バラバラで出口に逃すよりも一箇所に纏めて保護する方が効率的だと考えたからだ。

役割は俺が民間人の搜索。並びに怪異の討伐。

蒼佳がフードコートにて民間人の警護に分けている。

俺は道中に出くわした「ようぎ幼鬼」をすれ違い様に斬り捨てながら「首魁」を探す。

前世で言うところのゴブリンによく似た妖怪だ。

このモールの首魁はどうやら無数の未成熟の怪異を従える高位な存在なのだろう。

斬り捨てた幼鬼は泡沫の如く消えていった。

ジジジ。

耳につける無線機が起動の音を立てた。

「こちら蒼佳。そっちの様子はどうかしら。どうぞ」

「今丁度2階の探索が終わったところ。恐らく首魁は3階だろうね。どうぞ」

虱潰ししちつぶに一階から探索を始め、丁度二階まで終えたところだ。俺の見逃しがなければモールは三階建なので必然的にそんな結論に至る。

「油断しないでね。」

『どうぞ』という発信を終えるひと言を言わずに口を閉ざす彼女。

本気で心配している姿がありありと予想出来た。

「にしてもいちいち面倒だな。精気解放すれば向こうから来るだろう。どうぞ」

「民間人がいる時にそんなことすれば余計な被害を生むわ。ここは我慢なさい」

俺の冗談に、蒼佳はいつものようにお姉さん然とした口調に戻った。

怪異は女性よりも男性を好む。

これはこの世界共通の常識だ。

しかしながら何故男性を好むのか。どうやって男性を認識しているのかまでは民間人には知らされていない。

その理由が「精気」だからだ。

精気、もちろん女性の源気もだが、

退魔師や民間人、それこそこの世のあらゆる万物は氣は違えど体内にそう言ったエネルギーを内包しているのだ。

個体差による多寡はあれど怪異はそれを感じ取り好んで男性を喰らう。

そして俺の「氣」は誰よりも濃くて多い。

故の発言ではあるがそんな冗談は彼女には通じなかったらしい。

「はいはい。ん？どうやら本当に3階にいるっぽいわ」

2階から3階へ上がる階段を登る時にふと目には見えない境界線を感じて俺は無線に告げた。

1、2階とは違う。鼻を刺激する醜悪な「妖氣」の臭い。

どうやら、首魁は氣を隠匿する技術まで持ち合わせているらしい。

「完全に「枕返し」ではないな」

そう独り言を呟き臭いの元を辿る。

枕返しは本来第参位階に属する所謂低級の怪異だ。

そのような存在が己の氣を隠匿することも、ましてや幼鬼を使役することも出来うる筈がない。

そして「ヒトガタ」と言われた情報。それらを統合して導き出さ

れる怪異の正体を口ずさんだ。

「鬼か」

ガシヤリ。

進めていた足を止めて正面を睨みつける。

3階の階段付近の広場。

普段であればイベントショップや、携帯ショップが臨時出店するほどに開けた場所。

ソレは地に腰かけて人の腕を食んでいた。

食糧庫か。

ソレの傍らに10名ほどの民間人がひと固まりに身を寄せ合いその怪異から目を逸らす。

骨付き肉を食べるようにむしやむしやと咀嚼する。

背丈が5mほどで筋骨隆々な体躯。

肌は黒々とし、頭部に一つの角をはやして顔の中心に大きな一つ目。

例えるならばサイクロプスを彷彿される化け物の傍らには数体の幼鬼が控えるように付き従う。

“一つ目鬼”

鬼の名を冠す、その妖怪の位階は最低でも第7位階以上に分類される妖である。

鬼が今、俺を視線に捉えてその場で咆哮をあげた。

大地が揺れるほどに大気ごと震わすソレに俺は思わず盛大な溜息を洩らした。

「上等ッ」

俺は体中から精気を噴出させ斬魔刀を力強く握り締めてその場から跳躍した。



## 第拾参話 一つ目鬼

すれ違いざまに飛び掛かる幼鬼ようぎを一閃。

断末魔の声すらあげずに泡沫となり消えゆく。

「死にさらせー」

一つ目鬼の眼前にたどり着き渾身の力で刀を振り下ろす。

氣を纏いし俺の腕はもはや鉄をも砕く力を有する。

一撃必殺の如く剛腕を振るうも寸前で一つ目は靄もやとなり消えて空振りに終わった。

「――野郎が……」

――ドンッ！

背後に氣配を感じると同時に腰にトラックが衝突したような衝撃を感じ、俺はそのまま壁に叩きつけられる。

「ゴハッー」

壁に人型を描くようなめりこみ、衝撃で息を漏らした。

“こちら、蒼佳。現状を報告して。どうぞ”

無線から彼女の声が響くもそれに返答させる猶予は与えてくれないらしい。

一つ目はそのままドシドシと地を鳴らしながら駆け込み腕を振り上げた。

「くそっ」

氣の出力をあげて全身に纏い腕をクロスに重ねて全身を硬化する。

爆弾を破裂させるような音と共に衝撃が俺を襲う。

壁を突き破り、アクセサリー店のガラスでできた陳列棚を砕いて、ゴロゴロと地面に転がり受け身をとった。

立ち上がりざまに足に力を込めてすぐさま店から飛び出ると一瞬遅れて一つ目が俺のいた場所に飛び込み爆発音が響いた。

“現在、交戦中。対象は切り結ぼうとするも靄もやとなり空振りに終わる。至急、対策をしりたい。どうぞ”

壁を横向きに疾走しながら俺は蒼佳に現状を報告し対策を聞く。その間も一つ目は俺を目掛けて突進するのをなんとか飛んで躲かわし

ながら時間をつくる。

“ 応援は？ ”

“ 不要！ ”

彼女の無線を遮るように俺は返答を重ねた。

ヤツが使役する幼鬼の数はいまだ知れず、彼女が援護にくるとフー  
ドコートで避難している民間人はもはや無防備となる。

そのような愚を犯すことも出来ないし、そもそも氣だけで言えば俺  
一人で十分対処可能な相手だ。

ただし、攻撃が通用しないというだけで。

たらりと額にできた傷が垂れて目に入るのを腕で拭りながら彼女  
からの返答を待つ。

傷は多くとも全身を氣で守っているので大した傷ではない。

それこそ、サムライの俺からすればかすり傷でしかなかった。

“ 対象の種族はおそらく一つ目鬼。こちらが捉えようとする<sup>と</sup>霧  
になり、逆に俺を攻撃するときは実体となる。至急対策を！どうぞ ”

焦る気持ちを抑えて再度無線を飛ばす。

尚も一つ目からの攻撃は止まない。

“ カウンターね ”

無線から蒼佳とは違う聞きなれた声音を感じて思わず俺は口角を  
あげた。

“ こちら、碧理。まもなく現着。お姉ちゃん<sup>お</sup>は私の護符<sup>札</sup>を使って防  
護結界を展開してタクミの応援へ。その間くらいであれば遠隔でも  
私が護るわ ”

“ 了解 ”

“ オーケー ”

待ちに待った結界師の登場に思わず俺は破顔しながら飛び込む一  
つ目を躲すべく天井へと飛び立つ。

なるほど。確かにカウンターであればやつは霧にならない。

碧理の鋭い指摘に舌を巻きながら俺は肚を括った。

天井に引っ付くように逆さにぶら下がっていた俺の足の氣も、全身  
を守るべく纏っていた氣もすべてを

刀一点へと集約させる。

足元の気が無くなったことでそのまま自由落下の原則で落ちる俺目掛けて一つ目が醜悪な顔で拳を振り上げて飛び込む。

「刺し違えたらあぁッ!!!」

恋人を招くように両手を広げてやつを迎え入れる。

ブオオン!

剛腕が風を作りながら俺の胸に飛び込むのを身をひねり寸前に躲してから俺は一つ目の腕を抱え込んだ。

「捕まえた」

ニヤリ。

口角をあげて右手に握った刀を、一つ目の首元、目掛けて横なぎに振るった。

「破魔の剣ッ!」

もうもうと陽炎のように湯気をたたせた白い刃がなんの抵抗もなく一つ目の首を斬り落とした。

「——グ、があぁッ!」

離れる頭からそんな声を漏らしながら泡となり蒸発するようにヤツは消えていった。

「もう大丈夫ですよ」

一つ目の食糧庫として固められていた女性たちの肩を叩きながら脅威が去ったことを告げる。

どうやら、彼女たちの多くは一つ目の咆哮により鼓膜を破っているらしく、声を掛けてもあまり容量を得なかったので、肩を叩いてサムズアップすることなどでなんとかそれを伝える。

「まもなく、俺の仲間が来ますから、一緒に避難しましょう」

一つ目が去っても幼鬼が去ることはなかった。

俺はこちらに走り寄る残りの小鬼にクナイを飛ばして頭に命中させながらあたりを見渡した。

「た、たつくんッ」

背後から蒼佳の声が聞こえるので、あの無線の後にすぐこちらに向かったのだろう。

「大丈夫だった？」

はあ、はあと息を乱しながら俺の様子を伺う彼女に「大丈夫」と言葉返して、彼女たちの輸送を頼む。

「ええ。わかったわ」

俺の傷に致命傷がないことを確認してこくと彼女が頷いたとき、不意に頭上から声がかかった。

『ほう。果実が実ってきたのう』

不気味な声音に強烈な妖気が合わさり、全身から泡立つように鳥肌を立てながら首をバツと頭上をむけた。

天井にコウモリの如く天井でぶら下がる三つの人影

“ヒトではない”

発せられる強大な妖気にそいつらが怪異だと俺の心が告げる。

色鮮やかな花魁のような恰好したおしろいをした女性が二人。

その間に立つ、くすんだ肌色のような着物を着た子どもほどの大きさの老人。

後頭部は風船のように膨れあがり、手にした杖をコツンと天井を叩いた。

心が、頭がその存在だと理解することを拒否する。

その老人の姿に俺は、俺たちは身に覚えがある。

奴は

「……ぬらりひよんッ!!」

横に立つ蒼佳が言葉を漏らした。

彼女の言葉に呼応するように心から憤怒の感情が沸き起こった。

コツン。

再度、手に持っていた杖を天井に着いてぬらりひよんは顔を歪めた。

「愛い。愛い。そなたの憎しみ。実に愛いのう」

醜悪にほほ笑みながら蒼佳に視線を送るぬらりひよんはそのままぎよろりと視線を俺に動かした。

「ああ、久方ぶりに見る男子よ。お主もじつに良い果実となった」  
カーカツカツカツカ。

快活に笑ったあと、急に真顔に戻り妖氣を噴出させる。

慌てて俺もヤツに釣られるように精氣噴出して相殺する。

「ほほ、そやつらを守るか。男子め」

妖氣を更に噴出し、出力をあげるぬらりひよんに俺も出し切れるばかりの氣をあてがった。

妖氣は人の命を蝕む。

低位の妖は放つ氣が人間に与える影響を少ない。

しかしながら今、目の前に相対する化け物はもはや人の命を、御霊を喰らうほどに濃厚で、重苦しさを孕んでいた。

故に展開した俺の氣も、押し負けるようにじりじりと後退していく様を感じる。

足元に振るえるようにしやがみこむ女性たちの何人かは氣を失っているのか、その場で倒れ伏している。

「――殺す――」

横に立ち殺氣を飛ばしていた蒼佳がそう呟き印を結ぶべく右手を構える。

「そおれ」

ポキリ。

ぬらりひよんが指をひよいつと横にかざすと蒼佳の右手の肘が反対側へと折れ曲がった。

「――ッ!!!」

顔を歪めて手を引き、今度は左手で印を結ぼうとする彼女を俺は手を出して制した。

「ちよつとー」

俺の行動に異を唱えるべく声を荒げる彼女に俺は首をよこにふつた。

「愛いのう。実に愛い男子じゃ。我慢できずに思わず喰ろうてしまいたくなるわい」

不協和音をだすような不気味な声音で顔をゆがめるぬらりひよんに俺は言葉を返した。

「ということは今日は我慢してくれるってことか。それで、目的は？」俺の言葉にヤツの脇に立っていた女の一人が顔を般若に変えて叫ぶ。

「痴れ者があーぬらりひよん様になんたる口の利き方!!」

こちらに飛び掛からんとする般若にぬらりひよんは「じやかましい!」と声をあげて手を横に振るうと、般若はその場で身がねじ切れて泡沫へと変わる。

「なに、今日はただ果実の様子を見に來ただけじゃ。摘むのはまだ早い」

カツカツカと般若に叫んだ時とは真反対の柔和な笑みを浮かべてぬらりひよんと残された女は闇を浮かべてその場から消え去った。

「なんで止めたの!!!!  
ガシャンツ。!!!!」

珍しく感情を表に出した蒼佳が折れていない左手で俺の胸元を掴み壁に押し付ける。

ギリギリと食いしぼる齒に眉間にしわがよっている。

「いまは無理だろう」

ぬらりひよんだけでない。そばに立っていた女でさえも見たことはなかったが情報としては知っている、

“産女”と呼ばれる高位階。それこそ9位階相当の上位妖怪である。

ヤツらとの実力差がわからない彼女ではない。それでもやりきれないのか彼女は俺の言葉にその場で腰を落として慟哭した。

「——ああ、ああああああ!」

蒼佳の声が静寂のモールに響き渡った。



## 第拾肆話 救世主

「お姉ちゃん大丈夫かな？」

幼鬼の討伐も完全に終わり、やつとこさモールが解放されることは時刻は既に夜9時を回っていた。

蒼佳はあの後、意気消沈しながら心ここにあらずの状態で、そのまま救急車にて折れた指を治すために病院へと運ばれ、俺と碧理はモール入り口にて民衆からの歓声に手を上げて応える。

「まあ、幸いに折れただけみたいだから大丈夫だろ」

俺の言葉に碧理は「違うでしょ」と語気を強めた。

「ぬらりひよんのことよ」

もちろん碧理の言いたいことも理解出来る。

俺たちとヤツとの因縁は強い。

それこそ呪いのように――

「今日はそつとして明日お見舞いに行こう」

彼女の容態的にも精神的にも俺は一旦時間を置くべきと判断し碧理の頭を撫でる。

「……あ、あの……ありがとうございました」

会話を遮るように1人の女性が俺たちに感謝を告げる。

青色髪をボブカットした女性がこちらを見据えていた。年齢は恐らく俺と同じくらいか。

どこか、リスのような小動物を思わせる。

「君は……たしか……」

そうだ。一つ目の食糧として固まっていた一団の中に結果的にぬらりひよんの妖氣に当てられても尚、氣を保っていた唯一の女性だ。

ちなみに他の女性はみな蒼佳の後に救急車にて運ばれていった。

彼女達は病院に派遣された陰陽師にお祓いを受けて邪氣を払う。

それほどまでに高位の怪異が出す妖氣は厄介なのだ。

それなのに今日の前に立つ彼女が疲れた表情をしているも目には光を帯びている。



「強いね……。」

「え？」

俺の言葉に彼女は首を傾げる。

当然だ。急に強いと言われても理解できないのが普通の反応だろう。

「いや、なんでもないよ。よく頑張りましたね。救助が遅くなつてしまい不安な思いをさせました。ごめんなさい」

風潰しに1階から3階へと行ったのだ。

当然、一つ目に喰われて犠牲になった人もいる。

いつ自分が喰われるか心配だっただろう。

「いえ、あなたのおかげでなんとかこうして生きております。本当にありがとうございます」

小動物のような愛らしさの見た目とは裏腹にしつかりとした言葉遣いで言葉を結んで彼女はそのまま去っていった。

「彼女……タクミの言う通り本当に強いわね」

見送る碧理も俺と同じ感想を抱いたらしい。

「よっぽど『生』にこだわる強い理由があるんだろうね。それこそ大事な『家族』がいるとか……」

俺の言葉に碧理はコクリと頷いたきり、口を閉ざした。

その後、帰路についた俺たちは、風呂も早々に眠りについた。

今日ばかりは、碧理も姉を心配しているのだろう。

ただ俺を抱きしめてスヤスヤと寝息を立てる彼女の頬を撫でて共に眠った。

“私は貴方を恨んでいるわ”

蒼佳がいる病室に入った瞬間彼女から告げられた言葉だ。

折れた腕を支えるように包帯で固定され、上半身だけ起こして顔をむけることない彼女の声音はどこか冷たかった。

「分かってるつもりだよ」

その言葉に、一度息を吐いて手にしたメロンを横に立つ碧理に手渡した。

「悪いんだけど切ってきてくれないか」

案に2人にしてくれと言う俺の依頼に彼女もコクンと頷いてそのまま病室を去るのを確認し、

蒼佳のベッドに腰掛けた。

「昨日のことじゃないわよ。それよりもっと昔からよ」

いつもの温和な表情とは違う。

鋭い視線を受けても尚、俺の答えは変わらない。

「分かっている。蒼佳の母親、叔母さんを死なせたのは俺だ」

俺の言葉に一瞬驚いた表情を浮かべた後、彼女はどこか儂げな笑顔に変わった。

「なんだ……分かってるじゃない……」

彼女は顔を下に向けて膝においた手を震わせる。

「……そ、それなのに……なんで……なんで昨日は……」

言葉を詰まらせフルフルと横に振る蒼佳。

分かっているのだ。

ぬらりひよんに敵わないことを。

側に立っていた女の姿をした怪異、*「産女」*にも勝てない程に俺たちの実力差は遠いことに。

「——無駄死には祖母だけで充分だろう」

——!!!

俺の言葉にガバリと顔を上げて俺の頬に張り手を見舞う。

目にはありありと涙を浮かべ顔は憤怒に塗れていた。

「——あなたのその冷徹さが私は*「嫌い」*なのよッ!!」

掴みかかり俺の胸元にドンッ。ドンッ。と拳を振り下ろす蒼佳を俺はジツとした目でただ眺める。

「——おばあ様は、おばあちゃんは偉大な陰陽師よ！取り消しなさい！」

ドンッ。

胸を叩く音が部屋に響く。

「——おばあちゃんだけじゃないわ！母も叔母様も曾祖母も幸恵さんも!!みんなが偉大だった!!私たちだけよ!!戦うことも出来ず、ただ座して眺めていたのは!」

わかっている。当時は蒼佳は12歳、俺と碧理に至ってはまだ5歳だ。

第十位階のぬらりひよんとの鬪いに参加できるわけではない。

「…………あなた…………」救世主…………「…………なんでしよう…………戦つてよ…………仇を取つてよ…………」

胸を叩く力が次第に弱くなり、やがて止まった。

「…………助けてよお…………たつくん…………タクミ君」

昔のように俺の名を呼ぶ蒼佳の肩を抱き寄せる。

肩を震わせて嗚咽を漏らす彼女を俺はただ黙つて抱きしめ続けた。

「…………ありがとう…………もう大丈夫よ」

散々涙を流した後、彼女はそつと俺から距離をとりほほ笑んだ。

瞳は未だ赤く、目元もやや腫らしていた。

「…………あなたのそういう優しい所、好き」よ」

先と違う発言を述べる彼女に俺はニコリとほほ笑みを返した。

「取るよ。仇。母や叔母の分だけじゃない。祖母も、曾祖母、それに俺の2人の姉だつてぬらりひよんに殺された。全員の仇とつて。世界ごと救つてやるよ」

——俺はその為にこの世界腐った世界に転生生まれたしたのだから——

〃近し、訪れる災厄から日輪が如し和を導く存在出づる。さりとて男子おのこには悪しき業が苦難となりて立ち憚る。〃

俺が母の腹にいる際に賀茂家に告げられた御信託だ。

元々分家であり賀茂ではなく加茂と名乗っていた母らはソレを機

に名を賀茂に改めて本家に移ったと、母の死後、大人連中で唯一生き残った曾祖母が俺に告げた。

「恨むかや？このワシを」

当時、齢12歳。

来月の4月からサムライ養成機関へと進学が決まった俺を呼び出した曾祖母が俺に聞いてきた台詞だ。

「信託をお主に隠し、賀茂家であれば守れると慢心しておった結果がこの様じゃ。お主の母も姉たちも。

祖母も叔母さえも奪ってしまった。

全てはこの婆の慢心から来るもの。恨んでよい」

そう言つて曾祖母は畳に額を擦りつける。

「ひいばあちゃんのせいじゃないでしょ」

俺の言葉に彼女の肩がびくりと震える。

「全部、僕が生まれたせいじゃん」

これは記憶だ。

今でも鮮明に思い出す記憶の一部。

「ならぬ。そのようにお主が考えてはならぬぞ。匠よ」

曾祖母が顔を上げて俺を睨んだ。

その瞳には涙を浮かべ顔から怒気を放っている。

「お前の母からなんと教わった。美香はお前をなんと育てた。それを経て尚もそのような口を聞くのか」

彼女の言葉に俺は首を傾げた。

「もちろん愛を教えてもらったよ。でもそもそもは僕が生まれなければ母さんも死ぬことはなかったし、叔母さんやばあちゃん。それに姉さん達まで死ぬことはなかったんだろ。」

全部、ぜーんぶ俺が生まれたせいとしか思えないでしょ」

俺の言葉に曾祖母ひいばあちゃんがワナワナと震える。

「だから気にしないで。自分の尻は自分で拭うよ。日輪の如くだっけ？ひいばあちゃん好みの言葉でいえば救世の男子おのこかな？

いいよ。全部救つてあげる。怪異からこの世界を。

俺がぜーんぶ救つてあげる」

ケタケタと嗤う俺を見て彼女がヒュツと息を呑む。

「——こ、こんの大馬鹿ものがっ!!」

指先を俺に突きつけ式神を降臨しようとする力を込める彼女に向かって俺は掌を向けた。

「もう遅いよ。気がついたからね。僕俺がこの世界に生まれてきた理由を」

転生者なのだ。

輪廻転生の枠組みからも外れた前世の記憶をもつ異分子の存在。

なぜ、憎き前世の記憶が残っているのか。考えなかった日はない。

あの侮蔑の視線も、あざ笑う声も。

転生してからはそのような経験はなく、大事に育てられたと今でも感謝している。

しかしながら不意にフラッシュバックのように思いだす悪しき記憶に俺は苦しんできたのだ。

それが神託の理由を聞き、若干なれど腑に落ちてしまった。気づいてしまった。

この世界に生まれた理由を。

「ならぬ！復讐に囚われてはならぬ。それは身を滅ぼすぞ！」

彼女が怒声を上げるのを俺は首を横に振り否定する。

「憎しみじゃないさ。なすべきことをなす。どんな手を使っても。

協力しないならひいばあちゃんもただじゃおかない。

もう賽は投げられたんだよ」

そう言つて彼女の肩に手を置きぐいっと下へ力を込める。

「——ッ！貴様ッ、何故精氣をッ！」

彼女の顔が痛みで歪む。

「何故も何も男の子だから使えるでしょよ。

ああ、普通はこの歳では使えないかなあ、まあ俺は救世転の男子者だから特別なのかな？」

尚を力を込めて彼女を地につける。

「蒼佳姉も碧理も俺が守るさ。ついでにね。

だからひいばあちゃんも協力して。

俺が世界を救うのをさ」

もはや呻き声だけをあげる彼女に俺は氣の圧力を解いて笑顔を浮かべて彼女の元を去る。

翌日、曾祖母は自室で首を吊っていた。

奇しくもその日は母らと同じ命日であった。

## 第拾伍話 抜け駆け♡

「お姉ちゃん、メロン切ってきた……よ……」

匠の依頼により、給湯室を借りて普段の100倍丁寧に、ゆっくりと時間をかけて切ったメロンを手に携えて

碧理は明るい口調を装いガララーと病室の扉を開けて固まった。

病室に二人はおらず、ベッドに備え付けられた机には一枚のメモが置かれている。

窓は全開で外から吹く風にカーテンが揺れる。

“ちよつとホテルに行ってくる お姉ちゃんより♡”

普段の姉の字とは違い少し下手なのは利き手が折れている為、反対で書いたのだろう。

碧理の額にピクピクと青筋が一瞬走るも、彼女の顔は明るく既になつたベッドを向いて笑った。

「メロンがもつたいないじゃない……」

その場でハハハと口を開いてひとしきり笑ってから自分で切ったメロンを一人で食べた。

彼女の瞳にもはや憂いの色は消え失せていた。

「まさか、昨日の今日でホテルに行くとは思わなかったよ」

普段通りに笑う蒼佳を前に俺も思わず微笑みを浮かべた。

「仲直りの後はセックス。古来から言われてきた男女円満の秘訣よ」

——パクリ。

折れた手をいまだ肩に固定する蒼佳はいつもとは違う反対側の手で俺のチンポを支えて亀頭を啜えこんだ。

「喧嘩してたっけ？俺たち」

仁王立ちフェラをホテルの一室で受けながら俺は首を傾げた。

「私が一方的にね」

蒼佳も言葉に「違いない」と返しながら俺は彼女の頭を撫でる。

あの後、蒼佳が急に俺の目を見て言ったのだ。

「デートがしたい」と。

昨日約束したデートがしたい。ホテルへ行こうと。

泣きはらした目を浮かべる彼女に俺は快諾をして二人して窓から飛び出し、そのままホテルへと来た。

残してきた碧理が気にはなるが、

まあ、彼女なら大丈夫だろう。

「——ッ！あ、蒼佳姉……もうちよつとやさしく……」

ジュポッジュポッ！　グポッグポッ！　グジュッグジュッ！

ジュプッジュプッ！

俺の言葉を見殺して彼女はチンポを喉の奥深くまで啜えこみ容赦ない抽送を行う。

グッポングッポングッポングッポン！

ジュッポッジュッポッジュッポッジュッポ！

「——うッ、射精くッ！」

激しく吸い込まれる刺激に俺は思わず射精こうとその快楽に委ねようとした瞬間。

彼女はジュポンッ。つと音を立てながらチンポから口を離し、暴発しないように根元をぎゅうつと握りこんだ。

「ダメよ。折角の仲直りセックスなのなもの。射精く時は私のおまんこ以外では許さないわ」

妖艶にほほ笑み、彼女は握る手を緩めることなく、チロチロと俺の鈴口を舐める。

「ぴゅっ、ぴゅっしたくなくても、絶対にさせないわ。私の利き手を折ったこと後悔させてあげるから」

彼女の言葉に内心いろいろ思うことは口から出かけるも俺はそれを飲み込んで顔を歪めた。

「ソッフ。苦しそうね。でもだめよ。勝手に射精さないようにずっと握っておくもの」

ジュッポッジュッポッジュッポッジュッポ！

尚もぎゅつと根元を握りこみながら再度パクリと啜えこみ、ひよつとこ顔になるのも気にせず



彼女はバキュームの如く吸引する。

「……お願い……射精《イ》かせて……!!」

尚も激しく動く彼女にそんな懇願をするも彼女はその度に口を離して、チロチロと鈴口と、カ리를裏筋を舐める低刺激な愛撫へと切り替える。

「……レロ……手が疲れたわ。……あ、……そうよ!」

思い出したかのように彼女を口を開くと、チンポから手を放して自身の髪を一本引き抜き、俺のチンポの根元に置いた。

——縛<sup>ばく</sup>。

印を組んで彼女が口ずさむと根元でたたりと垂れていた銀色の髪がまるで意思をもったかのようにぐるぐる<sup>チンポ</sup>と俺に巻き付き締め上げた。

「これで手が楽になった」

自身の涎か、俺のがまん汁かもはやわからないほどにテラテラと光る手のひらを舐めて彼女は微笑む。

「……さ、さすが……陰陽師ですね」

思わず俺は顔を引きつかせながら彼女に賛美を送るのであった。

「——アアッ!!」

俺をベッドに寝かせ騎乗位で一気にズブリと挿入した瞬間に結合部がビシヤッと濡れる。

「……挿<sup>い</sup>れただけで……イっちゃったわ」

うらやましいでしょう?と言わんばかりの顔を浮かべる彼女。

もはや俺のチンポは限界にまで腫れあがり、いつ爆発してもおかしくないほど膨らんでいた。

「……あ、悪魔……め……」

思わず恨み節の一つでも言わないと気が済まない。

「フツ。大丈夫よ。私が何度かイってから、射精<sup>イ</sup>かせてあげる♡」  
蒼佳がそのまま前後に腰をグラインドさせる度に、

ビュッ!

ビュッ!

ビュッ。!

つと音を立てて俺を塗らす。

「……き、……気持ちいい……いいわッ!!……仲直り、せ、セックス!」  
腹部にクリトリスを擦り付けるように、密着させたまま前後に振るう彼女がビクビクビク!と連続に全身を震わせて仰け反った。

「はあ……はあ、あ、頭が……ばかに、なっちゃい……そう!」

ガバリと体を戻した彼女が俺の耳元に口を近づけ呟いた。

「射精イきたい?」

コクコクと頷く俺を顔少し離して覗き見た彼女は再度、耳元に近づいた。

「そんなに射精出したいならそれなりの“態度”があるでしょう?」

そのまま俺の唇を貪るようにかぶりつき、器用に腰を前後に動かす。

「……ちゅ……れる……あむっ……私に嫌いって言わせたこと謝ってくれるかしら……」

理不尽だろう。とは俺は思わない。

彼女にそう言わせる原因を作ったのは俺だ。

「……ちゅ……んッ……ほら、”ごめんなさい”と”イかせてください”って言ったらイかせてあげるわ♡」

上半身を起こし両膝を立て左手を俺の腹へと置いて彼女は上下に尻を動かす。

パンッ!パンッ!パンッ!パンッ!

肉が打つ音が部屋に響く。

「——アあッ!、気持ちいいわ……ほらッ。早く言いなさい……ンッ!それとも一生このままパンパンされたいのかしら?」

“わたしはそれでもいいけど?”

そんな言葉を続けながら彼女は膣内をキュウと締め上げあがら腰の動きを更に早めた。

パンッ!パンッ!パンッ!パンッ!

パンッ!パンッ!パンッ!パンッ!

まんこからどれだけ潮を噴き出そうとも彼女は止めない。

イっていることさえ無視をしてそれでも尚激しく俺に尻を打ち付ける。

「ほらッ……ンっ……ごめんなさいは……？」

「……ご……ごめんなさい……い、射精イきたい……です……クっ！」

俺の言葉に彼女がニイイと口角をあげた。

「イイ子ね……いいわ……」縛フをツ!!ンンっ!解いてあげる……」

パンッ!パンッ!パンッ!パンッ!

「ほ、ほら! きーんッ!」

パンッ!

「ニイッ!」

パンッ!

「イチ」

パンッ!

「ゼーロ。」

“解”

瞬間、拘束していた彼女の髪がダラリとほどけ、寸前で止まっていた精液が我さきへと外を飛び出す。

ビュルルルルルルルルルルル!

今までに感じたことのないとてつもなく長い、長い射精感を伴いながらも飛び出す精液は止まらない。

「あああああああああああ!」

杭を打ち込むようにビツタリと俺に体重を乗せる蒼佳が叫んだ。

「あああああ!!出てるッ!たつくんのツ!!赤ちゃんのお種!私の子宮に飛び込んでくるッ!」

ビュルルルルルルルルルル。

尚も止まらない射精感。

ドクドクと心臓の鼓動に合わせてビュルル!ビュルル!と噴き出した。

「ハアっ、ハアっ、ハアっ……フフフ。イイ子ね。子宮があなたのためメンでいっぱいよ」

長い長い射精を最奥で受け止め、やがて止んだ後、蒼佳は息を切ら

しながらほほ笑んだ。

「……もう、いつかい……できるよ……ねっ」

クチュ。クチュ。

ゆつくりと下ろしていた尻をあげては下ろし、あげては下ろし、

未だ、硬いチンポから絞りとらんと蒼佳は動く。

「——ンッ……はあッ、……ふふ、また更に力たくなって……きたよ」

ぎゆう、ぎゆうと締めり上下にこすられるチンポから第2射目の限界を寸前まで近づくのを感じた。

「ほらッ！ほらっ！いいよ！もう一回ッ！お種、ぴゅっぴゅっ！ンッ！しよッ！」

パンパンパン！

先程の疲れを感じさせないほどに高速に打ちつける。

「わッ、分かるっ？し、ンッ、子宮降りてるのッ！た、たつくん！赤ちゃんッ！孕みたいってえっ！子宮降りてきてるのっ！！」

「ちよーだいッ!!!たつくん!!!ちよーだいっ!!!」

彼女の覚悟に、俺は蒼佳の尻を掴み自らも腰を打ちあげる。

「射精くよッ!!蒼佳ッ!!ちゃんと受け止めてッ」

「——アッ、——タクミ君ッ！イイツ!!射精出してっ！射精《出》してええッ！」

ビュルルルルッ!!

「あぁッ!!!」

再度吐き出される精と同時に蒼佳が潮を噴き出しながら弓のように仰け反って息を漏らした。

二度目の吐精も先と同じほどの長い長い射精だった。

## 第拾陸話 試練

「あ、おかえ……り……」

碧理が啜えていたお菓子をポトリと落とす。

「どんだけやったのよ……」

「げっそりしているわよ」と言葉を続けて俺の肩を支えてソファーへと運ぶ。

「そうねえ。8回からは数えてないわ……」

フフフと頬に手を添えて首をかしげる蒼佳の顔には潤いを帯びていた。

「……走馬灯が見える」

そんな冗談を俺が呟くと碧理は「ダメよ！戻ってきなさいッ！」と何度も俺の頬を叩く。

「——ご、——うそ——うそだからっ！」

そのあまりの強さに叫ぶと碧理はほっとしたような表情を浮かべた。

「仲直りセックス。最高だったわ。ありがとうタクミ君」

そう言つて頬を赤らめる俺にキスをする蒼佳を見て碧理は目を見開いた。

「……どうかした？碧理」

その表情に気づいた蒼佳が彼女に問うと碧理は首を横に振り

「なんでもないよ！昔のお姉ちゃんみたい」と応えてほほ笑んだのであつた。

「タクミ君♡はい。あーんして」

あれから蒼佳の甘えが凄い。

「むううー」

食卓でいちやつく蒼佳と俺を交互にみて碧理が頬を膨らませる。

「あ、もう、ほっぺたにご飯つぶが付いてるわよ」

「いや、これは蒼佳がつけたんじや……」

——れろっ

俺の言葉を見殺して彼女は俺のほほをペロリと舐める。

「お姉ちゃんー！そもそもタクミの横はアタシの席なんだけど!!!」

ついに我慢の限界に達した碧理が姉に苦言を呈すも、当の本人は

「でも、私。利き手折れてるから……タクミ君に食べさせてもらわないと」と宣った。

「食べさせてもらってないでしょ!!!食べさせてるよ!？」

と切れ味の良いツツコミを放つ。

「ずるいわよーアタシがタクミに食べさせろ!!」

そう言っただけで席を立ち上げる彼女に蒼佳が「待ちなさい」とやや声のトーンを落とした。

「最後に口移しで食べさせてあげたいわ」

そう言っただけで蒼佳は食卓に置かれた唐揚げをかじり俺の口へと運んだ。

—————

「とまあ、冗談はここまでにしましょう」

「どこまで!?!なにからなにまでしてるじゃない!!」

碧理が干からびた俺をビシリと指さす。

下半身の服は脱がされ、抜かれたチンポはだらりと頭を垂れる。

蒼佳はペロリと唇についた精液の残滓を舐めてから真剣な表情を浮かべた。

「ぬらりひよんと相対してわかったことがあるわ」

「ちよっと待ってよ!!アタシ切替られないんだけどツ!!」

今日も碧理のツツコミはキレキレである。

そして今日の俺のちんぽはシナシナであった。

—————

「それで、話を戻すわね」

碧理をなんとか落ち着かせ、俺にズボンをはかせてから暫く、ようやくといった具合に蒼佳は真面目な顔に切り替えて先のぬらりひよ

んについて語っていく。

「実力差は測りしれないわ。なぜ私の腕が折れたのかさえ不明。加えて従える産女についても情報はないけれど、恐らく今の私たちでは“産女”にすら勝てないわ」

蒼佳の言葉に俺たちは頷いた。

「確かに氣の大きさだけで言えばタクミ君に分があるかもしれない。けどそれはあくまで量だけの話であって質の部分では劣るし、きつと私と碧理では足元にも及ばない」

“私、試練を受けるわ”

一拍置いて呟く蒼佳に碧理が立ち上がった。

「お姉ちゃんッ!」

蒼佳は「落ち着きなさい」と彼女を目で制し、言葉を続ける。

「覚悟が足りなかったのよ。私には。 “ 蟲毒 ” を受けるわ」

ゴクリ。

碧理の唾を飲み込む音が横に座る俺まで聞こえた。

“ 蟲毒 ”

それは退魔師の御三家の当主のみが受けることができる試練の名である。

壺の中に幾千の蛇やカエル、虫を入れて蓋をし殺し合わせる。

最後まで生き残った生物の生き血には強大な呪いが付与される。

試練とはその後の工程を指す。

その後、試練を受ける当主は生き血を啜り体に呪いをため込むのだ。

自身の肉を、血を呪いへと転換する。

もちろん簡単には転化出来ない。

ゆっくり、ゆっくりと血肉を呪いに変換し、定着させる。

その反動は身体中から血が噴出したり、40度を超える高熱が1ヶ月続いたりする中、

結界に閉じ込められて一人“孤独”に耐える。

故に蟲毒。

近年蟲毒の成功者は叔母と、曾祖母の二人だけで他の二家では3代

続けて挑戦するも全員が死亡している。

「でも……どれくらい年月がかかるかさえ分からないのよ？」

碧理の声に蒼佳も「そうね」と短く答える。

曾祖母は半年。叔母は1年。失敗したものはで最大で2年間生き地獄を味わいながら息絶えたものも居ると聞いた覚えがある。

「……一年以内。できれば半年だな」

俺の言葉に蒼佳が指を3本立てた。

「3ヶ月よ。私は必ず成功させる3ヶ月で戻るわ。それまでに貴方たちも鍛錬なさい。置いていくわよ」

ニヤリと嗤う彼女の顔には決意が現れており俺たちは口を噤んだ。

「あ、それともう一つ大事なことがあるわ」

「タクミ君はもつといっぱいセックスをしなさい」

「はあ？」

「お姉ちゃんっ！」

彼女の言葉に気の抜けた声を思わず漏れ、碧理は姉の名を叫ぶ。

「碧理、貴方もなんとなく察していたのね……そうよね。貴方の方が氣には聡いはずよ。」

碧理、それが分かって黙るのは独占欲でしかないわよ。男の人を独占しようとするのは辞めなさい。

男性は我々女性すべてに共有されるべきよ。それこそタクミ君みたいな男性は特にね」

蒼佳の言葉に顔を伏せる碧理に俺は余計首を傾げた。

「タクミくん。貴方、先月実家こじに戻って来た時より精氣せいぎの器うつわが広がっているわよ」

「……え？まじっ？」

彼女の言葉に聞き返す俺を見て蒼佳は碧理に視線を向けた。

「へ？し、知らないわ。ウソ、タクミ氣づいてなかったの？」

碧理の言葉に首をかしげながら自分の器を意識する。

「……あ、ほんとだ。なんとなくだけどそんな気がする」

「なんて無頓着なのよ」

俺の言葉に碧理が頭を抱えるようにして口を吐いた。



「でもタクミ君ならあり得るんじゃない？」

もはや馬鹿を見るような冷めた目つきでこちらを伺う視線に肩身が狭くなるころ、蒼佳から言葉が飛ぶ。

「そもそもタクミ君より氣が多いサムライ。いえ、退魔師を私は見たことないわよ。それこそぬらりひよんとも氣をぶつけ合えるほどの規格外だもの。」

器が広すぎて、微量に拡がったことさえ氣にならないということはないかしら」

なるほどと思う。

確かに俺の器は規格外らしい。

器とはそもそもが氣を貯蔵するコップのようなものだ。

サイズは人それぞれである。

俺の場合はもはやプール並らしいが……

「それにしてもよ。氣の器なんて退魔師の基本よ」

しかしながら碧理は俺の無頓着さに完全にあきれていた。

「まあ、今更それを考えても仕方がないわ。とにかくタクミ君の場合、いっぱいエッチした後に決まって微量だけど器が広がっているのよ。だから、あなた、どうせ高校に行くんだから一杯女の子とエッチしなさい」

最後に「好きでしょ。エッチ」ともつなげる蒼佳に内心ガッツポーズをしていた。

「あ、それと……」

蒼佳の言葉に俺は「まだあるのか……」と思わず漏らす。

「いいえ、あなただけにじゃないわ。どっちかという碧理もね」  
ビクリ。

蒼佳に名前を呼ばれ彼女は肩を震わせた。

「貴方達、セックスしてるときどこに射精してるの？」

ブツと思わず俺は噴き出す。

「昨日まで私の中では、もしかすると程度だったけど今は確信してい

るわ。

タクミ君の精液は、私たちの器も拡げるはずよ。

但し条件としてそれは膣内射精の時だけよ。私に比べて碧理はほとんど器が拡がってないけど、一体どこの穴に出してもらってるのよ？」

彼女の言葉に目をそらし顔を伏せる碧理をじーっとみて蒼佳がぼそりと呟いた。

「口」

「パイズリ」

「顔射」

「ぶっかけ」

「アナル」

ビクンツ!!

最後の言葉に碧理は激しく動揺を浮かべて震え上がる。

「へえ〜アナルねえ〜。私は経験ないんだけど気持ちいいのかしら？」

ニタリ。

まさに文字通りの顔つきをしながら伏せる碧理の顔を覗きこむ蒼佳。

その通りであった。直近でした試着室では、あくまで外だったの準備等もあり仕方なく膣内射精をしていたが、ホテルなどで二人つきりでするときは、碧理はアナルを好む。

「アナルでの射精は禁止よ」

「なんでよっ!!」

蒼佳の無慈悲な宣告に碧理は机をバンツと叩いて立ち上がった。

「まだ仮説段階だけど、膣内射精で器が拡がるのは源氣が子宮から作られていることが関係していると思われるわ。

なにもアナルプレイを辞めなさいとは言わないわ。

アナルで精液を受けるのではなく、マンコの中で精液をうけるのよ」

俺は今どんな猥談を聞かされているのだろうか。

そんな感想を抱くも二人の表情は真剣そのものだ。

「……でも……それが……一番……」

碧理の瞳に涙が浮かぶ。

(なぜ泣く)

泣くほどまでにアナルが好きなのだろうか。

「碧理。これは私たちが強くなるために必要なことよ。だから貴方は一杯タクミ君とセックスして膣内射精をしてもらうの。」

それでタクミ君は一杯ほかの女の子とエッチするのよ」

そう言い切る蒼佳に俺は手をおおずとあげる。

「蒼佳先生。俺がほかの子を一杯抱く理由は？」

俺の言葉に彼女は「抱く？そこは普通は抱かれるでしょ？」とつぶやいた後、フンつと鼻を鳴らした。

「いつも同じ女の子とばかりエッチしていると飽きるでしょ。いっぱいいろんな子と女の子とセックスしながら碧理にも毎日膣内射精をしない。それが成長への近道よ」

「さいでつか……」

蒼佳の言葉に俺はこくと頷いた。

「最後に碧理、他に気がついてることはないの？貴方を氣を出して結合させる結界師よ。私たちより氣には聡いでしょ。他に隠してることはない？」

蒼佳の言葉に首を横に振ることで答えを返す彼女に蒼佳は「はあとため息をついて彼女を諭した。

「碧理。何度も言うけど男性を独占するのは女として恥よ。」

男性が外で誰かとセックスしてきたら「ご苦労様」と言えなくてもいいから労いの気持ちを出さない。

それが私たちの女の普遍のルールでしょ」

蒼佳の目は真剣である。

この世界に男性が数多くの女性とセックスするのを面と向かって非難する人はほとんど居ない。

拘束するのではなく共有するのだ。そうして世界は回っている。

「……わ、分かっているわよ……」

唇を尖らせて答える碧理に蒼佳が微笑んだ。

「もちろんタクミ君みたいな男性を独占したいと思ってしまう気持ちは理解出来るつもりよ。」

でもそれを押し殺してでも見送るのが女の矜持よ。分かってくれるかしら?。」

最後はまるで子どもに言い聞かせるように優しい声音に碧理が「はい」と答えると蒼佳はその場でパンパンツと手を叩いた。

「と言うわけでタクミ君。碧理。やるわよッ!。」

「なにを?。」

その切り替えの速さに追いつけず俺と碧理は2人して首を傾げた。

「もちろんセックスよ!。」

「なんで??。」

まるで雛のように息の揃う俺と碧理を見て蒼佳は頬んで答えた。

「ヤ・リ・溜・め・よ♡。」

悪魔のように微笑む彼女に俺の顔が引きつった。

## 注) 【設定】 世界観について

### ●世界観について【大枠】

男女の出世率が1:10の世界により、男子はより草食系となり、女子はより肉食系へと進化した世界。

痴漢ではなく痴姦。強姦ではなく強漢。ビッチといえは『スケベな男性』を指す。

### 詳細

人外が跋扈する現代社会

毎年、人間の死因のおよそ5%が人外によつてもたらされること千年余り。

人々は人外を『怪異』と呼び、人類の繁栄には裏では幾千、幾万にもきかない人間が戦い、散っていった。

怪異と戦う人を『退魔師』と崇め、畏怖し、尊敬した。

これは退魔師と怪異のバトルファンタジーである。

### ★性欲について

女性が圧倒的に性欲が強い世界。

本作における性欲の強さは以下

主人公〈退魔師（女性）〉一般人（女性）〈一般人（男性）

※生氣（性欲）の強いものは退魔師として優秀とされており、時として優秀な退魔師は主人公と並ぶ性欲を有することもある。

### ●男性について

少数派による影響の為、

横暴、不遜、乱暴

と三拍子揃う性格が一般的である。

性に対しては非常に淡泊である。

### ●女性について

男性の草食化により、圧倒的肉食女子が多い。

より女性的なモノがモテるとされ、進化の過程で前世と比べて胸が

肥大化している。

バストサイズの平均はFカップである。

絶頂の際は、潮を吹く。

オナニークチュると通称している。

●サムライについて

精氣を纏い退魔庁より認可を受けた男性の総称

精氣を纏うことができる男性のみしか従事できない退魔師の象徴。

日本国内に籍を置き即応可能なサムライの総数は30,000人前後

●陰陽師について

源氣を纏うことができる女性のみしか従事できないサムライの補

佐を始め、怪異の封印を行うことが出来る退魔師。

怪異の予言、精器及び精具等の属性付与、式神を顕現させるなど、担当する役目は多種に渡る。

●結界師について

源氣を纏うことができる女性のみしか従事できない怪異の足止めや、封印構築の為の結界を作ること出来る退魔師。

★怪異について

神、鬼、妖怪、幽霊 人ならざるものの総称。

他にも妖（あやかし）であったり、妖怪と呼称されることもある。

最後に

本作は現代を舞台にした逆転世界系のファンタジーです。

作品に登場する人種、職業、場所、世界観はすべてフィクションであり、

筆者はそれらに対してなんら差別、偏見等はありません。

気を悪くされた方がいらっしやればここで謝罪致します。

犯罪行為等についても推奨するものでなく、あくまで創作の一部としてお楽しみ下さい。（字余り）

逆転世界で学園性を謳歌する。

## 第拾漆話 高校生♡（すこしだけ）

「賀茂 匠です。趣味は読書でサムライやってます。よろしくお願ひします」

桜咲き乱れる4月。

俺と碧理は地元の高校に入学し、先ほど入学式を終えてクラスのH Rにて自己紹介をしていた。

なお、碧理とは別のクラスとなっており、彼女は初日から職員室に抗議に行っていた。

「うそーやっぱり噂は本当だったのね！」

「めっちゃ、かつこいいい・・・」

自己紹介を終え、席に座るとざわざわとクラス中の女子が俺に視線を向けて呟く。

結局、蒼佳の宣言通り、丸2日。

彼女が家を出るまで搾精を続けられた。

その間、妹のDMさも彼女の知るところとなり、姉妹でアナルプレイを楽しむ様である。

もちろん射精の時はすべて膣内<sup>なかだし</sup>射精で終えるのだが

「はいはい！質問いいですかあ？」

俺の隣の席に座る女子が手をあげる。

「自己紹介に質問は含まれていないのだけど……」

教壇に立つクラスの担任である花田先生が困り気な顔を浮かべてちらりと俺に視線を移した。

「いいですよ。このクラスで男子は俺だけですし」

愛想笑いをうかべて応えると挙手をした生徒が「まじ!? やったね！」とガッツポーズを浮かべて立ち上がった。

「私、土井 律って言います！みんなから略して“ドイツ”って良く呼ばれるので賀茂くんもドイツって呼んでくださいー！」

その場で頭を下げる彼女に花田先生から「質問じゃないじゃない」

と制すとクラス中の女子から笑い声が漏れた。

どこの世界にもお調子ものはいるのだな。

そんなことを思いながら「よろしくね。ドイツ」とほほ笑みついでにウインクを返すと教室には黄色い嬌声が鳴り響いたのであった。

「カモっちよろしくねー」

クラスメイトの自己紹介タイムが終わり花田先生が黒板に明日の予定を書き始めた時、不意に横から声がかかった。

「君は……咲良さん？」

先の自己紹介で“咲良ちなみ”と名乗った人物は俺の席の横であり、ピンク髪の今世で珍しいギャル然とした姿に俺もなんとなく目をつけていたのだ。

「そんな固つくるしくじゃなくて下の名前で呼んでよ。アタシもカモっちって呼ぶからさ」

そう言つてニコリと微笑む咲良。

「オツケー。なら“ちなみ”って呼ぶね」

俺の言葉に彼女は破顔してコクコクと頷いた。

ピンク色の胸下辺りまで伸ばし、ややイタズラ少年を彷彿させるような瞳。

ワイシャツの胸元を開けっぴろげはだけさせ、谷間を強調している。

何より俺がギャルだと思つたのはそこではない。

腕にジャラジャラとした金色のブレスレットをつけて、スカートは改造したのだろうか。

ひざ上20センチほどの超ミニスカートにルーズソックスという今世ではあまり見ない服装をしていたのだ。

「カモっち、放課後暇？」

そんなちなみが俺に身を寄せて耳元で囁いた。

ふわりと甘いフルーティーな香りが鼻腔を刺激する。

「んっ？どうして？」



俺の言葉に彼女は「内輪だけでカラオケ行こうってさ。だからカモつちもどうかなくて」

と谷間を寄せて告げる。

「いいね。行くよ」

彼女のことばにふたつ返事で了承を告げるころには、ホームルームが終了していた。

「へえー！賀茂くん、歌上手いんだね!!」

ドイツが拍手をしながらこちらに声を掛けてくる。

駅前のカラオケボックス。

結局クラスメイトの3分の1。

おおよそ10名ほどを連れて俺たちは懇親会を行っていた。

10人が所狭しと座るL字型のソファ。

横に座る女子がぱちぱちと拍手し、賛美を送る。

そんな中、俺は対角線上に座る咲良にチラチラを視線が動いてしま

う。

「ちよつと、ちなぴー」行儀悪いよお」  
誰かが咲良にそんな注意をするも「これが楽し、別によくねー？」と軽い口調で返す彼女。

片膝をソファに立てて、まるでパンツを見せつけるように足を開く。

濃いシヨツキングピンクのパンツはTバックなのだろう。

秘部にそってV字に布の面積を減らしていた。

「俺も気にしてないから大丈夫だよ。みんなも男子がいるからってあまり気を使わないでね」

愛想笑いをうかべ応える俺に周りが「優しい」と持て囃す。

「ちよつと、トイレにいつてくる」

歌も一区切りしたころ、徐に席から立ち上げり部屋を出ようとする。

「あ、アタシもおしっこ」  
足を広げていた咲良が声をあげて俺たちは部屋を出た。

「カモつちってさ、実はスケベだったりすんの？」  
カラオケのトイレの前で不意に背後に立つちなみから声が掛かった。

唐突なその言葉に振り返り、俺は言葉を詰まらせた。

「……どうしてそう思う？」

実は、もなにも、一般的に考えて俺は無茶苦茶なスケベだろう。  
しかしながら彼女がそれに気がついた原因が思い当たらず思わず首を傾げる。

「いや、なんかずっと谷間に視線感じるし、それにアタシのパンツ見ただでしょ」

どうやら自業自得のようだ。

「不快にしたなら謝るよ。何せ中学校は男子校みたいな所に缶詰だったからね」

「いや、アタシは別にいいよ。むしろそっちの方が話早いし」

ちなみが自身の髪をクルクルとしながら顔を赤らめた。

「……アタシとセックスしよって言ったら怒る？」

上目遣いで俺の顔を覗くその表情に思わずニヤリと口角が嗤った。

「——しゅ、しゅごいッ！おちんぽしゅごいッ！」

カラオケの男子トイレ。

肉打つ音に加え、女の嬌声が響く。

「ちなみのまんこもぎゅうぎゅうって締め付けてて凄いいよ」

俺は後背位、いわゆる立ちバックって彼女を責め立てながらちなみの唇を食った。

「……ちゅ、アンっ、き、キスも、気持ちいいよう……」

「早く部屋に戻らないとみんな怪しむからスパートかけるよ」

腕を回し、彼女のクリトリスに指を添わせてコリコリと動かしながら腰の動きを早めた。



項垂れる彼女の膣内から先程出したばかりの精液が零れ落ちる。

「大丈夫だよ。ちゃんと16歳になったら孕ませてあげるから」

俺の言葉に顔をがばりをあげる彼女の顔が明るくなった。

「マジのマジ?」

「マジのマジ」

先ほどまでのどんよとした空気はなくなり、彼女はその場でぴよんぴよんと跳ねて喜びをあらわにする。

「とりあえず、早く戻ろう。みんな心配するし」

時間としてはわずか10分。

超インスタントセックスではあったのだが、これ以上二人ともがトイレに行っていた。

そんな理由が通用するには限界のある時間であった。

「おっけー!じゃあ、またエッチしようねっ!」

俺の言葉に異を唱えることもせず、彼女は零れ落ちる精液など気にせずにシヨッキングピンクのTバックを履いた。

「じゃあ、先に行ってるから、カモっちは少し遅れてきてね!」

そう言っ手て手をふりふりとしながらトイレを後にする彼女の太ももには白い体液がタラリと流れ落ちていた。

第拾捌話 タクミ当番♡（すこしだけ）

部屋に戻るとどこかガヤガヤとしていた。

「ちなぴー、あんたクチュってたでしょ？」

「クチュってねえし」

どうやら彼女のトイレが長いことが女子たちの不信感というには大げさだが、

お調子者代表のドイツがニタニタと笑いながらちなみに詰問していた。

「ほんとかなあ〜」

ちなみの反応に首をかしげるドイツがふと俺に顔を向けて

「どう思う？」を口を開いた。

「……どうだろうね」

反応に困る。

クチュるもなにも先ほどまでパンパンと腰を打ち付けていた張本人である。

思わず苦笑いを浮かべながら「まあ、人間だし、そういうこともあるかもね……」

とどつちつかずの言葉を返してしまう。

「へえ〜。賀茂くんも、もしかしてオナニーしたりするの？」

違う女子がそんなことを言う。

セクハラ事案な質問に誰かが諭すのを期待したのだが、皆が気になるのか、俺の顔を覗いた。

（最近全くしていない）

というのが本当のところである。

なにセムラムラすれば蒼佳、碧理を誘えば爆乳美女を抱けるし、つまみ食いしたくなれば立ちんぼをすれば良いのだ。

オナニー自体は別腹という考えもあるが、なにせオカズとなるものほとんどが男を中心に着目した作品が主流なのだ。

必然的にセックスに重きが置くのが当たり前となってしまった。

「……時々、してるかな」

しかし、ここは彼女たちの希望に沿うように答えよう。

俺の声に周囲から「マジ?」「え、ほんとうに?」「そう言った声が漏れ出る。

「週にどれくらい?」

もはや猥談である。

四方から下ネタの質問が俺を中心に飛び交うのを、俺はのろりくらしと答えながら場を盛り上げる。

「ところでみんなは週にどれくらいクチュるの?」

俺の質問に皆が周りを伺いながらぼそぼそと言葉を漏らす。

「週に3回くらいかな」

「私は4回?」

「一日1回はしてるかな」

皆のオナニー具合を知り俺はご満悦である。

「あ、そうだ。さつきタクミくんがトイレに行っていたときに話し合ったんだけど」

明日から〃タクミくん当番〃を作るのはどうかなって話になったんだけど……」

ふとドイツが俺の顔を伺い聞いてきた。

「タクミ当番っていうのは?」

思わず首を傾げる。

「毎日変わればんこで賀茂くんのお世話をするの。」

タクミ君が学校生活を過ごしやすいように、私たちでお弁当作ったり、日直みたいなことかな?」

ドイツが至極当然といった具合でそんなことを提案する。

「めんどろじやないかな?お弁当作るの?」

俺の言葉に彼女は首を振ってそれを否定する。

「そのかわりにっていうわけじゃないんだけど、タクミくんさえよければ当番の子と一緒に昼休憩は一緒に食べてあげてほしいの」

最後に「あくまで提案なんだけどね……」と言葉を紡ぐ彼女に俺は考え込む仕草をする。

悪くない。王様の扱いはこちらこそ喜んでである。

「いいよ。じゃあそうしようか」

俺の言葉に周りから歓声が起こった。

「じゃあ、明日、ほかの子にも声をかけてみるね！」

そんなこんなで俺の当番なる制度が決まった。

あ、碧理にお弁当作らなくて良いといわないと。

怒るだろうな。

俺はここには居ない、彼女が目を吊り上げて不貞腐れる光景が目  
に浮かび、その場で苦笑いを浮かべた。

「ちよつといいかしら？」

入学して早、1週間、タクミ当番の女子たちをつまみ食いしながら  
ら過ごしていたとき、放課後に一人の女子が話しかけてきた。

「ん？どうかしたかな？吉田さん」

俺は声の主に視線を送る。

黒髪で、肩よりは短めのショートカットヘア。

平均よりやや高めめの170cmほどのある身長  
の彼女は恐らくクラスで一番の双丘の持ち主であり、

まるでボールでも詰めているのかと気になるほどに胸元が突き出  
ている。

もちろんこの世界の女性らしく美馬麗しく、スポーツマンタイプな  
のだろう。四肢はほっそりと長く、

それが余計に胸を主張していた。

新学期始まってほとんど話すことがなかった彼女の急な問いかけ  
に思わずびつくりとしたが、

目をつけていたひとりでもあり思わず笑顔がこぼれた。

「ちよつと、あなたに一つ聞きたいことがあるの」

席に座る俺を見下ろすように立つ彼女の顔つきは、今世ではめずら

しく男性に媚びるような雰囲気はない。

そもそもそこまで胸が出ていると足元見えないのではないだろうか？

全く別のことに関心を取られながら俺は「なにかな？」と首を傾げる。

「あなた、当番の子に襲われているって話を聞いたのだけど本当かしら？」

皆に口止めをしていたのだが、やはり人の口に戸を立てられない。

「もし、そうなら正直に言っしてほしいの。なんなら然るべき措置をとるべきだと私は思うわ」

そう話す彼女の顔を見てどうしたものかと更に首を傾げる。

『襲われている』というのは表現として正しくはない。

どちらかというところ『襲っている』わけなのだが……。

苗字のあいいうえお順で訪れる当番制なので、彼女は番はそれこそ5月上旬ごろだろう。

「……襲われているねえ」

俺の言葉にすでに当番を終えたもの、加えて、今日の当番だった女の子がビクリと体を震わせる。

「そんなことはないかなあ。みんなちゃんとやってくれてるよ。それこそみんなのお弁当もおいしかったし」

俺の発言に、すでに当番をしている連中の顔が晴れる。

人によっては重箱。それこそ御節のような量を持つてくるものがあるが、総じてみんな上手くできている。

今日の弁当は天井で、当番の子は昼休憩の1時間前に一旦帰宅してから作ってくるという手の込みようである。

学業が疎かに……という意見は意外に出ることはなかった。

むしろ、教師側も男子当番制度については概ね賛成ということらしく、

当番による早退、遅刻についてはもはや公休扱いになっている始末である。

閑話休題。



「そう……。それなら良いのだけど……」

あたりが外れたのか吉田さんはそう言っつて自席へと戻つていく。

「なんかヤな感じい〜」

横で見えていたちなみが声を漏らすので俺は「まあまあ」と彼女を窘めるのであつた。

吉田美咲。

男子に媚びない性格であり、肉付きのよい美少女。

彼女の肢体を眺めながら俺は舌なめずりをしながら見送つた。

「カモつち」

翌日。

昼休憩が終わつてすぐの授業中。

教室を挿す光が陽気を伝え、眠気をクラスを襲い、多くの同級生が机に突つ伏している時。

俺の横の席に座るちなみがツンツンと俺の腕を叩いて小声で呟いた。

「みてみて、今日は新しい下着なの」

俺の机に身を寄せてシャツをぐつと引つ張り谷間の中を見せつける。

あれから彼女はこうして頻繁に俺を誘惑してくる。

そして彼女の言う通り、今まで見たことのない下着、

それこそヒョウ柄を選択してくる彼女におもわずグツチョブと親指を突き立てた。

「それにね……ほら、これ紐。パンツだよ？」

ぺらりと自らスカートをめくり紐に指を這わせる。

「ほら、これ引つ張るとほどけるんだよ」

腰でリボン結びされた紐をクイッククイッとほどこうと引つ張る姿に俺は唾を飲み込んだ。

「あつ、ほどけちゃった」  
はらり。

紐が解けて腰から生地が落ちてても、ちなみは慌てる様子などなくむしろニヤリとはにかんだ。

「見たい？私のお・ま・ん・こ♡」

彼女の秘部をギリギリに隠すヒョウ柄のパンティー。

剃っているのか、下腹部には毛が生えておらず、ぷつぷつと毛穴が隆起しながらも無毛を伝えていた。

「でも、だーめ。カモつちがおちんちん見せてくれたら考えなくもないんだけどなあ」

手を俺の下腹部にそつと載せると彼女の柔らかい手のひらの感触にムクムクと勃起あがり始める。

「じゃあ、触り合いつこししようか」

俺たちの席は廊下側の一番端の最後尾。

唯一廊下だけを意識すれば良いという配置にそつとベルトを外してチンポを露出させた。

「すつごおいつ。いつ見てもたくましいおチンポだね」

はははと小さく声を上げて笑うちなみがそつと肉棒を包み込んだ。

「カタいし、太いし、大きいし、おまけにエッチなんて、やっぱりおサムライさんは違うんだねえ」

しゅこ、しゅこ。

優しく、音が響かないようにそつと手を上下する彼女。

程よい刺激が気持ちよく、思わず声が漏れそうになるのをぐつと堪える。

「じゃあ、見せてくれたから、アタシのも見ていいよ」

そう言っただけだったパンティをひらりと開くとクロツチからいくつもの架け橋を描きながら彼女の秘部があらわとなった。

「むつちや濡れてるじゃん」

もはやシミとなったソレを指差し思わず破顔する。

「じゃあちよつとだけ足、開いて」

俺の言葉に従うように彼女は触らせやすいように足を広げた。くちゆくちゆく。

パンツを濡らしていたおまんこは当然の如くぬめり気を帯びており、音が小さく耳に届いた。

「カモつちのせいじゃん」

快感に唇を噛みながらそっと呟く彼女に「ムラムラさせてごめんね」と意味もわからず謝罪する。

「アっ、それ気持ちいいっ」

二本の指でクリトリスのサイドを挟み上下に擦る。

「イっただめだよ。潮でみんなにバレるから」

くちゆくちゆくちゆ。

チンポを擦るようにクリを上下に擦り上げると彼女は小さく身体を震わせた。

「っ、む、むりかもお。き、きもち、良すぎるよう」

そう言っただけで彼女はぎゅつと俺のチンポを掴みながら小さく喘ぐのであった。

## 第拾玖話 混乱

「タクミ。あんた最近女の匂いがすごいわよ」

高校に入学し初めての日曜の昼。

退魔師が毎日討伐に明け暮れているというワケではもちろんなく、昼間つから碧理と性に耽っていた。

日課となった彼女への膣内射精を終えてのピロートーク中にそんなことを告げられた。

ぎゅうっ。

チンポを強く握られ思わず腰が引ける。

先ほどまでアナルに挿入されながらヨダレを垂らしながら首絞めプレイをおねだりしていた人物とは思えない顔つきに俺は苦笑いを浮かべた。

「まあ、蒼佳姉の言う通り、クラスメイトに手を出してるからね」

大義名分はすでにあるのだ。

俺の言葉に「へえ、そうなんだ」と目だけ笑っていない笑顔で彼女は俺のチンポを啜え込んだ。

よく舐めれたものだ。とは今でも思う。

先ほどまで、アナルに挿入し、射精の瞬間だけマンコへと入れる。いくらプレイ前にはトイレで綺麗にしているとは言っても所詮直腸である。

それでも気にせず舐める彼女に感心しつつ俺はその頭を撫でた。

「いい？何を聞いても私が一番アンタのことを理解しているわ。それだけは忘れないで」

あらかた綺麗になったチンポから口を離して話す彼女の瞳は真剣さを物語っていた。

「そうだね。それに俺も碧理のことを分かっているつもりだよ。

とつてもエッチでお尻の穴が好きなドMってことをね、ッー」

最後にお腹をパチンと殴られて息が漏れた。

「一言余計なのよっ!!」

いつものように怒りながら彼女は体液を流すべく形の良い白い尻を振りながら浴室へと向かっていった。

「はあっ!!?なによそれ!もはや緊急討伐指令じゃないの!」

電話越しに碧理が声を荒げた。

二人して遅めの食事をしていた時に彼女のスマートフォンが鳴ったのだ。

どうやら相手は支部かららしく、碧理は板についた怒声を受話器にぶつけていた。

「ちよつとー待ちなさいよーそれこそアンタらねえ!

前回とその前も最近占術がおかしいんじゃないの?

今から迎えってこつちの都合も……あっ!!待ちなさいよ!まだ話はッ——」

「ふざけるんじゃないわよ!!」

一方的に切られる形となつたのか、碧理はスマートフォン握りしめて肩をワナワナと震わせた。

「なんて?」

大体察しはついている。

どうせ碌な依頼ではないのだろう。

彼女は自身を落ち着かせようとその場で大きなため息をついて言い捨てた。

「河童よ!カッパの馬鹿が10分前に現れたそうよよ」

ふざけんじやないわよ。

最後にそう続ける碧理に思わず苦笑いを浮かべた。

「それで場所は?」

「ここからほど近い水泳競技場らしいわ。ほら幹線道路の近くにある大きなプールがあるところ」

自身のスマートフォンで地図を開き画面を俺に見せつける。

「今日はここらへんの高校生集めて大会中らしいわよ。今頃現場は慌てふためいているでしょうね」

あんなに怒りながらも要点だけはちゃんと確認し、そして伝える。さすがは蒼佳の妹であると感心すると同時に思わず首を傾げた。

河童とは正しく河によく顕現する怪異である。

それが水があるからという理由で何故プールに出現したのか。

俺の疑問に勘づいたのか碧理がそれを補足する。

「どうやら、参加者の誰かに擬態してたらしいわよ。行くわよ。すぐに出発するわ」

そう言っただけで昼飯途中など関係なく碧理は立ち上がり、ドスドスと足音を立てながら彼女はリビングを離れていく。

どうやら第二部のセックスはお預けらしい。

「吉田っち。クラスの男子紹介してよお」

背後に衝撃を感じて私は前のめりになる。

「ちよつとメグル先輩。危ないじゃないですか」

背後から回された腕から抜き出て、注意するも彼女がいつものような軽薄な笑みを浮かべるだけだ。

「そうよ、吉田っちのクラスの賀茂くんだっけ？ウチら2年生でも噂になってるよ。曰くすごく女性に優しいイケメンだっけ」

メグル先輩の横にたつくるみ先輩もそう言っただけで「紹介してよ。水泳部のよしみでしょ」と下品な笑みを浮かべた。

3馬鹿トリオめ。

いまこの場に居ないもう一人の先輩とまとめてひとくくりしながら思わず悪態をつきそうになるのをぐつと堪えた。

賀茂 タクミ

彼女らの言う通り、まさに漫画に現れた男性だ。

女性に優しくして談笑にも応じて聞くところによると下ネタにも嫌な顔をすることなく応えるらしい。

タクミ当番なる制度が始まり1週間。

ウワサでは彼が女子に襲われているというのが出回り、思わず正義感から直接確認しても答えはN.Oだった。

私の勘が囁くのだ。

“何かあると”

しかしながらすでに当番をした女子連中に確認しても彼女らは口を閉ざしてなにも答えない。

襲ったのか。という問いについても否定や肯定するわけでもなく沈黙で返すのだ。

全く以て解せない状況が今の私のクラスの現状である。

「先輩たち、これから決勝でしょ！そんなことに気を回すくらいならストレッツチでもしたらいいじゃないですか！」

とりあえず、私に彼を紹介するつもりはなく、正に目の前に迫った試合のことを彼女らに言うもかえって来るのは

「水泳より男が大事」という言葉だった。

「まあ、まあ、美咲っち落ち着いて〜」

するとそこに残りのトリオの一人がやって来た。

彼女たち3馬鹿は言動は馬鹿一辺倒だが、その実力があるのだ。

私に飛び込んできた花咲恵<sup>めぐる</sup>。金髪のみディアムヘアで素行不良でよく補導されるくせに府内でも有数のトップ泳者<sup>スイマー</sup>

便乗してきた佐藤くるみ。色黒で紫髪の彼女はメグル先輩と一緒によく補導される。

最後に私を止める西岡美優。中学校からの先輩で舌つたらずの天然の癖にバンバン府内記録を更新す泳者である。

私を含めて3年生の部長と副部長も彼女ら2年生のことは3馬鹿トリオと呼んでいる。

“ハナサキ メグルさん、サトウ クルミさん ニシオカ ミユさん 至急選手控え室のお越し下さい”

ほら見たことか。

大会運営のアナウンスが館内に響きわたる。

その音に彼女らは「めんどくさい」と呟きながら控室へと向かった。あんなやる気で私より早いんだから全くやり切れない。

試合が終われば部長に怒ってもらおう。いや副部長だな。

そんなことを思い浮かべながら私はジュースを鞆にしまった財布を取るべく身を屈めた瞬間、競技用プールが爆ぜた。

「……………つえ……………」

天井まであがる水柱。ゴゴゴと大地が揺れる衝撃に思わず手にした財布がぼとりと落ちた。

「怪異だッ！」

誰かが叫ぶ。

は？怪異？ここに？なんで？

ていうか今試合中だよな？

思わず観客席に身を乗り出して私はプールを覗きこんだ。

つい今しがた100mの平泳ぎ決勝をしていたはず。

プールには先ほど泳いでいたのだろう何人かがうつ伏せでプカリと浮かんでいる。

爆発の衝撃のせいだろうか。そのうち半分ほどは体が千切れ、水面を赤く染めていた。

「逃げろ！殺されるぞ！」

関係者のだれかがそう叫んだ瞬間、絶叫が会場を支配し、皆が出口へと走りだし私もつられるように走り出す。

ここはもはや戦場のように怒号と悲鳴が響き渡っていた。



## 第貳拾話 河童

「なあ、河童って位階どのくらいだったっけ？」

黒バイの後ろに碧理を乗せながら俺はインカムで彼女に問う。

「報告では推定第五位階相当よ。伝えなかつた？」

彼女の言葉に首を横にふる。

その上での確認だ。

「第五位階が人に化けてプールに忍びこむかねえ」

俺の言葉に背中にしがみつくと碧理がひゅと息を飲み込むのが伝わった。

「……ヒトガタかも……しれないわね」

そうなのだ。

河童とは本来至る所に出現する低位の怪異である。

それこそ人には危害を加えど、縄張りの中で人を河へと誘い喰らう妖怪であり、そこから出てしかも人間に化けるなどの知能は持ち合わせていないはずだ。

ということは、それだけの知能を持つ妖あやかしであるという訳だが、報告には第五位階。

全く解せない。

「近く、本庁に行つて確認すべきかな。あまりにも予測が不明確でありお粗末だ」

俺の言葉に「そうね」と短く答える彼女をよそに、何故俺たちの管轄するエリアだけ、こうも緊急討伐ばかりが発生するのかを考えて一つの結論が浮かんだ。

「……俺か。目的は」

先のぬらりひよんの久方ぶりの登場と言い、裏に何かがあると予感が告げる。

「ん？ごめん。なんて？」

碧理がそう聞き返すも俺はなんでもないと首を横に振ってアクセスを全開に回した。

現場は近い。

先程から絶えず響くサイレンは俺の黒バイだけでなく救急車やパトカーの音も響きわたり、今般の救急性を物語っていた。

「酷い有様ね……」

現場である室内水泳競技場の出入り口には人がごった返し、あたりにはけが人が多く地に伏していた。

そのほとんどは怪異に傷をつけられたのではないだろう。

避難時の混乱により捻挫、打撲、擦傷、体中に靴の足跡が残る人が多い。

「京都退魔庁 第参地区所属 下級結界師 賀茂碧理」

「同じく下級サムライの賀茂匠」

入口に立つ警察の状況を確認しようとして声をかけるも、彼らもいま現着したばかりで詳細は不明とのこと。空振りに終わった。

「これ、またぬらりひよんが出てきたりしないでしょうね」

ややデジャブを感じながら碧理がそんなことを口にするので「フラグはやめろ」と応えながら俺たちは出入口をくぐりながらあたりを警戒する。

「河童ということであればやっぱりプールにいるんじゃない？」

彼女の言葉に頷いてプール競技場につながる入口を目掛けて走る。

「碧理、けがで動けない人に結界を」

至る所で倒れる人を視界に捉えながら彼女に伝える。

「わかってるわよ」

言われなくてもということだろう。

やはり、こういった緊急時には結界師の有用性がありありと分かるものだ。

「……いるわね……」

プールから漂う妖気を感じて碧理が呟く。

「ああ、それもかなり強めだ」

肌をひしひしと感じる氣の凶悪さに俺がゆがむ。

「気を付けてね」

背後から背中をバンつと叩く衝撃を感じ、コクリと頷いて俺は足に力を込めてプールへと駆けこんだ。

ここからも主役は俺である。

結界師はあくまで結界を張るだけであり直接的な攻撃を持ちえない。い。

故に彼女はここからサポートに回るのだ。

凶悪な氣に充てられながらも思わず嗤ってしまおう自身を戒めてプールへと躍り出た。

「……河童だけど河童か、あれは？」

50mの競技用プールの真ん中にソレは立って、いや俺を待ち構えていた。

おおよそ5mを超える体軀に緑色の肌に頭上に一枚の皿、しかしながらその巨大な体を支えるムキムキとした筋肉量に俺はいつぞやの鬼を思いだしながら刀を抜刀する。

「ほう。思ったより早いではないか」

突入後すぐに俺に首を向け、流ちような言葉をしゃべる河童が俺に向けて氣を放つ。

その姿はもはや河童というよりも「化け物」というに相応しい。

「坊<sup>ぼん</sup>や。ちよいと我に喰ろうてくれまいか」

河童がプールの中に入れた腕をこちらに向けて振るう。

水が鉄砲の如く幾千もの飛沫が弾丸となり飛来した。

「はい、そうですかとはなかなか言えないかな」

氣を足元に込めてその場から跳躍し水面を走り首を目掛けて刀を振るった。

「まあ、我もそう簡単に行くまいとは思っておるよ」

刀との間合いを凶り首をかしげるようにして斬撃を躲しながら嗤う河童に俺も思わず破顔した。

「せめて我を楽しませろよ。サムライ」

氣を放出させて俺の左側より津波の如く壁となり迫ってきた。

天井に着くかと思われるほどの高さに質量保存の法則なる前世で齧った知識が一瞬脳裏に浮かぶも、この程度であれば造作はない。

切り裂いてしまえば良いのだ。

刀に氣を込めて剣を構えた瞬間、河童が呟いた。

「よそ見はいかんのう」

足元から奴の妖氣を感じてその場から後ろに跳躍し距離を取る。

ついでと言わんばかりに迫っていた壁も切り裂いた。

「ご丁寧が悪いね」

悪態を奴に浴びせるも河童は「なんの、なんの」と気にした様子はない。

「ほれ、右じゃ」

ご丁寧に忠告を告げるそれに従うように右側に視線を向けた瞬間、反対側より衝撃を感じて俺は観客席へと叩き込まれた。

「あ、すまん。我から見て右じゃったな」

クソ狸め。

カカカカと大声の笑い声が響く。

瓦礫に埋もれながら俺は舌打ちをしてその場から起き上がる。

「ん？」

横に震えるように固まる一団と目が合った。

そこには見知った人間が震えながらこちらに視線を向けていた。

「吉田さんじゃん。何、水泳部だったんだ」

クラスメイトの目をつけていた女性の登場である。

ハイレグタイプの競泳水着に包まれた大きめな乳房に思わず俺は笑みを浮かべた。

「……か、賀茂……くん？」

彼女も俺に気がついたのか。やや目を見開いてこちらを伺う。

「ちよつとータクミ！河童が行ったわよ！」

どこからか碧理の声がこだまする頃に飛翔するように観客席に乗り入り込む、化け物に吉田を筆頭とした連中がヒツと言葉を漏らした。

「碧理いゝ護符使うねー！」

きつとどこかで河童の様子をみながら結界を張っているだろう彼女に向けて声をあげ、俺はポケットから取り出したお札を吉田に投げ

て「結」と呟く。

彼女の氣を触媒に作られる防護結界が一団を覆う。

これは先の一つ目鬼にも蒼佳が使用した碧理謹製の簡易結界である。

先に氣をお札に閉じ込めることで誰でも結界を展開できるという便利アイテムではあるが、

維持には作成者の氣を普通よりも多めに蝕むという燃費の悪いシロモノだが、目の前で知り合いが死ぬのも目覚めが悪い。

「坊の連れか？」

どすんと足音を立てながら河童が首を傾げた。

「だったら？」

「目の前で坊を喰らった後に喰らうてやるまでよ」

醜悪な笑みを浮かべる河童に俺も笑みを浮かべる。

「畜生は腐っても畜生だな」

右手に残魔刀を握りしめ、左手ペンダントを剥ぎ取り氣を送り式神刀を顕現させる。

「流石に女の子の前でカツコ悪い姿は見せられないでしょ」

完全に顕現した式神刀は脇差のサイズに調整する。

打刀と脇差。

二刀流に行き着いた末に辿り着いた型である。

十字に構え、正眼に奴を捉える。

「カカカ。やってみたい坊」

河童が腕を振るうと水が顕現し弾丸の雨となり降り注ぐ。

全身に氣を送り二刀を振るってそれらを叩き落とす。

いくつか落とし損ねた飛沫が服を肌を切り裂き身体に弾痕を刻む。

「キリがないか」

どちらもともなく呟いた言葉が重なり俺と河童が距離を詰めてぶつかる。

「死にさらせー！」

右の打刀を振るうと相對するように左手の拳でガードする

左の脇差はそれの反對で。

筋肉と妖氣で固めた河童の拳は正に鋼鉄の如く硬く、打ち合う瞬間に金属がぶつかり合う音を立てて火花が走る。

「タクミ。私だよ」

殴り合う河童の顔が不意に碧理へと変わる

気がついた瞬間にはもう遅く、一瞬だけ怯んだ俺の顔に衝撃が走り、再度後方に吹き飛ばされる。

額の皮膚が裂け壁に激突し口から血が吹き出した。

「……ちよつとそれは卑怯じゃないか？」

思わずそんな悪態を漏らす俺に「勝てば官軍と人間はよく言うではないのか？」と河童が快活に嗤った。

「畜生のくせに博識なことだ」

目に血が流れ込み視界が赤く染まるのも気にせず俺も同じように顔を歪めた。

「知ってるか。氣つて言うのは使い方によつては色んなことが出来るって」

先の衝撃で折れたのだろう。右手にもつたいた残魔刀が半ばで折れていた為、地面に放つて河童に向けて手のひらを突き出す。

「——カカ。まるで妖あやかしのようじゃな。坊」

全身から噴出する氣にそんな回答をする河童を無視し、氣を右手に凝縮させる。

「吹き飛べ」

刹那、氣を放出し空気砲のような圧力が化け物へ射出され衝突する。

よつぽど己の肉体強度に自信があるのだろう。

河童が腕を交差させて 受け止める体制のまま後方へと吹き飛んだ。

同じように俺も風のように河童目掛けて跳躍する。

「河童。右だ」

そう呟いた瞬間、左側より脇差をズブリと頭蓋に刺しこんだ。

「あ、わりい。俺から見てだったわ」

そのまま式神刀に渾身の精氣を送り込むと頭蓋がパンツと音を立てて破裂した。

次の瞬間には光の泡がプールへと舞っていた。

「…………ごめん。ちよつと無茶し過ぎたわ」

救急車に運ばれながら付き添う碧理に声をかける。

今ばかりは彼女も目に涙を浮かべながら俯くばかり。

つい先程までは「阿保！馬鹿！ドジ！オタンコナス！無鉄砲！」とさまざまなレパートリーの罵詈雑言を告げられたモノ……。

別に致命傷と呼ばれるものはそこまでない。

それこそ身体のいたるところに出来た銃創に割れた額ぐらいだろうか。

それよりも碧理が心配しているのは精氣の使い過ぎである。

戦いで使う氣、源氣、精氣問わずこれらは生命エネルギーでもあり、無作為に使うと死に至るのだ。

故に氣に聡い彼女曰く、今日の俺は使い過ぎたらしい。

俯き肩を震わせる彼女の頭に手を置いて、俺はそのまま意気を失った。

## 第貳拾壹話 過去

全身を覆っていた痛みも倦怠感も無くなり、浮遊感が俺を襲う。  
ああ、またか。

いつものようなフラッシュバックだ。

目を開けると周囲は暗闇に包まれるも、一点だけ光を放つ。

プロジェクターとスクリーン。

椅子はない。

映し出される映像に思わず顔を歪めた。

“○○さんって気持ち悪いよね”

“すぐに意見を否定するくせに碌な反対意見も出ないし、正直足手  
まといだわ”

スーツを着た二人の男女の口元が映し出されて笑みを浮かべる。

“お前なんて産まなければよかった”

“気持ち悪い顔浮かべてこつちくんな！殺すぞ！”

女性が少年の頬を叩き、男性が腹を蹴とばす。

“あの子とは遊んじやだめよ。娼婦の子だから”

母親と思われる女性が子どもにそう言い聞かせる。

ああ、相変わらず、くそつたれな映像記憶だ。

“あなただけよ。本当の私を理解してくれるのは”

“お店の外では会えないの。私も会いたいわ。でもお店にバレた  
ら私は殺されるわ”

“挿れるのはだめよ。フフフ。腑てないで。私がお店を上がると  
きの記念にとっておきましょう”

化粧の濃い、裸婦が一人の男に妖艶に笑い眩く。

“パンクね。もう貴方とは会えないわ。さようなら”

肌色多いドレスをきた女性が冷たい目でこちらは見下ろす。

画面が切り替わり、次に写しだされた映像に二人の少女と黒髪の美女  
が陽和な笑みを浮かべて俺の手を握っていた。

“



“ほら！<sup>トモエ</sup>巴。これがおちんちんだよ！”

“おちちちん？”

“これ、<sup>カナエ</sup>叶、変な言葉教えないの”

三人が見降ろすようにこちらを見ながら全員顔が弛緩している。

“タクミ。おっぱいの時間よ”

持ち上げられるに視点が変わり、乳房が画面に映し出された。

“たっくんはおっぱい好きだよね”

“おっぱい！おっぱい！”

幼女がはしゃぐ声に女性が窘める和気あいあいとした空間。

「母さん……姉さん……」

夢だ。今はもう居ないとわかりつつも涙が溢れる。

「……やめろ……」

この先の展開を知っている。

スクリーンに意味もなく言葉告げるも無慈悲に映像が変わった。

“……ウソ……う、うそ、うそよ、うそ、うそ、うそ、ウソッ！”

“

母が倒れ伏した少女にかけより抱き起こす。

「……やめろ……もうやめてくれ……」

映像を見るのをやめて俺はその場に三角座りで膝を抱えて頭は下げた。

「くそつたれ……やめてくれ……やめて……」

声も空しく耳にはいくつもの叫び声が聞こえて思わず身をビクリを震わせた。

『見イっつけタあ』

不意に耳元でささやかれるような声に顔をあげた瞬間、意識が現実へと移された。

「はあ……。はあ……。」

見覚えのない天井に、室内。

部屋は電気が切れて暗く、窓には月明りが指していた。

「——ッ！」

身体中の皮膚が突っ張る間隔を覚えて俺は体の視線を送る。

「……病院か」

所々にホツチキスのような針が腕や、足に刺さって傷口をふさぐ。

額に手を当てると、縫合されているのか、どこか触り心地の悪い糸の感触を覚える。

「母さん、姉さん……」

俺はかつてみた3人の家族の顔を思い出し、その場で膝を抱えて俯く。

俺の鼻をすする音だけが室内に響いた。

## 第三拾貳話 看護♡

「碧理、別に手が折れてるわけではないから自分で食べられるぞ?」

「ダメよ。せめて入院中は私に介護されてない」

くちゆくちゆくちゆと自分で咀嚼し、口移しで俺の口内へ運ぶ。

結局俺は入学早々に入院となってしまう。

夜中目がさめていくら、一人で泣いたあと、気が付くと眠りについてた俺は

朝になり処置をした医師が告げた処置の数々。

全身の銃創と額の裂傷による縫合。

及びこれは病院の管轄外であり上の管轄だが、精氣の欠乏による強制入院という措置が取られてしまった。

それでも全身で50針以上の縫合でも1週間ほどで退院出来るというのだから、氣というのは便利である。

「アంత、抜いてるの?」

何がとは言わずもがなである。

流星に搬送されて次の日は丸々目を覚ますことはなく今日なのだ。抜く暇も、抜く気力もなかった。

「アタシが抜いてあげるわ」

碧理が俺のズボンを脱がせてチンポを露出させる。

「少し、臭うわね」

仕方がない。

なにせ2日ほど身体を洗ってないのだから。

ちなみに排尿のカテーテルは朝方に抜かれた。

びっくりするほど痛かったとだけ言っておこう。

「チンカスも……ほら」

くにゆり

ふにやふにやと柔らかいチンポの包皮をめくり、カリの溝に真っ白なカスを俺に見せつけて碧理はそのまま。パクリと根本まで啞え込む。

「ふあふみほ、ふいんほほふいおい……」

じゅるるるる。

目を細めて、まるで好物を頬張るようにはにかみながらカスを吸い取る。

「ほほ大ふきいくふなつてふえきた」

ぐぼ、ぐぼ、ぐぼ、

優しく舐めとるように、勃起させるように動く彼女に、俺のチンポも思わずムクムクと膨れ上がる。

「ちゅっ。じゅるるるるるる。ぐぼっ。ぐぼっ」

手を添えて上下に擦りながら口への愛撫を強める碧理に俺は射精が近いことを彼女に伝えた。

「いいわよ。口に出して、流石に今日ぐらいいは膣内射精じゃなくても」俺の身を案じてくれたのだろうか。

久方ぶりに彼女の口内に吐き出してよいと分かれば俺のチンポが更にビキリと腫れ上がるのを感じた。

「じゃあ、久しぶりにイラマチオで行こうかな」

「——ングッ！」

彼女の頭を押さえ込み無理やり喉に向かって奥へ挿入させる。

生理現象から一瞬だけ彼女がそんな声を漏らす。

「——グッーゴッ、ゲッ、ぎゅこ、げこっ」

普段の彼女の可愛い声音ではなく、喉奥を刺激することで発せられるまるで蛙のような声を出す。

「ああ、射精イくよ」

グゴっ、ぐっ、ぐぼっ

目、鼻、口、至る所から体液を流しながら彼女がコクンと頷き、俺は彼女の喉奥に精を吐いた。

びゅるるるるるるるるるる

「——ゴっー」

射精の瞬間、逆流したのか彼女の鼻から白い体液が噴き出すも気にせず俺は精を吐き出す。

射精が終わり彼女の頭から手を離れた瞬間、彼女はチンポから口を抜いてその場で咳き込んだ。

「……………き、気持ちよかった？」

いくらか咳が落ち着いてから碧理は顔を上げて鼻を拭って俺に問う。

「もちろん。ありがとうね」

俺の言葉に「良いのよ。私もちよつと気持ちよかったし」と答えながらヨダレで汚れたチンポを綺麗に振るように優しく吸引する。

「碧理はしなくていいの？」

彼女も性欲は強い。

当然苦しいだろうと思ひ声を掛けるも

「気にしないで。帰ったら自分でやるわ。流石に寝たきりのタクミに覆い被さってアナルプレイというわけにもいかないでしょうし」

思わず破顔して「そうだね。病室がうんこ塗れになるし」

と言うとガキリとチンポに歯を立てられ思わず起き上がる。

「……次、余計なこと言ったら噛み切るわよ」

人質ならぬチン質を取られた俺はその場で「ごめんなさい」と謝ると彼女は「はい。綺麗になった」とチンポから口を離した。

「あんまり無理しないでね」

ベッドに腰掛け、俺の頭を撫でてボソリと彼女が漏らす。

「……善処するね」

俺の言葉に「まあ、それでいいわ」と返して「お大事に」と告げて病室から出ていった。

去る彼女の臀部が濡れて色が変わっていた。

「タクミ様あ！心配しましたあっ！」

翌日、午前中早々部屋に駆け込んできたのは以前俺が指名した搾精看護師の早川美鈴だった。

「よかったです！生きてらっしゃって！」

ガバリと俺に抱きつき頬を身体にスリスリと擦りつける彼女に俺の顔が歪んだ。

「——ッ」

「あつーごめんなさいっ！痛かったですよね！」

自分の失態に気づいた彼女がぼつと離れて俺に頭を下げていた。精液バンク所属の看護師がここにいる理由。

それは正に徴精である。

毎月10日が納付期限であり、今日がその日となる。

彼女たちの仕事は担当する男性の状況を確認し、納精を管理することであり、昨日連絡があった際に

「今入院中」と返すと「ではお伺いさせていただきます」という返信の結果、今である。

「それで早速納精なんですけど、今日納めていただけないと2ヶ月連続の延滞となりますと、やや高め延滞精となりますので……」

タハハと苦笑いを浮かべる彼女に「でも精液バンクじゃないと採取できないのでは？」と質問をあげる。

納精が何故精液バンクでしか出来ないのか、使う器具はオナホとコンドームである。

道具だけで言えばどこでも使えそうなものだが、きつと保管に何かしらの手間があるのだろう。

俺の言葉に早川は「大丈夫です」と自信満々に告げて俺の前になにやら機械チックのフラスコを見せつけた。

「結構高価なものらしく、滞納者に対しての強制徴収時にしか普段は使わないのですが、今回は射精した精液を保管する容器をお持ちしましたので出来ればこちらで納精いただきます！」

ケガで入院している俺にもこの対応である。

正にお国ヤクザとはこのことかと苦笑い漏れた。

「……そ、それで、あ、あのですね……」

もじもじと言ひ淀む彼女に首を傾げる。

「あ、あの……前回の納精のあとに先輩に確認したんですけど……、べ、べつに、ぼ、ぼ、ぼ、勃起させるのは消毒さえすれば手伝わっても良いと言われておりまして、よろしければ勃起から手伝わせて下さい！」

最後だけ早口になりながらその場でぺこりと頭を下げる彼女に「だ

ろうね」と俺も返した。

「じゃあ早速だけど脱がして、触ってくれる？」

俺の言葉に「ひゃい！お願いします！」と兵隊よろしく、元気な返事を返し、彼女はよそよそしく俺のズボンに手をかけた。

「し、失礼します……ね」

ズルンと降ろされ頭になった頭を垂れるチンポに早川はウツトリとした顔つきで感想を漏らす。

「これが、おチンポ様が変わるのですね……」

ほうっ。

彼女が俺のチンポに息を吐いた。

「失礼しますね……」

ちゅ。

下がったチンポの頭を上に向けて鈴口に唇をつける。

「なんか……酸っぱい匂いがします」

れろり。

包皮を引つ張り裏筋をチロチロと舐める彼女。

それもそうだろう。風呂に入れるのは明日から。

つまり彼女が今舐めているのは、昨日碧理に舐められた際の唾液の臭いも若干ながら残っているのだ。

もちろんあの後、碧理は甲斐甲斐しくも濡れタオルでも拭ってくれただろうが、ムワツと俺の鼻腔に臭気が漂うほどには臭うのだ。ぱくり。

彼女がカリごと口で啜えてやさしく舌を這わせた。

碧理とは違う、慣れていない手つきに、どこか興奮を隠せず、

俺のチンポに血液が集中するのを感じてムクムクと硬く、大きく膨張した。

「よかった。勃たせることが出来ました」

完全に勃起したソレから一度口を離して彼女がはにかむ。

「……おちんぼ様……」

うっとりとした表情で俺のチンポを眺めてから、彼女は鞆から消毒シートを取り出して自らの唾液を拭った。

「はい。そ、それじゃあゴムを……つけて……」

フェラとは打って変わって、手慣れた手つきでゴムを装着する彼女に思わず首をかしげると、それに気づいたのか、

「れ、練習したんです……デイルドを使って……」

と恥ずかしそうに言葉が返ってきた。

「タクミ様のサイズを探すのに苦労しました」

そう言っただけの彼女に「そっか」と短く返すころには彼女は自身の手にゴム手袋をはめてローションを手につける。

「……あのあと、大変だったんですよ？」

彼女が以前の搾精の後の状況を恥ずかしそうに告げた。

「あれから、職場での私のあだ名は“ラッキーオナニーガール”なんですから」

そう言っただけの彼女に俺は声をあげて笑う。

そりゃ、体験とは言え入社初日に業務中にトイレに籠り、オナニーをして水浸しにするような人物、職場では冷めた目で見られるだろう。

ただ、聞くところによると、いわゆるビキナズラックであり、オナニーするのも仕方がないということではいじりの対象ではあれど、

妬んで仲間外れされるといっわけではないらしい。

「では、挿れますね。いつでも射精イつていいですから」  
ぐちゅり。

ローションで滑りを良くされたソレがオナホールへとすんなり挿入され、そのまま上下にぐちゅぐちゅと音を立てて優しい抽送が始まる。

「ただ、こればかりはデイルドで練習しようにも難しく……」

試すように、オナホールを握る手を強くしめたり、緩めたりと思考錯誤しながら摩る彼女に「俺は強めの方がいいかな」と言葉を返した。

「強めですね！わかりました」

むぎゅ。

やや強めに締められることで、チンポに強烈な密着感を覚え絞り取るような締め付けに腰がビクリと震えあがった。



「どうでしょうか？痛くないですか？」

ぐっぽ、ぐっぽ、ぐっぽ、ぐっぽ。

上下にこすられるソレが音を立て、部屋に響いた。

「ああ、気持ちいいよ。すぐに出ちやいそうだよ」

チンポから精を抜き取る為に開発された搾精器オナホールは名前通り、全方向を刺激するようにヒダが立ち、ゾゾゾと射精感がこみ上げる。

「射精イッくよっ。」

「はいっ！いっばい吐き出して下さい。おちんぽ様からびゅっびゅ、赤ちゃん汁だして下さいっ」

ぐちゅっ！ぐちゅっ！ぐちゅっ！

手の抽送を早めて射精を導く彼女に俺は身をゆだねて、精を吐き出した。

びゅうるるるッ！びゅー！

長い吐精のあと、断続的に残滓を吐き出すようにびゅっ！びゅっ！と精は尿道こじ開けて、ゴムの精液溜まりへと射精する。

「……よ、よかった。ちゃんと搾精できました♡」

彼女は満面の笑みを浮かべてコンドームを抜き取ってビンへと詰めていた。

## 第三拾参話 謝罪

「カモっち、大丈夫だった？」

結局、氣が落ち着いてからも念には念をということで、1週間の予定を3日ほどオーバーして俺は退院して久しぶりの学校に来ていた。

普段から軽口を叩くちなみらしからぬ声音に俺は「大丈夫だよ」と笑顔を浮かべる

「賀茂……くん。今日なんだけど私お弁当作ってなくて……」

一人の女子、それこそタクミ当番の担当であるクラスメイトが絶望した表情を浮かべながらおずおずと俺に話しかける。

「大丈夫。それなら一緒に食堂でご飯食べるなり、売店で買ってどこかで食べようか」

桜が散り始めているだろうが、それとも春日和といった陽気の今日。

ピクニックにはもってこいの天候である。

「——うんッ！ありがとう！」

満面の笑みを浮かべて自分の席に戻る彼女と入れ替わりで彼女はやってきた。

「……賀茂くん。この間はありがとう」

「吉田さんが無事なら良かったよ。知り合いでケガした人とかはいない？」

俺の言葉に彼女は首を振って「あなただけよ」と言葉を返した。

「ごめんなさい」

頭を下げる彼女に思わず首を傾げる。

「別に謝罪は必要ないよ。君のせいでケガしたわけでも無いし、君のせいで怪異が出たわけでもないから」

俺の言葉に「……それでも」と言葉を探す彼女に俺は真顔で告げた。

「そもそも、退魔師だからね。もし謝るとするならば駆けつけるのが遅くなって死人も出してしまった俺が謝罪するのが筋だろうね」

俺の言葉に強めの口調で「それは違うわ」と否定する彼女に俺も頷きを返す。

「だろうね。だからこんな話は辞めにしよう。お互い生きている。今はそれでいいんじゃないかな」

丁度良く次の授業の予鈴が鳴り、俺は話をそこで区切ると彼女は腑に落ちてない顔を浮かべながら離れていった。

「……カモつち……」

「ん？」

腕をツンツンとされ俺はちなみに首を向ける。

彼女はどこか憂いを帯びた表情をしながら口を開いた。

「お疲れ様もこめてアタシとエツチする？」

どうやら、彼女は大分俺の扱いに慣れてきたのだろう。

「もちろん」と笑顔で答えるころには教師がやってきて授業の開始を告げていた。

「賀茂くん。少しいだらうか？」

昼休憩に桜の木の陰で当番の子を犯し、5限目と6限目の短い休憩時間にちなみと男子トイレでインスタントセックスを楽しみ、

体に若干ながら倦怠感を覚える放課後。

廊下から俺の名を呼ぶ声に顔をあげる。

紺色と、薄い紫の髪をポニーテールで括った顔が瓜二つな美人二人が視界に入った。

はて、誰だろうか。

同学年で見たことはない。

(といっても入学して次の週からいままで入院していたが)

そんなこともあるが、恐らく双子だろう美女二人。

片方はややおっとりとした目つき薄紫

片方は快活そうな目つきの紺色。

どちらも胸は突き出ており、こんな美人組を見逃すだろうかと思案する。

しかしながらどこかで見た覚えのあるような……

結局のところ情報がなく俺は思考を打ち切って

「なんででしょうか？」と他人行儀に言葉を返した。

「この間はありがとう」

紺色髪の方がそう言って頭をさげた。

「この間……？」

俺の反応におっとりとした顔つきの薄紫髪の女性が「……河童の時です」と言葉をきると俺は思わず手をポンッと叩いた。

「あの時、吉田さんといった人」

なんとなくだが、彼女たちも居た気がする。

どうやら俺の予想は当たりらしく、快活そうな方が「本当にあの時助かった！重ねて礼を言う」と頭をさげて更に続けた。

「私は、水泳部部长をしている。水川みずかわルルだ。一応こいつの姉でもある」

「私は、水泳部の副部長のナナです。その節は助かりました」

「じゃあ、あの時吉田さんたちと一緒にいたのはウチの水泳部の方々ですか」

たしか後、3人ほどいた気がする。

俺の言葉に姉のルルが「そうだ」と頷き何度目かの感謝の言葉を告げるのを俺は止める。

「今日の朝にも吉田さんから散々いわれたので、もう結構ですよ。サムライですから討伐は当然のことですから」

俺の言葉にルルは「それでも私の気がすまない」とやや大きな声をあげてどうだろうかと言葉を続ける。

「ぜひ、水泳部の部室に顔をだしてほしい。後輩たちも君に感謝を告げたがっているんだ」

廊下から回り込み教室へ入り、俺の腕をがしりと掴む。

「さあ、このまま来てくれないだろうか」

あまりの勢いに若干たじたじになってしまい、もう一人の片割れに顔を向ける。

「ごめんなさい。ウチの姉は言い出したら聞かないんです」

目を閉じてフリフリと首を振るナナに思わずため息を漏らす。

まあ、ちようど今日は暇なのだ。吉田との親交を深めるためにも水泳部に顔をだすのも悪くはない。

彼女はあれから何度か俺に話しかけようとするも、声をかけることはなく、放課後にはいそいそと教室から出て行ったのだ。

「わかりました。どうせ今日は暇ですからお付き合いします」

俺の言葉にルルが「そうか！それはよかった！」と口を開けて笑い、ナナは申し訳なさそうに頭をさげた。

なんと対照的な双子だろうか。

俺はルルに腕を引っ張られ部室に向かうのだった。

「野郎ども！賀茂くんを連れて来たぞ！」

パンツ！と力強く水泳部の部室の扉をあけるとそこは正に女の園と呼ぶにふさわしい光景が広がっていた。

壁に貼られた男性のグラビアポスター

床にちらばったエロ本らしく写真集

中央にはなぜか体操マツトが敷かれ3人の女性が寝転がっている。

金髪のセミロングに色黒の黒髪の女性が写真集のチンポに指をさし大きさはかり、

青色のショートボブの女は仰向けでヨダレを垂らして眠っている。

「……………は？……………まじかよ……………」

金髪の女が啞えていた棒つき飴をポトリと落とし、

色黒の女は指先を写真集に向けたままその場で固まる。

青髪の女性はいまだ寝ている。

「おまえらー！あれだけ片付けろと言っただろうがっ！」

瞬間、ルルが目を見開き怒声を浴びせる。

「いや……………まさか……………本当に連れてくるとは……………」

金髪の女性が言い淀むとき、奥に設置された更衣室から吉田が飛び出て顔をだした。

「部長っ、本当に連れてきたんです……………か？」

下着姿で半裸となった彼女が現れ俺と目が合い固まった。

「キヤーー!!」

一瞬の硬直の後、彼女は悲鳴をあげて体を隠そうとその場にしゃがみ込んだ。

——全くもって、どうやら俺を歓迎して感謝を告げたいと言ったルルの言葉とは完全に逆の状況が目の前で繰り広げられていた。

「すまない。連れてきておきながらこんな有様となってしまうた」

あれから、一旦部室前で待機を命じられ5分。

再度入室を許可されたところには先に見た乱雑具合がウソのような、整理整頓されキレイな室内へと変わった真ん中で、

水泳部の5名が正座をして頭を下げていた。

「見苦しいものを見せたかもしれない。本当に謝罪のしようもないが申し訳ない」

見苦しいとは何をさすのか？エロ本だろうか、それともグラビアポスター？もしかすると吉田の下着姿だろうか？

それなら眼福とさえ思うのだが……。

ルルの指す見苦しいものが分からず反応に困っていると金髪の女性性がボソリと口を開く。

「……そもそもあれ、全部部長のじゃん……」

どうやら前者のようだった。

彼女の言葉にルルは頭を叩いて黙らせるもそれが引き金となり取っ組み合いの喧嘩へと発展する。

「2人とも大人しくしてくれるかしら？」

ナナが一段と低い声で彼女達を戒めるとキヤットファイトを繰り広げていた2人がびくりと肩を震わせた。

「……改めて姉に変わり謝罪致します。この度はお呼びたてしておきながらこのような騒ぎで申し訳ありません。重ねて以前はありがとうございました」

三つ指をつき、ぺこりと頭を下げる姿は堂に入っておりそれに釣ら

れて他のメンツも居をただして頭を垂れる。

ただ1人を除いて。

「……彼女寝てますけど」

鼻ちようちんを器用に浮かべて正座しながら眠る青髪の女性を指さすと、ナナがパチンと裏拳を放った。

「——ニヤァ！」

猫を踏んづけたような声を上げてやつと目を開けた女性はあたりをキョロキョロと伺った。

「美優。ふざけてるのかしら？」

顔を覗かせるナナからはどこかゴゴゴと覇気を覗かせながら笑みを浮かべた。

「改めて、ありがとうございます」

再度、今度は全員が言葉を揃えて俺に頭を下げた。

面白いと素直に思った。

それぞれがマイペースで動く雰囲気思わず俺はその場で笑い声をあげる。

「賀茂くん？」

クラスでもあまり見せない本気笑顔に吉田が俺の名を呼んだ。

「ああ、ごめん。ごめん。あんまりこうして笑うのは久しぶりだったから。」

みなさん、もう感謝の言葉は良いです。

それが仕事なので」

俺の言葉にルルが「そうか。なら正座は膝が痛いし……」と言って立ちあがろうとするもその腕をナナに引っ張られて失敗に終わる。

「バカ。まだ1分かそこらしか正座してないでしょう」

ナナが姉のルルを睨みつけるとルルが「そ、そうだな。うむ」と言葉詰まらせながらよくわからない言葉を吐いた。

「あ、もう本当に結構ですから、楽にして下さい」

久方ぶりの面白さに俺の気分はすこぶるよかった。

「畏まりました。では失礼して」

ナナがそう言って周りに目配せをすると、それに応じるように皆が姿勢を崩した。

まるで彼女こそが部長であり姉だろう。

どこか、蒼佳と通ずるものを感じて俺は破顔した。

「こちらこそ、急にお邪魔するような形になり、申し訳ありませんでした。

それでは、これで失礼しますね」

俺は踵を返して部屋を出ようとした時「待ってくれ！」とルルが声を張り腕をつかんだ。

「じ、実は折り入って頼みがあるんだ！」

俺を掴まれ足を止めた俺は振り返り「なんででしょうか？」と首をかしげる。

「よかったら水泳部に入ってくれないか？」

ルルの顔がどこか鬼気迫る表情だった。



## 第貳拾肆話 水泳部

結局俺はルルの誘いに二つ返事で快諾し、水泳部への入部をきめた。

翌日の放課後、俺たちは体操服に着替えて、プールの清掃をしている。

「いやあ、まさか本当にタクミ君が入ってくれるとは思わなかったわ」  
デッキブラシを肩に担ぎブルマから覗く太ももをポリポリと掻きながら金髪の恵先輩が歩みよってきた。

花咲 恵

昨日、部長のルルとキャットファイトに興じた金髪女性であり、2年生である。

白い肌に全体的に柔らかそうな肉感。

軽々しい見た目通り、口調も明るい彼女はまさに金髪ギャルという言葉がしっくりとくる。

「たまにはあの脳筋部長も役に立つよねえ」

そう言って恵の横に立つ小麦色に日焼けした黒髪、ややきつい猫目の女性、佐藤クルミ先輩が軽口を叩く。

二人はごしごしと一人真面目に掃除をする吉田をよそにぺちやくちやおしゃべりに興じている。

2年生はもう一人、昨日の部室でずっと寝ていた西岡美優先輩もいるのだが、彼女は今プールサイドでお腹を出して昼寝をしていた。

この昼寝少女の美優はなにを隠そう、前回のひとつ目鬼討伐で、唯一意識を保ち、気丈に俺に感謝を伝えていたのだが、

今は見る影もなくヨダレを垂らし、腹を掻いていたのだ。

二重人格かなにかだろうか。

「ちよつとー先輩たちーちゃんと掃除して下さいよー」

会話が盛り上がり始めて、完全に手を止めてさぼっていた時、しまいいには吉田が声を荒げる。

いや、今後は下の名で呼ぼう。

昨日入部に伴って、部長のルルより「愛着を持ってみんな」下の名で呼んで欲しい」と言われたのだ。

それに倣い、美咲も下の名で呼ぶことになった。

そんな彼女が目を胸を揺らしながらゴシゴシと床を磨いていた。

「ミサミサは真面目だねえ」

ふと恵が感心気に言葉を漏らす。

「きつと、おっぱいに栄養が全部行ってるからなんじゃない」

くるみの軽口に恵が噴き出し「違う」と笑いあう。

「なんか言いましたか？<sup>先輩</sup>3馬鹿<sup>たち</sup>トリオ」

頬を引きつかせる彼女に恵が「心の言葉と口から出る言葉、逆になってるし」と口を尖らせた。

彼女たちの言う通り、美咲は巨乳ばかりの水泳部の中でひとときわ大きい。

身長も一番高いのが理由なのだろうか。

そんなことを思いながらじろじろと彼女の体を観察していると、視線に気づいたのか、美咲が胸を隠した。

「な、なにかしら？私の胸になにかついてる？」

美咲の言葉にめぐみ<sup>が</sup>笑みを浮かべた。

「そりゃあ、男の子だもん。ミサミサみたいに大きなおっぱいは多少なりとも気になるでしょうね」

耳元で「Kカップだよ」

囁く言葉にピクリと身体が反応する。

「なるほど。そのあたり詳しく」

声を荒げる美咲を無視して、2馬鹿+俺はその場で猥談へと興じるべく車座でしゃがみこんだ。

「タクミくんも好き者だねー」

くるみが悪戯っ子のような顔で笑った。

恵の情報により、水泳部の巨乳事情が整理される。

一番上が美咲のKカップ。

副部長がIカップ、その次に恵(H)と続き  
部長とクルミがG

最後に美優が女性の平均であるFという結果だ。

恵は自身のサイズを伝えるときに「エッチ」だよと妖艶な口調に思わずチンポがピクリと反応するのは言うまでもなかった。

「あ、それはそうと、副部長と部長って絶対役職も生まれも逆ですよ  
ね」

俺の言葉に二人ががうんうんと頷く。

「ナナさんのほうがおっぱいも、器量も大きいしね。

そもそも部長を決めるときにウチらはナナさんを推したんだけど、  
最後は拳を振り上げて、

“部長は私だ！” って言って無理やり部長になったんだから」

恵の言葉にその光景がありありと思いつかび思わず破顔する。

「そうそう。怒ったらすぐに手が出るし、猪みたいに突っ走ることしか  
できないから、タクミくんも部長ではなく、暴走機関車とか暴君と  
か、脳筋部長って呼んだらいいよ」

クルミが相乗りするように口悪く言うも、

俺は背後に忍びよる気配を感じ、「そ、それはどうかなー」と言葉を  
詰まらせた。

「ん？どつたの？タクミ……ミくん……」

俺の反応に気が付きクルミと恵が後ろを振り返る。

そこには部長のルルが笑みを浮かべながら指をポキリと鳴らして  
いた。

「ほう……詳しく私にも教えてくれないかな。だれが”脳筋部長”  
だって……」

額にいくつもの青筋を浮かべる彼女に二人は「ヒッ！」と声を漏ら  
す。

「ほらーちやつちやつと働け！バカども！」

仁王立ちでプールサイドから監視するように立つ部長の怒声が響く。

「……脳筋め」

「……暴君め」

頭にたんこぶを作り、全身ずぶぬれとなった恵とくるみが

憎々し気に恨み節を呟きながらいそいそとブラシで床をこする。

あの後、げんこつで殴られた二人は、そのままルルの怪力によりプール中央のまだ流れ切っていないコケの浮いた箇所へと放りこまれて濡れ鼠となっている。

白い体操服が透けて、中のブラジャーの色鮮やかさにゴクリと唾をのみながら、同じように俺もプールを清掃した。

「あんなに口は悪いんだけど二人は部長のこと大好きなんだよ」

ルルに蹴られて無理やり起こされた美優が、舌つたらずの口調で告げる。

「……なんとなく、それは伝わります」

人数が少ないからなのか、個々の連中の距離感は世代を問わず近い。と俺も思う。

それこそ新入生の美咲もすでに先輩たちと打ち解けている。

なんだかんだルルの魅力により纏まっているのだろう。

「それにナナさんのほうが怒ったら怖いし……」

そう言っつて美優は昨日の裏拳を思い出したのか鼻に手を宛がった。

「……でしようね。みんな個性豊かで面白いです」

はにかんで応える俺に美優は「君も大分かわってるけどね」と答えてから「眠いから休憩する」とブラシをこする手を止めてあくびしながらプールサイドへと向かった。

「あなたにも大概でしょう」という言葉を飲み込んで俺はブラシを走らせるのであった。

## 第貳拾伍話　プチ歓迎会

「かんぱーい！」

恵がグラスを掲げて返盃を返す。

「いやー、にしてもみんな付き合い悪いよね。せつかくのタクミ君の懇親会なのにさ」

グラスに入ったジュースをグビッとあおり、くるみが唇を尖らせた。

「まあ、今日の今日ではみんな都合はつきませんよ」

プール掃除の目処がある程度たち、皆が帰宅しようとした時に恵があげた提案だ。

美咲も美優も水川姉妹もそれぞれがこの後バイトであったり、家に帰らないといけないからと

結局俺たち三人でクルミが実家がやっている個室居酒屋の一室で舌鼓を打っていた。

「まあ、それはそうだけどさあ。あ、タクミ君、ウチの唐揚げは絶品だから食べてみて」

メニューを広げてクルミがおすすすめを伝えてくる。

居酒屋と言えども、酒は出ていない。

あくまでジュースでの乾杯であるのだが、そこは若さか。

俺たちの会話はげらげらと盛り上がる。

「あ、本当においしいですね」

唐揚げを口に運び、そう感想を漏らす。

「そうだよ。うちは一夜付けこんで、二度揚げしてるからね。手間が違うんだよ」

そう言つて二の腕をめくり力こぶをつけるクルミの腕はほっそりとしており、小さな山が形成された。

聞くところによると、頻繁に家業を手伝っているが、本日はお休みしているらしい。

「恵先輩はご実家でなにかされてるんですか？」

女性が多い関係からか、この世界では企業で働くよりも家で商売を起こす人が多い。

“家”を大事にする女性ならではののだろうか？

「ウチはなにも、ただのサラリーウーマンだよ」

どうやら違ったらしい。

とりとめのない会話をしながらも俺たちは会話の種は尽きない。

主に、俺に対する質問が多いが。

「おサムライさんってケガが多いでしょ？」

ふとクルミが枝豆を頬張りながら首を傾げた。

「まあ、この間まで入院してたぐらいだしね」

まさに一昨日とかの話である。

「たしかあれだよね……ウチらを助けるせいで何十針も縫ったとか……」

メグルの言葉に思わず首をかしげる。

自分から話してはしていないのでだれかから漏れたのだろうか。

まあ隠すことでもないので俺は袖をめくりその一部を彼女たちに見せた。

「大体50針ぐらいだったかな？まあ今はもう抜糸してるし跡もこのくらいだよ。」

そもそも古傷もあるし、なかなか比較しにくいけど」

俺の言葉どおり、腕だけでも相当の切り傷を見せると、二人は息を飲み込みだ。

「……タクミ君ってすごい筋肉だよね」

メグルの言葉にそっちなじゃないだろ。と内心ツツコミを入れる。

「ちよ、ちよつと触ってみてもいいかな？」

若干、空気がおかしくなったことを察知しながらも俺は「いいですよ」と笑顔を浮かべた。

「っーすごいよークルミーカチンコチンー！」  
ぎゅっぎゅっ。

両手で手を添えて硬さを確かめるように握る彼女。

もちろん、肉体を酷使して討伐する関係上、サムライには筋骨隆々が多くなる。

それこそ平均でいくと体脂肪率は高くても10%前半ぐらいだろう。

メグルの言葉に「わたしもッ！」と挙手をして同じように掌を載せて触るクルミ。

「ねねーもしかしてだけど腹筋とかもこれぐらい硬かったりするのかな？」

メグルの問いかけに「触ってみますか？」と返すと彼女たちは声をそろえて「いいの!？」とやや食い気味に答えた。

この世界での女性のセックスシンボルは前世を相違ない。

ひとつによつては好みはあるだろうが、胸であり、尻であり、太ももである。

故に女性は男性にアピールをするために露出の多い服装を好む。

逆に男性のセックスシンボルと言えば、それこそチンポが第一位だろうが、それは胸と違い服を着れば大きさなどが分からなくなる。

故に次点でより男性らしい肉体ということで筋肉がセックスアピールとなるのだ。

メグルの腹筋触らせてというのは前世で“女性に二の腕か太もも触らせて”というくらいにはセクハラ発言である。

まあ、どうせみんな食うのだ。

ここで焦らしても仕方がない。

「折角ですから直に触ってもらってもいいですよ」

と言って、シャツをめくり腹筋をあらわにする。

「……すっごっ」

ボソリとクルミが感想を述べてメグルはその場で固まった。

「6つ?いや8つ?ぼこぼこじゃん。タクミ君」

そう言つて腹筋に手を添えるクルミをみて固まっていたメグルが復活した。

「ちよつとークルミ、ずるい!」

きやーきやーと言つて手を伸ばしペタペタと触る彼女たちに俺は

ほほ笑んだ。

「折角なんで先輩たちのお腹も触らせて下さいよ」

俺の言葉にふたりが手を引いて「えっ……」と言葉を詰まらせた。

「わ、わたしのはちよつと……いますこしだけプヨってるといっか……。メグル、触らしてあげなよ」

「なんでよーウチの方がプヨってるわよ！」

と言いつ争いを始める。

「じゃあ、おさわり会はここで終了ですね。あと、触りたいなら、二人の触らせてもらうのが条件です。どちらか一人だけということここではもう触らせませんよ」

俺は自席に座り、枝豆に手を伸ばす。

「……どうする……？」

「……アンタが決めなさいよ」

ぼそぼそと話し合いを始める二人をよそにピザを、だし巻きを。

前世ぶりの居酒屋メニューに久方飲んでないことを認識させられ、思わず金色の飲み物を思いだし、なぜか悲しくなってしまった。

「そんなにお腹って恥ずかしいですかね」

俺の言葉に二人を声を揃えて恥ずかしいよ！と答える。

「タクミ君みたいに締まってたらいいかもしれないけど、女の子は折角鍛えてもその上にお肉がついちやうんだから」

メグルの言葉にそういうものだろうかと首をかしげる。

「そもそも、俺自身は肉感がある方が好きですよ？」

俺の言葉にクルミが「あのさ……もしかして童貞じゃなかったりする？」

と恐る恐る確認するので「全然違いますね」と笑顔を浮かべる。

「先輩たちはどうなんですか？」

その言葉に彼女らは首を横に振った。

「おもちゃではあるけど」

「わたしも」

臆面もなく答える二人に「それはまだ処女ですね」と苦笑いを浮かべた。



「セックスでどんな感じ？やっぱり気持ちいいの？」  
顔をあからめながらクルミが問う。

「……人それぞれじゃないですかね……」  
まあ、ウソだが。

少なくとも今世で関係を持った連中はほとんどがその性の虜になっっている。

「オナニーは気持ちよくないんですか？」

俺の質問にメグルが「気持ちいいけど……セックスとはくらべものにならないって言うし」

と歯切れ悪くこちらをチラチラと伺うように視線を行き来させた。

「……してみますか？セックス」

もはや腹以外にも恥ずかしいところを見られるだろうが、

俺の提案にクルミが「いいの!？」と食い気味に机を乗り上げ、メグルは「マジか……」と言葉を漏らした。

「場所があるならですけどね」

俺の言葉にクルミが「ワタシの部屋にいこう！」と言葉を発した。

「その前に全部食べ切ってからですね」

先輩の家のお店なのだ。

粗相はあつてはならない。

というところで二人はフードファイターよろしく、まるで飲むように机の上の平らげるのであった。

## 式拾陸話 インタビュー

「あ、……ちょっと時間もらってもいい？」

部屋の扉の前でくるみが思い出したように俺たちに手を突き出した。

「5分。いや2分頂戴」

「どーせバイブとか転がってるんでしょ」

メグルの軽口に「うっ！」と息を詰まらせたあとに「ち、ちがうわよ」と答えて目が泳ぐ。

「凶星かよ……隠しておきなよ。親がみたらどうすんのさ」

メグルが「はあ」とため息をつく。「ウチは放任主義なの！」と言葉を返してそのまま扉を少し開けて身体をねじ込みすぐさま閉じた。

まあ、前世の男子高校生よりも番がつがいすくない今世の女子高生となれば推して知るべしだろう。

俺は扉越しに「ごゆっくりー」と声を掛けてその場で待つことにした。

「……お待たせしました」

結局クルミが扉から顔をだすのに10分ほど時間を要していた。

「おそいよ。クルミ」

隣に立つメグルが口をとがらせるも当の本人は「仕方ないでしょ！男の子なんていれたことないのよ」と言葉を返す。

「あ、そういうえ俺の女の子の部屋に入ったことは身内以外でありませんね」

今さらながらに気づく。

立ちんぼではそのままホテルに直行するし、蒼佳と碧理はもはや身内だろう。

「クルミ、やったじゃん。タクミくんの童貞奪ったね」

謎理論を展開するメグルと違ってクルミの顔は晴れなかった。

「で、ではどうぞ」

重々しく扉を開いて彼女は俺たちを部屋へと招いた。

「普通だね」

「あ、前に来た時あその壁にあつた男の裸のポスターが無くなつて  
るよ」

まるで告げ口するようにわざとらしく言うメグルをクルミが叩く。  
まあ、想像通りというか”The 高校生の部屋”という光景が広  
がっていた。

勉強机に、少し狭めのシングルベッドでほとんどを埋めるスペース  
にテレビと小さなテーブルが一つ。

色合いとしては全体が水色で統一された部屋に「普通」という感想  
しか漏れない。

「ど、どうかな?」

手を腰に組んでもじもじとする彼女に「普通だね」と何回目かの同  
じ言葉吐く。

まあ、折角現役女子高生の部屋でやるのだ。そんな普通も良いだろ  
う。少し狭いが……。

とりあえず俺はクルミの言う通り、ベッドに腰かけてあたりを見渡  
す。

「あ、あのピンクの棒みたいなのやつなんだろ……」

クローゼットに一部をだすソレを目敏くみつけてわざと口に出す。

「あっ!」

瞬間、クルミがそれを蹴とばして中へしまいこみ「タハハハ」とわ  
ざとらしく笑い声をあげた。

デイルドだろうな。

鼻腔を刺激する女の匂いに思わずピクピクとチンポが反応した。

「じゃあ、早速なんですけど、2人ともパンツ脱いでベッドでM字開  
脚してもらってもいいですか?」

唐突な俺の言葉に彼女たちは「えっ!?!」と言葉を合わせるのであつ  
た。

「へえ、メグル先輩はクリが大きめで、クルミ先輩は日焼け後が綺麗で

すね」

俺はスマートフォンでカメラを回しながら彼女達の秘部を撮影する。

俺の依頼に最初は全力で拒否をしていたのだが、

「じゃあセックスするという話はナシということだ」

と告げると形相を変えて撮影に同意した。

「これ、めっちゃ恥じいんだけど」

スマートフォンの画角で顔は映さないようにしている。

イメージは前世のAVの導入部分である。

サンプルはあくまで顔を隠して本編で公開するのだ。

そのうち、肉感的で肌の白い金髪もとい、メグルが声を漏らしながら尻を動かしてポジションを整える。

白い肌に映えるようにピンク色なマンコ。

そこを守るように茂る陰毛には愛液が既に付着している。

「てか、メグルこの前試合だったのにマン毛剃って無かったことにわたしは驚いているよ」

そう言つて己の太ももを支えこちらに。パカリとマンコを見せつけるクルミは、日焼け跡が綺麗な跡を作り、露出する下腹部だけが異様に白く映えていた。

「めんどくさかったから忘れてた。こんなことになるなら剃れば良かったし」

そう言つて毛を隠そうとする彼女に「隠さないで下さいね。記念なんで」と釘を刺す。

顔を赤らめながら彼女は覆おうとしていた手を退ける。

「それにしてもクルミ先輩は日焼け凄いのになメグル先輩は全然焼けて無いんですね」

ふと思つた疑問を口に出すとメグルは「ウチは基本、全身タイプの水着着るし、そもそも練習しないからね」と何故か自信満々気に答えた。

「あ、でもクルミ先輩の日焼け跡も好きですよ。なんか、大事なところを象徴するようでエロいです」

メグルの言葉に横で脚を広げた彼女が恥ずかしそうに股を閉じようとするので俺がそう告げると顔を赤らめる。

「折角なんで自己紹介から始めましょうか。AVみたいに。先輩達も見るでしょ？」

俺の言葉に2人が逆に「あなたも見るの？」と質問を返すのに「まあ、ぼちぼち」と嘘をついた。

正直いうと見ない。

男性をずっとメインフレームに写しているAVよりも、SNSなどで裏アカ男子をすれば勝手にマン凸してくるのがこの世界の女性達である。

しかしながらたまにはAVを見たいとふと思いつた結果、こうして「記念」と称して撮影しているのだ。

「じゃあ、初めは金髪のキミから自己紹介と、職業。胸のサイズ。男性経験を教えて下さい」

気分は完全に素人監督である。

もはや俺にマンコを広げるように見せる彼女らはどうにでもなれと言わんばかりに女優のように応えてくれた。

「は、花咲 恵メグルです。メグミとかいてメグルです」

そう言っ言葉を切ろうとするので俺は「職業は？」と言葉を掛ける。

「しよ、職業は高校2年で、処女です。胸はHカップ……です」

俺の趣味から、彼女たちは今はワイシャツにスカートを履いた状態で脚を開いている。

「可愛くておっぱいも大きいのに処女なんですね。遊んでないとかですか？」

カメラに自分の顔を映さないように手を伸ばして彼女の頬に触れる。

「……あつ……ナンパにはよく行くんです……成功したことは無いです……」

猫のように顔をスリスリと動かしながらメグルは答えた。

「じゃあ、今度は黒髪のキミは？名前とか自己紹介をお願いします」

「佐藤くるみです。メグルと同じ高校2年生で処女です。一応Gカットプあります」

見慣れているのだろう。

中々堂に入った姿に俺の嗜虐心が湧き上がる。

「さつき、おもちゃが見えましたけど普段はデイルド派ですか？バイブ派ですか？」

俺の質問に「ちよっ！なんでわたしだけ!？」と声をあげる彼女に「セックスしたくないんですか？」と短く告げるとしぶしぶと言った具合で口を開いた。

「……い、一番好きなのは、電マです……」

「へえ、アンタ電マが好きなんだ」

茶化すようにニヤニヤと笑みを浮かべて恵に「うっせえし！陥没乳首」とクルミも負けじと言葉を返した。

「恵先輩、陥没乳首なんですな」

俺の呟きに「うっ」と息を呑む恵に「大丈夫ですよ。陥没乳首、好きですから」と笑顔を返した。

巨乳の陥没乳首は好きである。

「え？ホントに？ノリとかじゃなくて？」

恵が嬉しそうに身を乗り出す。

陥没乳首の扱いは前世で言うところの真性包茎と仮性包茎の間ぐらいには嫌われている。

嫌う専らの理由は隠れてて「カス」が浮いてるかも知れないということらしい。

ちなみに男性の（仮性）包茎について寛容的なのは前世とあまり変わらない。

むしろ人によってはチンカスフェチもいる始末である。

そんな俺は仮性包茎だが。

「全然。むしろほじくり出すのが好きですから」

俺の言葉に恵は「よかった」と胸を撫で下ろし、クルミの顔はやや啞然としていた。

「じゃあ、普段通りオナニーしてみましようか？」

口角を開けて俺はイヤらしくほほ笑んだ。

## 第貳拾漆話 白黒撮影♡

スマートフォン画面に二人の美女が恥ずかしそうに顔を伏せながらベッドの上に膝を立てる。

「2人は普段おもちやがない時はどーやって触ってるんですか？」

俺の問いに彼女達が恥ずかしがってモジモジとするので再度「セックス……」と続けると、2人揃って自らの下腹部に手を伸ばし触り始める。

「……んっ」

「……あっ」

恵は膣内派なのか、指を挿入し前後に動かす。

クルミは反対にクリの外側に指を添えて上下に擦った。

男子の前で下半身を曝け出す行為にか、

それとも撮影というシチュエーションにか、すでに愛液で溢れており、くちゆくちゆとした音と彼女らの控えめな喘ぎ声だけが部屋に響いた。

「折角なんでシャツのボタン開けてもいいですか？」

2人はボタンを開けてブラジャーを見せた。

白い肌に挿す薄ピンク色のブラジャーに、乳輪が大きいのだろう。その輪郭をはみ出させる恵。

小麦色と共生するように紫色のブラジャーの淵から本当の白さが垣間見えるクルミ。

2人にそのことを指摘すると、彼女らは羞恥に顔を更に赤める。

「折角なんでちゃんとイくまでオナニー続けて下さいね」

何が折角なのだろうか。

俺は自らの言葉に思わず笑みを浮かべるも彼女達の瞳はすでに水を帯び、たらんと目尻を下げている。

息は荒く、そのまま従順に指示通りにオナニーを再開した。

……くちゆ……くちゆ……くちゆ

人差し指と中指を根本まで挿入し、まるで掻き混ぜるように動かし



ていた恵が先に手をあげる。

「イ……イきそう……」

別にイくのは拳手制でもなんでもないのであるが、俺は彼女に首を頷いてスマートフォンを間近へと近づけた。

ぐちゅ！ぐちゅ！ぐちゅ！ぐちゅ！

指と穴の隙間から水滴が飛びカメラに付着してピントがズレる。

「イイですよ。このままイっても」

スマートフォンは防水であり、気にせずにイケと恵に言うが彼女は手を動かしながら言い淀んだ。

「で……でも、ンっ、た、たくみくん……んっ……はあ、か、かかっちやう……っ」

動く指は更にぐちゅぐちゅと早くなり、今や限界と言わんばかりに腰をビクビクと痙攣させる。

「大丈夫ですよ。それに好きでしよ顔射」

AVでしか普通は体験出来ない創作上のプレイ。

俺の言葉に「す、好きだけとお……」と答えながらも指を止めない彼女に「大丈夫です。だから早くイッて下さい」と優しく耳元で呟いた。

「っ……うん、イ、イクねっ」

掻き混ぜるような手つきから中の体液を掻き出すように動きに変わった。

「——イ、イクッ！イクうううっ！」

ビュっ！ビュっ！！ビュうっ！！

外へと掻き出す瞬間に噴き出す潮がスマートフォンを濡らし、俺の顔を濡らす。

「はーい。ここに飛ばして下さいね」

恵のマンコを正面に捉えていたカメラを少しずらして、顔を正面に向けて口を開く。

「ダメ、ダメっ！ダメっ！と、止まらないっ、止まらないよっ！」

潮の勢いが更に強くなりびゅっ！びゅっ！と俺の口内に噴き出す。

「あぁっ！キちやうう！！なんかキちやううっ、う、ウチ、イッてるのにつ！

あ、あっ!!!」

寸前、彼女は指をズポリと抜いて腰を打ちあげる。

先の断続的な勢いとは違い、まさにホースの如く勢いよく水が噴き出した。

口内にあたり飲みきれずに溢れ、顔にぶしゃつと潮が吹きかかる。

「う、ウソ、と、止まらないっ、止まらないよ!」

およそ、10秒ほどだろうか。

腰を打ち上げて勢いよく潮を噴き出した後、恵はばたんつと勢いよく腰を下ろしてベッドへと寝転がる。

息はあれ、どこか目の焦点はあつてはいない。

いわゆる本気イキだろう。

「……た、たくみくん、わ、わたしもイキそう……」

たまたまタイミングがあつたのかクリトリスを擦るクルミが手を上げた。

「顔に掛けたい?」

俺の言葉にコクリと頷く彼女に「いいよ」と俺はクルミの正面へと移動して膣に口をつけた。

「——ンアッ!」

舐められるのは予想外だったのか、瞬間クルミはその場でのけぞり声を漏らした。

「舐めてあげるからそのままイッていいよ」  
にゅぶり。

すでにパクパクと開いている膣口に舌を入れて周囲をグルリと舐め回す。

「——イ、イキます、イキますッ、ン——っ!!」

擦り上げる手つきから、左右に弾くような動きに変えたクルミが腰を浮かせて潮を噴き出す。

ごくっ、ごくっ。

それを口内で受け止めるように口を広げて飲み終わる頃には彼女も同様にベッドに寝転び呆然として表情で天井を見つめていた。

「うち、明日死んでもいいわ」

「それな」

その後、復活するのに互いが5分程かかった後、彼女達はお互いを見て笑いあった。

「まだ、終わりじゃないですよ」

どこか満足気に、さも終わったような雰囲気を出す彼女たちの前に俺は隆々と勃起したチンポを見せつけた。

「やっぱりまだ死ねないわ」

「それな」

2人の顔つきが真剣なモノへと変わったのを俺は満足気に頷くのであった。

## 第貳拾捌話 ずぶ濡れ♡

「……………す（い）……………全然違う」

何と比べたのか、クルミがチンポを凝視しながら感想を漏らした。  
「2人で一緒に舐めてください」

俺の言葉に頷いてチロチロと舌先を尖らせて一緒に舐め合う2人。  
舌先が交互に触れ合うのも気にしない。

恐らく、2人ですることもあるのだろう。

「……………れろ……………美味しいかも。ちゅ」

鈴口から溢れるガマン汁を舐めて恵が感想を漏らすとクルミが「ずるい！」と声をあげて同じように鈴口に舌を這わす。

「恵先輩。陥没乳首見せて下さい」

もはや、スマートフォンはクルミの机に立てかけている。

俺は恵をベッドに座らせて彼女の膝に頭をつけて仰向けに寝転がった。

「クルミ先輩はパイズリしてくれますか」

膝枕で乳房を咥えながらのパイズリ。

俺の提案に2人は頷き、いそいそとシャツを脱ぎブラジャーを外した。

「本当に陥没してますね」

スライムのように重さでブルンと下を向く恵の乳房。

乳頭が完全に隠れて窪んでいた。

「……………めっちゃ恥ずい……………」

俺の頭を撫でながら目を逸らす恵、俺の腰を持ち上げ日焼け跡がくつきりとした乳房で肉棒を挟むクルミ。

恵の乳房が「柔」ならば、クルミの乳房は「硬」であり、しっかりとした硬さの乳房にちんぽは包まれる。

あむ。

「ツ……………」

桜色の大きめな乳輪ごと、ちゅうちゅうと吸引する。

「たくみ君のおちんぽ……………むっっちゃ硬くて、熱いよ」



して満面の笑みを浮かべた。

「ザーメン、おいしいっ」

彼女は自身の谷間や顎に付着した精液も指で掬いあげてちゅぱちゅぱと全てを舐めとっていた。

「じゃあ、挿入れますね」

クルミの膣口にあてがいズブリと挿入する。

「——アっ、……ヤバイかもっ——いくっ!」

正常位で根元まで一気に挿入して瞬間、恵が仰け反り潮を吹く。首筋には血管が浮かび上がり、身体は全体的にほんのり赤くなっていた。

「クルミいく早漏すぎてウケるんだけど」

手持ち無沙汰の恵が潮を吹く彼女を冷やかしながら、俺の右腕に抱き着き、唇を突き出す。

「チューしよ?」

上目使いの彼女に俺は唇を合わせ、腰をゆっくりと前後に動かす。

「——んっ!だ、だめっ、と、止まらないっ、んん!」

抽送の度に、身体を震わせて尚も潮が噴き出すクルミに恵が「そんなに気持ちいいの?」と言葉を投げかけた。

「——や、ヤっ!やばいっ!、お!、おちんぽっ!やばいっ!んアっ!——っ!」

もはや痙攣するように身体を震わせるクルミに、

恵は「いいなあ」と口を漏らし、俺の指先に膣口を当てるようにふるふると腰を動かした。

「タクミくん……ウチのマンコも触って?」

ぬぷり。

すでにぼたぼたと愛液を溢れさす恵の膣に俺の指をなんの抵抗もなく受け入れる。

「とりあえず、クルミ先輩は俺が射精くまではなんとか頑張って下さ

いね」

俺の言葉に全力で首を横に振る彼女を無視して、そのままパチンと奥へと腰を突き出した。

「あゝっ！、ま、待ってえゝ！あっゝ！無理っ！無理ッ！ンンン、っー！」

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！

打ち付けるたびに潮を噴き出し身体を震わせるクルミの肌にはわっと鳥肌が泡たつ。

「死んじやうっ！死んじやう！、し、しんじやうっ!!」

ぎゆうぎゆうと膣内が肉棒と千切らんと締まっては弛緩し、締まっては弛緩を繰り返える。

「おゝおゝ、イゝっ、イゝっ、っ、っ、っ、っ！イッテクダサイいいいっ！」

半狂乱にイキ狂いながら懇願する彼女に応えるように射精感がふつふつと訪れ、俺は子宮めがけて精を放った。

「あゝ あああああああ！」

精をうけた瞬間、彼女は絶叫し、そのまま気絶してしまった。

「た、たくみくんっ、う、ウチも、ウチにも挿れて」

腕にしなだれかかり、指を動かすたびに腰を震わせていた恵がヨダレを垂らしながら懇願する。

「いいですよ。どんな体位がいいですか？」

俺の言葉に彼女は一旦離れて尻を突き出した。

「ば、バックで……バックでお願いしますっ！」

ズブリとクルミの膣から引き抜いて、そのまま恵へと挿入する。

この世界では極端にめずらしい連射も俺にとってはもはや造作もない。

「ああ、これがセックス……」

抵抗もなく受け入れる恵が感想を呟き腰を震わせた。

オナニーからも察していたが、彼女は膣内派で、ナニカを入れるのは慣れているのだろう。

挿入した瞬間に潮を噴き出しながらヨガリ狂うということではなく、

むしろ、早く動いてくれと尻を振る。

背後から手を回し、重力に従うように下を向いた乳房を揉みしだき、隆々と勃起した乳首を両手で引っ張った。

「——っ!!」

彼女がビクンと身体を震わせる。どうやらこの体勢が正解らしい。

「じゃあ、動きますね」

恵の返答を待つことなくそのまま腰を尻に打ち付ける。

「あっ！あっ！そ、ソレっ、や、やばいっ！」

乳首を引っ張りながら打ち付けるたびに嬌声をあげる。

やわらかく、長乳ぎみの彼女の乳房が更に下へ、下へといくように引っ張り、腰を激しくピストンさせる。

「んっ！イ、イきそうっ！た、たくみくっ！、イ、イっつもっ！っ！  
イっつもいいっ？」

許可をとる彼女に「俺もそろそろなんで一緒にいきましようか」と  
耳元でささやくと、彼女がコクコクと首をふる。

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！

「先輩っ、射精きますっ！」

「う、ウチもっ！い、い、い、いっ！くっ!!」

びゅるるるるっ！

射精と同時に潮を噴き出し、結合したまま余韻を楽しんでから俺は  
彼女から引き抜いて、二人に告げた。

「処女の卒業おめでとうございます」

彼女らは答えることはなく、ただ肩で息をしていた。



## 第貳拾玖話 セフレ♡

「たくみん……二人となにかあったの?」

翌日の部活動。

舌つたらずな口調に眠そうな瞳を浮かべながら、美優が俺のもとに歩み寄り首を傾げる。

「……そう思います?」

外見とは裏腹に中々するどい彼女に俺は苦笑いを浮かべた。

「なんかヘン。二人ともウクウキとしているし、ずっとたくみんのことを目で追っている」

なるほど。一応、昨夜の恵とクルミの処女卒業については、今のところ口外しないようにとは伝えている。

それでも口に出さずとも態度で出てしまうのだろう。

それが3馬鹿トリオと称されるほどの仲の良い美優ならなおさら気づくようだ。

「美優先輩……ちよつといいでしょうか?」

俺は彼女の腕を引っ張り、男子更衣室への中へと向かった。

「……つまり、恵とクルミとシちやつたってこと?」

美優が目を細めてこちらに視線を送る。

「美優もいいかな。仲間にいれもらっても……」

淡々とした表情で言う彼女に俺は頷いて「もちろん」と返す。

「じゃあ、さつそくだけでも抜いてもらってもいいですか」

ズルリとズボンと一緒にパンツも脱ぎ、俺はチンポを彼女の前に出す。

「フェラで大きくしてくれない?」

俺の言葉に、眠そうな瞼は大きく見開きこくと頷く。

「あ、手は使わないようにね」

俺の目の前で腰を下ろす美優にそう告げると、彼女は一瞬首を傾げるも、亀頭を舌でぺろりと舐めあげた。

「美優先輩、舌長いんですね」

彼女の口内から差し出される舌の長さには俺は思わず感想を漏らした。

まるで蛇のように長い舌。

べーっと出したソレは見える部分だけで恐らく10cmほどはあるだろうか。

彼女の滑舌の悪さはそこに起因しているのだろう。

俺の言葉に

「……おかげでヨダレが止まらないんだよ？」

と目を細めて笑う彼女が舌先からタラタラとヨダレを垂らしながら、裏筋を舐めあげる。

刺激にムクムクとチンポが勃起を始めて、あっという間にいつものように腹に着いた。

「すっごいね……血管が浮き出てる……」

レロリと舌で竿を舐める舌がその長さを見せつけるように一周する。

「……たくみんのおつゆが出てるよ」

目を細めて笑う彼女がパクリと、腫れた亀頭を口に食われて鈴口をチロチロと刺激する。

手は使わないと。忠実に指示を従うように、彼女は顔を前後、上下に動かし、チンポに快感を送り込む。

啜えた隙間からだらだらとヨダレが溢れ、ぽたりと自慢に着くことさえ厭わない抽送に思わず腰を引いてしまう。

「レロ。あんまり美味しくないね。ガマン汁」

人それぞれだろう。チンポから口を離して彼女が感想を告げる。

一般的に「美味しい」と答えるのが多いこの世界で「ちよつとしょっぱいかな」と感想を付け加えて、再度パクリと頬張りジユポジユポと音を鳴らす。

「美優先輩、もう出そうです……」

普段のおっとりとした彼女とは違い、激しく唾液を垂らしながらの愛撫に俺は彼女の肩をタップすると、

「ふいふいほ。ふあひて」

と目を細めて微笑みが帰って来た。

「うっ」

びゅるるるるるる

口内を蹂躪するように多量の精液が発射され、彼女な頬がリスのよう膨らんだ。

「うえ……、すっごい苦いかも……」

暫し、口内で余韻を楽しんだ後に、彼女はチンポから口を離し、自身の手で精液を吐き出した。

ただでさえ量の多い精液に加えて、彼女のヨダレが混ざり、手からぼたりと溢れる残滓。

「ごめんね。飲んであげなくて」

礼儀作法としては、味が苦手でも吐き出すことはマナー違反が通例であり、

無作法を咳き込みながら謝る彼女に俺は首を横に振った。

「大丈夫です。いくらでも出るので」

やや斜め上な回答に彼女が首を傾げるも、未だびんびんと立つチンポを見て領きを返した。

「じゃあ、折角なんでこのまま美優先輩の処女卒業といきましょう」

俺の言葉に彼女はコクリと領き、そのまま二回戦を続けることにならなかった。

「は、入るかな……」

腰ほどの高さの机に乗り上げた美優が不安そうに声を上げる。

「大丈夫ですよ。それにほら、こんなに愛液で溢れてますから」

下は全裸に、上の体操服をたくしあげて胸を曝け出す彼女の股に指をつけて眼前へを見せつける。

糸が引き、一瞬で多量な愛液が付着し、潤滑剤よろしくネチャネチャとしていた。

「それにしても、綺麗なおっぱいですね」

平均的サイズのFカップの白い胸に500円玉大の桜色の乳輪。

こりつと勃起する乳首に視線を送り思わず破顔した。

「理想的な胸のカタチってやつですかね」

胸上部の肉は薄く、下方へしたがつれてボリュームが増す乳房。

釣鐘のような形に下向きで勃起する乳首をつまみあげる。

「——んっ！」

美優が目を閉じ、身体をビクリと震わせた。

「じゃあ、挿れますね」

喘ぎ声をあまり上げないタイプなのか、周りに声が漏れるのを嫌っているのか、

あまり鳴かない彼女に若干ながら苛立ちを覚えつつ、ズブリと彼女の秘部に突き立てた。

「——んっ!!」

瞬間、がばりと俺の背中にしがみつくように脚を交差し、首にも両手を回した。

「痛くないですか？」

俺のカタチを覚えさせるために、奥まで挿入して10秒ほどその体勢を維持し、俺は彼女の耳元で問う。

「……だ、だい、じょうぶ……ちよつと、予想以上にき、きもちよくて」

口元からヨダレを垂らし、どこか余裕なさげな彼女に俺は口づけをした。

「いま、先輩のマンコに俺のチンポのカタチを覚えさせてるので、もっと気持ちよくなりますよ」

口を離し、ニヤリと口角を上げ、ゆつくりと腰を引き、カリで膣壁を引っかく。

「んっ、こ、これっ、やばいかもっ」

入口手前まで引いて、今度は奥へとゆつくりと突き立てる。

俺の首を抱く彼女が時折、艶めかしい吐息を吐き、ブルルと腰を震わせた。

「お、おねがいつ。もっと、もっと突いて」

普段の眠そうにし、だらしなさが垣間表情とは違う、発情したメスのようにハアハアと口で息をする彼女を無視し、

俺はそのままゆったりとした抽送で、腰を前後に動かした。  
ぎゆうぎゆうと締め付ける膣内を前後する肉棒。

緩やかなピストンの刺激でも十分に気持ちよく、俺は彼女のマンコをの感触を楽しむ。

「なっ、なんでっ！あぁっ！で、でちゃうっ」  
じよばっ。

結合部から暖かい感触と共に液体があふれ出る。

「あゝあ、ゆつくりでもイっちゃいましたね」

そのままズズと彼女を焦らすように腰を動かすと、断続的に体液が彼女の秘部から溢れ、

美優が腰がけている机に水溜まりをつくっていく。

「ゆ、っ、ゆつくりっ、ゆつくりでも、きもちいいっ、きもちいいのお」  
あむっと、彼女の口内へ舌を入れると、お返しとばかりに美優は舌を絡ませ、やがて俺の口内へと侵入する。

彼女の長い、長い舌により口内に彼女の感触でいっぱいになる。

「れるっ、じゆる、お、おねがい。も、もっとパンパンしてっ、パンパンして下さいっ」

口を離し、ヨダレをひきながらの彼女の懇願に、

俺は一度、彼女の奥へ突き立てた後、ぱんっ！ぱんっ！と音を立てるように腰をピストンさせた。

「——んっ！。ぐっ！、あぁっ！と、止まらないっ！止まらないのっ！」

周りを気にする余裕がなくなったのか、彼女は首を左右に振り、潮を噴き出しながら鳴いた。

「先輩っ。そろそろ射精イきますねっ。ちゃんと子宮で受け止めてください」

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！

「だ、だめっ！ピル飲んでないのっ！お、お願い、ンンッ、そ、そとに、外にだしてっ」

俺の言葉に目をぐっと閉じていた彼女が反対に見開いて顔を横に振り俺の胸に手を突いた。



“だからムラムラしたらまた抱かせてください”

俺の言葉に彼女は一瞬口を開けて呆然とした後に「たくみんってやっぱり変わってるよ」といつもの表情へと戻り呟いた。

「普通は、男のヒトってあまり同じ人抱かないから」

美優の言葉に「まあ、サムライですから」と濁した言葉を返すと、彼女もまた「そっか」とわかっているのか、わかっているのか、

よくわからない返答を返した後にはニヘラと笑った。

「まあ、いいよ。たくみんには助けてもらった恩もあるし、ボクのおまんこ好きに使ってもいいよ」

こちらに尻を向けてフルフルと動かす彼女の膣口からまた、ボトリと白い液体が落ちた。

「セフレになつてあげるよ。普通は逆だけど」

はにかんだ笑顔に俺も「こちらこそ、よろしくお願いしますね。先輩」と笑いあつて言葉を交わす。

その後、男子更衣室の清掃を終えて、恵とクルミに美優を入れて、ホテルでの4Pへと、しげ込むのは当然の結果であった。

## 第参拾零話 絶対領域

「行ってきます」

朝日が昇り始める早朝未明、俺はベッドにて寝転がる碧理の頭を撫でる。

「気をつけなさいよ」

半開きの目を浮かべながらぼつりとつぶやく彼女の顔色は艶々と光沢を放っている。

昨日、めずらしく緊急討伐指令ではない怪異を討伐した。

種別は“ぬり壁”と呼ばれる第五位階の比較的弱いランクの妖である。

俺も、碧理もケガを負うことなく、討伐を完了し、そのまま生存本能に任せて乱痴気騒ぎで性を貪ったのだ。

部屋には、さまざまな醜悪な臭いが充満し、ベッドだけでなく、床にも体液が乾いたような跡が浮かび上がっている。

もちろん、彼女、お好みのアナル浣腸プレイは風呂場やトイレでしているの、人糞が落ちているということはないが、

それでも今日の部屋の掃除は大変だろう。

俺は心の中で合掌を彼女に送って庭先へと出る。

日課となる早朝のトレーニングだ。

真剣を片手に素振りをし、型を舞う。

昨晚討伐で精氣を使ったこともあり、あくまで氣の放出は抑えている。

それが終われば、刀を置いて町内をランニング。

「おはようございます」

「おはようございますー！」

道行く婦女とあいさつを交わしながら、朝日を浴びて汗を流すこの瞬間が俺が一番好きだ。

いや、セックスも好きなのだが、それと同程度にはトレーニングも心を落ち着かせる役割がある。

「あ、賀茂の坊ちゃんおはようございます。精が出ますねえ」



町内を2週目に差し掛かるころには賀茂家のお隣さんの老婆が玄関先を掃除しながらペこりと頭を下げる。

「中田さん、おはようございます。中田さんも朝からご苦労様です」  
社交辞令を返すと「昨日はまた一段と凄かったですね」と老婆が口角を上げてほほ笑んだ。

隣といってもそれなりに距離があるのに、彼女が耳聡いのか、はたまた、碧理の喘ぎ声は煩いのか。

まあ、この婆さんに至っては蒼佳の時も決まって声を掛けてくるので、きつと耳聡く、且つ賀茂家の女は声が大きいのだろう。

「すみません。騒がしくて」

俺は苦笑いを浮かべ謝るも、彼女は首を横に振る。

「おサムライ様ですし、まだお若いですけど、しょうがないでしょう……はて、坊ちゃんは今おいくつでしたかいの……」

わざとらしく首を傾げながら更に口角をあげる老婆に俺は

「まあ、まあ、細かいことばかり気にしすぎると早死にしますよ、おばあさん」

と言葉を返す。

「おお、怖や、怖や。まあ、お隣さんのよしみに目を瞑りましょうか。ワシももう少し若ければお相手しますのに」

人たらしの笑みを浮かべる彼女に「御冗談を」と言葉を返して俺はそのまま走り出す。

彼女はおそらく齡100を超える。さすがの俺でも許容範囲外である。

背後に寒気のする視線を感じながら、若干足に精気を込めて加速する。

曲がり角を曲がるころには寒気は無くなっていた。

「ふう〜ん。それで碧理つちと朝方までパコパコしていたと」

すでに入学して早、1ヶ月。

以前は校庭や校門前には桜が咲き誇っていたが、いまやほとんどが散っている。

昼休憩のタクミ当番の暗黙つまみ食いの了解を終えて、授業の合間の短い休憩時間にも関わらず、俺とちなみ会話に花を咲かせる。

いつぞやか、ちなみと碧理と交友を深めており、時折二人で遊びに行くこともあるらしい。

「アタシもカモつちと夜通しバコバコセックスしたいなあ」

下腹部に手を添えて撫でる彼女に「その場合、ちなみはほとんど気絶してると思うけど」と言葉を返す。

「まあ、それもそうかもだケドさ、あ、そうだカモつち、明日はヒマ？」

「一応部活はないけど、なに？」

添えていた手がじーつとズボンのチャックを下ろし、窓から手が侵入してパンツの上を這う。

「よかつたら、明日デートしようよ。折角の連休の初日だしさ」

パンツの隙間へと手を挿入し、ふにやつとしたチンポを優しくしごく。

「いいけど、どこか行きたい場所あるの？」

しゅこしゅこ優しい刺激を感じながら俺が問うと彼女はほほ笑む。

「カモつちがもし無いなら、映画みたいになって。ダメかな？」

鈴口から徐々に溢れるガマン汁を親指につけて、尿道をこするよう  
に摩る彼女が上目使いで俺を見る。

「いいよ。じゃあ、リードしてね。明日の12時に河原町の駅前に集合して、ご飯食べてから映画行こうか」

完全に勃起したチンポを握り、上下にさする手つきに思わず息が漏れた。

「うんっ！　じゃあ、楽しみにしてるね！」

ズボつと手を抜き、自らの手に着いた精液をペロリと舐めながらほほ笑む彼女に俺は苦笑いを返す。

「明日まで、我慢してね。碧理つちにも出しちゃダメだよ」

どうやら、明日までのという短い期間であるが俺の射精管理をする彼女に「はいはい。じゃあ出来るだけね」と言葉を返して笑みを浮かべた。

彼女は「映画っ。えいがっ。デート」とまるで幼児のようにきれいな笑みを浮かべていたのであった。

「あ、カモっちー！こっちー！こっちー！」

京都市っつての繁華街に位置する駅前のコンビニ。

白のミニ丈のニットワンピースに、黒のニーハイを履き、絶対領域を醸し出すちなみがこちらに手を振って、ぴよんぴよんと跳ねる。

突き出た胸部が連動するように上下に揺れて、思わず「眼福、眼福」と呟きながら俺は彼女に手を挙げて応える。

「ごめんね。待った？」

デートの常套句をつけると彼女はニンマリと笑顔を浮かべて「ぜんっぜん！アタシも今来たところだしっ」と俺の腕を抱いた。

いつもの同じピンク髪が今日はどこか艶を放ち、髪も巻いて、その気合ぶりに思わず笑みがこぼれた。

「すごい可愛いね」

彼女の恰好を褒めると満面の笑みでありがとうと言葉を返して彼女もまた、俺に社交辞令を述べた。

「カモっちも私服姿もカッコイイよっ」

普段通りの無地のパーカーにスキニータイプのパンツスタイルである。

可もなく、不可もない服装だが、どうやら彼女にとってはそれが良いらしい。

「じゃあ、さっそくランチ食べにいこっ！アタシ予約してるから」

腕をグイっと引つ張る彼女のミニ丈のセーターの裾がふわりと風でめくられて中身を見せる。

「ちなみは付き合い短いけど本当に俺の性欲を刺激するね」

履いてたパンツは白のTバックで、ニーハイのむちむち具合と言い、絶対領域といい、ミニ丈と言い、

まるで俺の好みを知り尽くすような恰好に思わず言葉を漏らすと、

彼女が振り返って笑った。

「カモっち、スケベだけど、がつつりの露出よりもチラつと見える方をよくクラスでも目に追ってるから。」

だから、こーゆうのも好きかなって思ったんだけど、どうやら成功みたいだね」

悪戯っぽい笑顔を浮かべる彼女に「うん。良いと思うよ」と言葉を返して、そのまま彼女が予約しているレストランへと歩みを進める。

彼女の笑みに映えるように、日が差し込んでいた。

「カモっち、あーんてして」

ちなみがピザを持ち俺の口へと運んでいく。

白い脚を俺の太ももに載せバタバタといちやつく俺たちを見る視線を至るところから感じるも、

彼女はそれを気にせず、もはや抱き着くような距離感で身を寄せている。

「カモっち、ちゃんと昨日から我慢してる?」

耳元でそつと囁く彼女に「一応ね」と言葉を返す。

ちなみが碧理に先に伝えていたのだろう。昨日の日課の際に、碧理が「今日は辞めておくわ」と答えて、いそいそと一人で床についたのだ。

いつの間にか、二人は仲良くなったのだろうか。

きつと、ちなみの誰とでも打ち解ける性格の為せる技なのだろう。

それでも、あの碧理が日課を引き下がった理由がどこか解せない自分がいるが、俺はそれに目を瞑ることにした。

「あとで、いっぱいエッチしようねっ」

かぷりと俺の耳たぶを甘噛みしてほほ笑む彼女に「頑張るよ」と言葉返して、その後もちなみにあーん攻勢は続く。

この後は、彼女指定のSF系の映画を見に行く予定である。

エロも楽しみだが、今は彼女とのデートも楽しもう。

俺は差し出されたピザを頬張りながら、そんなことを考えていた。

「ちよつと……カモっち……手つきがエロいよ……」

休日の映画館。

それなりに人気のSF映画に座席の多くが埋まり、スクリーンに映画お決まりのお色気シーンセックスが映し出される。

前世と違い、まるでAVの一面面のように如実に移される絡みに、観客のゴクリと喉を鳴らすことが響いた。

しかしながら、映画自体の中身は前世の記憶がある俺からすればどこかチープでちぐはぐに感じてしまい、

映画をそつちのけで俺はちなみの太ももを愛撫していた。

幸か不幸か、俺たちが座るのは最後尾のペアシート。

手を這わすの先はミニ丈のニットワンピースとニーハイソックスの隙間。

白磁の如く白くなめらかな彼女の内ももに指を這わせると彼女がビクリとその場で身体を震わせた。

足の付け根に近づくにつれて、すべすべとした肌から水気を感じる。

「もしかしてずっと濡らしてた?」

今世では別に珍しくはない。

よく濡れて、よく溢れる愛液であるが、あくまで言葉責めの一環で俺は彼女の耳元で意地悪く囁く。

「だって……カモっち、カッコいいんだもん……」

もはや、スクリーンを見ていない彼女は、赤い顔を下に向けて、目をぎゅつと閉じ、声を漏らさないように唇を噛んだ。

「ありがとね。ちなみもエロくて可愛いよ」

爪を立てて、ツツツと彼女の鼠径部に指を這わせ、そのまま秘部へと触れる。

ぐちよりとした感触に思わず笑みを浮かべる。

「こ、え、声……出ちゃうよお」

ビクビクと身体を震わせ、甘い声でつぶやく彼女に「でも、嫌じゃないでしょ?」

と言葉を返す。

返答はなく、ただ、腰を震わせて、「んっ。ンン」とちなみが息を吐いた。

映画は物語の佳境となるシーンを移しており、まもなく終わりを迎えるだろう。

絶えず溢れる愛液で俺は座るシートに若干ながら心配を頂きながら、彼女の下着の中に手を差し込んだ。

「アぁっ」

ちなみの大きな声で周囲の観客がこちらに振りむくので俺は彼女たちに手を振って笑顔を浮かべた。

彼女は完全に下を向いて羞恥に震えていた。

## 第参拾壹話 彼女♡

「いいよね！アタシいっぱい我慢したから！いいよね!!」

その後、周りの視線に居た堪れなくなった彼女はエンディングも途中に、俺の腕を引っ張り、近隣のラブホテルの一室でベッドへと俺を押し倒していた。

「キス！キスっ！ちゅうしょよ！カモっち！」

肉食獣にガラガラとして目つきで彼女が俺の唇にキスをし、無遠慮に舌を伸ばす。

バシンとビンタをするように俺の両頬を掌でロックし、まさに蹂躪するかのように歯がぶつかるのも厭わずに口内を犯す彼女。

「ちよっ、んん。っぱ。い、んッ、息がッ」

絶えず蹂躪される口内に思わず呼吸が乱れて彼女の肩をタップするも、尚も攻勢は激しく、それこそ俺の息さえ飲み込むかのようにバキュームを行うちなみは俺の舌を吸引する。

レロ、ジュッ！チュッ！ジュルルル！ジュポ！レロオ、チュ

ジュルルル！ジュポ！

「ンアッ！もう無理!!」

彼女はしばらく俺の口内を楽しみ、ひとしきりヨダレを吸引するよ  
うに音を立て吸っていたのをやめ、

バツと顔を離し叫んだ。

「お、おチンポっ！このおチンポが悪いんだよねっ！カモっちがエツ  
チなのは全部このおチンポのせいだよッ！

待ってて、今すぐアタシがお仕置きするからっ！」

ズボンの上から、やや半勃起している肉棒を摩り、そのままカチャ  
カチャと音を鳴らしてベルトを外す。

そのまま乱暴にズボンと下着をはぎ取る彼女の顔つきは正に狂気  
に狂っていた。

「アア。大きいッ♡」

あらわになったチンポを見て彼女の目がトロンと目じりを下げた。

「いま、勃たせてあげるねっ！カモっちのスケベちんぽっ」

チュツ！ジュルルル！ジュポ！ジュポ！ジュポ！

強制的に勃起させるが如く、じゅぽじゅぽと音を立てて吸い付くフェラに、ムクムクと血液が集まり、いつもの硬さへと変化していく。「っパっ！、ほらっ！すぐにこんなに勃起して、待っててね！今、ラクにしてあげるからっ」

ちんぽから口を離してそのまま俺の上に跨り、ちなみは自身の下着に指を引っかけてグイっ！と横にずらした。

角度を調整するように握り、ぬるぬるとした膣口へあてがう。

「ほらっ！ここに挿れるよっ！今からセックス！するからね！！

」

彼女の瞳はどこか焦点があつておらず、目にはハートマークが浮かび、口からヨダレを垂らしながら、そのまま腰を下ろした。

「ンア、ア、アアアッ！！」

獣のように叫び声とは対照的にズブリとなんの引っ掛かりもなく俺の肉棒が突き刺ささつた。

瞬間、「ンン、っ！！」

ブルルル。

チンポを奥深くに挿入できるよう、背筋を伸ばしていたちなみの身体が震えた後、

結合部からジュワっとした温かさを感じると同時に彼女が俺に倒れ込んだ。

「うそだろ・・・？」

ビクビクと震えながら白目をむいて気絶する彼女に俺は思わず天を仰いだ。

お仕置き云々の最中で挿入しただけで気絶という珍事。

絶えず溢れる体液から、鼻を衝く刺激臭を感じ、思わず顔をしかめるのを禁じ得ない。

これからやっ！と本番だろう。

昨日からしているごく短いスパンであれど禁欲をしていたのだ。

その結果がこの体たらくである。



俺の上へのしかかり、口を開けてヨダレを垂らす彼女の臀部に向かつてやや大きく振りかぶり手のひらを打ち付けた。

バシッッ!

「ヒャウンッ!!!」

衝撃により意識を覚醒した彼女はガバリと起き上がると再び連結された部位がズリユルと動く。

「アッ!!!」

瞬間にまたチンポが濡れる感触を覚えると彼女はビクンビクンと体全体を震わせた。

「ムリィィ。気持ち、ぎもぢよすぎるう〜!!」

そう言つてハアハアと深い息を吐きながらその場で止まる彼女に俺ははあーつとため息を吐いた。

「ちなみ、さっきまでの威勢はどうしたの? 射精管理までしておいて入れた瞬間に気絶して、起きたと思えばもう無理なんて流石にね……。」

ここまで来たら俺も気持ちよくさせようつてというのが女の矜持つてやつなんじゃないかな?」

再度、彼女の尻を目掛けて掌を振るう。

バチンッ!!

先の叩きよりも大きな音が響き、彼女の尻が脈打つのをを感じる。

「ヒグッ!」でも、無理だよお!こ、ヒッ!こ、こんなの、ウッ! こんなおちんぽデエ! 気持ち良すぎてエッ! アンッ!!」

パチンっ! パチンっ! と何度も臀部を叩きながら、腰をぐりぐりと動かし、彼女の子宮を奥へ、奥へと押し上げる。

ジョバジョバと潮なのか、尿なのか、もはやわからない体液を噴き出しながらただ喘ぐ彼女に俺はため息は漏らした。

「うーん、これはもうバトンタッチした方がいいか。俺がお仕置きするよ」

腹筋の要領で身を起こし、そのままの反動で彼女をベッドへと押し倒す。

騎乗位の状態で動かず、ただ体液を漏らす彼女に合わせては埒があ

かない。

そこでふと俺はあることが思い浮かんだ。

「あ、そっか。いつもトイレでスるからこうしてベッドするのは初めてか」

普段、彼女とやるときは学校の中で短い休憩時間に行うインスタントなセックスばかりだ。

こうして、周りの目も気にせず、ゆったりと寝そべり挿入などはしたことがなく、故に彼女も発情しているのだろう。

そんなことを思い浮かべながら、正常位の体勢でつま先を立て、ぐりぐりと子宮を押しす。

「ヒギィー！」

鳴くたびにジヨパッと体液を噴き出す彼女。

俺はちなみに両乳房を手で押しつぶす。

「動くよ」

俺はの言葉に首を横に振る彼女に、「お仕置きだから」と告げてピストンを始める。

「イツー！ま、ツーアツ！！ちよー！ツ！」

彼女が俺を静止しようとそんな声を出すも、襲ってくる快感に言葉は途切れ途切れで腰を幾度も震わせた。

ズチュン！ズチュン！ズチュン！

腰を打ち付けるたびに、彼女の体液が隙間から噴出し、より濁った濁音を立てる。

「アッ！アッ！アッ！アッ！アッ！アッ！」

恥ずかしげもなくアへ顔を晒し、奥を突くたびに声を漏らす彼女。そのだらしない顔とは違い、膣内は名器のごとくぎゅうぎゅうと俺のチンポを締め上げてくる。

パンっ！ぱんっ！ぱんっ！

ピストン運動をおよそ50回ほどした頃にやっと襲ってくる射精感に乳房を握る指に力が入った。

「ちなみ、射精くよ！！」

既にダッチワイフのように脚を広げて突くたびに喘ぐ彼女にス

パートをかけるように更に力強く腰を動かした。

「ギイツ!!むーアツ!むり!ツ!ムリイッ……!!!!」

覆いかぶさるの腰に足を、首に手を回してガチリとしがみつきな<sup>!!!!</sup>がら叫び声をあげる彼女をよそに、

俺はそのまま精を奥へと射出する。

ビュルルルルルル!!

強烈な勢いで尿道をこじ開けるように精液が彼女の子宮へ注いだ。

「アッアアアアアア……!!!!」

最奥へと吐き出される刺激に彼女が再度叫び声をあげてすぐに、抱き着いていた四肢の力が緩んで、ペタリとその場で意識を放った。

ゴポリ。

生き抜いた瞬間にあふれ出す精液。

いまだ俺のチンポが出したりしないと主張するかのようにドクドクと脈打つも、当の相手はその場で干からびたカエルののように、脚を開いて、白目をむいていた。

「はあく。ほら、やっぱり気絶した」

俺はその場のため息を漏らして、彼女のワンピースをめくりあげてブラをはぎ取り谷間へチンポをあてがった。

「せめて、もう一回射精させてね」

自ら彼女の谷間を寄せてセルフパイズリを楽しんだあと、

射精の瞬間だけ、再度ゆるゆるとなった彼女の膣内へと射精し、そのまま浴室へと向かった。

挿入の一瞬だけ、「ングっ」と声を漏らしたちなみだが、風呂を上がった後も彼女は目を覚ますことは無く、

本日も何度目のかのため息を吐いて、俺も床につく。

まあ、きつとそう遠くないうちに目を覚ますだろう。

そんなことを考えながら瞼を閉じた。

「面目次第もございません……」

結局彼女が目を覚ましたのは俺が起きてからさらに1時間。

時刻はすでに21時を回ることであった。

覚醒しだい、飛び起きるようにその場で土下座を繰り返す彼女に「おはよう」と俺が苦笑いを浮かべる。

「カモっち、ほんとごめんっ。気持ちよすぎて死ぬかとおもった」  
どこか悪びれることもなく謝る彼女に俺はホテルのメニュー表を渡す。

「明日も休みだから、ここで晩ごはん食べて泊まろう。  
ちなみも言ってたでしょ。夜通しバコバコセックスしてみたいって」

俺の言葉に彼女の頬がぴくぴくと引きつった。

「あ、あの、そ、そうですねっ、泊まれるのは嬉しいんだけど……で、できれば、お手、柔らかかに、というか、なんというか……」

アハハハと乾いた笑いを浮かべる彼女に

「バコバコセックスだからね。本気でバコバコするけど？」

邪悪な笑みを浮かべる俺に、彼女の顔が青ざめた。

夜はまだ長い。

せつかくだから、満足するまで射精をし尽そう。彼女の顔を見て俺は更に口角を上げるのであった。

「ちゅっ。……もう、おまんこ壊れるかとおもった……」

気絶してはスパンキングでたたき起こしてを繰り返し、かれこれ4連発するころには、俺も眠気を感じて、ピロートークよろしく、

ちなみがしな垂れかかり俺の頬へキスをする。

「壊れるというか、もはや壊れてるけどね」

俺の言葉通り、完全に開ききった膣口から今もとめどなくドロドロと愛液と精液が溢れだし、ベッドを濡らしていた。

「もう一回する？」

俺のことばにちなみは苦笑いを浮かべながら唇を重ねた。

「ごめんね。カモっち。さすがにこれ以上は本当に死んじゃうから」  
どこか真剣みのある瞳でつぶやく彼女に「そっか」と短く言葉を返した。

「カモっち」

ふと、お手の乳首をレロレロとなめていた彼女が顔をあげて俺の名を呼ぶ。

「よかつたらさ……アタシってカモっちの彼女かな？」

瞳に憂いを感じる顔で彼女が俺に問いかける。

“彼女”

扱いとしては前世という所の彼女と婚約者の間ぐらいの立ち位置だろうか。

今世ではあまり告白という文化はなく、あってもプロポーズが一般的であり、

“よく一緒にいる女性がガールフレンドである” というような認識だ。

俺は、「うーん」とその場で首を傾げた後に、笑みを浮かべて彼女に伝える。

「どっちかと言うとちなみ”も”セフレ”の一人かな」

俺の言葉に彼女はどこかさみし気な顔を一瞬浮かべた後、

「そっかつ」

と満面の笑みへと変わり、俺の唇にキスを落とした。

抱き着き俺の首の匂いを嗅ぐ彼女をよそに俺は天井を見上げた。

“俺はこの世界でも彼女を作れない”

天井のシミがどこか黒いモヤのように感じながらそつと彼女の頭を撫でるのであった。

## 第参拾弍話 位階

「いらつしやいませー!」

ゴールデンウィークの連休、俺はクルミ先輩の実家が営む居酒屋でアルバイトに精を出していた。

「生ビール4つ追加です」

「あいよー!!!」

どこか、クルミの面影を残す女性が合いの手を返す。

「あ、お客さん、お触りは禁止です」

注文とりの際に背後からニョキつと手が伸びて寸前で躲し、手を伸ばした女性に注意を促す。

「いやあ、タクミくんが良ければ卒業したらうちの看板息子として働いてほしいよ」

先の店主もとい、クルミの母親がキッチンから顔を出して俺に告げた。

「すいません。一応本業はサムライなので」

手をあげてペこりと頭を下げる俺に「そうだよね。御勤めいつもご苦労様」とクルミとよく似た笑顔を浮かべて頭を下げる彼女に

「まあ、こうした暇な時ぐらいはいつでも手伝うので声かけてください」

と伝え、そのまま注文とりに汗を流した。

「ありがとうございます」

最後のお客さんを見送り店内へと戻ると従業員が拍手を交えて俺を迎えた。

「タクミくん。過去最高の売り上げだった」

汗を流しながらはにかむクルミに「そうですか。やっぱり異常でしたよね。忙しさ」

と苦笑いを浮かべて汗を拭った。

「一旦ここらで休憩して賄いでも食べようか」

パンパンと手を叩き皆に告げる彼女の母親が「今日はタクミくんが手伝ってくれた記念だ。ぱつと豪勢な賄い作るよ!」と声を張り上げ

ると全員がガッツポーズをして喜びを表す。  
その一体感に、俺は思わず笑みを溢した。

「タクミ君はゴールデンウィークは本業はお休み？」

賄いの海鮮丼にいつぞや食べた唐揚げ。

それらを頬張りながら、ふとクルミが尋ねる。

「うーん。今んとこ討伐指令は直近でないんですけどね。でもそれってフラグですよ。先輩」

唐揚げに箸を伸ばして、そのまま口へと放る。

じゅわりと肉汁が口内で弾けて思わず頬が緩んだ。

「あ、ごめん」

ピピピピピピ

ほら言わんこつちやない。

俺の私物のスマートフォンとは違う。退魔庁から貸与されたスマートフォンが音を発し、思わずその場でため息をついた。

「どした。碧理」

電話音を鳴らすスマートフォンを気だるそうに取り上げて受信のボタンを押して受話器越しの彼女の声に耳を傾けた。

「出たわよ。緊急司令」

まさに予想通りのフラグの回収に再度息を吐いてから「どこに？」

と返すと碧理は「鞍馬よ。天狗を祀っているお寺」と短く返した。

「……じゃあ、討伐対象の怪異はテングか？」

俺の言葉に「ええ」と返した後、

「第八位階相当ね」

と言葉を続けた後、「いつ戻れる？」と更に言葉を重ねた。

「すぐ家に戻るよ」

「了解。準備しておくわ」

電話のやりとりを終えて、一同がこちらに真剣な眼差しを送るのを笑みを浮かべて返した。

「というわけですので、俺はここら辺で失礼します。あつ、唐揚げもう一個もらっていきますね」

無作法にも手掴みで唐揚げを掴み再度口へと運ぶ。

「じゃあ、お疲れ様でした」

ぺこりとその場で頭を下げると「お待ちを」と接客中の時とは違う、重々苦しい声音でクルミの母が言葉を発した。

「せめてもの、気持ちだけど切り火を打たしてくれないかい」

「じゃあお願いします」と返すとドタドタと厨房に戻ってすぐさまこちらにやって来た彼女の手には火打ち石を持っていた。

「お気を付けて。おサムライ様」

お辞儀する俺の頭上でカチカチと音がる。

古くから伝わる魔除けの一種である。

「ありがとうございます。じゃあ、行って来ます」

顔をあげて礼を告げてから踵を返し俺は家へと走った。

背後で「ご無事で」と短くクルミの声が聞こえるのであった。

「被害は？」

家に着くなり私服を脱ぎ捨て、全裸も気にせず戦闘服に着替えながら横に立つ碧理に声をかける。

「今のところはないそうよ。施していた封印が急に解けて鞍馬寺に境内に顕現しただけで、

寺の境界線の結界までは壊されていないみたい」

全国各地に怪異を祀る寺社仏閣は多い。

秋田であればナマハゲ。

四国には人魚を祀る寺も存在している。

中でも有名なのは鞍馬寺のテングと、伏見稲荷の妖狐だろう。

彼らは寺社に石や、墓に妖怪を封印し祀る始末で、今回も討伐とは名ばかりであくまで最終的なゴールは「封印」であると碧理が告げる。

「それにしても鞍馬寺は俺らの担当エリアでもないだろ。おまけに俺らは下級で本来は第八位階以上は中級数名もしくは上級が目安だろう」



俺の言葉に彼女は頷いてから言葉を返す。

「なんでも一つ目鬼の実績も考慮して選ばれたそうよ。」

「下級にして下級ならず」ってさ。

後、今回の指令が完遂した暁にはアタシもあなたも中級に昇格するってさ」

「よかったじゃない。2ヶ月で出世よ。アンタ」

言葉を続ける彼女の表情は硬い。

怪異の位階にはそれぞれ目安が決められており、退魔師が派遣される主な位階は四位階以上指す。

第一〜第三は結界師を派遣し封印し支部へと提出。

第四〜第五は下級サムライを筆頭としたチームを送りこむ。

第六〜第八が基本的に中級、もしくは上級のチームが受け持つが通例なのだ。

そんな括りをぶっ飛ばしての俺たちの指名に思わず首を傾げざるを得ない。

もつとも鶴が第五位階、一つ目鬼が第七位階で河童も恐らく同程度だろう。

もはやそんな枠組みから外れてしまった討伐実績も加味されているのだろうが、それはそれである。

「あと、アタシ達の他にも退魔師のチームが3組、任務に当たるそうよ」

「……仲良くお手手繋いで討伐でもなく討伐ね。上手くないから」

思わず口をへの字に曲げて顰めっ面を浮かべる。

退魔師のチームは常に自身が所属する「組」を重視し、動くのだ。

そんな奴らを集めて、急に「仲良く討伐して下さい」など言われても無理である。

「討伐じゃないわ。今回の指令は封印よ」

首を傾げる俺をよそに彼女が続けた。

「……それと、他のチームは下級が2組に中級が1組だそうよ」

トドメを刺そうとばかりに告げる碧理の言葉に俺は口を開けて間

抜け面を浮かべた。

「どうやら、上は指令ではなく、遠足を命令しているのだろう。」

「まるで遠足ね」

「どうやら俺の顔に文字が書かれていたらしい。」

彼女が代弁して言葉を吐いた。

「まあ、なるようになるか。一応、俺らと同じ指令が下されるくらいには優秀ということだろう?」

俺の言葉に「一応、そうみたいね。アタシも詳しくは知らないけど」と碧理が言葉を返した。

彼女の言葉に「ふーん」と間抜けな返事を返しながら腰に斬魔刀を佩く。

「まあ、行ってみないと始まらないわな」

車庫に止めてある黒バイに跨り、後部座席へ腰を下ろした彼女にヘルメットを渡す。

「あ、髪の毛が焼き鳥?のような匂いがするわね」

鼻をクンクンと鳴らして髪の毛の匂いを嗅いだ碧理がそんなことを言った後、「焼き鳥食べたいわね」と続けた。

「賛成。これが終わったら行きますか」

「アクセルをぶん回し、排気音を響かせる。」

「肝が食べたいわね。一杯精をつけましょう」

「どこか締まらないことを言う彼女に俺は愛想笑いを浮かべて車体を走らせる。」

深夜に赤色灯が煌めき、サイレンが鳴り響かせながら俺たちは鞍馬寺へと向かった。

## 第参拾参話 共同戦線

「いらっしやいませー!」

ゴールデンウィークの連休、俺はクルミ先輩の実家が営む居酒屋でアルバイトに精を出していた。

「生ビール4つ追加です」

「あいよー!!!」

どこか、クルミの面影を残す女性が合いの手を返す。

「あ、お客さん、お触りは禁止です」

注文とりの際に背後からニョキつと手が伸びて寸前で躲し、手を伸ばした女性に注意を促す。

「いやあ、タクミくんが良ければ卒業したらうちの看板息子として働いてほしいよ」

先の店主もとい、クルミの母親がキッチンから顔を出して俺に告げた。

「すいません。一応本業はサムライなので」

手をあげてペこりと頭を下げる俺に「そうだよな。御勤めいつもご苦労様」とクルミとよく似た笑顔を浮かべて頭を下げる彼女に

「まあ、こうした暇な時ぐらいはいつでも手伝うので声かけてください」

と伝え、そのまま注文とりに汗を流した。

「ありがとうございます」

最後のお客さんを見送り店内へと戻ると従業員が拍手を交えて俺を迎えた。

「タクミくん。過去最高の売り上げだった」

汗を流しながらはにかむクルミに「そうですか。やっぱり異常でしたよね。忙しさ」

と苦笑いを浮かべて汗を拭った。

「一旦ここらで休憩して賄いでも食べようか」

パンパンと手を叩き皆に告げる彼女の母親が「今日はタクミくんが手伝ってくれた記念だ。ぱつと豪華な賄い作るよ!」と声を張り上げ

ると全員がガッツポーズをして喜びを表す。  
その一体感に、俺は思わず笑みを溢した。

「タクミ君はゴールデンウィークは本業はお休み？」

賄いの海鮮丼にいつぞや食べた唐揚げ。

それらを頬張りながら、ふとクルミが尋ねる。

「うーん。今んとこ討伐指令は直近でないんですけどね。でもそれってフラグですよ。先輩」

唐揚げに箸を伸ばして、そのまま口へと放る。

じゅわりと肉汁が口内で弾けて思わず頬が緩んだ。

「あ、ごめん」

ピピピピピピ

ほら言わんこつちやない。

俺の私物のスマートフォンとは違う。退魔庁から貸与されたスマートフォンが音を発し、思わずその場でため息をついた。

「どした。碧理」

電話音を鳴らすスマートフォンを気だるそうに取り上げて受信のボタンを押して受話器越しの彼女の声に耳を傾けた。

「出たわよ。緊急司令」

まさに予想通りのフラグの回収に再度息を吐いてから「どこに？」

と返すと碧理は「鞍馬よ。天狗を祀っているお寺」と短く返した。

「……じゃあ、討伐対象の怪異はテングか？」

俺の言葉に「ええ」と返した後、

「第八位階相当ね」

と言葉を続けた後、「いつ戻れる？」と更に言葉を重ねた。

「すぐ家に戻るよ」

「了解。準備しておくわ」

電話のやりとりを終えて、一同がこちらに真剣な眼差しを送るのを笑みを浮かべて返した。

「というわけですので、俺はここら辺で失礼します。あつ、唐揚げもう一個もらっていきますね」

無作法にも手掴みで唐揚げを掴み再度口へと運ぶ。

「じゃあ、お疲れ様でした」

ぺこりとその場で頭を下げると「お待ちを」と接客中の時とは違う、重々苦しい声音でクルミの母が言葉を発した。

「せめてもの、気持ちだけど切り火を打たしてくれないかい」

「じゃあお願いします」と返すとドタドタと厨房に戻ってすぐさまこちらにやって来た彼女の手には火打ち石を持っていた。

「お気を付けて。おサムライ様」

お辞儀する俺の頭上でカチカチと音がる。

古くから伝わる魔除けの一種である。

「ありがとうございます。じゃあ、行って来ます」

顔をあげて礼を告げてから踵を返し俺は家へと走った。

背後で「ご無事で」と短くクルミの声が聞こえるのであった。

「被害は？」

家に着くなり私服を脱ぎ捨て、全裸も気にせず戦闘服に着替えながら横に立つ碧理に声をかける。

「今のところはないそうよ。施していた封印が急に解けて鞍馬寺に境内に顕現しただけで、

寺の境界線の結界までは壊されていないみたい」

全国各地に怪異を祀る寺社仏閣は多い。

秋田であればナマハゲ。

四国には人魚を祀る寺も存在している。

中でも有名なのは鞍馬寺のテングと、伏見稲荷の妖狐だろう。

彼らは寺社に石や、墓に妖怪を封印し祀る始末で、今回も討伐とは名ばかりであくまで最終的なゴールは「封印」であると碧理が告げる。

「それにしても鞍馬寺は俺らの担当エリアでもないだろ。おまけに俺らは下級で本来は第八位階以上は中級数名もしくは上級が目安だろう」

俺の言葉に彼女は頷いてから言葉を返す。

「なんでも一つ目鬼の実績も考慮して選ばれたそうよ。」

「下級にして下級ならず」ってさ。

後、今回の指令が完遂した暁にはアタシもあなたも中級に昇格するってさ」

「よかったじゃない。2ヶ月で出世よ。アンタ」

言葉を続ける彼女の表情は硬い。

怪異の位階にはそれぞれ目安が決められており、退魔師が派遣される主な位階は四位階以上指す。

第一〜第三は結界師を派遣し封印し支部へと提出。

第四〜第五は下級サムライを筆頭としたチームを送りこむ。

第六〜第八が基本的に中級、もしくはは上級のチームが受け持つが通例なのだ。

そんな括りをぶっ飛ばしての俺たちの指名に思わず首を傾げざるを得ない。

もつとも鶴が第五位階、一つ目鬼が第七位階で河童も恐らく同程度だろう。

もはやそんな枠組みから外れてしまった討伐実績も加味されているのだろうが、それはそれである。

「あと、アタシ達の他にも退魔師のチームが3組、任務に当たるそうよ」

「……仲良くお手手繋いで討伐でもなく討伐ね。上手くないかなだろ」

思わず口をへの字に曲げて顰めっ面を浮かべる。

退魔師のチームは常に自身が所属する「組」を重視し、動くのだ。

そんな奴らを集めて、急に「仲良く討伐して下さい」など言われても無理である。

「討伐じゃないわ。今回の指令は封印よ」

首を傾げる俺をよそに彼女が続けた。

「……それと、他のチームは下級が2組に中級が1組だそうよ」

トドメを刺そうとばかりに告げる碧理の言葉に俺は口を開けて間

抜け面を浮かべた。

「どうやら、上は指令ではなく、遠足を命令しているのだろう。」

「まるで遠足ね」

「どうやら俺の顔に文字が書かれていたらしい。」

彼女が代弁して言葉を吐いた。

「まあ、なるようになるか。一応、俺らと同じ指令が下されるくらいには優秀ということだろう?」

俺の言葉に「一応、そうみたいね。アタシも詳しくは知らないけど」と碧理が言葉を返した。

彼女の言葉に「ふーん」と間抜けな返事を返しながら腰に斬魔刀を佩く。

「まあ、行ってみないと始まらないわな」

車庫に止めてある黒バイに跨り、後部座席へ腰を下ろした彼女にヘルメットを渡す。

「あ、髪の毛が焼き鳥?のような匂いがするわね」

鼻をクンクンと鳴らして髪の毛の匂いを嗅いだ碧理がそんなことを言った後、「焼き鳥食べたいわね」と続けた。

「賛成。これが終わったら行きますか」

「アクセルをぶん回し、排気音を響かせる。」

「肝が食べたいわね。一杯精をつけましょう」

「どこか締まらないことを言う彼女に俺は愛想笑いを浮かべて車体を走らせる。」

深夜に赤色灯が煌めき、サイレンが鳴り響かせながら俺たちは鞍馬寺へと向かった。

鞍馬寺最寄りの鞍馬駅。

大きなテングのお面のモニUMENTが置かれる場所で俺は合流した退魔師たちに頭を下げる。

「京都退魔庁 第参地区所属 下級サムライの賀茂匠です」

「同じく下級結界師の賀茂碧理と申します」

退魔師同士で挨拶する時にはめんどくさいルールが存在する。

その一つが、サムライが先に名乗り、その後には女性の陰陽師と結界師が続いてサムライに頭を垂れるのだ。

「ふんっ。第四地区の担当のコムロだ」

「同じく、中級陰陽師の安部晴希あべのハルキと申します」

「同じく、下級結界師の安部明里アカリと申します」

年齢的には陰陽師のハルキは蒼佳と、アカリは碧理と同年代だろう。

2人は黒髪のロングヘアであり、顔もどこか似通っている。

二人とも顔つきはキレイだが、胸部が平坦としており、俺の食指は動かない。

しかしその苗字に覚えがあり、後ろに控える碧理へと視線を送る。

コクン。

どうやら間違いないようだ。

彼女の顔が是とし、〃あべの〃と読む彼女らはまさに賀茂家を含む御三家の一つ。

先祖にかの有名な〃安倍晴明〃を排出した名家だ。

「おっぱい結界師も元気そうね」

碧理と同年代だろう結界師のアカリが俺の背後に隠れる碧理へと声をかけた。

「誰がおっぱい結界師よ、貧乳結界師」

そして彼女たちは仲が悪いらしい。

バチバチと火花を散らすように睨むあう碧理に俺は思わず苦笑いを浮かべる。

「お、確かに良く見ると中々に美形じゃねえか。女。俺が抱いてやろうか」

コムロと名乗った蒼佳と男が下卑た顔を浮かべて口を開いた。

「結構でございます。私に心に決めた相手がおりますので」

睨み合いを終わらして、コムロに頭を垂れて瞬時に言葉を返すと、彼の額にピクピクと青筋が浮かび上がった。

「おい、この俺様が抱いてやるって言ってるんだぞ」

この世界の男の中の男らしい不遜な物言いに今度は俺の額にも青



筋が浮かぶ。

返事をする事もなくただ頭を垂れる碧理へと一步踏み出す彼に俺は氣を当てつける。

「やんのか？」

流石は安倍家と退魔師とパーティーを組むだけはある、俺の氣に反抗するように自身の氣を当てるコムロ。

他のサムライと違い濃密な氣に思わず関心してしまう。

もちろん俺の全力には遠く及ばないのだが。

「はいはい。そこまで」

手をパチパチと叩き間に割り込む妙齡の男性。

サムライの戦闘服を着る彼もまたサムライだろう。

「俺は今回お前たちを率いる中級のオガワだ。お前たちの任務は正確には封印ではない。後詰の退魔師の為にテングの力を削ることだ」  
彼が作戦についての詳細を述べ始める。

「氣に食わないな」

「氣に食わないわね」

俺と碧理の聲が重なり思わず見つめ合う。

きつと、それは俺ら以外の退魔師も同じだろう。

元々、我が強い連中の塊である。

さも使い捨てのような扱いにハラワタが沸々と煮え上がる。

「と言うわけで、各組でそれぞれがテングの力を削ぐように尽力するように。では着いて来い」

そう言っただけから踵を返し、背後を氣にすることなく歩むオガワに俺は、はあつとため息を吐いた。

「めんどくさい」

思わずそんな言葉が漏れ、碧理に尻を叩かれる。

「油断しないようにね」

めんどくさくとも、補欠的な扱いにヘソを曲げようとも、これから相対するのはテングである。

彼女に「分かってるよ」と言葉を返して刀を柄を握りしめる。

「ここから先が結界の中だ」

先頭に立つオガワが足を止めて紅色の仁王門を睨む。

門の手前で入り口を守るように左右に鎮座するのは狛犬では無い。

2匹の虎の像。

入り口より先は、結界のせいでピンク色をさし、伺い知ることは出来ない。

「ここから、先は各組チームに分かれて、テングの捜索を行ってもらおう。

もし見つけたら、竹笛を吹け」

オガワがそう言っただけに俺たちに向かつて笛を投げ渡す。

「どうせ、協力しろと言っただけでも無理な話だ。各自で対応し、テングの力を削ぐぞ」

彼はそう言っただけに我先へと仁王門を潜った。

「おい、行くぞ、メス共」

次にコムロが仲間の安倍姉妹を顎で使い、門を潜る。

「お先に、おっぱい結界師」

「死んで行きなさい、貧乳結界師」

アカネの軽口に碧理が悪口を乗せて返す。

それに続いて、もうひと組が門を潜った。

「いいの？ 奴ら先に行ったわよ」

碧理の言葉に俺は頷く。

「順番は関係ないさ。見つかる時には見つかるし、見つからない時は見つからない。」

気楽に「いこう」

先程からビシビシと感じる妖氣。

他の組が対応出来るとは考えていない。

「碧理、いつでも結界を張れる準備だけしておいて」

「そう言った時の俺の予感によく当たるのはすでに彼女も知っている。」

碧理はコクリと真剣な顔で頷く。

「いこう」

門を潜ると、すでに他のチームはおらず、眼前にとてつもなく長い

石段が目に入る。

足元を照らすように門と同じ紅色の行燈が左右に等間隔で設置されている。

鞍馬寺は仁王門を潜ってから本堂へ行くには、やや急勾配な石段をいくつも超えなければならぬ。

人によつてはまるで登山をする気持ちだろう。

「……見られてるわね」

彼女の言葉に「ああ」と短く言葉を返して辺りを伺う。

四方から視線とともに妖氣を当てられるのだ。

気が付かないはずがない。

加えて、身体を刺す氣は以前感じたぬらりひよんや、産女と同程度に濃厚で鋭い。

俺の顔が自然と口角を上げる。

それなりに楽しめる相手なようだ。

刀の鯉口を切り、柄に手を添えて俺たちは石段を駆け上がる。

瞬間、竹笛が鳴り響く音がこだました。

## 第参拾肆話 天狗

「あれがテング……」

碧理が息を呑み、眼前に佇むソレを凝視する。

全身青い肌に、山伏のような衣服で身を包む。

頭には烏帽子を被り、鼻が伸びたソレは正しくテングと相違ない。

おおよそ6 m程の巨軀に手に芭蕉扇を持ち、腰に人の身丈よりも大きな刀を腰に佩いていた。

「……逃……げろ……」

奴の足元に転がるオガワとその一味。

オガワは半身が離れ、仲間の陰陽師と結界師は衣服を残して中身が無く、

離れた場所にはもう一組分のチームの肉塊らしきモノが転がっている。

「コムロ様っ！」

目だけを右に向けると地面に伏し、右肩に手を当てるコムロ。

肩の先は、彼の近くへと飛んでいた。

「一番、遅かったか」

別に落胆などしていない。

俺からすれば他の組などは有象無象の一つ。

刀を抜刀し、相對するテングへ切先を向ける。

「碧理」

仲間の名を呼ぶと、力強く背後から「ええ」と短く言葉が返ってくる。

刹那

膂力から脚先へと力を込めてテングとの距離を詰める。

忽然と現れる碧理の結界を踏み、三次元的な動きで駆け寄り一閃。

「……及第点をやろう」

瞬足から繰り広げる精氣を込めた一撃。

奴の首元目掛けて振り下ろした刃が芭蕉扇に止められ火花を散らした。

「——ありがとよっ！」

クナイを3本ほど顔目掛けて投げつけ距離を離すべく元いた場所へ跳躍する。

着地の瞬間、突風が吹きつけ、刀を地面に突き刺し全身へと力を込める。

「碧理、〃結〃」

風とともにキラリと光るナニカが迫り、後方にいる彼女へと声を飛ばす。

「防護結界 〃結〃」

前方にピンク色の四角い結界が顕現し吹き付ける風が止み、ガキんと何かが結界に弾く。

「空蟬の世に迫りし不浄、玄武の力を借りて常闇を照らせ——」

碧理が後述詠唱で結界に強度を付加する。

キンキンキンと何かがぶつかりひび割れたソレが意思を持って傷を塞ぐように修正される。

「……なかなか良い結界よ」

結界の先からテングの声が響き、音が止んだ。

「主のソレ、見覚えがある。〃幸恵か〃」

ふと聞き覚えがある名を呼ばれてピクリと眉を顰めた。

「なんでアンタがそれを知ってるのよ」

碧理が一步前方に踏み出した。

「なんじゃ、本人ではなかったか」

声が一瞬で近づき、瞬時に俺の眼前に姿を現すテングが腰を据えて拳を突きつけた。

ガラスが割れるような音と共に腹部に衝撃を感じて後方へと吹き飛ぶ。

「タクミツ!!」

まるで腹部を鎚で殴られたような衝撃に地面を転がり込んで受け身を取った。

「ホホホ、壊れぬか。上等。上等」

身体を起こすのと同時に再度身を翻して跳躍し彼女とテングの間

に入り刀を振り上げる。

「お主の氣も覚えがあるぞ。主ら、賀茂家〴〵のものじやな」

片手で刃を摘み上げたテングが顎に手を当ててギョロリと視線を向けた。

「トミの血脈か……」

身を振り無理やり拘束から離れて、回転ざまにテングの首へと刀を当てた。

ガツン。

まるで巨木に刃を突き立てたような感触で刀が止まった。

トミと幸恵。

トミとは、曾祖母の名であり、幸恵は賀茂家に、基い、曾祖母に使えた結界師 兼 家政婦の名前だ。

幸恵はぬらりひよんの襲撃の際に殺されている。

「蠅のようにうるさい童よ。——喰らうぞ——」

睨みつける視線と一緒に、刺すような妖氣が当てられる。

その空気に碧理のひゅつと息を呑む音が聞こえた。

「安倍清明の血脈に、賀茂トミの血脈……。氣が変わったわ。やはりここを出て塵殺とするか」

テングの顔がみるみる紅く染まった。

「元は安倍清明に封印されたこの地、氣には入ってたが、それもこれまで。」

汝等、全員を喰らい復讐を成す」

テングが口を開いて咆哮を上げる。

ビリビリと大気を、地面を揺らす様に碧理がその場にしゃがみ込んだ。

「〴〵大天狗〴〵か」

俺の言葉にテングが動きを止めて眉を上げた。

天狗にも種類は様々存在し、カラス鴉天狗、小天狗、大天狗と大まかに分類される。

その内大天狗となると、もはやその位階は十にあたる。

「汝等らが決めた名でワシを呼ぶか。痴れ者が」

右手で腰に佩いた巨刀を抜刀し、横薙ぎの一閃。全身に氣を込めて斬魔刀で受ける。

先の河童戦後に打ち直してもらい、刀身を更に厚く、長くしてもらった特注品だ。

火花を散らしながら受け止めるも、臂力の差か、じりじりと身体ごとへ押し込まれる。

「ワシの名は『武蔵坊』、貴様らが『弁慶』と呼ぶ存在ぞ！」

決して『大天狗』などと呼ぶでないわっ！童アツ！」

拳が俺の頭上から振り下ろされ、後転し、距離をとった瞬間に、地面が割れた。

「碧理、ちよつと、避難しててくれる？」

もはや、彼女に氣を回せる存在ではない。

背後で蹲る彼女に顔を向けることなく声をかける。

「行かせるものと思つてか！汝等らは皆殺しだと言つただらう！」

芭蕉扇を振り上げてテング目掛けて跳躍し、拳に氣を練り込み頬を殴り飛ばす。

確かな手ごたえのもと、テングが半歩後ろへ下がった。

「皆殺しとは言つてはいないだらう。大天狗」

口から紫色の血を吐き出してギョロリと俺を睨む。

「余程、死にたいのか。阿呆あほうが。その望み、ワシが叶えてやろう」

テングの妖氣のすべてが俺に集中する。

「碧理、早くどっかに行つてくれ。邪魔になる」

今、分かる。

本来第十位階相当の妖氣に耐えられるモノなど、稀有だと。

蒼佳がぬらりひよんの氣にあてられても尚、正気なのは復讐心から来るものだ。

それほど、目の前に立つソレからはまるで『死』を予感させるだけの絶望が伝わる。

「碧理ッ！」

怒氣を孕めて再度名を叫ぶ。

ようやく彼女が後方で下がる氣配を感じながら俺は不敵に笑った。

「死中に活あり、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」  
全力だ。

氣を全身から噴き出させ、髪の毛を靡かせ、あたりに栗の花の匂いを漂わせる。

刀身、全身が白く色づき、周囲を靄が包んだ。

「人外決戦といこうか。大天狗」

口角をあげて巨軀を見上げながらクイッと手招きをする。

「その名で呼ぶなと言っただろうッ！」

巨刀を振り上げてテングの更に頭上へと跳躍して刀を振り下ろす。

芭蕉扇で止められるのを厭わず、その巨軀を足場に横へ移動し再度振るう。

山伏の衣服ごと、肉を裂く手ごたえを感じながらその場で後方に跳び、距離を置いてから、再度詰め寄り刀を振るう。

人外の動きに、関節、骨が軋む音を立てながらも何度、刀を弾かれようと、その度にテングの肉を削ぐ。

「楽しいなあ。大天狗」

自身の身体に切り傷を作りながら俺は嗤っていた。

「タクミ……」

目の前で繰り広げられる戦いに視線を向けながらアタシは唇を噛む。

自分の口から一筋の血が流れて、口内に鉄の味が広がるのも気にせず、拳を握りしめた。

“ 邪魔 ”

先に言われた彼の言葉通り、正にアタシは邪魔だっただろう。

妖氣、咆哮にあてられてその場にしゃがみ込んで動けなくなってしまう。

今、先の死を直観させる妖氣はすべてタクミへと集められながら、



彼は嗤って刀を振るっている。

器用に、テングの身体を足場に縦横無尽に動きまわり斬りつける。その動きはもやは人ならざる速さを生み、また相対するテングも人外よろしく、巨軀を思わせない身のこなしで彼の攻撃を受け止めていた。

手数はタクミが優勢だろう。

刀を打ち合いながらも、徐々にテングを切り裂く様に、思わず齒噛みする。

彼は、まだ3月にサムライになったばかりの新米退魔師だ。

アタシの方が2年先に、姉と一緒に現場に出ていたはずなのに、初めからその力量を感じていた。

そして、現在蒼佳は試練の為、家を離れている。

自分出来ること、自分がなすべきこと、それらを放棄し、今アタシはただの傍観者へとなり下がっていた。

「タクミ」

再度、彼の名を呼ぶ。

今、テングの芭蕉扇を持つ左手を斬り飛ばした。

圧倒している。というわけではない。

彼もまた、身体に傷を負い、無理な動きのせいか口から血を吐いている。

「……なにやってんのよ……」

太ももに拳を打ち付け震えを止まらせる。

両の頬を叩き、全身に力を込める。

「やってやるわよ」

彼の得意とする戦い方は室内戦。それも足場が多い場所での多次元的な動きだ。

今、彼は足場が地面とテングの巨軀しかない場所で戦っている。

「……もう、見るだけはイヤなのよ」

指を突き立て、印を結ぶ。

「もう、震えてただの傍観者はまっぴらよー」

タクミがテングに蹴り飛ばされ、その場を転がった。

「多重結界 “連”」

身体中から気が抜け落ち、足元がふらつくのを奥歯を噛みしめて留める。

タクミとテングを囲うようにいくつものピンク色の結界が四方に散らばり足場を作った。

「ブチのめしなさいよ！馬鹿タクミっ！」

受け身をとって、顔を上げた彼の名を罵声と併せて呼ぶと、彼は口元をニイっと開いた。

彼らの動きは見えない。

であれば、障害物のように先にいくつもの結界を展開するまでのこと。

本来、いくつもの結界を展開し続けるには気を消費するため、節約しながらセオリーである。

セオリーを破り、アタシは彼の周りに100、200、1000と結界を展開させる。

タクミがいくつもの結界を足場に、まるで飛ぶようにテングへと何度か切りかかり、ついに、その首を切り落とした瞬間、アタシはその場で意識を失った。

首を切り落とし、ドスンと地響きを立ててテングが崩れた瞬間、周囲の結界が夢散した。

「さんきゅー碧理」

恐らく源氣の使いすぎで倒れたのだろう。

俺は彼女がいた後方を振り返り賛美を送った。

氣の使い過ぎはもちろん自分自身でもある。

ふらつく脚で肩で息をし、このまま眠ってしまいたいほどの睡魔を堪えながら俺はほほ笑んだ。

ガサリ。

背後で物音と一緒に、ナニかが立ち上がる気配を感じて鳥肌が粟

立った。

消滅の証拠たる泡を見たか。

答えは否。

首を切り落としても、祓えない存在がいることを失念していた。憎々気に後ろを振り返ると、首より上の無いテングが立ち上がり、刀を天へと掲げていた。

「化け物かよ……」

悪態をつかずにはいられない。

柄を再度強く握り俺は受け止めようと刀を構えた。

「封印結界 // 獄極<sup>じごく</sup>」

瞬間、背後から声が響き、テングの巨軀を黒い結界が包んだ。

ドンっ！と結界の内側から殴りつける鈍い音と共に地面が揺れるが、強度が硬すぎるのか、ビクともしない。

「お疲れ様です。おサムライ様」

耳元で囁く声に背筋が伸び、勢いよく振り返る。

目の前には、金髪の髪に黒い狩衣をきた陰陽師と赤髪の結界師が立っていた。

「武蔵坊弁慶。平安時代にかの安倍晴明に封印されたテングです。指令内容は討伐ではなく封印ですよ。忘れていましたか」

結界師がつかつかと地面に転がるテングの頭部に近づき再度「獄極」と唱える。

頭部も同じように黒い結界が包んだ。

「まあ、まあ、彼も頑張ったんだよお。そこは褒めてあげないとお」

陰陽師が間延びした声でテングの頭部に近づいて自らの指をポキリと折り曲げた。

「喰らい、鎮めよ、白虎」

瞬間、空中に五芒星が現れ、巨大な白い虎が結界ごと喰らいつき、そのままテングの胴体にもかぶりついた。

彼女らの腕には金色の腕章が施され、きらりと光りが挿す。

「初めまして。私は特級陰陽師の 東司 育美。気軽に”お姉ちゃん”って呼んでね」

反対側に降り曲がった何本かの指を気にせず、握手するように腕を差し出す彼女。

金色の髪を後頭部でまとめるシニヨンヘアに、右目を前髪で隠すように垂らした、およそ20代後半の美女がほほ笑む。

胸部が突き出て、美咲をも超えるその豊かさに、谷間に深く深く一本の筋を刻んでいた。

「同じく、特級結界師の田井中 幸ユキです。幸せと書いてユキです。」

東司とは違い、まるで睨むようなきつい目つきでこちらに頭をさげる赤い髪を肩付近で編み込んだツインバードヘアの、こちらと同じく大きな乳房をもった女性。

“東司”と“田井中”という苗字に思わず背筋が伸びる。

東司とは賀茂・安倍からなる御三家であり、田井中とは、まさに先の会話で出た曾祖母に仕えた幸恵。

“田井中幸恵”の名字だ。

そして彼女たちの等級を表すように金色に輝く腕章は“特級”を示すパーソナルカラー。

言わば、現退魔師における最高戦力に他ならない。

「ども、賀茂タクミです。下級サムライです」

本来退魔師の中で序列はサムライの後に陰陽師、結界師と続く。

故に頭を下げるサムライは珍しいが、どうしても下げざるを得ない覇気に俺はぺこりと頭を下げた。

「……おサムライなのに、素直な子だね。ほらお姉ちゃんって呼んでいいよ」

頭を下げる俺の視線に谷間を寄せる金髪。

「……お、さすが最近武名を響かせるおサムライさんだ。気になるの？お姉ちゃんのおっ・っ・ぱ・い・い・♡」

思わず固まった視線に気がついたのか、東司と名乗る彼女が「触っていいよ」と耳元で囁いた。

「はしたないわよ。育美」

思わず触りそうになるのを寸前で止める。

「私をご存知でしょうか？賀茂殿」

冷たい目つきで田井中から言葉がかかり、俺は頷いた。

「もちろんです。幸恵さんには随分とお世話になりましたから」

柔らかな笑みを浮かべて返すも、彼女から怒気がゆらゆらと放たれる。

「その節は祖母がお世話になりました。以後もお見知り置きを」

まるで睨みつけるかのように笑わない彼女はペーリと頭を下げた。

「ユキちゃんはね、賀茂の一族を恨んでるんだよ。おばあちゃんを奪られたから」

「育美」

冷たい声音で東司の名を呼ぶ。

「ごつめーん。ユキちゃん。じゃあね。私たちは弁慶さんを再度封印するから。賀茂くんたちはもう帰っていいよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべて踵を返す彼女たちを止めるべく声をあげると、東司が真顔で振り返って手を突き出した。

「ここから先は、私たちの仕事。君たちはお家に帰って休みなさい。低級サムライさん」

顔が笑顔に変わるも目だけ笑っていない。そんな顔つきに思わずぎゅつと歯を食いしばった。

「あ、次会う時はちゃんと“お姉ちゃん”って呼んでね。上級にでもあがったら、お祝いにパイズリぐらいはしてあげるよ」

そう言つて再度谷間を見せつける彼女の後頭部を田井中が叩くと彼女たちはそのまま俺たちを置いて、闇となり消えていく。

「上等。ダブルパイズリさせてやるよ」

憎々し気に顔を歪めながら俺はその場で吐き捨てて、倒れ伏す碧理のもとへと向かった。

何はともあれ指令は成功だろう。

彼女を抱き、空を見上げると、やや赤みがかっており、日の出が近づくことを告げていた。



## 第参拾伍話 武蔵坊弁慶

「タクミ……」

目の前で繰り広げられる戦いに視線を向けながらアタシは唇を噛む。

自分の口から一筋の血が流れて、口内に鉄の味が広がるのも気にせず、拳を握りしめた。

“邪魔”

先に言われた彼の言葉通り、正にアタシは邪魔だっただろう。

妖氣、咆哮にあてられてその場にしゃがみ込んで動けなくなってしまう。

今、先の死を直観させる妖氣はすべてタクミへと集められながら、彼は嗤って刀を振るっている。

器用に、テングの身体を足場に縦横無尽に動きまわり斬りつける。

その動きはもやは人ならざる速さを生み、また相対するテングも人外よろしく、巨軀を思わせない身のこなしで彼の攻撃を受け止めていた。

手数はタクミが優勢だろう。

刀を打ち合いながらも、徐々にテングを切り裂く様に、思わず齒噛みする。

彼は、まだ3月にサムライになったばかりの新米退魔師だ。

アタシの方が2年先に、姉と一緒に現場に出ていたはずなのに、初めからその力量を感じていた。

そして、現在蒼佳は試練の為、家を離れている。

自分に出来ること、自分がなすべきこと、それらを放棄し、今アタシはただの傍観者へとなり下がっていた。

「タクミ」

再度、彼の名を呼ぶ。

今、テングの芭蕉扇を持つ左手を斬り飛ばした。

圧倒している。というわけではない。

彼もまた、身体に傷を負い、無理な動きのせいか口から血を吐いている。

「……なにやってんのよ……」

太ももに拳を打ち付け震えを止まらせる。

両の頬を叩き、全身に力を込める。

「やってやるわよ」

彼の得意とする戦い方は室内戦。それも足場が多い場所での多次元的な動きだ。

今、彼は足場が地面とテングの巨軀しかない場所で戦っている。

「……もう、見てるだけはイヤなのよ」

指を突き立て、印を結ぶ。

「もう、震えてただの傍観者はまっぴらよー」

タクミがテングに蹴り飛ばされ、その場を転がった。

「多重結界 “連”」

身体中から氣が抜け落ち、足元がふらつくのを奥歯を噛みしめて留める。

タクミとテングを囲うようにいくつものピンク色の結界が四方に散らばり足場を作った。

「ブチのめしなさいよ！馬鹿タクミっ！」

受け身をとって、顔を上げた彼の名を罵声と併せて呼ぶと、彼は口元をニイっと開いた。

彼らの動きは見えない。

であれば、障害物のように先にいくつもの結界を展開するまでのこと。

本来、いくつもの結界を展開し続けるのには氣を消費するため、節約しながらがセオリーである。

セオリーを破り、アタシは彼の周りに100、200、1000と結界を展開させる。

タクミがいくつつかの結界を足場に、まるで飛ぶようにテングへと何度か切りかかり、ついに、その首を切り落とした瞬間、アタシはその



場で意識を失った。

首を切り落とし、ドスンと地響きを立ててテングが崩れた瞬間、周囲の結界が夢散した。

「さんきゅー碧理」

恐らく源氣の使いすぎで倒れたのだろう。

俺は彼女がいた後方を振り返り賛美を送った。

氣の使い過ぎはもちろん自分自身でもある。

ふらつく脚で肩で息をし、このまま眠ってしまいたいほどの睡魔を堪えながら俺はほほ笑んだ。

ガサリ。

背後で物音と一緒に、ナニかが立ち上がる気配を感じて鳥肌が粟立った。

消滅の証拠たる泡を見たか。

答えは否。

首を切り落としても、祓えない存在がいることを失念していた。

憎々気に後ろを振り返ると、首より上の無いテングが立ち上がり、刀を天へと掲げていた。

「化け物かよ……」

悪態をつかずにはいられない。

柄を再度強く握り俺は受け止めようと刀を構えた。

「封印結界 // 獄極」

瞬間、背後から声が響き、テングの巨軀を黒い結界が包んだ。

ドンっ！と結界の内側から殴りつける鈍い音と共に地面が揺れるが、強度が硬すぎるのか、ビクともしない。

「お疲れ様です。おサムライ様」

耳元で囁く声に背筋が伸び、勢いよく振り返る。

目の前には、金髪 of 髪に黒い狩衣をきた陰陽師と赤髪 of 結界師が

立っていた。

「武蔵坊弁慶。平安時代にかの安倍晴明に封印されたテングです。指令内容は討伐ではなく封印ですよ。忘れていましたか」

結界師がつかつかと地面に転がるテングの頭部に近づき再度「獄極」と唱える。

頭部も同じように黒い結界が包んだ。

「まあ、まあ、彼も頑張ったんだよお。そこは褒めてあげないとお」

陰陽師が間延びした声でテングの頭部に近づいて自らの指をポキリと折り曲げた。

「喰らい、鎮めよ、白虎」

瞬間、空中に五芒星が現れ、巨大な白い虎が結界ごと喰らいつき、そのままテングの胴体にもかぶりついた。

彼女らの腕には金色の腕章が施され、きらりと光りが挿す。

「初めまして。私は特級陰陽師の 東司 トウジ 育美 イクミ。気軽に”お姉ちゃん”って呼んでね」

反対側に降り曲がった何本かの指を気にせず、握手するように腕を差し出す彼女。

金色の髪を後頭部でまとめるシニヨンヘアに、右目を前髪で隠すように垂らした、およそ20代後半の美女がほほ笑む。

胸部が突き出て、美咲をも超えるその豊かさに、谷間に深く深く一本の筋を刻んでいた。

「同じく、特級結界師の田井中 ユキ 幸です。幸せと書いてユキです。」

東司とは違い、まるで睨むようなきつい目つきでこちらに頭をさげる赤い髪を肩付近で編み込んだツインバードヘアの、こちらと同じく大きな乳房をもった女性。

“東司”と“田井中”という苗字に思わず背筋が伸びる。

東司とは賀茂・安倍からなる御三家であり、田井中とは、まさに先の会話で出た曾祖母に仕えた幸恵。

“田井中幸恵”の名字だ。

そして彼女たちの等級を表すように金色に輝く腕章は“特級”を

示すパーソナルカラー。

言わば、現退魔師における最高戦力に他ならない。

「ども、賀茂タクミです。下級サムライです」

本来退魔師の中で序列はサムライの後に陰陽師、結界師と続く。

故に頭を下げるサムライは珍しいが、どうしても下げざるを得ない  
覇気に俺はぺこりと頭を下げた。

「……おサムライなのに、素直な子だね。ほらお姉ちゃんって呼んで  
いいよ」

頭を下げる俺の視線に谷間を寄せる金髪。

「……お、さすが最近武名を響かせるおサムライさんだ。気になるの  
？お姉ちゃんのお・っ・ぱ・い・♡」

思わず固まった視線に気がついたのか、東司と名乗る彼女が「触っ  
ていいよ」と耳元で囁いた。

「はしたないわよ。育美」

思わず触りそうになるのを寸前で止める。

「私をご存知でしょうか？賀茂殿」

冷たい目つきで田井中から言葉がかかり、俺は頷いた。

「もちろんです。幸恵さんには随分とお世話になりましたから」

柔和な笑みを浮かべて返すも、彼女から怒気がゆらゆらと放たれ  
る。

「その節は祖母がお世話になりました。以後もお見知り置きを」

まるで睨みつけるかのように笑わない彼女はぺこりと頭を下げた。

「ユキちゃんはね、賀茂の一族を恨んでるんだよ。おばあちゃんを奪  
られたから」

「育美」

冷たい声音で東司の名を呼ぶ。

「ごつめーん。ユキちゃん。じゃあね。私たちは弁慶さんを再度封印  
するから。賀茂くんたちはもう帰っていいよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべて踵を返す彼女たちを止めるべく声をあ  
げると、東司が真顔で振り返って手を突き出した。

「ここから先は、私たちの仕事。君たちはお家に帰って休みなさい。

低級サムライさん」

顔が笑顔に変わるも目だけ笑っていない。そんな顔つきに思わずぎゅつと歯を食いしばった。

「あ、次会う時はちゃんと」お姉ちゃん」って呼んでね。上級にでもあがったら、お祝いにパイズリぐらいはしてあげるよ」

そう言つて再度谷間を見せつける彼女の後頭部を田井中が叩くと彼女たちはそのまま俺たちを置いて、闇となり消えていく。

「上等。ダブルパイズリさせてやるよ」

憎々し気に顔を歪めながら俺はその場で吐き捨てて、倒れ伏す碧理のもとへと向かった。

何はともあれ指令は成功だろう。

彼女を抱き、空を見上げると、やや赤みがかっており、日の出が近づくことを告げていた。

## 第参拾陸話 阿呆

「そう……幸恵さんのお孫さんが……」

眠りから覚めた碧理のテングでのことの顛末を話すと彼女は下を向き、身体を震わせた。

ここは、先の河童の時にもお世話になった病院の一室。

もはや常連になりつつある俺たちは、同じ部屋で入院となり、ややスペースの空いた病床で半身を起こして向かい合っていた。

「テングも倒せなかったわね……」

シーツを握り、拳に涙を落とす彼女に俺は明るい声音で返した。

「そもそも、寺社仏閣に祀られている妖怪は、封印元を破壊しない限り、消滅しないのを忘れてたよ」

俺のことばに「そうね」とどこか心ここに非ずの声音で返事をする彼女に思わず苦笑いが浮かんだ。

機関で習ったことを忘れていた。

祀られる怪異は祀られるだけの理由がある。

当時に討伐が困難なレベルによる永代封印。それゆえに祀り、畏れ、敬う。

故に、かの大天狗もとい武蔵坊弁慶も言ってしまうえば怪異であれど半ば、神の一種であり討伐は困難だったと言わざるを得ない。

「……でも、アタシは足手まといだったわ……」

彼女らしくない、しおらしい反応に眉を顰める。

「碧理は頑張ってるさ。それに腔内<sup>中</sup>射精<sup>だ</sup>で徐々に器も広がってるし焦ることはない」

彼女の求める言葉ではないだろうことは理解している。

それでも彼女に無理を強いることはどうしても出来ない。

故に軽口を載せての言葉に碧理は「ふざけないでよ」と俺を睨んだ。

「タクミは良いわよね。人並外れた精気があつて。まさに人外よ」

「碧理も多いほうじゃないか」

彼女の言葉に思わず即答してしまう。

彼女は下級なれど、氣の多さはそれこそ目を見張るレベルであり、そこを卑下するほどではないのだ。

「人なみにはでしょ」

もはやややくそと言った表情を浮かべる彼女にため息をついた。

「アタシも、あなたやお姉ちゃんのように強くなりたい。次にテングと戦った時には足手まといにならないように。」

それこそ、ぬらりひよんを前にした“幸恵さん”のようにツ！

自身の太ももに拳を何度も振り下ろす彼女に「でもどうやって……」と言葉が漏れた。

「その話、お姉ちゃん」が聞いて差し上げましょう!!」

病室が勢いよく開かれて金髪の女性が声をあげた。

手にはフルーツの盛り合わせを携え、今日は陰陽師を表す狩衣ではなく、ピチつとしたスーツスタイルでその胸部を強調していた。

特級陰陽師の東司 育美その人である。

「……誰よ……」

涙を拭いながら闖入者を碧理が睨み、俺は苦笑いを浮かべた。

「さつき言った特級の陰陽師だよ。御三家の東司 育美さん」

俺の言葉に碧理が口を開けて呆然とする。

「少女よ！その願い。この“お姉ちゃん”が託された！」

手ぶらな方の右手には包帯が巻かれているのを厭わず、バシバシと碧理の肩を叩く。

「っ！痛いわね！誰がお姉ちゃんよ」

衝撃に顔を歪める碧理を無視して東司が俺に振り返り、胸元に手を突っ込み、によきによきと一振りの刀を取り出し突き付けた。

「これは？」

摩訶不思議なポケットが谷間の下にでもあるのか。

凡そ、式神の能力だろう。

通常ではありえない長さの太刀が谷間に納められていたことを無視して物について問う。

「おめでとう。賀茂くん。これが中級の証である専用の斬魔刀だよ」

やや人肌なみに暖かい太刀を受け取り鞘から刀身を覗く。

「妖刀 叢雲<sup>むらぐも</sup>。列記とした呪いが付与できる、君の専用武器さ」

前髪で隠していない左目を細める東司は碧理に向き直り、「君にはこれを」といって、

自身のスカートに下から上へと挿し込んで、お札の束を彼女へ差し出した。

「い……いらないわっ!」

碧理が顔をひきつけながら答える。

それはそうだろう。

もつと、マシな出し方があるだろうに、この人物、実力は本物だろうが、どこか頭がおかしいらしい。

「……う・なんでかな。この特級陰陽師の東司様ご謹製の結界用護符だよ?」

心底不思議そうに首を傾げる彼女に碧理が「そもそもなんて所から出してるのよ」

とついにはツツコミが入ってしまった。

「ああ、ごめん。ちよつとしたお茶目さが出てしまったんだ。別にここじゃなくても、ほら」

そう言っただけで空中にむけて手あげると次元がゆがみ、黒い亀裂が不意に現れた。

「便利だよ。なんでも入るから。ほら、これもお近づきの印にどうぞ」

亀裂の中に手を差し込み取り出した更に盛られた焼き鳥。もうもうと湯気を放ち、まるで出来立てと言わんばかりのそれを碧理へ突き出す。

「いちいちチョイスが気持ち悪いわよ!」

金切声をあげて突っ込む彼女に東司はため息をついて、俺に振り返る。

「君にはこれをあげよう」

コップに入れられた透明の液体を突き出すので、ペコリを頭をさげて受け取ってそのまま飲み干す。

丁度喉が渴いていたところだ。

喉をするすると透き通り口内に塩気のような酸味が広がった。

「ありがとうございます。ちなみにこれはなんだったのでしょうか？」

空になったコップを指さすと彼女はいらすらっぱい笑みを浮かべる。

「私の潮よ」

「なんてもんの飲ますのよ！アンタ！」

瞬間、碧理がベッドから立ち上がった。

「なるほど。道理で飲みなれた味だなと思いました」

俺の言葉に「あ、そうなの、じゃあ今度は愛液を持ってくるね」とウインクをする彼女に「ご自由に」と答えて破顔する。

「それで、いつまで冗談は続く感じですか？」

俺の言葉に彼女の目つきが、値踏みするようなものへと変化した。

「賀茂匠下級サムライ並びに賀茂碧理下級結界師。本日ヒトニーマルをもつて中級への昇格を承認す。しかと励め」

重圧を載せた声音に思わず身が震える。

「つて、帝様みかどからの御下知よ。あ、あと君たちのお姉ちゃん、あ、私もお姉ちゃんだからややこしいわね。

賀茂蒼佳中級陰陽師についても同時刻に上級へと昇格したわ。

もつとも彼女については“蟲毒”から生きて帰ればの条件付だけどねっ」

先の表情とは打って変わりふざけた顔つきに戻る彼女は「さて碧理ちゃん」と顔を彼女へ向けた。

「賀茂蒼佳の現時点の状況についてはお答えできません。御三家の試験については正式に守秘が私のも課せられています。

しかしながら、あなたが望む“強くなること”についてはある程度、助言はできるつもりよ」

そこにはいままでの悪ふざけをしていた人物には全く見えない貫禄があった。

「貴方、ユキ。って言っても伝わりにくいわね。田井中幸恵さんのお孫さん。私のバディーの特級結界師の田井中幸ユキの元へ行きなさい」

東司の言葉に碧理が息を詰まらせる。



「貴方の術式は幸恵さんの影響が若干残ってるわ。でもそれは不完全で強度も及ばない。

それをユキの元で完成させなさい。

もつとも場所が関東だから彼とは離れるわ」

そう言つて顎で俺を指差す東司に、彼女は首を横に振つた。

「出来ないとは言わせないわよ」

碧理との距離を詰めて声音を強める。

「賀茂蒼佳がもし蠱毒を成功させた暁には貴方完全にチームの足手纏いになる。それでも良いというのならそのままそこでへこたれてなさい。

私は立ち上がる者にしか手を差し伸べないわ」

不意に碧理が俺に視線を向けた。

「タクミは洗濯も料理も出来ないわ」

「家事代行を雇いなさい」

「掃除なんでもつての外できつと部屋を散らかすわよ」

「家事代行を雇いなさい」

「アタシがいなくて家に他の女をきつと連れ込むわよ」

「そのどこがいけないのかしら。」

男子、ましてや精氣溢れるサムライは国の宝よ。

それこそ賀茂蒼佳より彼の特殊な事情。

それこそ女に膾炙射精をするたびに器が拡がるのは支部を通して

私も知っているわ。どんどんSEXしなさいな」

「いつか孕ませるわよ」

「それも上等。精氣溢れる男子が成す子は総じて氣が普通より多いし、願ったり叶ったりじゃない」

東司の言葉に思わず唸つてしまう。

それは初耳だ。

「アタシは彼のそばにいたい」

碧理の瞳から大粒の涙が溢れ出た。

「そばに居たいなら努力しなさい。このままだといつか貴方は死ぬか切り捨てられるわよ」

東司がため息一つ吐いてから続ける。

「自分で決めなさい。このままその立場にしがみつき自分は足手まといと卑下するままなのか。」

それとも彼の横に立ち、怪異から国を救うべく前に進むのか。次は言わないわよ。

貴方がどうしたいかを」

暫しの沈黙の後、碧理が項垂れてから「お願いします」とか細い声で答えた。

「決まりね。じゃあ早速だけど、今から関東に戻るわよ」

東司の言葉に俺と碧理の腑抜けた声が重なる。

「療養なんて東司家でいくらでも出来るわ。私たちには時間が無いのよ」

そうだ。何故こんなにも彼女が協力的且つ、精力的なのか。

根本の理由がわからずに彼女に尋ねた。

「安倍家の嫡子及び次女が昨夜死亡したわ」

その言葉にゴクリと息を飲み込む。

「弁慶さんの妖氣に当てられた結果、自暴自棄になり自殺したそうよ。」

高々第十位階の妖氣でね」

彼女の言葉であるが、それはたかだかでは決して無い。

奴の妖氣はそれこそ精神を蝕み死を予感させるだけの鋭さがあったのだ。

「それに『百鬼夜行』が近いの。私たちはそれまでに有望な退魔師を育てるのが急務であり、先のテング戦ではそれが裏目にでたわ。

将来有望な退魔師を派遣してこのザマよ。

生き残ったのは貴方達だけ。

あ、コムロっていうおサムライ様も生き残ったけれど、片腕欠損の上、除隊申請をしてこれが可決された」

彼女の言葉に碧理が絶句する。

それなりに軽口を言い合う仲の者の者の死だ。

それも自死となれば尚更か。

「分かりました。ちなみに俺には何か助言を頂けないのですか？早く

上級になれるように」

俺の言葉に眉をピクリとあげて彼女は笑った。

「何？そんなに私にパイズリをして欲しいのかしら」

彼女が谷間を寄せて見せつけながら口角を上げる。

「貴方はこれまで通りいっぱいセックスしなさい。それが近道よ」

彼女の言葉に「はあ」と間抜けた返事を返した。

「あ、それと、ちよつと指出してくれる。利き手じゃない方でいいわ」

不意にこちらに歩み寄る彼女に俺は反射的に左手を差し出す。

「よいしょ」

ポキリ。

まるで菓子折るように俺の人差し指と中指を一緒に折り曲げ、小気味よい音が部屋に響いた。

「——っッ！」

不意に訪れた痛みに俺は手を引き阿呆を睨みつける。

「貴方に私の術式を付与したわ。つくよみのみごと月読尊のね。

これで貴方も私と同様に次元を操れるわ。

もつとも物を入れるだけで出すことは出来ないけど」

真顔でそう言う阿呆が「手を伸ばして空間が避けるように意識してみなさい」と告げる。

心底、その巨大な乳房を叩きたい心情を抱きながら俺は指示通り、心に願ひ、空中に手を伸ばす。

寸前、指の先で空間が裂けた。

「貴方は、毎日3回はオナニーして容器はなんでも良いから精液を三人分、そこにしまつて。

それを私とユキと彼女はマンコへと毎日流し込むから」

鮮度が落ちないことは先の焼き鳥で十分伝わっている。

しかしながらこの阿呆はそんなことのために俺の指を2本折ったのか。

思わず憎々し気に目を吊り上げてしまうのを彼女はため息を返した。

「……そうね。流石にいきなり折ったことは謝るわ。お詫びに一つ。

もし強くなりたいたいならまた鞍馬寺に行つて弁慶さんに話してみなさい。何かしらの収穫があるかもしれないから」

弁慶とは先の大天狗だろう。

それはお前達が封印したのだろうと俺は睨みながら首を傾げる。

「説明もめんどくさいからとりあえず行つてみなさいな。じゃあ、彼女は連れて行くわね」

俺から視線を外し、俺の折れ曲がった指と阿呆の顔を交互に見比べながら呆ける碧理の元へと歩み寄り、そのまま肩抱きをして持ち上げる。

「——えっ？あなの、ちよつとっ！」

ジタバタと東司の肩で暴れる彼女を気にせず、

「それじゃあ、ザーメンよろしくねー」

つと手を振りながら彼女は碧理を連れて去って行く。

瞬間に訪れる嵐が過ぎ去った後のような静けさの中で俺のため息が響いた。

「絶対に気絶するまで犯してやるわ、あのクソ金髪」

反対に折れ曲がった指を見つめながら、俺の心がメラメラと燃えるのを感じながら俺はナースコールを押す。

「すいませーん。指を折られましたー」

俺の言葉に駆けつけたナースが叫び声を上げるのは言うまでもなかった。

## 第参拾漆話 水泳部会議

「カモっちも大変だねえ」

3日ほどあれから入院し、再度学校に復帰した際に横の先に座るちなみが俺の指の包帯を見た。

「それで碧理っちは関東に行っちゃったってことね」

ふーんと息を吐きながら背伸びをして俺の顔を覗く。

「それじゃあ、溜まってるでしょ？アタシが抜いてあげるよ」

目の前で握った拳を上下に動かすジェスチャーをする彼女に「お願いします」と笑顔で答える。

「しようがないなあ。カモっちのおちんちはスケベだもんねっ」

そう言つてはにかむ彼女の手を引いて、復帰早々にトイレへ駆け込んだ俺を碧理が知れば怒るだろうか。

ふと、そんなことが脳裏によぎった。

「なんか、お前ら距離近くないか？賀茂くんと」

部長のルルが訝しげな目つきで口を開いた。

放課後の部活。

久方ぶりに出席した水泳部の活動はあいも変わらずプール掃除である。

連休中にクルミの実家でバイトしてからその後入院となったので、久しぶりに顔を合わせた恵とクルミがベタベタと俺の身体に触りながら鼻の下を伸ばした。

美優はプールサイドで眠っている。

「へっ、べ、別にそんなことないっすよ？」

典型的な反応をしながらその場で口笛をびゅくと吹く二人に俺は思わず苦笑いを浮かべる。

「おい、お前ら、アタシに秘密ごととかあつたら分かつてるよな」

もはやヤンキーの番長ごとく、二人を脅すルルに、彼女たちは「本

当にないっすから」となんとか逃げ切ると、

ルルは納得とは言い難い表情を浮かべながらそのまま作業へと戻っていく。

「ふ、脳筋部長のクセに中々に鋭いやつめ」

ルルの背中を見送りながら、クルミがぼやき、恵も「マジでそれな」と同意する。

「とりあえずたくみ君、またエッチしようよ」

下卑た笑みを浮かべ、鼻の下を伸ばす二人に

「いいですよ。また近々しましうね」と笑顔を浮かべて返す。

その後、ふと背後から声が響いた。

「へえ。ずいぶんと面白そうな話をしているのね」

落ち着いた声音に二人の背筋がピンと伸びて、ゆっくりと後ろを振り返ると

ナナが冷笑を浮かべてその場に立っていた。

「ルル。この子たち、たくみ君とエッチしたんだってー」

「あ、副部長、ちよっ!」

二人がナナを止めるもすでに遅く、最終的に急遽水泳部緊急会議が執り行れるのは当然の結果だった。

「ほう、それでお前らは賀茂くんが入部した次の日に処女を卒業したということだな」

プールサイドにて恵とクルミを正座させ、ルルとナナ、美咲が二人を囲うように見下ろした。

「襲ったのか?」

ルルの言葉に全員がピクリと反応し、最終的に横に立つ俺に視線をおくる。

それぞれが俺の身を案じるような視線に俺は首を横にふった。

「どっちかと言うと、俺が襲いましたね」

俺の言葉に当人たち以外が目を見開いた。

「……え?たくみ君……もし二人を庇おうとしているなら、正直に言うべきだよ……?」

美咲がその大きな胸をプルンと動かしながら口を開く。

「いや、本当だよ。一緒にご飯食べて、ムラムラしたから誘った。さすがに初日からセックスするのは早すぎたなと内心反省しているところだよ」

シーンとした静寂が周囲を包む。

「も、もしかしてクラスの当番の子たち……も?」

俺の発言に美咲が確信にせまるべく声を震わせた。

「当番?」

同級生は彼女だけであり、周囲が首を傾げるのも気にせず俺は「そうだ」と肯定した。

「今んところ、全員おいしく頂いてるね」

「あ、ついでに言えばそこで寝ている美優先輩ともやりましたね」

前世でいうところのサークルクラッシュャーだろうか。

俺の言葉に全員が寝転がる美優に視線を移し、ナナが彼女を枕を蹴飛ばした。

「——ギニャー!」

頭を支えるモノを無くして後頭部を打ち声を上げる美優。

脛を擦り回りをキョロキョロと見渡して硬直した。

「……ん?これはなんの集まりかな?」

自身を刺す視線に頬を引きつかせる彼女にナナが拳骨を落として微笑んだ。

「お話をしましょうか」

アイアンクローをするように頭を固定して俺の方に顔を動かし視線が合致した。

10秒後には三馬鹿トリオと何故か俺も含めて正座させられ、苦笑いが漏れた。

「申し訳ありませんでした」

ルルではなくナナ覇王に頭を下げる三馬鹿であった。

「まあ、シてしまったものは仕方ない。今すぐにもお前らタコ殴りにしてやりたいが今更言ってもしょうがないだろう」

手をパンパンと叩きルルが口火をきつた。

「いや、殴られてるし、ウチら」

口を尖らせる恵の頭にはいくつものタンコブが連なっていた。

「それでだ、まあこれは賀茂くんが復帰してからと考えていたのだが、  
どうだろう。」

新入生の歓迎会をちゃんとしてなかったし、この際改めて催そうと  
思っつてな。

今からするか」

急な提案にクルミがおずおずと手を挙げる。

「あの、わたしは今日は家の手伝いが……」

「では、お前は抜きで」

ルルの言葉にクルミが肩を落とした。

「他の連中は今日は予定がつくか？」

「どうやら、不参加はクルミだけらしい。」

彼女以外は予定が付くらしく急遽歓迎会の開催がここに決定され  
た。

「暴走機関車……」

クルミがポツリと言葉を漏らした結果、彼女のタンコブが更に増え  
ることになり、俺は心の中で合掌した。

「じゃあ、改めて美咲と賀茂くんの入部を祝って」

〃乾杯〃

最終的な折衷案として、俺たちは再度クルミの実家で舌鼓を打つて  
いる。

「いやあ、タクミ君が無事で何よりよ!」

注文を取りに来たクルミの母、カレンが俺の背中を優しく撫でて  
微笑んだ。

「そういうえば、あの日以来ですね。ご無沙汰しております」

1週間も経ってないのに、何故かそんな言葉が漏れるのを「また、  
時々お手伝いをお願いしてもいいかしら。常連さんが〃タクミきゅ  
んは〃つてうるさいのよ」



頬に手を添えて笑う彼女に「タイミングが合えばまた手伝いますね」と答える。

「貴方、まさかクルミ先生のお母様にも手を出したの？」

美咲がカレンさんが去った後、ふとそんな言葉を漏らす。

「ん？まだだよ。単純に連休中にお店を手伝っただけ」

俺の言葉に「まだって……」とピクピクと頬を動かす美咲。

「いや、タクミくんって多分貴方達が思ってる男子とだいぶ違うから」  
突き出しに箸を伸ばしながら恵が口を開く。

「おちんちんも大きいし、太いし、硬いし、2連射、3連射も余裕で精液の量もエグいから」

あまり食事中に好ましくないワードをバンバン言いながら摘む。

あ、突き出しのおひたしが美味い。

「もはや凶器。美優のおまんこ壊されるかと思った」

同意するようにコクコクと頷く美優に恵は「そもそもやるんならうちも誘いなさいよ」と声を上げるも

「お互い様。抜け駆けは良くないよ」と彼女も口を返した。

「とんだ性豪ね」

ふとナナが俺を見てそう言った。

確かにその通りだろう。

尤も俺が異常転生者なものもあるが、サムライは基本性欲が強いのだ。

「これはオフレコにして欲しいんだけど……」

やってきた唐揚げに頬張りながら彼女達に俺の特異体質について告げた。

「……なるほど膣中内射精出すればするほど賀茂くんは強くなると……」

どこか目を泳がしながらルルがポツリと呟いた後、美咲が机を叩いた。

「詭弁よ。貴方はそう言って女性を抱きたいだけでしょ！」

「いややら彼女だけはこの世界で珍しい、貞操観念が強いヒトらしい。」

「詭弁でもなんでもないよ。一応守秘事項だから本当は言っちゃダメ

なんだけど。

とにかく俺は強くなるためにはいくらでも女性を抱くし、膣内射精もする。

だからクラスの当番制についてもお互いが同意の上ならそのまま犯すよ。

恵先輩や、クルミ先輩、美優先輩。それにルルさんやナナさんが協力してくれるなら喜んで抱かせてもらいたい」

俺の言葉にルルとナナがゴクリと唾を飲み込んだ。

「あ、でも部長達は許嫁がいるよ」

ドリンクを飲みながら美優が補足する。

「そうよーだから部長達は置いておいて、タクミくんはウチとセツクスしよ！」

身体を寄せる恵の頭を撫でる。

もちろんそのつもりである。

「許嫁と……言ってもただの親の決めたことだ……」

ルルが百面相を浮かべながら苦しそうに言葉を吐いた。

寝取られるのは趣味ではないが、寝取る方は個人的には問題ない。

ナナも「ちよつと……ルル……」と口では姉を窘めるが、その顔がどろろと朱が挿している。

「美咲はしたい？俺と」

普段より彼女の下の名を呼ぶことはどこか避けていたいたが、俺は敢えて彼女の名を呼び問う。

大きな胸部の下で腕を組み、目を吊り上げる彼女は「遠慮するわ」とぶつきらばうに答えた。

「ルルさんとナナさんはどうですか？許嫁が居ることは初めて知りましたが、コトは単純です。」

俺がサムライとして強くなるために協力するか、しないか。どうしますか」

ここで敢えて協力と協調して双子に問うと姉がポンっと手を叩く。「そうだーあくまで協力だ！協力をしよう！」

ただの建前である。

それでもルルは破顔しながらナナに顔を向けた。

「ナナ。あくまでも協力だ。それにいざ結婚となった時に私たちが不得手ならば、相手の男性に失礼なこともあるかもしれない。」

「ここは賀茂くんに協力してはどうだろうか」

「この世界で処女信仰は低い。」

「女性は経験をする前に自身で破瓜をする。」

いざ、本番となった際に血を出せば男性のヤル気が削られる可能性があるのだ。

「……協力ねえ……」

目を細めて俺を見つめるナナ。

「まあ、タクミ君には助けてもらった恩もあるし、エッチをすればそれが君の為になるなら……ええ。協力しましょう」

やや勿体ぶって答える彼女に俺は「ありがとうございます」と言葉を返し、頭を下げた。

「美咲は本当にいいの？」

再度、腕を組む彼女に視線を向ける。

「何度も言わせないで」

にべもなく断り横を向いた彼女に、俺は嗤った。

身持ちの硬い女。

手に入りそうで入らない。

必ず外堀を埋めていつか収穫しよう。

ふと農園の風景が思い浮かぶのをかぶりを振って霧散させる。

「それじゃあ、早速行きましょうか」

俺の言葉にルルとナナはどこに？と首を傾げる。

「もちろん、ヤリに」

満面の笑みを俺は彼女達に向けるのであった。

## 第参拾捌話 寝取り♡

「……………これが、チンポ……………」

ゴクリとルルが唾を飲み込む音が部屋に響く。

横に座るナナも目を見開いて固まっていた。

最終的に俺とルル・ナナ姉妹で現在ラブホテルへとチエツクインしている。

恵と美優の二人が来たがっていたが、今回は遠慮願ったのだ。

次いでに言えば美咲は冷たい視線を俺に送りながら帰っていった。

「見るのは初めてですか？ 婚約者のとかは？」

ベッドに座る彼女たちに尋ねると首を横にふった。

「何度も言うが、私たちの許嫁はあくまで親が勝手に決めたことだ。

私も。ナナも、その方と必ず結婚するというわけではない」

ルルの言葉にナナも頷いた。

どうだろうか。

聞いた所によると彼女たち、水川家は京都で有数の良家の子女である。

故に、彼女たちの行儀作法はいちいちが完璧であり、それは家の教育が厳しいことを物語っている。

それに加えて相手の婚約者は水川家が経営する企業の最重要取引先の息子だと言うのだから、恐らくは結婚するのだろう。

「……………たしか、お相手は40歳でしたか」

チンポを横にフリフリと振りながら訪ねると、釣られるように彼女たちの視線が連動するように動く。

「ああ、一応な。私たちを第8、第9夫人として迎えたらしい」

この世界では一夫一妻の家は珍しい。

ほとんどが一夫多妻制であり、二人は同じ人物との許嫁として親が決めているらしいのだ。

18歳巨乳を姉妹丼で娶る。

なんと破廉恥な男だろう。

自分のことを棚に上げながら俺はすでに勃起したチンポをシゴく。

「こんな感じで擦ってけると男性は気持ちよくなります。はい。ルル先輩、しごいてみてください」

ぐいっと彼女の元へ一歩歩みより眼前へと腰を突き出す。

紺色のポニーテールを揺らして一歩身を引くルルに「怖くないですよ」と笑みを浮かべる。

「……ああ。すまん。思わずな……」

頬を引くつかせ、彼女は目の前に突き立った肉棒へと手を伸ばす。

「ツ！か、硬いなっ！」

ぎゅっ、ぎゅっ、と握りこんで硬さを確かめる彼女に俺は顔をしかめた。

「ちよつと、痛いですね」

俺の言葉に、ルルが手を放して謝るので「初めは優しくでお願いしますね」と笑みを浮かべる。

彼女がコクリと頷き再度手をチンポに伸ばして上下に摩った。

「んっ。そうです。気持ちいいですよ」

彼女の頭を撫でながら褒めると顔をあげて「そうかつ！」と満面の笑みを浮かべる。

シュっ。シュっ。シュっ。シュっ。

摩る音が部屋に響く。

抽送により更にビキリと強度を高めて、鈴口から透明な液体が出るのを横で見ていたナナが最初に気がつき、「あっ」と短く声を漏らした。

「啞えて下さい」

俺の言葉にルルは頷き、そのままパクリと頬張った。

「ナナさんは俺に抱きついてキスして下さい」

じゅぽ、じゅぽと初めてながらも淫らな音を響かせて顔を前後に動かすルルを見つめていたナナを呼ぶ。

その場から立ち上がり近づく彼女の腰を抱き寄せ、口内に舌を伸ばした。

「——っ！」

一瞬、目を見開いて口元に力を強めるも、すぐに弛緩し、ぬちやぬ

ちやと舌を絡ませる。

「ナナさんのおっぱいって大きいんですよね」

ワイシャツの上から乱雑に手を乗せて揉みしだく。

「——ンツ」

指が沈み込み乳房が形を変える。

スカートを捲り、臀部に手を伸ばすと割れ目に生地が食い込むTバックに俺は口角を上げてプリンッと張りのあるそれを叩いた。

「——アあっ」

短く声を漏らす妹に一心不乱にフェラをする姉

「ナナさんって意外にスケベな下着着てるんですね」

高校生でTバックとは。

碧理や、ちなみなどは俺の好みに合わせるようにTバックを好んで穿いているが、

こんな世界でも女子高生でTバックはマせている。

俺の言葉に彼女は舌を這わせながら「お母様がそうしろと言うので」とトロンとした目つきで答える。

「へえ」

きつと、許嫁が俺と一緒にのタイプなのだろう。

ただ、〃気にくわない〃という気持ちに肚より湧き上がる。

臀部を力強く揉みしだくとナナが背筋を伸ばした。

「ルルさん。そろそろイキますので、ちよつと我慢して下さいね」

俺の言葉に「ふあまん？」と首を傾げる彼女の後頭部に手を回し、そのまま喉奥目掛けて腰を突き出す。

「グツ!!」

目を見開き、顔をしかめる彼女を無視してのイラマチオ。

グポ、グポと音を鳴らし、口の隙間から濃厚な唾液が床へと落ちる。別に全ての女が俺のという大それた考えなどは持ち合わせていない。

但し、俺が〃良い女〃だと思った者はすべからず俺の女なのだ。

グポっ!ぐぼっ!ぎゅこっ!

「ちゃんと全部飲んで下さいね」

更にピストンを早めて俺はルルの喉奥に精を放つ。  
遅れて、彼女の鼻から俺の精液が逆流する。

〃搾取されるのは前世で充分だ。今世では俺が搾取する。〃  
咳き込むルルの頭を撫でながら俺は嗤った。

「——いっ！アアッ！っ！、ま、まってエっ！」

パンっ！パンっ！パンっ！

ナナが鳴き声をあげて身体を震わせる。

「チンポっ！チンポ！やばいっ！チンポっ！」

ズブリと引き抜き、そのままルルへと挿入し腰を動かす。

姉妹丼と言えば膣比べだろう。

ルルを仰向けに寝かせ、ナナを彼女の上で尻を突き出させての交互への挿入。

ルルはタコ壺タイプの名器であり挿入した根元をぎゅうぎゅうと締め付ける。

ナナは数の子天井タイプで、バックで挿入するたびに裏側にゾゾゾとした快感を感じた。

「1回目の膣内射精はどちらに出しますか？」

交互に挿入しながら俺は2人に問う。

帰ってくる声は喘ぎ声だけであり、互いが潮を吹きお互いを汚す姉妹に俺はナナに狙いを定めて、再度挿入し奥へと突き精を吐き出した。

「アアアアっ!!」

背中をのけぞらせ、絶叫をあげるナナの胸を掴み、密着度を高めてドクドクと溢れる勢いに従う。

暫しそのままで静止した後、ナナを退かせて正常位でルルをタコ壺を犯す。

「ちっ、チンポ！チンポっ、チンポやばいっ、やばいぞっお、お、お、おちんぽっ！」

もはやそれしか鳴かないルルの胸を揉み潰しながらピストンさせて精を放った。

「キタっ！きてる!!ザーメンが中ででてるうううう！」

ルルがその場で絶叫して潮を吹き出し、果てた。

「さて、次はどちらにしましょうか」

ベッドで長距離走を走った後のように呼吸を乱す2人を見下ろす。

あんたのところにはやる前に俺が彼女たちをチンポ奴隷にして送ってやろう。

許嫁とやらの人物を夢想し、破顔しながら俺は、未だ隆々と勃起したチンポを再度ルルに突き立てるのであった。



## 第参拾玖話 妖刀

「痒い<sup>かゆ</sup>ところはありますか？」

「裏筋当たりがちよつと痒いですね」

くちやくちやと部屋に響く音。

クラスメートの1人である、美容院を営む女の家に入り込み、シャンプーとフェラのスペシャルサービスを堪能する。

「ああ、気持ちいいよ。委員長」

シートに寝転がり頭をマッサージされながら、チロチロと這う舌の動き。

裏筋の痒いところを舐め終わると、次は全方向を包む温かさを感じてすぐの吸引。

「ちよつと、響<sup>カナデ</sup>。ちゃんと奏<sup>カナデ</sup>の分も残しておいてよ」

俺の頭を洗う女がフェラをしている妹へ声を掛けると声を掛けられた女が「ふあい、ふあい」と答えながら俺の乳首に手を伸ばす。

上村響。

茶色い三つ編み、お下げをし、赤メガネが似合う俺のクラスの学級委員長である。

「お客様、他に痒いところがありますか？」

彼女の姉、奏が頭をお湯で流し終わり微笑む。

委員長とよく似た整った顔立ちにメガネが似合う美女に俺は「ちよつと口が寂しいですね」と伝えると、奏が唇を重ねた。

今日は久方ぶりに散髪へと来ているのだ。

もつとも、3年間遠方へ行っていたので、行きつけの美容院は潰れてしまっていた。

故に、クラスメートで美容院を営んでいる委員長に相談をして予約させてもらったのだ。

そして頼んだスペシャルメニュー。

もちろん、店は俺がいる間は貸切にしてもらい他に客はいない。

じゅぽつ。じゅぽつ。じゅぽつ。

下半身からモゾモゾと、射精感が襲い、そのまま俺は吐き出した。

びゅるるるるるつ。

精を吐き出すこともせず、ゴクリゴクリと嚙下する委員長。

最後に口を開いて「ご馳走さまでした」と妖艶に微笑む目にはハートが浮かび上がっていた。

「ありがとうございましたー」

「賀茂くん、また来てねー!」

委員長と姉に見送られながら、俺はさっぱりとした髪を靡かせて店を出る。

都合4度ほど吐き出した腰にはどこか爽快感を感じる。  
散髪されながらのフェラや、パイズリ、そしてバック。

カットする側からすれば動き回られ切りにくいだろうに、それでも小綺麗に切り整えられ、奏の腕に關心してしまう。

今日は学校もオフで部活も討伐指令も入っていない。

この後の予定は東司が言っていた通り

「鞍馬寺に行き天狗に会う」という予定だけだ。

スマートフォンが通知音を響かせ、チャットの受信を告げる。

「タクミ、元気にしてる?アタシは寂しいです」

碧理がM字開脚をしてマンコを見せつけた自撮り画像を送りつけてくる。

「俺もだよ」

可愛らしいスタンプと一緒に返信すると瞬時に既読を表すマークが付く、思わず苦笑いを浮かべた。

碧理が関東に行き、早1ヶ月。

季節は春から梅雨へと移り変わりを終えた6月の中旬。

ジリジリとした日差しに思わずシャツを扇いだ。

碧理は今現在、東司と田井中の特級コンビに鍛えられ日々、高位階の妖との闘いに身を投じている。

蒼佳は未だ連絡がつかないが、特級である東司より、第三関門に突入したと教えられたので未だ試練の最中なのだろう。

「カモつち、この下着どう思う」

未読状態だったちなみにチャットルームを開くと映し出される通販ショップのスクリーンショット。

「イイネ。想像するだけで勃起するよ」

別に本当に勃起するわけではないが、彼女の気をよくするためそう言った返信を返す。

「タクミくん。ちゃんとマン毛剃りましたので近々クンニして下さい」

「ちなみに剃ったのは私です」

「美優は寝てました」

水泳部の2年生と俺だけのチャットグループにツルツルとなった恥丘を晒す恵とはにかむクルミ。美優はあくびをしながら写っている。

「明日の部活でちゃんと剃り残しがないか見てあげます」

返信を返す。

水泳部も現在は美咲以外は美味しく頂いている。

前世で言うサークルクラッシュャー的な動きをしてしまった俺だが、思いの外水泳部はちゃんと機能している。

ナナ曰く、三馬鹿がちゃんと毎日部活に来るようになったということだ。

まるで目の前にニンジンをぶらさげられた馬のように、彼女たちはご褒美を期待して部活に精を出す。

ルルとナナのチンポ調教はまだ途中段階である。

ルルは普段暴走気味だが、セックスの時は従順で、しっかり者のナナの方がコアな性癖の持ち主だったりする。

この前は「食ザーしたい」と言い、弁当箱に精を吐き出すと、それを美味しそうに食べていた。

それについては流石のルルの顔も引いていた。

タクシーに乗り込み目的地を運転手に伝えて帯刀した斬魔刀を見つめる。

妖刀叢雲。

東司に渡された帝より下賜された専用武器。

持ってきた本人が説明をしないため、未だ所以などはさっぱりであるが、

直近の討伐指令で使用した際の感想は「よく切れる刀」というだけだ。

別に斬れすぎるといってわけでもない。ただの普通の刀だった。

「ありがとうございます。お釣りは結構です」

車に揺られること1時間。

山を登り到着を告げる運転手に札を渡して車外へと出る。

休日の昼下がり。

観光客も多く訪れる時間であり車から降りた瞬間に四方から視線を感じて歓声が上がる。

「中級サムライの賀茂匠です。本日はご住職とお約束しております」

入り口を清掃する巫女に声をかけるとビクリと背筋を伸ばし、住職の元へと案内してくれた。

「初めまして、おサムライ様。蔵馬 美琴と申します」

剃髪をした妙齢の女性がペコリと頭をさげる。

法衣に包まれる肉体は瑞々しさを醸し出しており、剃り上げた頭のとギャップに思わず唾を飲み込んだ。

聞くところによると彼女の実年齢は今年で70歳と言われもはや、開いた口を閉じることができない。

この世界の女性は歳をとっても美魔女が多い。

「封印の代まで」案内いたします」

足音を立てずに歩く彼女に従い、本堂を抜けて小さな祠の前で足を止める。

「これですか？」

目の前に立つ小さな石碑に俺は首を傾げる。

第十位階の怪異を封印する祠はもっと盛大な大きさを予想していたのだが。

目の前にあるのは古びて、20センチ四方の小さなモノ。

中央にはそれこそ3センチ程度の鏡が置かれている。

「はい。こちらの鏡の中に武蔵坊弁慶様が封印されております」

住職が指差す鏡だけは確かに真新しく光を放っている。

「それでは私はこれにて。要件が終わりましたら巫女にお声がけ頂ければと存じます」

そう言つて住職がその場を辞し、辺りを静寂が包む。

四方を覆うように生い茂る草木に日光が閉ざされ足元にヒヤリとした冷気が伝わる。

「ここに行けと言われたけどどうすればいいのだろうか」

東司の言葉に従つてここまで来たが、この先については何も聞いていない。

やや途方に暮れつつも俺は祠の前にしゃがみ込み瞼を閉じて手を合わせた。

「お主、この前のサムライじゃな」

ふと脳裏に響く声と一緒に一陣の風が吹き髪が靡く。

「——っ！」

目を開くと祠の上に胡座をかいた大天狗が顎に手を乗せてこちらを見つめていた。

「ほう。妖刀、じゃな。それは」

腰に佩く刀に眉をぴくりとあげる天狗。

顔色は青色のままだ。

「あの、女狐、はおらぬのか」

誰を指しているのかは測らずも悟つてしまう。

「ワシに何か用かや？・童<sup>わっほ</sup>」

天狗の言葉に俺は「多分」と言葉を返すと彼はため息を吐いてから「どーせ、あの女狐に焚き付けられのだろう」と言つて嗤った。

どうやら女狐とは予想通り、東司を指すことらしい。

「俺は何をすればいい？」

自分でもここまでできた理由は分かっていない。

ただ、言われるがままにやってきたのが本音であり、とりあえず妖刀は持つてくるべきという安直な考えの元に訊ねたにすぎない。

俺の言葉に天狗が笑いを止めてジロリと俺を睨んだ。

「女狐めが。何も伝えておらぬのか」

みるみる顔が紅く染まり、憤怒の表情に変わって顔を歪める天狗。妖氣が肌を突き刺す鋭さへと変化し、俺は反射的に身体を精氣で覆った。

「まあ、良い。童、力が欲しいか？」

天狗が腕を組みこちらに顔を寄せる。

醜悪な、妖氣特有の刺激臭が鼻腔に刺しこむ。

「妖刀を持たされるくらいには期待されておろう」

腰穿いた刀を指差す天狗に眉を顰めた。

「妖刀」

東司にはそう言つて渡された刀。

どうやらただ切れ味の鋭い刀ではないらしい。

「これはなんだ？」

刀を鞘ごと突き出し天狗へ訊ねる。

すると彼は「妖刀じゃ」と短く返事を返すので思わず額に青筋が浮かんだ。

「カカカ。そう怒るな。童。妖刀は妖刀じゃ。それ以上でも以下でもない」

拳を握る手が震える。

まるで禅問答だ。

苛立ちを表すようにゆらゆらと氣を震わせる俺はみて、天狗が再度嗤った。

「氣が短い童。まあ、聞け。ワシはな、元はサムライじゃ」

天狗の言葉に俺の口から間拔けな声が抜け落ちた。

## 第肆拾零話 契約

「そもそも童は怪異がどうやって生まれるか知っておるか？」

天狗の言葉に俺は答える。

「人の邪な気から生み出されるのだろう」

機関でも習うし、陰陽師と結界師は親から教わる内容である。

俺の言葉に天狗は首を横に振って「それもある」と答える。

「その考えも間違っってはおらん。ただ、付け加えるなら無から生み出される存在もおれば、ワシのように怪異となり果てる存在もおる。それが“ヒトガタ”じゃ」

喉がゴクリとなった。

弁慶の話の内容は、怪異についての理を真つ向から覆すソレだ。

しかし、その言葉には説得力がある。

ヒトガタと呼ばれる人語を操り思考する知能もある存在。

ふと、肚の中にストーンと落ちる得体のしれないなにかに思わず嗤った。

「ほう……童はそのような反応をするか」

天狗、否。弁慶は俺の顔を興味深げに覗きこんで同じように嗤う。

「もつとも、怪異になる前の記憶を残せるのは稀じゃがな」

天狗はそう言って話を続ける。

曰く、妖氣に飲まれて怪異になるにはある種の才能が必要であること。

曰く、怪異になり果てた際は強烈な殺意が身を支配し殺戮しか考えられないこと。

曰く、先の戦闘では封印が緩み強烈な怒りを覚えていたこと。

曰く、封印され祀られると徐々に殺人衝動が薄れ、元の記憶がよみがえるということ。

最後については、祀られることで半ば神格化される影響だからだろうか。

彼は最後に「特に退魔師が怪異になれば厄介じゃな」と告げる。

それはそうだろう。

氣を操ることに長けた存在が妖氣を操る人外にかわるのだ。

天狗の妖氣の鋭さに、俺の動きについてきた身のこなし。

そこでふと俺はぬらりひよんについても元は人間かと尋ねる。

「あやつは元からの妖怪じゃ。まさに邪氣の結晶よ」

弁慶が言うには邪氣から生まれた妖怪も幾千、幾万の人を喰らうこととで人語を理解し知能をつける存在もいるということらしい。

頭に槌を振るわれるような衝撃の数々。

それでも混乱しないのは前世の影響だろうか。

荒唐無稽な内容にも「なるほどな」と勝手に納得をしてしまう。

ちなみに弁慶は自身のことを“元特級サムライ”だったと語り、誇らしげに胸を張る。

「それで、妖刀とはどんな関係が？」

納得できてしまえば話が早い。俺の言葉に天狗は手を俺に突き出し「急くな」と答える。

「その為には封印について今しばらく説明が必要だろうの」

ぽつり、ぽつりと日本全国で祀られる妖怪の名を上げる天狗。

彼らは元は退魔師の中で傑出した者であり、人に祀られ、畏れられ、怪異の中でも特異な存在になったそれらは、時として地場神となり、サムライに力を貸す。

彼はそれを“契約”と呼んだ。

怪異の力を閉じ込め、使用できるが故に“妖刀”。

ただの切れ味の鋭い刀ではないと弁慶が告げた。

「童とは契約は出来んがのう」

俺の顔を見て呟く彼に「なぜ」と冷たく尋ねる。

「臭うのじゃ。お主どこかの神に見初められておるであろう。気づかぬか？」

弁慶の言葉に首を傾げる。

神などに会ったことは今の一度もない。

それこそ、転生する際に俺自身になにかしらの啓示があったわけではないのだ。



気が付いたら、この世界で生を受けていたにすぎない。

「神……ねえ……」

存在を夢想し思わず漏らす。

「ワシではお主との契約に足る格が足りぬ。それこそ伏見の妖狐であればと思うが、彼奴が童と契るかはワシにも分からぬ」

そう言つて俺と同じように首を傾げる天狗の顔色は青色へと戻つていた。

「なんにせよ。この臭いはまともな神ではないぞ。お前、碌な死に方はせんのを」

カカカカと笑い声をあげる弁慶がふと真顔に戻る。

「伏見に行くのなら油揚げを持参せい。あと、今後ここに訪れるときは酒のひとつでも持つてこい。」

機嫌がよければ組手の指南でもしてやるわい」

そういつて彼は霧となり無散して姿を消した。

最後に「女狐には気を付けることだ。女難の相が出ておるぞ。童」  
そう言葉を残して。

疑問が一つ晴れた後に違う疑問が沸きあがる。

俺は祠に頭を下げて山を下りた。

“伏見の妖狐”

弁慶が言う、大天狗の格を超える存在。

妖刀を握る手が興奮で震えるままに嗤う。

気が付けば空は赤みが挿して夕暮れを告げる鐘が鳴っていた。

逆転世界で過去を謳歌する。

## 第肆拾壹話 ビデオエッチ♡

「美咲、やる気にはなってくれた？」

2回目のタクミ当番。

彼女が作った弁当をだれも居ない教室で食べながら俺が彼女に声を掛ける。

「……何度も言うけど」

短くため息をついてから彼女は首を横に振った。

別に期待していない。

ただの世間話の一環である。

ただ、クラスの女子全員をすでに一周しており、2週目も終盤になると、俺がまだ手を付けることの出来ていないのは彼女だけだ。

「じゃあ、今日も手だけでいいからお願いしても良い？」

俺の言葉に何度目かの息を吐いてから彼女はコクリと頷く。

彼女は当番の時にセックスはしないが、手コキする分には承諾した。

なんでも彼女曰く、セックスには“愛”が無ければ出来ないということらしく、キスももちろん無しである。

彼女がしてくれるのは手コキのみ。

もつとも、手コキで出した精については、東司からの毎日のノルマも相まって無駄になることはない。

「ごちそうさま・おいしかったよ」

彼女にそう告げて俺はおもむろにズボンを脱いで下半身を露出して彼女の顔を見つめる。

部活により春よりもいくらか焼けた小麦色の肌に、猫のように大きく鋭い瞳。

肩より短めに切りそろえられた黒髪は光を反射し、キラキラと光っている。

「だれか来たらどうするのよ」

周りをきよろきよろを見渡す彼女に俺は「大丈夫」と自信満々に答える。

今、俺たちがいる教室は別名『当番部屋』

サムライ俺の入学に合わせて、学校が用意した俺専用の教室だ。

元は、技術室だったらしく、隅に追いやった机には様々な工具が乱雑に置かれている。

配置としては2階の角部屋であり、窓は目張りし、入口の鍵は閉めている。

普段から当番の子を襲う際によく使うので当番部屋と、呼ばれているのだ。

「……なんで、もう勃ってるのよ……」

睨むような目つきを俺を見る彼女に思わず破顔する。

夏服をきた彼女の姿は正に暴力的な胸部がロケットのように突き出しており、彼女のスポーツブラを透けさせている。

「勃起させる方がよかった？」

俺の言葉に彼女が押し黙る。

肉欲に負ける女性が圧倒的に多数の中で彼女の存在は最高に愉快である。

パイズリも、フェラもマンコも、クンニも単語の意味も理解しそれなりに性欲もあるだろうに彼女はそのどれも拒否するのだ。

ちなみや、クラス連中を呼べば喜んでするだろうプレイも彼女は断る。

「じゃあ、手で擦ってくれるかな」

俺の言葉に彼女は俺の股の間に座り、手を肉棒へと伸ばして優しく上下に摩る。

その目は常にチンポに注がれ、息も先ほどよりから荒くなっている。

「そんなに興味あるなら挿れてみたらいいのに」

俺の言葉に彼女はバツと顔を上げて俺を睨みつけた。

「興味なんて……女だからあって当然でしょ。でも私は肉欲には負けないわ」

その目つきに、愚直に固まったソレが更に硬度をあげるようにビク  
リと跳ねた。

「はいはい。じゃあ頑張って射精<sup>イ</sup>かせてね。胸触ってもいいかな？」

俺の言葉に「断つてもどうせ触るでしょ」と矢継ぎ早に答える彼女  
に笑みを浮かべて俺は彼女の胸部に両手を伸ばした。

手のひらに感じる超重量な脂肪の塊。

メロンほどの重量感を前のめりで確かめてからブラジャーごと優  
しく揉みしだく。

「んっ。ちよ、ちよつと。大人しくは出来ないわけ、んっ」

揉むたびに彼女が身を震わせて口を尖らせた。

「無理かな。こんなおっぱいぶら下げておいて、ただ手を添えるだけ  
なんで阿呆のすることだよ」

彼女以上の巨乳なぞ中々お目にかかれるものではない。

入学して2ヶ月。

学校で彼女に並ぶ持ち主は見かけておらず、学外に限って言えば、  
あの特級コンビだけだろうか。

弁慶は最後に“女狐には気をつけろ”といった。

それは妖狐を指す言葉か、それとも東司を指す言葉か。

なんとなくだが、東司を指す言葉な気がする。

やつの軽薄さを思い出し、思わず口角をあげるころには俺の腰がビ  
クビクと震えだした。

「……そろそろ、一回目、射精<sup>出</sup>そうだよ」

息を吐く俺に、彼女は「何回出すのよ」と不満げに言葉を返した。

「もちろん。最低3回くらいかな」

彼女に微笑んで俺はそのまま精を吐き出した。

「そう。今日はその美咲って女に抜いてもらったの」

タブレットの画面の先に映った碧理が眉を吊り上げて俺を睨んだ。  
毎日というわけではないが気が向いたらこうして俺たちはテレビ

電話でつながっている。

彼女はスマートフォンを壁にでも掛けているのだろうか。全身を映し、ベッドにてマニキュアを塗りながら俺を睨んでいた。

ショートパンツとチューブトップの寝巻姿。

俺がこの前送った煽情的な姿に思わず股間に力が入った。

「……それでそっちはどんな調子？修行は順調？」

なにか話題を変えようと俺が提案すると彼女が短くため息を吐き、

「上々ね」と続けた。

「この前は、がしゃどくろ餓者髑髏の討伐に行ったわ」

足先に手を伸ばす彼女の太ももの境からチラリとピンク色の下着が覗いた。

「それは本当に上々だね」

餓者髑髏とは第九位階の怪異であり、文字通り骸骨の妖怪だが特筆すべきはそのサイズ。

平均して100mを超えるほどの巨躯であり、特級と行動を共にしなければほとんど見かけることさえ出来ない妖だ。

「ちよつと本当に聞いているの？」

オウム返しのような俺に碧理が眉を上げて目が合うと彼女がニヤリと笑みを浮かべた。

「なに、そんなにここの中身が気になるの？」

マニキュアを塗るのをやめて、その場で膝を立ててM字開脚をし、裾をぐいっと横に引っ張りピンク色の下着を見せつける。

思わずピクリとチンポが跳ねる。

「気になるし、更にその中身も見たいと思ってしまっようよ」

“ほら見せてごらん”

俺の言葉に「あれ？攻守逆転してない？」と彼女が首を傾げるのを「でも好きだろう？」と重ねると顔を赤らめてコクンと頷く。

「そのショートパンツも可愛いけど、できれば脱いで、脚を開いて」

指示に従うように、碧理が一旦、立ち上がり、ズボンズボンを脱いで再度カメラ正面で足を開く。

恥骨から尻穴にかけてV字を描くように鋭利にとがるピンク色のTバック。

「碧理も溜まってるでしょ。そこでオナニーして」

俺の言葉に頷き、彼女は下腹部に右手を伸ばし上からクリトリスを刺激する。

「んっ。き、きもち、い、いいよおっ」

左手の指先を噛みながら左右にこするよう動く右手に次第にくちゆくちゆとした音がスピーカー越しに響いた。

「いやらしい音を立てるマンコだね」

俺の言葉に彼女がビクンと跳ねた後に嬌声をあげて腰を突き上げた。

「ああッ!!」

パンツの生地から潮が溢れだし、脚の付け根の隙間から横に水が噴き出す。

「た、タクミ、おちんちん。おちんちん見せてくださいっ」

タブレットいっぱい彼女の顔が映り、懇願する声に「いいよ」と返してズボンを脱いでタブレットのカメラにそれをドアップで映した。

「ああ、タクミのおんちんぽおっ。恋しいよ。寂しいよおっ」

レロリと画面を舐める碧理に俺も「碧理のアナルが恋しいよ」と言葉返す。

「アレ持ってるでしょ?」

俺の言葉に画面を舐めるのをやめてこくと頷く彼女に「もっておいで」と優しく告げる。

「はい」

従順に返事を返して、スマートフォンを置いて、尻をふりふりと振りながら背後のクローゼットから黒いおもちゃを取り出した。

それはふたつのチンポのカタチをしたデイルドである。

これも先に彼女に贈ったプレゼントの一つである。

彼女はそれとスマートフォンを床に置くと、画角が下から彼女の秘部を見上げる構図に変わった。

「ほら。ゆっくり挿れてごらん。碧理が大好きな俺のチンポだよ」  
彼女の為に俺の形で作ってもらったオーダーメイドの品だ。

碧理は「はい。挿れさせていただきます」と答えて、パンツを脱ぎ  
そのまま腰を下ろす。

赤く染まった秘部と菊門。

二つの穴がゆっくりと画面に近づいて2本のデイルドの先を咥え  
こんだ。

「っんーっ!!」

悲痛によく似た声を漏らしながらぬぷぬぷと咥えこみ、やがてすべ  
てを飲み込む。

「ああ、タクミのおちんぽっ、おちんぽが二本入ってますっ」

顔を下に向けて口を開ける彼女がヨダレを垂らす。

「いいよ。そのまま動いてごらん。ちゃんと俺の感触味わいながら」

俺の言葉に頷いて犬のように舌を出して上下に動き始めた彼女の  
膣からびゆるびゆると潮が吹き、画面に水滴をつける。

「イツても止めちゃ、だめだよ。俺がいくまでは碧理は動き続けて」

「ひゃいっ！あっ、っ、で、でもっお、いい、イギマスっ、ああっ！」

奥深くに自分で差し込み仰け反り彼女が天を仰いだ。

「あ、あ、ま、また、イ、イグっ——っ！」

俺たちは、そのまま明け方までビデオエッチを続けるのであった。

## 肆拾弐話 妖狐

「あ、ここに結構です」

討伐指令が終わり、運転手に告げる。

現在、チームを組む蒼佳も碧理も不在のため。討伐に関する移動はもっぱら退魔庁より派遣された運転手と一緒に移動している。

「……しかし、ここは……」

運転手の女性が不安気な声音で呟く。

深夜の伏見稻荷神社付近。

封印される妖狐が一際有名であり、深夜に訪れる人は居ない。

紅い千本鳥居が有名で日中は観光客が絶えないこの場所も夜中になるとどこか薄気味悪い雰囲気醸し出していた。

「大丈夫です。ちよつと用事があるので」

待つことなく先に帰っていいと運転手に告げて俺は正門の階段に足をかけた。

先の弁慶とは話し込んでしまった。

今回も同様に時間がかかるだろう。

左手には取り寄せた高級の油揚げが入った紙袋を掲げ登る。

怪異を祀る場所は総じて広い。

暗闇が支配する鳥居をくぐり、本殿に辿り着くころにはすでに30分はかかっていた。

「捧げ物です」

賽銭箱の上に袋ごと油揚げを置いて手を合わせる。

「臭い匂いを放つ奴じゃ」

ふと背後から声が響き振り返った。

金髪を地面に着けるほどの長髪。

狐よろしくピンつとたった耳に着崩した赤い着物。

着物と同じ色の瞳がジロリと俺を睨みつけていた。

「……九尾」

ゆらゆらと揺れる九つの尻尾を生やした花魁のような美女が顔を歪めて立っていた。



「妾になんぞ用か?」

見目麗しい姿で憎々し気に顔を歪める九尾が言葉を吐いた。

「単刀直入に言えば契約をしたい」

妖刀を突き出すと九尾の髪が逆立った。

「貴様のような小僧が妾に契れと。殺すぞ。餓鬼が」

背後から火球が現れ轟轟と音を立てる。

大気が震え、あたりの温度を上昇させるソレに俺は刀を構えて氣を纏う。

「天逆毎あまのざしの臭いを漂わせる餓鬼風情が、この玉藻前たまものまえによく姿を現したものじゃ。蒸発させて臭いごと消し飛ばしてやるわ」

九尾が咆哮を上げて巨大な火球を放つ。

どうやら、話は聞いてくれないらしい。

刀に精氣を送り込み俺は飛来するそれを一刀両断に斬りつけた。

「隴火」

九尾の声の後に同じようにいくつもの火球が飛来する。

振り上げるように一つを両断するもそれはヌルりと刀を通り過ぎ  
て俺の身を焼く。

追撃をかわすべく燃える右腕を気にせず後ろに跳躍し、皮膚を精氣  
で覆うも、出量に比例するように付着する焰がメラメラと勢いをつけ  
て肌を焦がした。

炙れる痛みに顔を歪めながら氣を閉じるとソレは鎮火した。  
「なるほど」

氣に反応する火に頷く。

もはや、右手は焼け爛れ今は使い物にならない。

左手に刀を持ち換えて九尾を睨むと彼女が笑う。

「痛そうじゃのう」

どこからか扇を取り出し口元を隠して笑う彼女が俺を追跡させる  
ように火球を動かした。

氣に反応するのであれば話が早い。

精孔を閉じた右手で一つの火球は叩く。

「クソっ」

予想に反して叩いた火球が右手に纏わりつき、メラメラと焦がし思わず舌打ちを漏らし、氣で腕を覆う。

二段構えだろう。

瞬く間に鎮火する右手は完全に焼け爛れて皮膚が黒く染まっていた。

「クソ女狐が」

見た目通りの性格の悪さにそう呟いて彼女へ距離を詰めた。

「踊ろうか。玉藻前」

刀を振り上げる俺に彼女は妖しく目を細めて笑っていた。

本殿、茂る木々、大氣が妖狐の焰で燃え盛る。

幾千の斬撃さえも彼女の持つ扇で止められ火花が飛び散るのも数度、戦況は完全に妖狐に傾いていた。

彼女が顕現する火球は一目には氣に反応するタイプなのか、そうじゃないのかは皆目見当がつかず、もはや躲すしかなく、繰り出した斬撃も余裕綽々と止められる。

「なぜ攻撃しない」

俺の言葉に彼女が嗤う。

言葉通り、彼女は火の玉を出して襲うだけで、それ以上はせずただ刀をいなすだけだ。

見ようによつては攻撃していると言えなくもないが、相對する俺からすればただ觀察しているような不気味さを感じた。

「天逆毎の臭いに混ざる天之御中主神の匂い。小僧は不思議な餓鬼じゃのう」

彼女の言葉に俺は眉を動かして刀を止めて離れる。

天之御中主神なら知っている。

最高神の石柱であり、俺の信託を賀茂家に残した神の名である。

「終いか？」

こちらに視線を送る妖狐に首を振って刀を納刀した。

「それが貴女が殺意を飛ばさなくなった理由か」

何度目かの攻撃の後より身を刺していた妖氣も殺意も無散しており、それを彼女に指摘すると妖狐が嗤った。

「天逆毎あまのびしだけなら消し炭にしてやろうと思うたがの」

そう言つて火球を消滅させて扇を仰ぐ彼女に俺は首を傾げた。

「その天逆毎とやらはなんだ」

俺の言葉に首を横に振る妖狐。

「お主に行つても聞こえぬじやろう。●□※×○じゃ」

彼女の声が途中でハウリングが掛かり頭に響いた。

「ほれ。聞こえぬじやろう。まあ、良いわ。気が変わった。契つてやろうぞ」

こちらに歩みよる妖狐に思わず一步後ろへ後ずさる。

「その代わり、小僧には〃試練〃を受けてもらうがの」

妖狐が手を伸ばして俺を抱き寄せ唇を交わした。

“お前の過去、見せてもらうぞ”

脳に直接響く声に俺は意識を刈り取られ、瞬間 景色が暗転したのだった。

## 第肆拾参話 本家と分家

目を覚まし、身を起こす。

周囲を暗闇が支配するなか、一点、プロジェクターが光を放ちスクリーンに映像を映す。

「またか」

思わず俺はその場で舌打ちを漏らして下を向く。

「やはり、小僧は輪廻異端の輪端から外れた存在者か」

ふと横に気配を感じ顔を上げると妖狐がその場に立ちスクリーンを見つめていた。

「なぜそれを知っている」

彼女の言葉の指す意味を瞬時に理解し彼女に問う。

「フン。あやつに見初められる存在なぞ、大体が異端者じゃ。そうか。転換の時間が近いということかのう」

ふふふと笑い声をあげる彼女の顔が怒気に歪む。

「始まりは牛若丸。次に織田の吉法師、坂本直柔なわなり。そして小僧か。忙しいことよ」

バチンと扇を自身の手のひらに叩きつける妖狐。

詳しくは聞けそうにない。

彼女から放つ怒気がそれを物語っていた。

「小僧。妾の試練は主の過去を見せてもらうことじゃ。付き合ってもらうぞ」

一瞬だけ俺を見下ろした妖狐がすぐさまスクリーンへと移される  
とき、場面は一人の幼女を映していた。

「タクちゃん！これあげる!!!」

俺とよく似た黒髪の幼女が真新しいランドセルを背に満面の笑みを浮かべ手にした泥団子を差し出す。

今世での次姉の巴だ。<sup>トモエ</sup>

その言葉を拒否するように小さな手が振られた後に、言葉が響く。

「けっこうでしゅ」

大分記憶は薄れてしまったが、俺の声だろう。

舌つたらずの<sup>トモエ</sup>の声音にトモエがその場で地団駄を踏んで叫んだ。

「なんでー!!!」

ドンドンと飛び跳ねるように抗議する彼女。そこに響く別の女児の<sup>トモエ</sup>声

「巴、そんな形の悪い泥団子なんてたつくんは喜ばないよ。はい！ たつくん私の泥団子の方が綺麗だよ。特別にどうぞ」

トモエよりだいぶ身体の高い黒い髪を腰まで伸ばした少女。

背にはランドセルを背負っており、手にはトモエの泥団子よりかはいくらか綺麗なそれが置かれている。

長姉の<sup>カナエ</sup>葉である。

記憶をたどるにカナエが9歳、トモエが6歳ころだろうか。

俺は手を振ってトモエ同様に彼女に断りを告げた。

「あ、けっこうでしゅ」

「なんでよっ!?!」

トモエと同じように地団太を踏んでから手にしていた泥団子を地面に投げつける彼女に俺は真顔で理由と伝える。

「ばっちいもん」

「ばっちくないもん!!!」

食い気味に叫ぶカナエをみてトモエが「ぶぶぶ」とわざとらしく噴き出すと、彼女は「なに笑ってるのよ!」と頬を膨らませて怒気を放つ。

俺たちの姉弟仲は良かった。

精神年齢が前世の影響もあり子どもじみてない俺を姉達は気味わるがることもなく、一つの個性として愛を注いでくれていた。

前世で嫌われ者を地でいき、親からも捨てられ愛を知らない俺の心が融雪するがごとく、溶けだしたころの記憶であり、映像を見る俺の瞳から自然と涙がこぼれた。

「あ、ママだ」

ふとトモエが家の正門をくぐる母の姿を見つけて声をあげる。

「ママあ~~~~!!!!」

精神年齢30歳オーバーのことも隠して、まるで本当の3歳児のよ  
うな声音で母に突進する俺。

「ただいま。匠。それに叶と巴。お利口さんにお留守番出来たかし  
ら?」

駆け寄る俺を抱き上げて柔和にほほ笑む黒髪の母性溢れる女性が  
俺たちの心の中心である、母の加茂美香であった。

「ママツー」

「ままつ」

俺に続くように姉たちも彼女に抱き着き、泥だらけの手を母の黒い  
狩衣へとベタベタと着ける。

「ねえねえ。今日はどんなお化けとたたかったの?」

トモエが俺たちを代表して問うと、母は「そうねえ」と言っ  
てから本日のことをお伽話口調で幼児にもわかるように話してくれた。

俺はそんな母の話が大好きだった。

「匠。これあげる」

「わあ〜!ありがとう!!!」

その後、泥団子の話を彼女に伝えると、母は徐にしゃがみこみ、6  
歳の巴が作った泥団子より形の悪いそれを渡してきたので俺は満面  
の笑みを浮かべて受け取った。

「なんでよっ!!!」

その様子を見ていた姉妹たちがそうツツコミを入れると母がフフ  
フとほほ笑み、それにつられて俺たちは笑いあう。

いつも家には笑顔が溢れていた。

「いただきます」

「いただきます（しゅ）」

晩ごはんになると、離れに暮らす俺たち分家は本家へと出向き、一家全員で食卓を囲む。

分家である母と、姉二人に俺

本家である叔母に、蒼佳と碧理、祖母に曾祖母ひいおばあちゃん

そして給仕係を務めるお手伝いの幸恵ばあちゃん。

総勢9名で囲む食卓はいつも賑やかだ……主にトモエと碧理の二人が……

「みどりがたつくんのとないがいいのおー！」

「ねんこーじよれつよっ!!」

3歳児の碧理と6歳児のトモエ。

毎日繰り広げられる争いが今日も目の前で行われている。

理由はまさに俺の席の横をめぐる骨肉の争いなのだが、先日、変わりばんこが決まり、昨日は碧理が座っていたのに、彼女はその順番を守らずに今日もということとトモエに直談判している状況である。

あまりにもぎゃーぎゃー騒ぐその様子に俺の横が完全に定位置になっっている母が腰を上げた。

「えーっと、ならおばちゃんが退けるね」

そう言っつ俺の反対となりに座った母親が席を立とうとするのを俺は彼女の腕をつかんで止める。

「やーママはぼくのよこー！」

俺の声に母はニマニマと表情を崩してから俺の頬に自らの頬を擦り付ける。

もはやそこには精神年齢などは関係なく、年相応に甘える俺がいたのだ。

そんな光景など気にせず取っ組み合いの喧嘩へと発展し始めた二人を見て俺はふうと息を吐いた。

「ふたりともうるしやい。なかよくできないなら、もうなかよくしないから」

俺の言葉にトモエはひゅつと息を短く吸い言葉を詰まらせ、碧理は

ぽかんとした表情をうかべた後、みるみる目に涙を貯めていく。

「今日とはもえねえ、あしたはみどり。わかつたらみどりはイスにもどってごはん食べる！そのかわり、今日はいっしょにおふろに入っ  
てあげゆ！」

びしつと碧理の席を指さすと最初は泣き出さんとばかりに顔をしかめたが、その後「お風呂は一緒」とのフレーズに満面の笑顔へと戻り、てくてくと席へと戻った。

「たくちゃんは将来は〝稀代の女たらし〟とか言われそうねえ」

俺たちの様子を見た祖母は肘をつきながらそう呟いて食卓は笑いに包まれた。

分家と本家。

母を筆頭にした黒髪の加茂家<sup>分家</sup>。

碧理、蒼佳、叔母、祖母、曾祖母の銀髪の賀茂家<sup>本家</sup>。

表面上は仲睦まじい家庭環境の中でも俺たちはうまくやっていたのだ。

「あつー匠、ピーマン食べなさい！」

皿の端に退けるピーマンを母が目敏くみつけて俺に唾を飛ばしながら口を出す。

それを俺は笑顔で母の顔を見上げて答えた。

「けっこうでしゅ」

家には〝愛〟が溢れていた。

そう、奴が来るまでは。



## 第肆拾肆話 狭間

ソレがやってきた日。

転生して5歳になった3月のある日。

俺たちはいつものように食卓を本家・分家問わず囲んでいた。

その場にいないのは、祖母と叔母の2人。

彼女たちは討伐指令に出かけていた。

「匠、ピーマンを食べなさい」

「えんりよしますー！」

母から差し出される緑色の物体を首を振って躲す。

前世の影響もあるのか、俺はピーマンだけは食べることが出来ない。

俺の反応に母は「仕方ない子ね」と苦笑いを浮かべてパクリと自分の口へ放った。

「タクミはお子ちゃまだもんねっ！」

横に座る碧理がそう言うてはにかむので「碧理もグリーンピース食べれないでしょ」と言葉を返す。

「うっ、た、食べれるもん」

目を泳がせる彼女に「ふーん」と相槌を打って皿にもられたハンバーグにフオークを添える。

「巴は好き嫌いないよ」

机を挟んで正面に座ったトモエとその横に座るカナエが「私も」と頷きを返す。

彼女らはすでに8歳と10歳。

俺はまだ5歳だと、精神年齢を伏せる謎の言い訳を返すと彼女たちがはにかんだ。

「好き嫌いする男の子はモテないよ？タクミくん」

蒼佳の言葉に俺はピクリと眉を上げて声を震わせた。

「蒼佳姉は僕のこと嫌い？」

得意の幼子ムーブで瞳を潤わせると彼女が焦ったようにかぶりを振った。

「じゃあ、大丈夫。みんなが愛してくれるなら僕はそれで十分だよ」  
俺がはにかむと周囲が釣られるように笑顔を浮かべる。

「女たらしねえ。ほんとに」

頬に手を添えながら微笑む母がそう言うときみんなが首を縦に振った。

がちやり。

ふと玄関が開く音が部屋に響き皆が顔を見合わせる。

「やけに早いほう」

首を傾げて曾祖母が漏らすと横に控えた家事手伝いの幸恵さんが「そうですね」と相槌を打った。

スタスタと廊下を歩く音が響き、居間に繋がる扉が開かれる。

「あつ！おかえりなさい！ま、ま？」

横に座る碧理が無垢な笑みを浮かべて今に入ってきた人物を見て声をあげるも、最後には疑問符を浮かべた。

叔母のようで叔母ではないナニカ。

姿はまさに見知った彼女であれど顔に気はなく、どこか青白い。

瞳は濁り亡者のようにソレがゆったりと手を前に突き出すと、刹那。

目の前に五芒星が浮かび一匹の蛇が正面に座っていたトモエの胸を貫いた。

「え？」

全員がその場で硬直し目を見開く。

トモエが食卓に顔をぶつけて机を血で濡らした。

「美紅!!!、お前、なんのつもりじゃ!!!」

まず最初に正気に戻ったのは曾祖母。

叔母の名を叫び椅子から立ち上がり恫喝をあげる。

「……ウソ……う、うそ、うそよ、うそ、うそ、うそ、うそ、ウソツ!!!」

次に母が声をあげて机に顔を伏せたトモエに歩み寄り彼女の名を叫んだ。

「ああつ!!!ともえツ!!!ともえ!!!ともえツ!!!!!!」

肩を揺さぶるも返答はなく、チラリと見える顔は未だ目を開いたまままで正に人形のように事切れていることを物語っていた。

「え、おかあ……さま？」

暴虐を行う叔母に蒼佳が声をかけると、ソレは光のない目つきをギョロリと動かして、一点で止まった。

『見イ〜つけタあ』

視界に俺を定めて、無表情だった顔がまるで口裂け女のごとくニイ〜と開き、再度五芒星を顕現させて俺にナニかを飛ばした。

「たつくんツ！」

俺の名を叫び射線を遮るようにカナエが間に入るとドンつと音を響かせた後。

彼女の胎に風穴が空いた。

「幸恵え!!!匠に結界じゃ!!!」

曾祖母の悲痛な叫び声とは対照的に「はい」と落ち着いた声音で返事を返した幸恵さんが俺に向けて印を組んで腕を振るった。

「防護結界 // 結」

俺を封じ込めるように四方からピンク色の結界が展開される。

「飛ばせ。鳥」

曾祖母が指を叔母に突き立てると、人差し指が関節と反対側に折れ曲がり、中空に五芒星が浮かび上がる。

中央から巨大なカラスが顕現し翼をはためかすと、叔母はまるで大砲の球のように後方へと吹き飛ぶ。

背を壁にぶつけようとも、柱にぶつけようと勢いは止まらず、バキバキと音を立てながら人形の穴を家に作りながら彼方へと吹き飛んだ。

「——ねえちゃんツ!!!」

カナエに手を伸ばそうするも結界に阻まれ、手のひらが壁で止まる。

「…………た、た…………つく…………ん…………」

叶はバタリと倒れ伏し顔をこちらに向いた。  
ドンドンと結界を叩き、俺は彼女の名を叫ぶ。

「……………生、……………きて……………」

最後にと 目を細めて笑顔を浮かべたまま彼女は目を閉じた。

「……………あッ!!い、……………いや……………いや、いやいやいや……………いッ——  
!!!」

トモエを抱きさめざめと泣いていた母がカナエにも気付いて彼女も抱き寄せる。

「カナエ！トモエ！待って！お願い！逝かないで！いやよ！イヤ！イヤッ——」  
パシン。

曾祖母が母の頬を叩く音が部屋に響いた。

「呆けるな！敵はまたやってくる！」

「敵」と呼称した瞬間に蒼佳と碧理が肩を震わせる。

「目を覚ませ。今戦えるのはワシとお前しかおらんのだ。お前が悲観する間に次は匠まで奴に殺されるぞ」

肩を激しく揺るも、母は激しく首を横に振って現実を悲観した。

「聞くのじゃ。美香よ。」

奴の正体は分からぬ。

分からぬが妖に取り込まれたのか、それとも何者かが変化へんげしているのか、それは今は分からぬ。

じゃが、奴の目的は匠じやろう。

お前は何者じゃ。

賀茂に連ねる一族のものじやろう。

日本を守護する御三家の血筋じゃ。

何より匠の、日輪の子の母親じやろう！

いい加減に目を覚ませッ！」

最後にパシンと再度彼女の頬を叩くと母の震えが止まる。

「……………叶……………痛かったよね……………怖かったよね……………ごめんね……………頼り  
ないお母さんで……………」

肩を震わせて母は叶の横に巴を寝かせた。

「解。」

ふと幸恵おばあちゃんの声が聞こえた後、俺を守っていた結界が消失して母が俺を抱きとめる。

「匠。お母さん行つてくる。叶と巴の仇とらなくちや……。ごめんね。愛してるよ。」

再び震え始めた彼女の背を抱いて思わず瞳から涙が溢れた。

母は俺の額にキスをして「いつてきます」と愛想笑いとわかる笑みを浮かべて立ち上がった。

「幸恵。子らを頼む。どこかに避難させて結界で守護するのじゃ」

「畏まりました。ご隠居様」

曾祖母が幸恵に指示を与える。

2人はすでに80歳を超えた人たち。

そんな彼女たちの背からはメラメラと覇気が漏れていた。

「美香。行くぞ。弔い合戦じゃ」

母の背を叩いて、2人は家の大穴に向かって歩みを進めた。

俺はそれをただ呆然と見ているだけだった。

「おい、そろそろいいだろう」

スクリーンを見つめる妖狐に声をかけると彼女は首を横に振った。

「何故」

もういいだろう。俺は腐るほどの光景を夢想した。

この先の展開に希望をしたことなど数えきれない。

しかし現実是不変ならない。

トモエもカナエも生き返ることはなく、母の姿もこれが最後だった。

「何故じゃと？小僧。この空間の名を知っておるか」

妖狐は地面を指差して眉を上げた。

「空間？この世界のことか？これは俺の記憶の世界だろう」

俺の言葉に彼女は長い息を吐いて首を横に振った。

「分かっておらぬの。異端者よ」

彼女の物言いに思わず胎から怒気が湧き上がる。

「ここは、〝狭間 〝じゃ。空蟬と常闇の境。小僧はこれが自分の記憶じゃと言ったが正確には、ヒトや鳥。樹木。全ての御霊記憶が彷徨う場所よ」

「故に……」

妖狐がプロジェクターを操作して景色を移し変える。

「は？」

何故プロジェクターの操作方法を知っているのか。

何故この場所を知っているのか。

そんなことを差し置いて、俺はスクリーンの映像をそんな声を漏らした。

「これは、主がまだ胎の中における時じやろうな」

映し出された映像には医師らしき女性に検診されてエコー画面を見つめる母の姿。

知らない。見たことがない。

当然だ。

今まで俺が見ていたのは全て俺の視点の過去だ。

この景色を俺は知らない。

「妾に過去を見せることは、すなわち小僧が過去と向き合うことが同義よ。」

貴様は呪われておる。

暫し付き合ってもらおうぞ」

初めて見る映像に映し出された母の顔。

妖狐の話などほとんど聞こえず俺は食い入るようにスクリーンを見つめる。

「母さん……」

彼女を呼び瞳が涙が溢れた。

## 第肆拾伍話 母

「おめでとうございます！男の子ですよ！加茂さん！」

膨らんだ腹部に機械を当ててエコー映像を映した医師が、興奮気味に画面の一部分を指さした。

「ほら！これわかりますか？ちよつと角度的に隠れちゃって見えにくいですけど」

……これがおちんちんですね！さつきは思いつきり形が見えておりましたので十中八九、男の子だと思ってもらって結構です！」

そう自分のことでもないのに喜色満面で断言する医師の言葉に

「はあ、そうですか」と気の抜けた返事を返してしまった。

三人目の子供はどうやら男の子らしい。

男の子。一般的に10人に1人の割合でしか生まれることのない存在であり、

私の実家<sup>本家</sup>の賀茂家でも最後に生まれたのは祖母の代だっただろうか？そんなことを思い浮かべ、

いきなり男児なんて言われても実感の湧かないフワフワとした表現しがたい感情が心を支配した。

「女の子の方がよかったですか？」

医者<sup>の</sup>言葉に私は「いえ、正直実感が湧かなくてどのように反応したらいいか困惑しています」と言葉を返すと、

彼女を「そうですね。お気持ちは何となくですが分かります」とうんうんとその場で頷きながら答えた。

「ただし、まだ完全に安定期に入ったわけではありませんので気を付けてくださいね！せつかくの男の子ですのー！」

医師はそう言ってガッツポーズをとるようにサムズアップするが私は再度「はあ。」と気の抜けた返事を返した。

この医師との付き合いも早いものでもう5年になる。

腕はよく、経営する設備も綺麗で、おまけに自宅から最寄りということもあって長女と次女をここで出産し、3人目もここへ検診に通っているわけだがいかんせん言葉が悪い。

「男の子だから気をつけろ」というのはどうなのか。

それこそ今お腹の中にいるこの子が女の子であれば無理をしていいのか？そんなことを思ってしまう。

男の子も女の子も関係ない。私を選んで生まれてこようとする子はみな、可愛いのだ。

私はムクムクと内から沸き起こる怒りを鎮めるべくお腹を優しくさすった。

「元気に生まれてきてね」そう心で語り掛けると、返事をするようにお腹をドンと蹴られて思わず「フッフ」と笑みが漏れた。

どうやらこの子も上の姉たちと同様に元気な子に育ちそうだ。

「やったあー！男の子だったの？おとーとができるんだね！ママ！」

保育園より帰宅した長女<sup>カナエ</sup>にお腹の性別を聞かれたので結果を伝えるとぴよんぴよんとその場で跳ねて喜びを表現して次女<sup>トモエ</sup>に微笑みかけた。

「巴<sup>トモエ</sup>〜！一巴もお姉ちゃんになるんだよ〜」

そして跳ねる姉を見上げ釣られるようにキャツキヤと真似して喜ぶ次女<sup>トモエ</sup>を見て私も思わず笑みを漏れ出た。

「ともえ、男の子ってね」おちんちん「がはえてるんだよお〜！おちんちん！」

そう言って『パオーン』と象のモノマネを次女に伝える長女に私は「こらこら」と苦笑いを浮かべながら彼女を諭した。

「おちちちん？」

まだ二歳になったばかりの次女ははつきりと意味を理解して発する単語はそれほど多くない。

その中で「おちんちん」など真っ先に覚えさせる単語でもない。

故にそう諭したのだが、次女はその単語のゴロの良さに惹かれたのか、その後もずっと「おちちちん！おちちちん！おちちちん！」とはしゃいでいた。

「お久しぶりでございます。ミカさん」



男児の妊娠が判明して2カ月後、安定期にも入ったことも相まって私は数年ぶりに里帰りをしている。

「ご無沙汰しております。幸恵さん」

そう言って私は玄関で正座をしてお辞儀をする女性に挨拶を返した。

田井中幸恵さん。

私が生まれる前から実家の家政婦をしており、記憶が正しければ私の母が小さいときから働いているのもう70歳を超えているはずなのに、彼女の背筋は鉄が入っているようにピンつと張っている。

「この度はご妊娠おめでとうございます。体調はいかがですか？」

目尻をしわくちやにするように微笑んで問う彼女に

「上々です。ただ叶と巴かなえ トモエの時と違って、頻繁に塩気というかジャンクフードが食べたくなつてしまつて、少し太つてしまいました。」

ペロリと舌を出して答えると彼女は、

「そうですか、そうですか。ジャンクフードというのはあまり存じ上げませんが体重が増えるということは、その分赤子にも栄養がいくということですから。よいことでございます」

そう言つてうんうんと頷いた後に私の背後に隠れる二つの影に幸恵は気が付いて首のニヨキと伸ばした。

「ほら、二人とも幸恵さんにご挨拶して」

「こんにちはー」

「わんわいわー」

私の後ろから娘の二人がそう挨拶をすると幸恵はくしやりと笑つて、

「こんにちはわ！カナエさん、大きくなりましたねえ。トモエさんは初めまして。幸恵おばあちゃんつて呼んでくださいね」

そう好々婆こつこうばあな表情を浮かべた。

彼女は子供の扱いが昔からうまい。それこそ、この笑顔に私は何度救われたかわからない。

そして娘たちは彼女の笑顔に釣られるようにすぐに笑顔を返して自ら寄つていった。

「おばあちゃん！おばあちゃん！」

「ばっばー！ばっばー！」

喜色の声をあげながら彼女に歩みよる。どうやらこのまま任せても問題ないようだ。

私は幸恵に「少しだけ、子どもたちをお願いします」と小声で言う

と  
幸恵も「分かりました。ご隠居様は客間でございます」と返ってきた。

「失礼します」

襖の前で正座をしてから声をかけると中から「入りなさい」と腹が冷えるようなズンとした声音で入室を促す声に私はゴクリと唾を飲み込んでから襖を開ける。

スーツ。

なるべく音をたてないように行儀よく襖を開き、私はその場で頭を下げた。

「ご無沙汰しております。お婆様」

下げた頭の先で「久しいのう。そこでは顔が見えぬ。近くに寄ってはくれぬか」

祖母の言葉に「はい」と返事を返して頭を上げて彼女の元へと歩みよった。

彼女の両隣には母と姉が控えており、姉は賀茂家の当主らしく冷たい顔つきでこちらを見ていた。

「本当に久しぶりね。元気にしていたかしら？」

私の顔をじーっと見つめたながらほほ笑む母に私はペコリと何度目かの頭を下げた。

久方ぶりに見る母や祖母に老いを感じながら内心では笑顔で駆け寄って世間話をした気持ちをぐつと堪えた。

結果的に家を飛び出るように出奔した私を加茂という家を与えてくれた者たちだ。

それでも、もはや別の家。分家の者として大人の対応をせざるを得

ない歯がゆさに思わず私の声音は堅く、意固地になってしまった。

「おかげさまで何事もなく。そ、それで本日私が呼び出された理由をお伺いしても？」

つい先日、安定期に入りお医者さんからも「すくすくと育ってますよ！もう大丈夫です！」と

お墨付きをもらってから、一応本家たる実家に形式ばかりの妊娠報告をしたのだが、

今回も前の2人のように定型分が帰ってくるという予想は裏切られ、至急本家に顔を出せと、命令のような返信が返ってきたのだ。

『男子を身籠った』との報告の後に矢の如く飛んできた実家<sup>本家</sup>へと招集命令。

当然お腹の子に関係することだと予想され、この場には祖母と母に当主である姉が一堂に会する場所に私は警戒を禁じ得ない。

もしやお腹の子を下ろせというのだろうか。そうは言わずともこの子にもし危害が加えられるような提案ならば、私は命を賭して守る。

そう決意を新たにすれば不思議と身体中に勇気が溢れる。

言い換えればまるでお腹の子からパワーがおくられてくるような不思議な気持ちになった。

「神の御信託が下りた」

ポツリと当主である姉が三人を代表して言葉を述べる。

彼女の声を聞くのはいつぶりだろうか。

昔はそれこそカナエとトモエのように仲の良かった姉。

それも気が付けば、かれこれ10年以上口を聞くこともなくなっていた。

「信託ですか？それは蛇神様でしょうか？」

私たち、賀茂家を本流とする家系は代々、十二天将の一柱 勾陳<sup>こうちん</sup> 別名蛇神尊<sup>へびがみのみこと</sup>を祀り、その御力をお借りする巫女の一族である。

故に私から主神となる神の名を訪ねると姉は「違う」と短く言葉を発した。

「では、どの神からの御神託でしょうか？」

「あめのみなかぬしのかみ天之御中主神よ」

母の言葉に思わず肩がビクリツと跳ね上がり、一時炎を灯していた私の心はみるみると萎み、圧倒的な不安感がこみ上げた。

その神とは我々、退魔を生業にする一族に知らぬものは居ない。

最高神であるあまてらすおわみかみ天照大御神と同列とされる創造神の一人であり、退魔を象徴する。

それこそ十二天将さえも従える神だ。

「な、なにゆえそのような高位の御方が御神託を？」

そんな最高神からの御神託など、ここ数百年で聞いたことはない。

それこそ平安時代。いまよりも魑魅魍魎が跋扈する災厄の時代に訪れた“百鬼夜行”の時以来ではないか。

そう思い当たり私は思わず絶句して言葉を詰まらせた。

“百鬼夜行”が近づいているとの御神託がみかど帝におりたそうよ」

そしてその絶望の予感を姉に肯定されて思わず血の気が引いて思わず倒れこみそうになるのをぐつと堪えて私は姉を見据えた。

“百鬼夜行”

第九・十位階に区分される怪異の複数同時出現。悪鬼羅刹の大暴走。

それが発生した際は、かの伝説の陰陽師 安倍晴明が一騎当千の活躍により安寧を護られたとされるが、

伝承によればその陰陽師は正に規格外。

現存する陰陽師が束になってもその実力に及ばないほどの存在だ。そんな大災厄が今、面前へと迫りつつあることに私は娘二人とお腹の中にいる子の未来を案じる。

「話はそれだけではないのよ」

母はそう言っつて祖母にペコリと頭をさげて、続きを促した。

「これはまだ帝にもご報告していないお話である。故にそのような心得よ」

祖母の声音に思わず背筋がピンとなる。

「我々賀茂家には蛇神尊を通してあめのみなかぬしのかみ天之御中主神より御神託が下りた。

その内容こそが今回、お主を呼んだ理由よ」

祖母の言葉に私は拳に込める力を強めた。

「それが、お腹の子に関係するん？」

思わず剣呑な表情を浮かべてしまう私に、

祖母は「左様」と吐いたあとに言葉をつづける。

「近し、訪れる災厄から日輪が如し和を導く存在出づる。さりとして男子には悪しき業が苦難となりて立ち憚る」

祖母の言葉にゴクリと唾を飲み込んだ。

「これはお主より妊娠の報をうける一週間前に下された御神託である。

そしてその後、お主より妊娠の報が届けられた。それも男子である」

祖母の言葉に思わず後ずさり、腹を守るように身をよじった。

「そう、構えるでない。なにもその男子を取ろうなどはしておらんし、帝に献上するようなこともせぬ」

続けて述べられた言葉におもわずほっと息を吐いた。

「御神託には最後に“秘守せよ”とあらせられたのよ。よって賀茂家としてはこのことを帝にご報告もせぬ。お主は安心してその男子を産むがよい」

“安心なんて出来るわけがない”

真つ先のそんな文句が私の脳裏に現れた。

「ただの、その男子が日輪の如き、災厄“百鬼夜行”を退ける救世の男子であることはもはや覆えのできないことじゃ。

よつてお主の分家の処置を本日より解き、加茂ではなく賀茂を名乗ることを認める。加えて男子が生まれし暁には本家に定期的に顔をだすように」

ピシヤリと一足飛びにそう告げられた私は言葉を失う。

御神託とは神のお言葉でありそれが違えることはまずあり得ない。

故に私は日輪という箇所よりも悪しき業という箇所に案じることを禁じ得ない。

今だ混乱する頭でとりあえずはその場で頭を下げて、私はその部屋

を後にした。

「あ、ママだあく!!!」

「まんまっ! まままー!!」

ふらふらと長い廊下を歩いていると正面から私を呼んで駆け寄る娘のふたり。

彼女たちも私の、いや賀茂家の娘なのだ。

おそらく今後は退魔師となり、お腹の子と一緒に怪異と戦うことになるであろう。

今、浮かべるこの笑顔を私は生涯守り抜くことができるだろうか。言いようのない不安を覚えて私はその場でえずいて膝をついた。

「ママッ!? 大丈夫!?!」 「らいろーぶー」

叶と巴がうずくまる私の背中をさすって表情に涙を浮かべていた。「ご、ごめんね。大丈夫よ。少し気持ち悪くなってしまったみたい。大丈夫だから安心して。ほらないないないばくくくくく!」

手で顔を隠してあげると同時に笑顔を見せる。

巴はそれを見てきやつきやと笑みをこぼしていたが、叶は心配そうな顔を浮かべたままだった。

その後をかいつまんで話すと、私たちは大阪より本家の賀茂家の離れに拠を移しすことにした。

すでに家を一度出た身でもあるので、性は加茂のままとし、戒めの意味をこめた。

叶と巴。お腹の子である匠の未来を守る為にはそれが最善であると決断したためだ。

将来、叶と巴が退魔師になろうとすればここより適した場所は私は知らないし、匠を守る場所としては退魔師の名家である本家は安泰であろう。

匠。

不思議な男の子だ。

生まれてしばらくはあまり笑うこともなく、怒っているのか？と思うほどむっつりとした表情が板についた子どもだった。

そして今、私の目の前では母がデレデレとした表情で匠を抱いていた。

「ムー」

抱かれる匠はいつも通りの仏頂面をしながら暴れることなく抱かれている。

聡い子だ。お腹の中で散々暴れていた子も、いざ生まれてみれば大人しく、飲み込みも早く、夜泣きもしない。

娘の時はまったく眠ることができなかった新生児期を私は穏やかに過ごすことができたので思わず『男の子はこんなものなのか？』と過去に男兄弟をもったことのある祖母に尋ねると、「1歳になる頃に怪異により殺された」と聞き、背筋が凍った。

祖母曰く、

“男子は1歳になるまでは全員が怪異を寄せ付ける氣を放つ”らしく、よく怪異の標的になる為、通常は一歳までは結界師に守られるのが一般的と教わった。

そんな、匠もすくすくと育ち1歳を超えるころにはよちよち歩きから直立して歩くようになり、

「ママ」と「ねえね」のふた言だけしゃべれるようになった。

そして現在、2歳。

他の子と比べても流暢にしゃべり(おしゃべりではないが)、大人しい、子どもらしからぬ落ち着きを放つ現在まで成長していた。

「ババ、あつい」

仏頂面が板についた我が子を気にせずほっぺをすりすりしていた母に匠はぼそりと呟いて彼女の腕をパンパンと叩く。

これは“おろせ”の合図である。

珍しい男子に群がる女性陣に匠が身に着けた数少ない拒否の意思表示。

それを賀茂家は全員知っている為、母をその場で「ごめんねえ」と

つぶやいて匠を下した。

テコテコテコ。

おろされた匠はちよこちよこ短い歩幅で私の足元までやってくと「ママ、だっこ」と腕を伸ばしたので思わず私は破顔した。

匠は基本、人にやさしい。だれかに自分の意思を貫くことはほとんどなく、3つも年上の巴にさえおもちゃをねだられると渡してしまう。

それでも匠は私にだけは要望を告げる。

『抱っこ』に『おんぶ』、『ぎゅー』、はては『キス』と仏頂面でしてくるおねだりに私は何度、胸を高鳴らせたことだろうか。

「はいはい。抱っこね〜」

私は母の矜持が保たれ鼻を高くしながら息子の脇に両手を差し込みそのまま持ち上げた。

「ほーらー！たかいたかーい！」

高く掲げると匠は少し笑った気がした。

匠が4歳になるころには、もはや7歳の巴よりもすっかりとし、9歳の叶よりも泣くことのない子へと成長していた。

なにもそれを悲観したわけではない。

なぜなら、彼はそんな大人びた様子をだしながらも、私にだけはまだベタベタと年相応に甘えてくれるからだ。

彼が3歳になるとき、急に私のことを

“ママ”ではなく“おかあさん”

と呼んだ日には泣いて“ママって呼び続けて”と懇願したものだ。それからというものはいまも律儀にそれを守り“ママ”、“ママ”と私を呼んで甘えてくるのだ。

そんな子どもたちを連れて、私は温泉へと旅行に行つた日。

家族水入らずで露天の家族風呂に入っている時、ふと匠が空を見上げながら口にした。

“また来年も、再来年も、家族みんなで行きたいな”と

普段よりわがままも言うことがない彼から発せられる言葉に家族



一同、彼を抱きしめて約束した。

「ああ、あの時も今日みたいに満点の星空だったなあ」

空を見上げて涙を流す。

「戻って気おったぞ。準備はよいな」

祖母の声には私はコクンと頷いた。

“タクミ。ごめんね。約束守れなくて”

宙には姉の美紅が翼から羽をはやしてこちらに飛来<sup>そら</sup>していた。

## 第肆拾陸話　ぬらりひよん

「ワシを恨むか。美香よ」

空を見上げる祖母が私に視線を映した。

「冷血姦れいけつかんだと思うじやろうか」

握った拳は震え、唇から一筋の血が流れた。

「おばあちゃん……」

いつぶりだろうか。彼女をそう呼んだのは。

彼女は自身を冷血姦と卑下するがそれは逆である。

誰より、強く、優しく、たくましいのだ。

私が姉や母、それこそ賀茂家を象徴する銀髪ではなく、まるで漆黒のような黒髪で親族連中から避難されたときに、真っ先に擁護してくれたのは彼女だ。

家を出奔した時も、加茂という名を与えてくれたのも彼女。

誰よりも強く、誰よりも厳しく、私はそんな祖母が大好きだった。

「人の世を、子らの未来を。護らねばならぬ。創らねばならぬ。これも賀茂家の宿命じやろう」

空を睨む彼女の目に復讐の炎が灯されるのを思わず幻視する。

「あれは恐らく十位階の魔物じやろう」

先の闖入の際には感じなかった身を刺すようにするどい妖氣。

姉の姿をしてそれに翼をはためかせる彼女の背が陽炎のようにゆらゆらと揺れていた。

「全力じゃ。もはや美紅だと思うてはなるまい。仮にその肉体を乗っ取られていようと」

祖母は右手を突き出し詠唱と唱える。

先の鳥と呼ばれる式神を降臨した際の代償で折れ曲がった人差し指。

それを除く4本の指が同じようにポキリ、ポキリと折れ曲がる。

特級陰陽師である彼女が行使できる闇の式神降臨術。

“黄泉よみの王　修羅　畜生　餓鬼　地獄　悪鬼あくき羅刹らせつを従えし、冥府の

主よ

“ 空蟬うつせみの世に迷い込む不浄の者を 捕らえ 啄ついばみみ 君臨せよ

“ “ 出でよ。 羅生門 ”

詠唱と終えると化け物の眼前に唐突に出現した冥府の扉。

勢いよくその両扉が開かれ、幾重もの亡者の腕が叫び声をあげながら捕まえんと延びる。

“ 羅生門 ”

顕現したソレは天を突くほどの巨大な姿に私はゴクリを唾を飲み込んだ。

「美香！ わしを補助せい!!!」

祖母の言葉に私は頷き手を組み詠唱を始める。

“ 壺輪の瑠璃 式重ふたえのころもの衣 ”

“ 参つ唱えて 肆行しぎようのこうの業 ”

“ 伍陸ごりくてんだく天濁 漆魂しちこんほろま宝極 ”

“ 捌方はつぽう結びて玖曇と為す ”

“ 拾刻じつこく刻んで 蒼天を示せ ”

「佰雷びやくらい仟雹せんひょう障」

中空に巨大な五芒星が出現し光を放ちながら無数の金色こんじきの蛇いかずちが雷のように空から姉の姿をした何か振りかかった

「不浄を喰らう金色こんじきの蛇よ！ 今、一族より魔を退け給え!!!」

蛇が喰らいつくと同時に羅生門から延びる手が化け物をとらえた。

「平たいらげろ。 冥府の門」

化け物を捕らえた亡者の手を羅生門へ引きづるべく祖母が手を横に振りはらう。

門から聞こえし叫び声が一層強くあたりをこだました。

蛇と亡者の腕に包まれ門へと引き釣りこもうとする、グググと音を立てるもすぎにピタリと止まる。

拮抗したのだ。化け物と羅生門の力が。

「ちッ！ やはり一筋縄ではいかんのう。」

祖母が憎々し気にそう呟いて無事な左手で印を結んだ。

令りょう・百びやく・由ゆ  
旬じゆん・内ない・無む  
諸しよ・衰すい・患げん

「妖あやかしの首を刎ねよ。『断罪の刃』」

空に巨大な、五芒星を描き、現れたのは巨大な一本の腕。

黒々とし、大樹の幹の如く太い腕の先には鉋のようなモノが握られている。

巨大が故に振り上げてから、化け物目掛けて振り下ろす腕がのそりのそりと重く感じる。

鉋と化け物がぶつかりあつた瞬間、衝撃で地面が揺れ、土煙が私たちを襲う。

強風となり、砂が目当たろうとも私たちは目の前から視線を外さない。

「やつめ、ビクともしておらん」

ふと横に立つ祖母が言葉を漏らす。

顔には噴き出すように玉の汗をたらし、顔色は青くなっている。

先の降臨術により、その右腕をだらりと下げていた。

土煙が晴れはじめて化け物のシルエットが見える始めたころ。

ソレは口を開いた。

「フフフフ。愛うあいい奴やつじゃ。フフフフ」

土煙が完全に晴れると姉は地面に横たわり、そばに一人の老人が立っていた。

服は着ていない。背丈は子どもほど、手には木の杖を地面につき、後頭部が鞠のように膨らんでいた。

「……『ぬらりひよん』……」

その特徴を知らない退魔師は居ない。

それこそ怪異の象徴的存在とされ百鬼夜行を先導する怪異の王で、妖怪の王がその場で嗤っていた。

「このようなものでワシを閉じ込めようなど、おぬしらは愛い奴じゃ  
ブンツ!!」

ぬらひひよんが持っていた杖を羅生門目掛けて振り下ろす。

すると一拍置いてから爆発音が響きわたり、ゴゴゴと音を立てて崩れる冥府の門に私は思わず後ずさった。

「カカカカ、匂う、匂うぞ。お主、あの男子おのこの母か。どれ。こつちへ来やしゃんせ」

クイツ。

手招きするような仕草をした後、私は見えない力に引っ張られるようにぬらひひよんへと引き寄せられる。

「ほれ」

間際、杖を私の顔めがけて振るわれ、避けることもできず頬に強烈な衝撃が走る。

齒に骨、それぞれが砕けるのを感じるも化け物の杖は止まらず私の体を打ち付けた。

「ほほほほほほ！よい！よいぞ！男子おのこの匂いじゃ！お主の血からあの小僧の匂いを、力を感じるぞ！」

「美香っ!!」

背後で私を呼ぶ声が聞こえるも、ぬらひひよんが「邪魔よ。散れ」と声を出すと突風が通り過ぎ、祖母の気配が消えた。

「愛い！愛い！愛い!!!」

連打するごとく振り回され、頭が割れる音、腕が砕ける音。鈍い音が身体の内より響く。

最後の一発とばかりに私のお腹に杖を突き立てるとぬらひひよんは嗤った。

「な、なにが……目的……なのよ」

未だ意識があり、喋れることに私は驚きつつもソイツに問うた。

「おおん？なんじゃ？お主、まだ生きておるのか。愛い奴よのう。」

理由とな。……理由……理由……りゆう……」

私を足蹴に考え込むように手を顎にあてるぬらひひよんがニヤリと口角をあげた。

「オモシロイからじやな。」

「――殺す――」

まだ神経を通していた腕で印を結ぶ。

「――爆。――」

腕が爆ぜ、衝撃でぬらりひよんの拘束を外しながら地面へと転がった。

「ほほほほ。腕を贅に逃げようとは。全く痴れ者は愛いのう」

ゴロゴロと転がり、受け身を取ることもできず距離をとる私にヤツは笑った。

「――ツツー……やって……やるわよ。お前は殺す！殺す！殺す！絶対にあの子の元へは行かせない。それこそ私の命と引き換えでも……!!!」

もはや動かせる腕は右手のみ。左手は肩から先が無くなって。両足だって折れ曲がっているのを痛みを無視してなんとか立ち上がっているに過ぎない。

奥歯を噛み締め、歯が砕ける音を出そうとももはや気にしない。

「ごめんね。みんな。こんな不甲斐ないお母さんで」

叶に、巴に、匠に、姉の遺した子供たちに。

傷だらけになった腕を突き出す。

呼び出すは禁断の式神。

“禁術”と呼ばれる高位式神を超える最高位。

神に召喚をお頼み申す式神降臨術。

「ああ、こんなことなら冬にでも温泉に行けばよかったわ」

思わず先の冬に行かなかったことを後悔するもはや遅かった。

“十二天将が一、勾陣よ”

蒼佳ちゃん。きつと貴方なら任せられる。優しい匠のお姉ちゃんになつてください。

“我、曠劫 戌を祀る傍系の者也”

碧理ちゃん。匠を愛してくれてありがとう。まっすぐ愛の豊かな子に育ってください。

“今、六根を贄に謹請す。

叶。怖がりて泣き虫のあなたが匠を守ってくれた。怖かったよね。痛かったよね。大丈夫。ママもすぐいくよ。

“我が身、磔礫なれば！我が御霊も賜ち給へ”

巴。いつも好奇心旺盛なところママは好きだよ。でもそつちに行ったらまずは怒られてください。ママむちやくちやに怒るからね。覚悟してて。

“金色の蛇　！破邪の牙　！退魔の火焰

匠。貴方の名前は世界や人の世の平和を作る。それこそ御神託で救世主って言われて舞い上がっちゃた私が名付けたの。

貴方はこの世界行方を負わせるのはママとして本当はいやだけど。きつと貴方なら出来る。” 貴方にしか” 出来ないことなの。

“四方に散りし持国の剣”

“増長の戟　文玉混じりて結び”

ああ、私の大好きな子どもたち。5人とも一生私の宝物よ。

最後に、姉さん。ごめんなさい。結局一緒に住むようになってから一言も昔みたいにおしゃべりできなかつた。素直になれないこんな私でごめんなさい。

「ぬらりひよん!!!せめてお前だけでも私は必ず道ずれにする！」

私の宣言を聞いても尚、その表情は醜悪に歪めて『愛い。愛い』と宣っている。

“みんな。愛してくれて、愛されてくれてありがとう”

「今、九族桎梏より護り給へ！」

顕現せよ!!

『騰蛇天』

『そなたの願い聞き届けよう』

ふと男性の優しい声音が私の鼓膜を包み、そのまま私は意識を手放した。

## 第肆拾漆話 姉妹

「禁術か……」

スクリーンをみて妖狐が呟く。

知らなかつた母の想い。

映像は母が金色の龍となり、ぬらりひよんに向けて火焰の息吹ブレスを吹きかけていた。

「禿坊……」

ふと妖狐が哀愁を漂わせてながら一言漏らした。

ぬらりひよんが杖を振るい、母龍を殴りつけると吹き飛び家屋を壊す。

「おかあ様っ！」

瓦礫にできた空間から一人の少女が飛び出し、地面に倒れ伏す叔母に駆け寄った。

蒼佳だ。

それに触発されるように碧理も彼女へと駆け、幸恵が二人の名を叫んで止めようとするも、間に合わない。

先の衝撃で結界は崩れてしまったのだ。

もう一度構築するには、再度、氣を整えて印を組む必要があると、今なら理解ができる。

二人を追うように俺たちも叔母へ駆け寄ると、幸恵が印を組み再度、結界を構築した。

「おかあさん!!」

うつ伏せで倒れる叔母の肩を抱いて仰向けにして叫び声をあげる二人。

すると、叔母が一瞬苦しそうに呻いた後、ゆっくりと瞼を開けた。

「……囚われていたのね」

視界をぐるりと見渡した後にボソリと彼女が呟いた。

「ご当主様……」

幸恵が叔母をそう呼び、蒼佳と碧理が叔母の胸元に泣きつく。

「私が、殺したのね」



“カナエもトモエも”

空を見上げる瞳から涙が流れる。

「蒼佳、碧理、起してくれないかしら」

泣き叫ぶ二人の頭を撫でる叔母に彼女たちは頷き肩を支えて叔母の身を起こした。

「……騰蛇とうだてんごう天てんね」

それを見上げ、龍を見つめる叔母の表情はどこか儂げであり、彼女の言葉に反応するように幸恵が頷いた。

「タクミ。ごめんなさい」

ふと視線を下げて俺に移して叔母が頭を下げる。

なんの謝罪かは察しがついている。

それでも俺は彼女に怒りを感じずにいられない。

拳を強く握り、肩が震え、涙が決壊したダムのようにとめどなく溢れていく。

許すとは口が裂けても言えなかった。

前世から嫌われてひねくれながらやつと甘受できた幸せを。

愛を、唐突に彼女に奪われた。

「助けて……」

母をだろうか。自分自身をだろうか。

俺の口から出た言葉に叔母はコクリと頷いてから娘たちの額にキスをした。

「二人で協力してタクミと生きなさい」

唇を離していつもとは違う、慈愛に満ちた顔つきで叔母が娘に言葉を掛ける。

「いやーママもここにいてー!」

碧理が彼女の腕を抱くと蒼佳も同じように彼女を抱いた。

「私ね。仲直り出来てないのよ」

二人の頭を交互に撫でて空を見上げた。

「昔はあなた達みたいになさく仲の良かった姉妹だった。それがいつしか私から彼女を避けるようになって、話すこともできなくなつて、それで5年前、タクミ達を連れてここに戻つて来た」

普段の鉄仮面のように表情を出さない叔母がくしゃくしゃに顔を歪めながら涙を流す。

「嬉しかった。仲直りできるチャンスを神様がくれたと思ってた。でも……素直になれなくて、意固地になって結局、今の今まで仲直り出来てないのよ」

“ 蒼佳 ”

優しい声音で娘の名を呼ぶ。

「貴方もお姉ちゃんだから分かるでしょう？ 碧理と喧嘩したとき、時間がたてばきゅつと胸を締め付けるように痛いわよね」

“ 碧理 ”

「もし貴方がお姉ちゃん何年も離せなくなったら悲しいでしょう？ 寂しいでしょう？」

二人を抱き寄せて肩を震わせる。

「美香妹を一人には出来ないわ。お姉ちゃんだもん。最期まで守ってあげなくちゃ」

叔母の言葉に蒼佳が首を横に振って抱く力を強めた。

「行かないで。おかあさん！ お願い、おねがいだからあつ……」

“ 退魔師とは人の世を護る存在なり。御三家とは国を、子らの未来を護る象徴なり ”

「おばあ様がよく言い聞かせることよ。知ってるわよね」

私はあなた達を護りたい。子どもたちが生きるこの世界に天下泰平の世にしたいの。貴方たちを愛してるからこそ」

『わかつてくれる？』

叔母の声にそれでも尚、泣きすがり蒼佳が首を横に振った。

「……わからないよー！」

強める声音とは対照的に叔母の声は優しい。

「今はわからなくても、いつかきつと貴方にも分かるわ。愛してる。」  
抱き着く二人を無理やり剥がして、その場から立ち上がり幸恵に視線をむけた。

「子どもたちの避難を」

叔母の言葉に幸恵は首を横にふった。

「ここから離れば、奴が追ってくる可能性がありますので、ここに結界を張りましょう。〃天〃を使います」

幸恵の言葉に叔母が口角を上げた。

「さすが、特級の結界師ね」

「……一か月だけでございますが」

幸恵の言葉に頷いた叔母がふと俺に視線を向けてほほ笑んだ。

「許してとは言わないわ。私が貴方の姉を殺めてしまったのはすべて私の心の弱さよ。

それでも言わせて頂戴。ごめんなさい。

貴方に業を背負わせてしまつて。貴方の家族を奪つてしまつて」  
彼女の瞳を見つめながらも俺の目つきは厳しいままだ。

「こんな不甲斐ないおばちゃんの頼みを聞くのは癪でしようけど。聞いてちょうだい」

〃世界を救つて。救世の男子様〃

叔母の言葉を皮切りに、幸恵が一旦結界を解いて俺たちを残して二人が外へと出る。

「ママっ！」

碧理がすがろうと手を伸ばすと叔母が振り返り手を突き出した。

「愛してるわ……バイバイ」

涙を流しながら笑った彼女が印を組み、詠唱を唱える。

幸恵も同行するように俺たちに向けて結界を構築した。

〃東西守りし両の武よ

南北守りて両の文よ

珠たまを中あたに、四方を結び

捌方しやうほうより迫る不浄には

拾陸方じゅうろくほうから浄化せよ。

「天陣結界 〃天〃」

俺たちを中心に半円球の結界が展開される。

「騰蛇とうだてん天てん」

叔母が詠唱と唱えると、母と同じように姿を龍へと変えて空を駆け  
ていく。

「皆様」

結界の外で幸恵が俺らの前で跪いた。

「ご隠居様にお伝えください。仕えて60年余り。お慕い申しております」と

普段と相も変わらずその笑顔。しかしながら瞳だけはキラキラと光を放っている。

「タクミ様。世を。人の世を。どうかお頼み致します」

目を細めて笑ってから彼女は踵を返して駆けていく。

それを俺たちはただ叫び声をあげて見送ることしかできなかった。

## 第肆拾捌話 京都事変

「親不孝な馬鹿孫どもめが」

叔母たちとは反対側から声が響き、俺たちは後ろを振り向く。

「ひいお婆さまっ！」

蒼佳が叫び声を上げて碧理は息を呑んだ。

ズタボロなのだ。

衣服が削げ、体中に切り傷をつくり、至る所から白い骨が見える。

彼女は右腕を抱えながらゆっくりとした足取りで俺たちを包む境界に手を添えるとその場で崩れ落ちる。

「毫碌してもうたわ」

血の混じった唾を地面に吐き捨てその場で仰向けに寝転がつて。

「2人とも禁術を知っているとは、一体どこで書物を盗みよんだか。

阿呆め」

どこか誇らしげな表情で嗤う彼女の目は厳しい。

空では2匹の金色の龍が浮かぶ化け物目掛けて咆哮を上げていた。

「良いか。しかと目に刻め。お主らの母が自身を御霊を犠牲にしても守ろうとする勇姿じゃ」

肩で息をする曾祖母に蒼佳が尋ねた。

「御霊っ!?!それはどのような意味ですか。ひいお婆さまっ!?!」

彼女の言葉に曾祖母は「そのままの意味よ」と冷たく告げた。

「あやつらはもはや輪廻転生の理から外れ、神に願ったのよ。未来永劫その御霊は神の供物となる。故に禁術じゃ。」

「まっこと、阿呆な孫たちじゃのう」

泣きながら笑い声を上げる曾祖母が空に向かって叫んだ。

「お前らっ! その覚悟、ワシが見届けるぞ! しかとぬらりひよんを退魔の炎で消し飛ばせ!」

まるで彼女の声に呼応するように、片割れの龍が緋色の焰を吐き、もう片方が黒い焰を吐いた。

「あつちが美紅かのう。奴め、炎に蠱毒を混ぜまこんでおるわ」

カカカ。

そう言つて黒い火焰を吐く龍を指差して笑う。

「毒を混ぜ込ませた退魔の火焰じゃ。いくらぬらりひよんとて、無事では済むまい」

両方向から吐き出された火焰はぬらりひよんを中心に尚も火の勢いを強める。

「幸恵も死ぬ気か」

天を結界を足場に駆ける幸恵に移した。

「碧理よ。主は幸恵と仲が良かったのう。みよ。あれが結界師の極地じゃ」

老婆らしからぬ俊敏な動きで幸恵が空を駆けながら叫び声を上げていた。

「——『獄極』」

ぬらりひよん、母と叔母。そして幸恵自身を包んだ四角く、巨大な黒い結界。

「……あやつ、このワシにまだ働けと言うのか」

目を見開き曾祖母が更に口角を上げて嗤う。

「——良き相棒じゃった」

震えながら身体を起こす彼女に蒼佳と碧理が駆け寄る。

「ダメー！ひいお婆さま！行かないで！」

2人の声が揃い彼女は笑った。

「逝かぬよ。良いか。蒼佳。覚えておるか。結界師はあくまで結界を展開し、一時的に封じ込めることしか出来ぬ。それを手助けするのが我ら陰陽師の仕事よ。」

匠、主は将来サムライとなる。

サムライはそんな彼女達を守りながら討ち祓うのが役目じゃ。それを忘れてはならぬぞ」

結界を手すりに立ち上がった彼女が空を睨んだ。

「幸恵はワシに託しおった。ワシが生きてると信じておったのじゃろう。」

故にワシが奴らまとめて止めをさしてくれるわ」

その場で印を組み詠唱を唱える。

「ワシはまだ逝けぬ。故にこの右手じゃ。右手を喰らわせてやるわ。聞こえるか。九十九よ。久方ぶりの出番じゃのう」

両手を天に掲げると現れた五芒星がみるみる肥大し、中央から宙を駆ける龍よりも大きな大蛇が姿を表す。

「ひどい有様じゃのう。トミよ」

舌をシウルシウルと出す大蛇がふと声を上げる。

目測で200mを超えるほどの大ききから発せられる声が地面を揺らした。

「まっことひどいのう。ほれ。贄じゃ」

折れ曲がった右手を突き出すと大蛇が舐めると、どろりと蠟が溶けるように腕が崩れた。

「婆の肉は気に食わぬの」

顔を歪めたのだろうか。

巨大すぎてもはや表情は分からない。

「そうは言うてくれるな。もはや50年以上の付き合いじゃろうて」

かたや、曾祖母は笑った。

溶けた腕を気にすることなく笑い声をひとしきりあげた後、ふと動きを止めた。

「喰え。九十九」

彼女の言葉に従うように大蛇が黒い結界に這い寄り、身体を起こしてがま口の如く口を大きく開き結界ごと飲み込んだ。

蛇の丸呑みよろしく、顔が膨らみ、喉を通り、腹が膨らむ。

暫し訪れた静寂に俺たちは息を呑んだ。

しばらく。

「これは……無理かも知れぬのう」

大蛇がそう漏らした後、腹部が爆ぜて爆風を伴い結界へとぶつかった。

「痴れ者！痴れ者！痴れ者！」

大蛇の亡骸の中央に1人の男が叔母の顔を踏みつけ、やがて踏み潰した。

パキヨリ。

形容しがたい音を立ててザクロのように潰れた顔に俺たちは息を呑んだ。

「痴れ者が!!ワシに何を盛った!何を盛ったのじゃ!」

頭の潰れた亡骸を痛めつけるように拳を振り上げて下す、頭の禿げた筋骨隆々な体軀。

「すまぬ、幸恵」

ばたりと祖母が背後で倒れ込む音が聞こえた。

「クソが!身体が崩れる!巫山戯るなあアアアア!」

咆哮を上げるぬらりひよんの身体がドロドロと溶け出すと、現れたのは1人の老人。

手足は細く、頭だけが風船のように膨らんでいる。

「遊んでやろうと思うたら姑息な真似を使いおって」

ふと奴がこちらに視線を向けて固まった。

「口惜しい。口惜しい。美味そうな男子おのこを前にして我慢など」

足蹴にした叔母を蹴飛ばしてこちらに歩みよるぬらりひよん。

足取りは震えながら顔だけは邪悪に嗤っていた。

「お、お母さんは返せ!化け物っ!!」

近寄るそれに蒼佳が叫び声を上げる。

「返せ?阿呆なこと抜かすな小娘があっ!!」

結界目掛けて杖を振りかぶると鈍い金属音を立ててソレが止まる。

「ちっ!あのクソ結界師めが!余計なものを展開しよって!」

何度か杖を振るうも結界が阻みぬらりひよんがため息を吐いた。

「……な、なんで……なんでウチなのよ……なんで……なんでお母さんを……」

その場で膝から崩れ落ちる蒼佳にぬらりひよんが顔を歪めた。

「理由なぞ、あの女から美味そうな男子おのこの匂いを感じたに決まっておろう」

そう言ってソレが結界に被りついてギョロギョロとした目つきで俺を視界におさめた。

「ほほほ、良い。実に芳しい香。まさに果実よ。今日はもう良い。興



が削げたわ」

ぬらりひよんがその場で踵を返してコツコツと音を立てて離れていく。

「……タクミ」

俺の服の袖を引っ張り名を呼ぶ碧理に視線を動かす。

「お母さんたちはいつ帰ってくるの？」

絶望からか、キョトンとした顔で尋ねる彼女をみて蒼佳が叫び声を上げながら彼女を抱いた。

2005年3月29日

怪異の王。

ぬらりひよんと呼ばれる化け物が京に現れた。

対応に当たった退魔師の多くが死亡。

サムライの死者 1000人

陰陽師の死者 2000人

結界師の死者 2000人

近畿全体の半数の退魔師及び民間人2万人余りを塵殺した。

退魔庁は此の対象を十位階を超える超位階と区分する。

世はこれを「京都事変」と呼んだ。

## 第肆拾玖話 匠

「ギャアアアアア!!」

夜中、碧理の叫び声にビクリと身体が震えて飛び起きる。

よかくしょう  
夜驚症である。

泣き喚き、身体を暴れさせて、叫び声をあげる。

京都事変を境に賀茂の家は壊れてしまった。

碧理は幼児退行し、夜な夜な叫ぶ。

曾祖母は未だ入院から帰らず、蒼佳が俺たちの面倒を見る。

「寝てていいのよ。たつくん」

蒼佳の言葉に俺は首を横に振って碧理の背中を摩る。

あの日から蒼佳もまた変わってしまった。

俺の名をタクミくんから、カナエのように「たつくん」と呼ぶようになり、いつしか俺も蒼佳姉とカナエや、トモエを呼ぶような呼び名へと変わる。

「蒼佳姉こそ寝てていいよ。あまり無理しないで」

俺の言葉に「そう?ありがとう」と答えて彼女は寝転び俺に背を向ける。

彼女は甲斐甲斐しくも俺の面倒まで見るが時折見せる、睨むような、冷たい目線を送ることがあり思わず恨んでいるのだろうと当たりをつけるが5歳児の俺にはどうすることも出来なかった。

翌朝、京都事変以降、日課となった庭先でのトレーニング。

その瞬間だけは余計なことを考えずに済んだ。

何故、自分が転生したのかを。

何故、家族を奪われなければならなかったのかを。

何故、自分には力がないのかを。

そんな考えに囚われる日常から解放される為に俺は刀を振るう。

「1999……2000」

素振りを止める頃には全身より噴き出す大粒の汗。

上着は水気を吸って重く、息を短く吐いて呼吸を整える。

トレーニングによりこの身体の特徴が自ずと理解できた。  
頑丈なのだ。外側だけは。

5歳児が日に、2000も3000も素振りをしてからの町内を一周するぐらいで倒れることはなかった。

「タクミーあちよぼー！」

汗を拭っている最中に縁側から声がかかり俺は振り向く。

夜中に飛び起きて泣き叫ぶ症状で昨夜も苦しんだ筈の彼女は自身がそれに犯されていることなど知らない。

以前に何度か朝になりきいてみるも決まって彼女は首を傾げて「アタシ、寝てたよ？」と無垢な顔で答える。

「だっ……」

ぴよんぴよんと跳ねる彼女に近づいて俺は抱きしめる。

「ああ。クソツタレな今世だ」

彼女を抱く手が震えるのを、碧理は不思議そうに首を傾げていた。

2年。

年齢が7歳となった俺にはすでに幼な子らしきは消えていた。

小学校の先生、クラスメイトには極力敬語で接して一定の距離を取る。

大人連中はそんな俺をどこか不思議そうな目で見つめていた。

「ビデオレター？」

曾祖母の言葉に俺は首を傾げた。

「ああ……。匠も7歳。立派な男児に育ったものよ。美香からお前に今日届くように退魔庁に預けていたみたいで」

今世でも七五三という概念はあるが意味合いは少し違う。

七五三とは男子の誕生、成長を祝う日とされ、

3歳、5歳を経て7歳となれば末長く健やかに育つだろうという呪いの一種であり、曾祖母は俺に一枚のDVDを渡す。

「……匠、復讐に囚われるではないぞ」

曾祖母が恐る恐ると言った表情で口を吐いた。

まただ。

彼女もまた、他の連中と同じようにあの日から変わってしまった。以前までの覇気は消え失せ、日に日に痩せ細りまさに老婆らしく急激に年老いていく。

「大丈夫だよ」

何故か湧き上がる怒気を隠すように愛想<sup>鉄仮面</sup>笑いを被ると曾祖母が言葉詰まらせた。

「見てみるよ」

ひらひらと手にもつDVDを掲げて踵を返して自室に籠り、早速それを再生した。

「タクミ、見てますかー？」

映る母の顔に俺の顔が強張った。

2年。たかだか2年。されど2年か。

久方ぶりに聞く彼女の肉声に瞳が潤んだ。

「……母さん」

母よ。俺を愛してくれた母よ。

やつとのこととで掴み始めた愛という得体の知れないナニカ。

それはもはや今世には残っていない。

——タクミが7歳でこれを見ているということとは私は指令に失敗して死んだのかも知れません——

冒頭に何故こんなものを遺したのか母は語った。

退魔師とは常に死と隣り合わせ。

人によつては月に一度遺書を書くほどだと。

映像の母が言うには今俺が見ている映像は京都事変の半年前に撮ったモノだと推察できた。

「7歳の誕生日おめでとう！匠もこれで立派な男の子1人だね！」

すでに誕生日は半年ほど過ぎている。

それでも久方ぶりにみる動く母に肩が震えた。

「今日は匠の名前の由来を伝えようと思います。私一生懸命考えたんだよ——」

母はそう言って胸を張る。

“元々は三人目の子どもは葬か渚を考えてたんだけど、匠が男の子だと分かったから私の計画は全てペアになりました”

画面の前で両手を広げる仕草をする母。

そのひょうきんさを今はもう見ることは出来ない。

“だから、私困っちゃって寝る間も惜しんで1時間ほど考えました！”

“どこが『寝る間を惜しんで』だろうか。”

“大工さんって分かるよね。匠のことだもん。賢いからもっと他にいっぱい知ってることあるだろうから大丈夫だと思う”

“大工さんって、モノを作ったり、壊して作り替えたり、いろんな仕事があるの。あなたには未来を創るそんな意味を込めて”大工”と名付けようかと叶に聞いたらあの子、目を吊り上げて断るのよ”  
そりゃあそうだろう。”

叶と巴、大工など一人だけなぜ二文字なのかと考えてします。

賀茂 ダイク

口ずさんで見ると読みとして幾分か悪くないような気がしてきた。

“だから匠。大工の匠からあなたの名前を匠にしたの”

“未来を創って”

彼女はそう言って満面の笑みを浮かべる。

“あ、あと、お姉ちゃんたちとは仲良くするのよ。喧嘩してもいいけど最後は仲直りしなさい。これママとの約束”

小指を突き出し、指切りげんまんを口ずさむ。

“匠は優しいからきつと将来はいろんな女の子と結婚するだろうなあ。子どもってすごいんだよ。パワーが湧いてくるの”

まあ、匠は男の子だからあまり子育てすることはないだろうけどね。

そう言って彼女がはにかんだ。

“蒼佳ちゃんや碧理ちゃんも大事にしてね”

なぜか涙を流す母に思わず頬が緩んだ。

“愛してる”

ビデオレターが終わりを告げてTVの画面が暗転した。

「創るよ。未来」

拳を握る手を震わせて呟いた。

「このくそつたれな世界を俺が壊して創り変えるよ。母さん」  
画面に反射する俺の顔は嗤っていた。

「なんと言うか、貴様はほんに天邪鬼よのう」

スクリーンを見つめていた妖狐が俺に振り向き目を細めた。

「悪いか？」

剣呑な目つきで返すと彼女は首を横に振るう。

「悪しきこととは思わぬが、好いこととも思わんの」

彼女が俺に歩みより、肩に手を載せる。

「まあ、良いわ。小僧の過去、しかと見せてもろうた。妾と契るかや？」

答えは決まっている。

俺は無言で頷きで返すと彼女が目を細めた。

「妖と契約するということとは死後、貴様の御霊は妾に喰らわれるということじゃ。ほんに良いのか」

“ 輪廻転生出来ぬぞ ”

背から覇気を漂わせる彼女に俺は「くどい」と告げる。

御霊を献上することは初耳なれど、もはや決意している。求めている。彼女の力を。

妖狐は「はあ」とため息を吐いてから、「良かろう」と笑みを浮かべた。

「では契ってやろう。小僧。マラを出せ」

「はあ？」

不意に言われた単語に思わず聞き返してしまう。

「マラじゃ、マラ。貴様の男根を出せというておるのじゃ」

どうやら聞き間違いではないらしい。

「男根をだして妾と交われと言うておるのじゃ。当たり前じゃろう」  
言われてもいないし、当たり前でもない。

まあ、そうと言われれば脱ぐしかあるまい。

俺はため息を吐いてから服を脱ぎ捨て彼女の前にチンポをさらけだした。

「よい、マラを持っているではないか」

妖狐の耳がピンと立ち、彼女は妖艶にほほ笑んだ。

この際、肉体でも魂でも好きに持っていけ。

すべては世界を創り変えるため。

チンポに添えられた妖狐の手は恐ろしく冷たかった。

## 幕間

### 第伍拾零回 契り♡

「ほう、妾の手の中で大きくなってきたわ」

冷たい手のひらに一瞬腰を引くも、にぎにぎとする手つきに次第に下腹部に血液が溜まる。

「立派なマラじャのう」

膝立ちとなった妖狐が妖艶に微笑んで鈴口に唇を合わせる。

彼女の尻尾がゆらゆらと動いた。

「ちゅ。あむ……。」

キスをしてからの啜え込み。

金玉に左手を添えて、右手で根元を扱きならの甘く優しいフェラチ才。

熱くなるチンポとは逆に彼女の手も、口の中も冷たく、それが一層心地よい。

「じゅるるるるる」

口をすぼめての吸引に思わず腰を引いた。

「小僧。好きな時に好きなだけ射精出して良いぞ。妾が受け止めてやる故」

シゴク手を止めずにチンポから口だけ話して微笑む彼女。

言われなくても、彼女の手管に射精は近い。

じゅぽっ、じゅぽっ、ジュルルルルル、じゅっ。

暗闇の空間に響く抽送の音。

喉奥に啜えられ、根本をシゴいていた手は肛門に指を添えている。

「ほほいれえ。いイっクふがあよほいい」

ぬちゅり。

彼女の指先が肛門に入り、前立腺をノックする。

前からも、後ろからも攻められ、視界にモヤが漂い、俺は彼女の口内で精を放った。

ドユルルル。



いつもとは勢いとは違う、強烈な粘液性を持った精液がどろりと出たような射精感。

「ふおへ。ふあだふえふふあるう？」

女のGスポットを手マンで刺激するように、彼女は俺の前立腺を押し上げると、更にドロリとしたモノが尿道を通るのを感じた。

すでに彼女の指はズブリと根本まで入っているのだろう。

肛門いっぱいを感じる彼女の感触に思わず尻が締まった。

「小僧の割には実に濃厚な汁じゃ」

チンポから口を話して口内に溜まった精液を俺に見せつけてからゴクリ飲んで彼女は笑った。

——ちゅば……。

肛門に挿していた自身の指を舐める妖狐の耳がピクピクと動く。

「小僧の穢土も実に美味じゃのう」

指先についた糞を舐めとり、ニヤリと嗤う彼女の目はピンク色に怪しく輝いていた。

「久方ぶりの交尾じゃ。妾を楽しませろよ。小僧」

俺を押し倒し、着物の裾を持ち上げてマンコを顔に押し付ける。

割れ目を口に当てがうように腰を下ろし、鼻先が彼女の陰核に当たる。

「——ンッ！よい……実に良いッ」

腰を前後にグラインドさせる彼女に合わせて舌先を膣内へと挿入し、グルリと回した。

「ああ、っ！出すぞっ！小僧っ！」

瞬間。

彼女の尿道から黄色い液体が吹き出し俺の顔を濡らす。

鼻につく刺激臭のソレを受け止めながら

「怪異も小便はするのか」と素っ頓狂な事を考えた。

「ふふふ。妾の小水を飲んで小僧のマラが喜んでおるぞ」

放尿を終えた彼女が一瞬腰を浮かして言うので下腹部に目をやると俺のチンポが最大に硬くなり、ピクピクと跳ねていた。

「妾の小水はちと特別性でう。催淫の類いよ」

レロリ。

場所を移動して俺の身体にうつ伏せとなった妖狐が俺の頬を舐めた。

「ほれ。挿れるぞ」

器用に手をチンポへと伸ばし、切先を膣口に当てがってぬぷりと膣内へと向かい入れる。

「——ッ」

彼女の快感ので塗られると同時に俺も身体を震わせた。

熱い肉棒に、冷たい膣内。

そのギャップは凄まじく、おまけにぎゅうぎゅうと締め付ける妖狐の膣。

「もはや衣など不要よな」

妖狐が自身の着物に指を立てるとナイフのように切り裂くと白磁のように白い身体が視界に映った。

「嗚呼っ！小僧のマラが妾の子宮口を叩いておるぞっ」

両膝を立て、自らの乳房を啜えるように持ち上げて彼女が叫んだ。

ぱちんっ、ぱちんっ、ぱちんっ！

尻と腰が打ち合う音を響かせながら彼女が動く。

「妖狐っ、……イクぞ」

激しく動く彼女の抽送を補佐するようにぷりつとした臀部に手を添えて下からも上へと突き動く。

「ンッ、ンンッ、よ、妖狐ではないっ！嗚呼っ！た、玉藻たまも、じゃ、

玉藻とっ、嗚呼あ！よ、呼べっ！」

乳房を舐めるのをやめて彼女は俺の胸に手を突いた。

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！

更に激しくピストンし、膣内をぎち、ぎちと締め上げる。

「玉藻、射精くぞっ」

びゅるるるるるるるるるるっ！

精を彼女の奥へと吐き出すと、玉藻が仰け反り叫び声を上げた。

今までに感じた以上に長く、勢いも強い吐精は貯蔵していた精液を

全て吐き出すように彼女の奥へと注がれる。

「はあ、はあ」

やっと射精感が止まり、彼女は息を荒らしながらぺたりと俺に身体を預けた。

「実に良き、濃厚な精じゃったぞ。小僧」

満足げに微笑む彼女が俺の耳を噛んだ。

ピクリ。

彼女の膣内に入ったままの肉棒が跳ね、残滓を吐き出しながらゆつくりと硬さを取り戻す。

「ん？なんじゃ。又シ。まだ射精出したりないのか」

「全く節操のない男根じゃのう」

玉藻が嗤い、身を起こして腰を上げた。

どろり。

膣穴から白濁とした精液が溢れ落ちて俺の腹を染めた。

「ほれ、次は後ろから挿れてみるかや？」

後ろを向き、尻を突き出しす彼女の尻尾がゆらゆらと動く。

九つに分かれた音が尾てい骨から伸び、搔き分けて後ろから彼女の膣穴に挿入した。

「良い子じゃ。実に逞しい……」

艶めかしい息と共に吐く彼女を羽交い締めするように抱きしめて腰を突き上げる。

「ンアッっ！よい！ンツッ！そ、そうじゃっ！もっど！もっど妾にマラを突き立てよっ！」

パンツ！パンツ！パンツ！

腰を打ちつけ、彼女の鞠のような尻に張り手を打つとそこに朱色が挿した。

「ンニヤッっ！っ！、小僧っ！し、尻を叩くなっ！」

彼女の抗議の声が聞こえるが、散々この世界でやってきたのだ。

その声音に拒絶の色が混じってない事を感じて俺は再度力強く叩きつけた。

「ヒヤっ！！！！、こらっ！やめぬかつ！辞めよっ！か、感じてしまっ

「！」  
形勢逆転だ。

わかったような口を効き、搾取するように前立腺をいじめられたのだ。

「搾取するのは俺の方だよ」

彼女に言ったのだろうか。

自分に言ったのだろうか。

俺はチヨークスリーパーをするように彼女の首を後ろから締める  
と玉藻の膣が一層締まった。

「やっ、ぐっ、い、息がっ」

くぐもった声音をしながらも尚も膣を締め付ける彼女に俺はその  
まま精を放つ。

赤玉でもなんでも出してやろう。

俺の気が済むまで。

精を受けて止めてのけ反った後、玉藻が地面に倒れ伏す。

「こ、小僧、き、鬼人か、お主は」

頬を引きつかせる彼女の両膝を開き、正常位で未だ熱く猛る肉棒を  
突き立てる。

「アア、っ！」

快楽に顔を歪め、腰を震わせた後、結合部から水が溢れた。

「怪異も潮吹くんだな」

尿も出るのだ。当然だろう。

「し、知らぬっ！こ、こんなのは妾は、し、知らぬぞっ！ンオオっ」  
顔が崩れるのも気にせず玉藻は口を開き、ヨダレを垂らした。

目は虚に変わり、黒目が上を向く。

「気持ちいいっ！気持ち、イイっ！！ンンン、——っ」

激しく腰をピストンして、俺は三たび目の膣内射精を彼女に決める  
のであった。

「ほれ、契りの証じゃ。鬼の子よ」

強姦分からせつクスを終えた後、しばらくの時を置いて彼女が膣内から赤色の珠を吐き出して俺に渡した。

時間を置いたのは、彼女が意識を失ってしまったからだ。

何度目かの吐精の後、完全に白目になり気絶したのでトドメに彼女の身体に放尿し、それが乾き切った後に彼女が目を覚ました。

「なんでそこから？」

膣内から出された珠はテラテラと愛液か、精液か分からない液体を反射させる。

「妾は子が出来ぬかったのよ」

玉藻の顔はどこか儂げだ。

「怪異が子を孕むのか？」

俺の言葉に彼女は首を横に振って「ヒトの時の話じゃ」と短く答えた。

「詳しくは言わぬぞ」

どうやら聞くことはまだ許してくれないらしい。

「どうせ、又シに言うてもまだ聞こえぬよ」

そう言っただけ彼女は微笑む。

「とにかく、この珠を斬よ。さすれば小僧の妖刀にも妾の力が付与される」

珠を受け取ると、案の定手のひらに伝わるヌメリとした感触に思わず顔が引きついた。

「小僧の御霊は妾が将来貰いうけるぞ」

先に言われた言葉を確認するように彼女が言葉を吐いた。

「好きにしてくれ。今世に悔いは残さない」

やれることはやる。

俺の顔を見つめた後、満足気に頷く玉藻。

「では契約じゃな」

彼女の言葉に同意するように俺は珠を斬る。

朱色のモヤが刀を包み、一瞬にして刀身に紅色が挿した。

「よろしくな。玉藻」

俺は新しい力を手に入れた。

## 搾精看護師の1日

「生ハメっ!!生ハメー!生おちんぽっ!おちんぽ様!しゅきっ!!」

可愛さのかけらもなく喘ぐ私は膣内を感じる王子様タクミ様の感触に身体を震わせて潮を撒き散らす。

「死んじやうっ!しんじやう!しんじやうの!!あゝ あ!イイイイー  
ーっ!!!」

子宮口をこじ開けるように侵入してきたおちんぽ様からナニカが噴き出す感触に私は絶叫をあげていた。

今日は私の命日になるかもしれない。

そんなことを片隅で思いながらも絶えず襲う快樂の波に飲まれながら、私は自身の幸せに思いを馳せる。

---

搾精看護師の1日は早い。

「おはようございます」

ナースセンターに入り、すでに出社していた先輩ナースが「おはよう」と言つて首をポキリと鳴らした。

「おはようございます。ミカド先輩」

先輩ナースの名を告げながら、私は自分のロッカーの前で立ち止まり、衣服を脱いでナース服へと着替える。

「例の子が来るのは今日よね。全く美鈴ちゃんが羨ましいわ」

ニタニタと鼻の先を伸ばしながら近づくミカドに私は「そうですね……」と相槌を打ちながら襟を直し、ガーターをあげて鏡に映る自分の顔を見て化粧のノリを確認した。

大丈夫。昨日の夜にはエステに行つて肌の調子はすこぶる良い。

ムダ毛も処理して、陰毛はワックスで脱毛しているし、今日の下着は上下セットで2万円もした高級品だ。

鏡の前で口をイーっと開くと、キラリと白く輝いた歯。

これは朝早く起きてセルフホワイトニングしたせいもあって今日一日は輝いているだろう。

「アタシも出来ればおこぼれが欲しいのよ」

横に立ちぺちやくちやと話しかける先輩を横見しながら、鼻毛が出ていないかも確認する。

「聞いているの？美鈴ちゃん」

その言葉に眉がぴくりと反応するが、怒ってはならない。怒ると眉間にシワがついてしまう。

「先輩、その呼び名はやめてください」

ため息混じりにそう告げるも彼女は「でも本当のことでしょう？」と笑みを浮かべた。

搾精看護師とは、いま、若者が一番なりたい職業に20年連続で君臨する仕事である。

数が少ない男性と接することが多く、女性のみんなが、成功に憧れる。

しかし現実はそのようなことは稀である。

稀というのがまたミソなところか。

男性の多くが搾精看護師に手伝ってもらうことなく、搾精室にこもり、自身を慰める。

終わればナースコールを押してやってきた私たちを蔑んだ目で見ながら搾精器ごと私たちに提出するのだ。

理想と現実のギャップがそこには存在している。

「出勤初日で男性の手伝いをした後に、トイレでオナつて、床を潮浸しにしたのは誰だったかなあ？」

下卑た顔を浮かべる先輩を脳内でタコ殴りにして最後は鼻フックを決めてやる。

そう、稀に、搾精を私たち搾精看護師に依頼する男性のことを私たちは「ラッキー」と呼ぶのだが、そんな私は運良く初日よりそのラッキーにあり着いたあと、昂った性欲を解消すべくトイレの床を潮浸しにした所を婦長に告げたのはこの女である。

いけない！怒ると化粧が取れちゃうわ。

無理やりに頬を上げて「その話はもうやめてくださいよお。じゃあ私は準備があるので」と話を切り上げて、業務前の掃除を行うべくナースセンターを離れた。

「……つち。ほらよ。さつさと持っていけよ。駒使い」

午前の部。

担当する1人の男性の搾精。

例に漏れず自慰の際は部屋の外へ出るように命じられ、終わったことを告げられて部屋に戻ると暴言一つを加えて容器に入ったソレを渡される。

「……ありがとうございます。山田様。納精〳〵期日は毎月10日となっておりますので、来月は必ずそれまでにこちらへお越し下さいますよう、平にお頼み申し上げます」

男性は基本的に横柄である。特に精を出した後は狂犬のように眉間へと皺を寄せて女を拒絶する。

今日の前にいる山田様は正にソレであり、全面禁煙のルールなど守らず、その場で煙草に火をつける。

「……山田様。〳〵は禁煙でございますので」

私の言葉を見無視して彼はシツシツと腕を払って出ていけと私に告げた。

先月はそれでも律儀に喫煙をやめるように言った際は金切り声を上げて暴れたのだ。

婦長より『目を瞑りなさい。彼は優秀な納精者よ。期日が1日、2日遅れるぐらいであれば目を瞑るのも私たちの仕事よ』と苦笑いで言っていたのを思い出した。

毎月、納精の期日は決まっているのだ。

男性に課せられた数少ない義務も守れない者に、何故私はぺこぺこしているのだろうか。

そんなことを思いながらも顔には菩薩のような笑みを浮かべながら私は部屋を去る。

午後にはもう1人、納精者が来るのだ。



ピリピリすればするほど、彼に失礼をしてしまいかもしれない。  
私は口から出そうになったため息を必死で堪えてナースステーションへ戻った。

「王子様<sup>タクミ</sup>あつ。お待ちしてありがとうございましたあ♡」

予約時間の10分前。

やってきた男性に私は自分でもわかるほどの猫撫で声を出して迎え入れた。

「もしかしてちょっと早かったですか？美鈴さんも忙しいようでしたら次回からはなるべく時間ぴったしに来ようかな？」

目の前で微笑むのは、王子様であり、天使様であり男神様<sup>おがみ</sup>のタクミ様である。

年齢は私より8歳年下の今年16歳になれる男子様だ。

「いえ！タクミ様もお忙しいでしょうし！私の予定など全く気にせずにお越し下しやいっ！」

本音を言えば一時間前でも、一日前でも、それこそご用命とあれば1ヶ月前でも私が泊まり込んで世話をしたい！

ご飯を作つてあげたい！お小遣いをあげたい。

そしてご褒美にちよつとイチヤイチャしたい！

そんな風には思わずにいられない程に、彼は正に漫画に出てくる男性そのものである。

女性に優しく、笑顔を浮かべ、下ネタさえも嗜む。

おまけに吐き出す精の量はそんなじよそこの男とはわけが違う。

正に「漢」の生殖機能を有している黒髪の美男子。

彼こそが私の入社初日に引くことができた「ラッキー」である。

「なら良かったよ。じゃあ早速だけど始めようか。おいで美鈴」

手を開かれ、私は抱きつくように彼の胸に飛び込んだ。

「……いい匂いするね。香水かえた？」

私の首筋に彼の鼻先があたり、思わずビクンと身体が震え、膣内からじゅわりと愛液が溢れるのを感じた。

「ツ、ひゃ、ひゃい。好きな匂いでしたでしょうか？」

私の言葉に彼は「うん。好みの匂い」と耳元で囁いてかぷりと耳を噛む。

「アアッー！」

それだけで私の膝は崩れてその場でよろけそうになるのを彼が腰を支えた。

「君は全く、本当に感じやすいね」

まるで物語の王子様のように私の腰を支える彼。

先程から愛液が吹き出し、股を伝ってガーターを重く濡らした。

「じゃあ、搾精の前に美鈴の綺麗になったマンコを良く見せて」

ダンスをするように華麗に腕を取り、ベッドへと誘導されて私は腰掛けた。

「ほら、脚を開いて」

コクンと頷きマットの上で脚をM字に開き、羞恥で顔を赤らめる。

「シミが出来てるね」

彼が目を細めて妖艶に微笑んだ。

「ちゃんとマンコの毛も処理してる？」

彼の言葉に「はい」と告げてTバックに指を引つ掛けて中身を見せつける。

脱毛したてのパイパンである。

毛穴がポツポツと隆起しているのはきつとワックス脱毛のせいだろうが、彼はこれを「舌触りがいいから好きなんだ」と前に仰つていた。

「うん。綺麗だよ。それにもう欲しいのかパクパクと膣穴が開いてるしね」

彼が股の間で膝を下ろしてそのままグルリと膣内へと舌を差し込んだ。

「ンアッー！」

快感に思わず仰け反り身体を震わせる。

ぺちや、ぺちやと膣内や、ヒダを舐める音に連動するように腰が震えた。

クンニリングスなど、この世でどれだけの女性が体験できるだろうか。

女性がして欲しいプレイN01に君臨するクンニを受ける、女性になりたい職業N01の搾精看護師。

きつと、他の女性が知れば私は殺されるかもしれない。

「く、クリをつっ！クリトリスをつっ！お、お願いしま、ン——！」

懇願の最中、彼は「だーめ」と笑って指を挿入し、Gスポットを上手へと押し上げる。

「お、っ！で、でちやうつ、で、出ちやいますっ！イツ——ぐっ！」

尿道から潮が噴出し彼の腕を濡らす。

「と、とめてっ！！ンぐっ、あつ、あつ、あつ、ぎゅっ」

ぷしゃ、ぷしゃと絶えず吹き出し続ける潮。

彼は自身にソレが掛かろうとも気にせずGスポットを連打した。

「き、キちやうつ！キちやっ！キちやいます！な、何か、キちやう、ああ、っ！！」

先の潮とは比較にならない量の体液が、私の尿道をこじ開けびゆるるるると音を立てて噴き出した。

「おっ、すごい出るね」

指を抜いて射出口から身体を避けた彼は、放物線を描き飛んでいく潮を見ながら笑った。

「止まらないっ！と、止まらないのっ！」

3m、いや4mは飛んでいるだろうか。

放物線を描き、遠くへと飛ぶ飛沫で小さな虹を描いたあと、ふいに勢いが弱まり、その場で息を吐いた。

「——はっ、はっ！はっ！はっ」

学生時代にやった長距離走の後のように短い呼吸を繰り返す、時折空気が足りず、深く呼吸を行う。

「いっぱい出たね」

私の頭を撫でて優しく微笑む彼に、思わず子宮がきゅつと締まる。

「褒美をあげるよ」

じゅるるるるるるっ！

ギンギンに張ったクリトリスを口に咥え、訪れた強烈な快感に私は、頭をベッドへと打ち付けながら身をよがらせる。

「だめで、すっ！た、た、たくみ様あつ！ああ、っ！出……ちやうつ！！」

先の潮吹きとは違う射出感を感じたあとのじよぼじよぼと緩く尿が噴きだした。

ごくっ、ごくっ、ごくっ。

それは避けることもなく飲み干す彼に私の胸が高鳴った。

「馳走様。美鈴。」

口元に黄色い液体をつけながら彼は微笑む、私へと唇を重ねる。

「じゅる、ちゅ、れろ、あむ」

最初のころは気になった私自身の尿の味。

こうして何度目かの逢瀬を重ねるうちに慣れてしまった。

いや、むしろ好きになりつつある。

もちろん彼の唇や舌の感触があるが故になのだが……。

「た、た、たくみ様、さ、搾精を、搾精をしませんと……」

本音を言えばこのまま彼を強漢レイプしたい。

しかし、私は国家公務員の搾精看護師なのだ。

そんなことは許されない。

私の言葉に「うーん」と首を捻った後に彼は「挿入してもいいかな？」と犬のように屈託のない笑顔を私へ向けた。

「え、っ!？」

予想外の言葉に思わず変な声が表へ出てしまう。

いままで搾精は、搾精器、彼風に言えばオナホールとローションを用いての行っていた。

それが、マニュアルだったからだ。

「コンドームあるでしょ。そこに」

彼がそう言うですでに置物となつて久しい小皿に置かれたコンドームを指さす。

本来の使用意図は避妊具であるが、現在は使われることはほとんどない。

産めよ増やせよと国が振興している関係で、コンドームには300%の避妊税が購入時に課せられている。

故に、現在では使用するのには、搾精看護師のラッキー中の大大々ラッキー用のそれである。

ごくり。

予想だにしていなかった彼の言葉に私は唾を飲み込んだ。

「よ、よろしいのでしょうか……」

破瓜はすでに済ませてある。

むしろ、最近は王子様<sup>タクミ様</sup>の“おちんぽ様”のサイズとよく似た、かなり大きめのデイルドで嗜むほどだ。

「ん？もちろん。だから脱がせてくれる？」

腰を突き出す彼に私はコクンと頷いて彼の足元で膝をおろす。

瞬間、自分の潮か、尿かもはやわからない水気を膝に感じるもすでに私の視線は彼のズボンから話すことができない。

かちや、かちや、かちや。

簡易に作られた彼の皮ベルトと外して、チャックを下す。

むわっとしたかぐわしい匂いを感じながら、爪を立てないように彼のパンツに手をかけてゆつくりと下した。

「ああ……♡」

まだ勃起をしておらず、帽子をかぶるような彼のおちんちぽ様。

私は知っている。ここから、平均を遥かに上回るおちんぽ様へと変化するその姿を。

「この前に教えた通りにやってね」

髪を優しくなでられ、「はい」と笑顔を返してまだ小さいおちんぽ様に手を添えて上へ向ける。

皮をめくるようにやさしく下へこすって、あらわになった亀頭のミゾに舌を這わせて掃除する。

男性は大変だ。

毎日お風呂に入るのに、皮を被っている関係でカリ首にすぐカスが溜まるのだ。

チーズのような生臭さと酸っぱさに思わず愛液がさらにじゅわりと溢れ出す。

「おふちのなかで大ふいふふあつてふあふ」

口に頬張った彼のおちんぽが次第にむくむくと大きく、硬くなり思わず笑みが浮かべてしまふ。

この瞬間が私は大好きだ。

彼を身近で感じる事が出来る。

「ああ、きもち良いよ。ちゃんと練習したんだね」

私の髪を指で梳く彼が吐息を吐きながらおちんぽをぴくぴくと跳ねさせる。

「ふあいつーおもふあでしまふいたー」

よかった。

どうやら、彼好みのやり方で合っていたらしい。

最近読み始めてファッション雑誌にあった“男性が好むフェラチオ特集を参考にしながら動画サイトでみながら練習したのだ。

おかげで頬が若干引き締まり、彼にも褒められて、まさに一石二鳥である。

じゅぽ、じゅる、じゅぽ、じゅっ、じゅっ！

唾液を多めに口に貯めながら、彼のおちんぽ様を口でしごく。

我慢汁が出てきたのだろう。

味蕾を刺激する若干の甘味を感じながらしごいていると彼がとんとんと私の肩を叩いた。

「ありがとう。そろそろいいかな？」

無垢な顔に思わずジュンと子宮が疼いた。

「……はい。お願いします」

コンドームの袋に手を伸ばし、慎重に包みを剥がす。

本音をいえば、いますぐ生のまま、彼の感触を膣内<sup>中</sup>で感じたい。

ぬくもりを子宮に教えてあげたいのとぐつと堪えて、私は彼のおち

んぽ様にゴムをかぶせていく。

「あつ。ちよつと、これ難しいです……」

さすがに使い道がほとんどないコンドームのつけ方など練習しておらず、何度も被せようとするもはや正解などわからない。

「貸してごらん」

そんな私に見かねてか、手を取り、彼は器用にゴムを被せた後にくるくると反対に巻いてあつという間にピンク色のおちんぽ様へと姿を変えた。

「初めてだよね。どんな体位で挿れてほしい？」

ゴクリと唾を飲み込んで私は、『正常位で……』と答えると、彼は笑顔を浮かべて頷いた。

「じゃあ、全裸になって、おねだりできるよね？」

妖艶にほほ笑む彼に私はナース服を脱いでベッドに腰を掛けてM字に脚を開く。

「……お、お願いします。わたしを……私のおまんこを犯して……下さいっ」

彼に膣内を見せつけるように指を使って開く。

くぱあと音を立てるように開いたヒダは愛液が糸を引いていた。

「じゃあ挿れるよ」

股の間に立ち膣口に添えられた彼の切先。

待っていた。この時を。

ゴクリと頷きを返すとタクミ様がゆっくりと切先を挿しこんだ

「んぐっ——っ！」

デイルドとは違う生暖かい感触。

破瓜は済ませていたがどうやら私の予想より幾分か太いおちんぽ様がメキメキと膣を押し広げながら膣内を犯していく。

「ごめんなさいっ！」

デイルドとはひと味も、ふた味も違う感触に、私は彼に謝罪の言葉を吐いた後に失禁した。

先ですでに出し切っていたかと思っていたが、完全に気のせいだった。

ジヨボジヨボと音を立てて彼の腰を濡らす。

「大人なのに、ここまでお漏らしするのは考えものだね」  
ぎちゅ。

「アギいっ！」

止まることを知らない尿も気にせず彼は最奥をノックし、思わず声が漏れた。

「む、むり、でしゅっ、あっ、ご、ごめんなさいっ」

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！

彼が腰を弾くたびに圧迫から解放された尿道からびゅっとな音を立てて体液が吹き出し、あたりに刺激臭を放つ。

「あ、あっ！き、く、きゆるっ！ああっ、またっ！またきちやうっ！」  
視界にパチパチと火花が散るのを残滓しながら子宮に込み上げる  
ナニかを彼に訴える。

入れた瞬間に感じていたゴムの感触はもう気にならない。

激しくピストンされる影響からか、まるで生で挿入されているような熱さを感じてぎゅん、ぎゅんと子宮が降りてきた。

「た、た、たくみいっ！、しゃ、しゃまつ、でましゅ！出ちやいます！  
イ、イきますっ！——あ、っ！」

今まで感じたことのない快感が脳を支配して、私は快樂に身を委ねるように天を仰いで叫び声をあげた。

「おおおお、っ！きゆる！きゆる！きゆる！来るっ!!!」

刹那、脳内が真っ白に変わり全身をベッドに打ちつけて暴れ出す身体。

衝撃の痛みなど気にせず、まるでバイブのように腰が痙攣し潮がとめどなく溢れた。

「俺も出すよっ」

耳の奥で彼の言葉を感じるも私はそれにさえ答えることが出来ずに雌叫びめたけびをあげた。

びゅるるるるるるっ！

ゴム越しだろくに感じる彼の射精感が子宮口を叩くようや勢いに私の脳内が絶頂の更に奥の扉を開くのを夢想してからその場で気を



失った。

じゅるるるるるる。じゅぽ。じゅぽ。

「ぐふえんなふおい。気を失っておりまふいた」

一瞬だけ完全に意識が飛ぶも、すぐに覚醒した私は抜かれた彼の肉棒を咥え込み、意識朦朧としながらも謝罪の句を告げる。

彼のおちんぽを覆っていたゴムは早々に彼により抜き取られ、保存容器へと仕舞っており、口内に彼の残滓を感じることに多幸福感を覚えながら目を細めた。

「美味しい？」

彼の言葉に「ふあい」と咥え込みながら返事を返し、じゅぽ、じゅぽと音を立ててカリ首に溜まった精液をも綺麗にする。

「あ、おしっこ出るかも」

不意に彼がそんなことを口走り、私は「ここに」と告げた。

彼は私の尿を飲んでくれる殿方だ。

礼儀として、私も彼のためなら便器になろう。

出しやすいように吸引を弱めて優しく竿を上下にさする。

「いふでもいいいふえふよ」

彼にそう告げた瞬間、口内に吐き出されたチヨロチヨロとした液体をぐくぐくと喉を鳴らして嚥下する。

「ちゅ、ちゅぱっ、ぐ馳走様でございました」

最後の残滓までも吸い出すように、鈴口に口をすぼめて吸引を施してから私は彼に頭を下げた。

「ごちんごそありがとう」

そう言つて微笑む彼の顔は眩しい。

「あ、でもまだ出したりないし、今日の分は納精したからどうせなら生ハメしようか」

そう言つて自らおちんぽ様をシゴく彼のソレは隆々と猛り、私は自らの興奮にガッツポーズをするのは言うまでもなかった。

## 逆転世界で沖縄を謳歌する 幕間 逆転世界の美容院（再）

「タクミくん。もしよかったらお姉ちゃんがまた家にカットしにきてよってさ」

授業も終わり、がやがやとする放課後。

一人の少女が俺の机にやってきて、その場にしゃがみ込んだ。

「えっと、奏さんが？」

胸を大きく突き出した、茶色の髪を三つ編みにした赤ぶち眼鏡をかける彼女。

「うん。来週には新店がオープンするんだけど、もしタクミ君がいいなら、明日その新店に来てくれないかな？だって。もちろん」

“君だけのスペシャルメニュー付きで♡”

耳元に口を近づけ、吐息と共に囁く彼女。

「ほう。いいね」

思わず口角があがってしまう。

「行くよ」

丁度散髪もしたいぐらいには伸びてきていたのだ。

二つ返事で快諾すると彼女は「ありがと！詳しくは夜にでもチャットするね」とはにかみながら去っていく。

“スペシャルメニュー” 良い響きである。

この世界は男女の貞操観念が前世とは完全に逆転した世界。

彼女ともすでに何度か身体を重ねている。

加えて先月初めて訪れた際には彼女とその姉<sup>奏</sup>を美味しく散髪した後<sup>響</sup>に頂いたので。

姉妹井の気持ちよさを思い浮かべると自然と鼻の下が伸びた。

「考え込むタクミくん……かっこいい」

ふと近くの席に俺を見つめていた女子の声が耳に届き、愛想笑いをうかべて手を振る。

スケベな顔も彼女たちからすれば思案するように映っているのだ

ろうか。

なんとも業の深き、逆転世界よ。

そんなことを考えながら、俺は鞆に教材をしまいこみ部活へと向かうのであった。

翌日

「いらっしやいませえー！」

「いらっしやいませつ」

昨夜、チャットにて指定された新店舗にやってきた俺を迎える響ヒビキと彼女によく似た女性。

「タクミ君、改めてありがとう」

学校で見るいつもの彼女とは違った服装。

オフショルの黒く、丈の短いワンピースを着た響きに、

彼女の面影を残す20代前半で、茶髪をゆるく巻いたミディアムヘアにデニムのショートパンツに胸元のぎっくり空いた白いカットソーを着た姉の奏カナデ

「タクミ君、一カ月ぶりだけどまた伸びたね。やっぱりエッチな男の子は髪が伸びるの早いから。でも今日はありがとう。改めていらっしやいませ」

そういつて頭をさげる彼女の胸が重力に従うように下を向き、深い溪谷が現れる。

この世界では男女比も1:10となった関係で、前世の女性とは比較にならないほど、皆発達している。主に胸がだが。

響。クラス委員長を務める妹でさえ高校一年生なのにHカップの巨砲を持つ人物であり、姉の奏はそれよりも更に大きい。

「こちらこそ、オープン前にお招きいただきありがとうございます。今日はよろしくお願いしますね」

愛想笑いを浮かべて頭を下げると奏が一瞬目を見開いて驚きを表現してから「やっぱり男性に頭を下げられるのは慣れないわね」とつぶやいた。

「タクミくんはそこらの男性と違って優しいんだからつ」とどこか自

慢げな表情を浮かべる響に奏は「貴方は同級生だから慣れているだけでしょ」と口を尖らせた。

「今日は、タクミくんと私たちだけだから、いっぱいおもてなしさせてもらうね」

満面の笑みを浮かべた響に「よろしく」と告げて俺は招かれるように店内へと入っていく。

若い女の匂いに下半身に血が集まった。

「かゆいところはありますか?」

シャンプー台に寝転がり、奏の慣れた洗髪の手つきに関心しつつも、俺は鼻先まで垂れる胸に釘付けた。

仰向きでの洗髪では寝転がる俺の頭の方に立つやり方と、顔の横にたち手を伸ばすやり方があり、奏は後者での洗髪を俺にしていた。

必然的に前傾姿勢となった彼女の深い谷間には漆黒の如く闇を刻んでいた。

「どこがとあえて言うのであれば“チンポ”でしょうか」

セクハラではない。今世では男性から女性に対するすべては〇〇ハラスメントの対象外である。

「もう、ムラムラしてきたの?」

奏が妖艶にほほ笑んで、妹の名を呼ぶ。

「はい」

グラスを片手に響がひよいと顔出す。

「おちんちんがかゆいそうよ」

奏は俺の下腹部を顎で指すにつこりとほほ笑みを浮かべながらグラスを棚に置いて近づく。

「せっかくお茶を入れてきたのに、畏まりました。お客様」

ベルトを外し、優しく介護するかのようになり、そつとズボンを脱がす。

「お姉ちゃん。みて。タクミくんのおちんちんぽ。

パンツの上からでも形がわかるの」

灰色のピタッと張り付くボクサーパンツの中で窮屈そうにテントを張るチンポを指さすと、奏は目を丸くして洗髪の手を止める。

「それに、ほら。タクミくんのおちんちん。期待してるのかももう我慢汗が出てシミになってるでしょ」

ツンツン。

シミを作った鈴口を人差し指ではじく彼女。

「お客様、かゆいところはこちらでしようか？」

勃起した裏筋に人差し指を上下に這わせ、亀頭あたりで5本指を立ててフェザータッチの容量で開いては閉じるを繰り返す。

「ピクピクしてる」

“相変わらずスケベなおちんぽ”

そう言って彼女はゆっくりとパンツを下ろし、血管を浮かび上げさせるチンポを解放した。

「いつ見ても本当に立派なおちんぽだね」

響が感想を漏らし、奏が「そうね」と短く返す。

洗髪の手は止まっており、2人の視線が注がれていた。

「あ、お姉ちゃん。手が止まってるよ！大丈夫。タクミ君は連射が出るから」

知ってるでしょ？と付け加えて目を細める妹に「そ、そうよね」といって洗髪を再開する姉。

「それじゃあ、お客様のおちんぽのコリをほぐしていきますね」

ちゅっ、と鈴口にキスを落としてから、腹についたチンポの角度を上げるように手を添えて、ぱくりと頬張る。

じゅぽっ、じゅぽ、じゅぽっ。

くぐもった音を響かせる抽送に思わず腰はひくついた。

「奏さん。マッサージもいいんですが、少し口がさみしいです」

ちらちらと妹のフェラを見ながら洗髪をしている奏を見上げてほほ笑む。

「しようがないですね。では準備しますのでお待ちくださいね」

流暢な接客敬語の後、彼女が俺の頭側へと移動して上着をたくし上げて、胸をさらけ出す。

「はい。どうぞ。お客様」

背中に手をまわし、薄ピンク色のレースが施されたブラジャーは外

して露わとなった豊満な乳房。

妹の響はボールのように張りのある胸でいまだ大人になりきれない胸の持ち主だが、姉の奏は今年で24歳。

十分に大人の女へとかわった彼女の乳房はスライムのように重力に従い下を向く。

「はい。おっぱいですよ」

やや大きな乳輪の中心のそびえたつ眺めの乳首を口先へともっていく奏。

俺の口が自然と開き、ぱくりと乳輪ごと啜えるようにしやぶりついた。

ちゅっ、ちゅぽ。あむっ、レロ

「んっ、お、お口にあいますか？お客様……あっ……」

時折、身体を震わせながら笑みを浮かべる彼女に俺は頷きを返しながら、彼女の両乳首を一転に寄せて同時に舐ねぶった。

こりこりとした気持ち良い触感が口いっぱいに拡がる。

「んひいっ……そ、それ、やばい、んっ！」

俺の肩に手をつけて、谷間で顔を圧迫するように身を預ける彼女。

顔中にやわらかい肉の感触を感じ、さらにビキリとチンポが固くなった。

「ふふ、いイきそほうう」

フェラをする響の声を感じながら、心地よい圧迫感でしゃべることのできない俺は代わりにぴくぴくとチンポをヒキつかせる。

「いいふお。飲んであふえふ」

じゅるるるるるる。じゅぽっ！、ぐぽっ！じゅぽっ！

喉奥まで啜えこみチンポを包む刺激がより一層強くなる。

「あ、タマタマがきゅっとし始めたね。いいよ。ぴゅっ、ぴゅっしよ？」

一旦、口を離して強めな手コキで責められたあと、再度じゅぽ、じゅぽと隠微な音が響いた。

びゅるるるるるるるる。

射精感に思わず口に啜えていた乳首を噛みながら精を放つ。



「それじゃあ、お胸でマッサージさせていただきますね」

腰を支えるように完全に差し込まれた奏の太もも。

下腹部だけが浮き、チンポの真上に柔らかく豊満な谷間が目に入る。

チンポにヨダレを垂らし、手を添えて乳房で挟む。

「だいぶ、コってますね」

クスリと微笑む彼女の胸にすっぽりと覆われた肉棒が切先だけは顔を出していた。

「ゆつくり。ゆつくりほぐしていきますね」

両胸をサイドから圧迫して上下に動くと、切先が隠れては出て、隠れては出てを繰り返す。

「痛いところはありますか？」

奏の言葉に首を横に振って答えると彼女は微笑んでから優しく告げた。

「では、徐々に早めていきますね」

胸を持ち上げ、右と左を交互に上下させる。

その柔らかさを主張するように、ぶるん、ぶるん、と形を変える乳房に腰を引いた。

「いきなくなったら存分に出してください」

射精へと導くように交互の動きをやめて圧迫しながらぱんっ、ぱんっ、ぱんっとな音を立てて胸を上下させ始めた。

「い、イキそうですっ」

我慢汁が溢れ、ぬちゅぬちゅとした音が谷間から響き、ぎゅうぎゅうと締め付けられながら上下へと擦られる感触に思わず声が漏れた。「いいですよ。奏のおっぱいまんこにお客様のザーメンいっぱいびゅっ、びゅっ、してください」

ぱちゅん、ぐちゅ、ぱんっ、くちゅ。

「っ——っ」

びゅるるるるるるるるるる

「あ、っ！出れますっ、お客様の暖かいザーメン、私の胸に出ていますよ」



長い射精感の後に、びゅっ、びゅっと更に残滓を吐き出すように発射される精液。

彼女は挟む乳房の力を緩めることなく全てを受け止めた。

「お掃除しますね」

やがて全てを吐き出したことを感じたのか、彼女は胸の拘束をやめてしやがみ込み、チンポを啜える。

じゅるるるる。

ちゅぽっ、じゅぽ。

「はい、綺麗になりました。お疲れ様です。一旦、お席へ移動してカットをさせていただきますね」

妖艶に微笑む営業スマイルとは違う何かに俺はゴクリと息を呑んだ。

「響、ほどほどにしなさいよ。カットを失敗したら洒落にならないわよ」

俺の背後に立ち、またぐらに腰を下ろす妹を叱責する奏。

「だ、大丈夫。舐めてるだけだから。ねっ。たくみくん」

勃起したチンポを握りチロチロと亀頭を舐める響が笑みを浮かべながら首を傾げる。

「じゃあ、せめて、その手を止めなさい。くちゅくちゅうるさくて仕事にならないわよ」

響をジト目でみる奏の意見に俺も「まあ、確かに」と頷いた。

響が今、全裸となり、俺の脚の間に座り込み、自分を慰めながらチロチロと舐めているのだ。

先ほどから愛液がとめどなく溢れて、床に水溜まりを作っている。「ごめんね。こんな妹で。いつも迷惑かけてないかしら」

かちやかちやかちやと器用に缺で髪を梳きながら謝る奏に「学校でももっとしっかりしていますよ」と笑顔で返す。

彼女はこれでもクラス委員長であり、模範的な生徒なのだ。

ただ、ひとたび性のスイッチが入ると、もはや野獣の如く快楽を追

求する。

「あつ。……またイ……。クウっ！」

ブシュウウウウウウツッ！

尿道を床に向けるように直角に起こした響から、ホースの口を一部締めたかのように勢いよく体液が噴出し、水溜まりを更に拡げた。

「お、お姉ちゃん。まだ？私、そろそろ限界でっ……」

びゅっ！ビュッ！と最後に勢いよく噴き出して尿を切るように尻を上下にふった響の眼はすでにイッていた。

「……そうね。粗方切り終えたし、お客様。髪を再度流しますので、もう一度シャンプー台へご案内致しますね」

何度目かの営業スマイルを浮かべた奏が鉢をポケットにしまい込んでイスをぐるりと回して誘導する。

勃起したチンポ丸出しで俺は彼女の後について、先のシャンプー台に仰向けに寝転がった。

「た、タクミくん。あつ、お客様。それではこれよりおまんこマッサージを行いますっ！」

奏が俺の洗髪を。

響が舌を出した犬のように力を抜けきった顔を浮かべながら、俺の上を跨り、腰を下ろした。

「くうううううっ！」

顔を歪め、最奥を突いた瞬間、ドバつと結合部が濡れた。

「イ、イっっちゃった。き、きもち良すぎるよぉ」

俺の腹に手をついてはあはあと息を荒らす響に、奏が「しつかりしなさいよ」と口をとがらせる。

「いいですよ。俺が動くんで」

やや肉付きの良い彼女の腰を掴み、そのまま上へと突き上げた。

「イギイっ！」

瞬間、仰け反るように天井を見上げる彼女を無視して力いっぱい上下に腰を突き上げる。

「たんまっ！タンマっ！たんま！、ま、まって！たくみきゅっ——んっ！、い、イッてるっ！イッてるからあゝっ！」

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！と腰を突き上げるたびにじよばじよばと彼女の膣から潮が溢れる。

「いいよ。もつとイこうよ」

奥へとチンポを固定して、今度は彼女の腰を前後へと動かした。

「あゝっ！、しよ、しよれ、や、やばいっ！ごりっ、ごりい、いつてりゅ！ごりごりいつてるからあゝっ！」

半狂乱するかのようにかぶりを振って、暴れる彼女を無視して無理やりグラインド騎乗位を堪能していると徐々に射精感がこみ上げてきた。

「射精くよっ」

「イって！だして！わ、わたひのおまんこに出してくださいっ！

ああああゝっ」

びゆるるるるるるるっ！

子宮へと直接、精液を送りこんだ瞬間に、彼女が叫び声をあげてその場で痙攣をしてからぱたりと俺にしな垂れかかる。

「相変わらず、すごいわね……」

妹の半狂乱ぶりのことを指しているのか、洗髪していた手を気が付けば止めていた奏がぼそりと感想を漏らした。

「まあ、だいたいどの女の子もこんなもんですね」

やや、クリアとなった視界に俺は彼女へと笑いかけると「さすがビッチなのね」と感心したように彼女が頷いた。

「あ、ごめんなさい。もう流したら終わるからね」

ふと思いついたように手を動かして髪についた泡を洗い落とす彼女。

「そ、それじゃあ、私はバックからお願いたいわ……」

やや顔を赤らめた彼女に「設定はもういいんですか？」とにやりを笑う。

「ええ、どうせタクミくんのおちんぽを挿れられると馬鹿になっちゃうし」

奏はシャンプー台で寝転がる妹に視線を向けたあと、鏡に手をついて尻を突き出した。

すでに、服は脱いである。

ぷりつと桃のように張った尻を撫でて、そのまま彼女の膣内にチンポを突き立てた。

「っ！、相変わらず……恐ろしく、気持ちいいわ」

鏡に映る奏の顔が赤く染まり、目じりをトロンと下げていた。

「じゃあ、動きますね」

彼女の乳房に手を回し、掴み、引き寄せ、垂直へと突き立てる。

「ぐっっ！」

その感触からか、彼女がぐもつた声を漏らすと脚が震えはじめてちよろちよると潮が太ももと伝う。

「奏さんも、妹さん同様、挿れただけでイってますよ」

乳房をつぶすように握りながら彼女の首元に歯を立てる。

「っ！」

びくりと身体を震わし、膣内がぎゅつと更に締まった。

「ほら、動きますよ」

乳房から手を離し、彼女の乳首を下へひっぱりながら腰を打ち付ける。

「ぎゅつ、ああ、っ、ん、っ！き、きもちいいですっ！」

“ あっ、あっ、あっ、あっ ”

腰を打ち付けるたびに声を漏らす彼女。

鏡には口からヨダレを垂らし、乳首を引っ張られる淫乱女がソコに映りこんだ。

「さつきからずっと潮が噴き出してますよ」

じゅっ！じゅっ！じゅっ！

腰を引くたびにホースのように断続的に体液が噴き出し床を濡らす。

新店オープン前なのに、大丈夫なのだろうか？

そんなことを思うも、俺には関係ない。

「ほら、一回目出しますね」

こみ上げてきた感覚に限界を悟った俺は、彼女の乳首から手を離して腰をつかみピストンを早めた。

「あつ、だめっ、あつ、あつ、イクっ、イクっ、あつ、あつ」

手を壁について喘ぐ奏の尻をパシんと叩くと更にぎゅつと締め、手の跡が赤く染まった。

「だしますよ」

パンっ！パンツ！パンっ！パンツ！

「つくー！」

びゅるるるるるるる。

フィニッシュに彼女の奥へ、奥へと突き立てて精を放つと切先からあふれ出た精液が壁にあたり跳ね返るような感覚を覚えながら、無遠慮に彼女の中へザーメンを注いだ。

射精感も収まり、膣内から抜くと、ゴポリと音を立ててあふれ出す精液。

「ほら、綺麗にして下さい。出来るよね」

ペタンとその場で腰を下ろして息を切らす彼女を無視して口先に体液に濡れたチンポを宛がうと、彼女がそれをぱくりと頬張り舐めとる。

ちゅぽ、ちゅぽ、はあ、じゅるるる、はあ。

息を切らしながらの奉仕を受け、彼女の頭を撫でてから、そのまま尿を放った。

びゅうううううう！

勢いよく発射されるソレを彼女は一瞬目を見開くも、そのままごくごくと嚙下する。

「良い子だね。奏さん。今日はいっぱいエッチしてあげるから」

最後までに飲み干した彼女の唇にキスをして俺は嗤った。

逆転世界の美容院で行われるスペシャルサービスは、いまだ始まったばかりであった。

## 第五拾壹話 プール♡

「そう。玉藻前と契約したの……」

東司が神妙な顔で頷く。

黒のネグリジエ姿の彼女は谷間を恥ずかしげもなく披露しながら机に頬杖をついて視線だけ俺に移した。

「なにか問題でも？」

横に座る田井中の視線もどこかきつく感じて俺は2人に問うと、東司が息を短く吐く。

「いえ、契約出来たのなら正に上場。彼女が最後にサムライと契約したのは吉法師。」

かの、織田信長以来の実に四世紀は前のことで驚いているの」

この世界、前世で有名だった偉人達は総じてサムライが多い。

もちろん男女比の観点からその数は少ないのだが、武蔵坊弁慶と織

田信長はサムライだった。

玉藻曰く、信長は俺と同じ異端者転生者だったと告げていたが。

「それで、どんな能力だったのかしら」

東司と田井中が興味深げに目を細める。

ちなみに俺の横には碧理が座っているが、彼女は2ヶ月ぶりあった影響だろうか。

シリアスな話題を無視して俺の腕にしがみついて頬を擦っていた。

猫だろうか。この子は。

そんなことを思いながら机に置いた妖刀を手に取り鞘から少しだけ抜いて刀身を彼女達へと見せた。

「朱いわね」

「ええ。幸の髪のように綺麗ね」

田井中が刀の感想を漏らし、東司が彼女の髪を褒める。

彼女達はバディで活動し、サムライは居ない。

特級退魔師に見合うサムライは昨今人手不足にあえいでいた。

「それで、能力は？」

机を指でトントンと叩く東司に「秘密」と頬を上げて答えると彼女

の眉がぴくりと動く。

よく考えれば彼女達の登場から俺と碧理は散々に振り回されている自覚があるのだ。

ここで少しは意趣返しをしてもバチは当たらない。

「俺も1週間ほどは東京に居る。それこそ明日には権限を予知されている指令があるって彼女から聞いてるから、同行させて貰う。」

が、能力を見せる条件だけど」

碧理の髪を撫でる。

しばらく見ないうちに大分伸びたものだ。

「……分かったわ。同行を認めます」

東司がため息を吐き、田井中が抗議の視線を彼女に向けるも、東司は首を横に振った。

「それで宿は？」

今日、学校を休み東京にきたばかり。

弾丸旅行的なノリで来たので当然宿などは取っていない。

俺は碧理の腕を引っ張り椅子から立たせた。

「碧理とラブホテルにでも泊まります。一緒に泊まりますか？」

爆乳の退魔師二人組。

それも特級の2人に俺は破顔すると田井中が俺を睨みつける。

「……冗談です。とりあえず今日は碧理連れて行きますね。」

折角久々に会ったんですから、デートに行ってください」

先程よりずっと目を細めて顔を歪めながらスリスリと密着する碧理が顔を上げて咲<sup>笑</sup>った。

「デートっ?! いく! 幸さんっ! いいですか?」

どうやら完全に師弟関係が出来上がってるのか、彼女が真っ先に田井中に許可を求める。

「……好きにしなさい」

ため息一つ。

短く言葉を吐いた彼女に2人揃って頭を下げる。

「やった! ありがとうございます!」

ねっ! タクミっ! どこっ、どこ行く!」

ぴよんぴよんと跳ねる彼女の頭を撫でた。

「暑いしプールでも行くか」

俺の言葉に彼女は満面の笑みに頷くのであった。

「タクミ……。どうか……？」

モジモジとし、顔を赤らめる碧理に「可愛いよ」と言葉を返す。

トレードマークの銀髪のツインテールに、

ホルター型の白色のビキニ。

谷間の間には金色のチャームが施されているソレは正直なところ  
「可愛い」よりも「エロい」という感想が始めに出そうになるのを  
必死で堪えて俺は彼女を褒めた。

正に「肉」

胸を覆う布の面積は狭く、溢れそうな碧理の柔肌を包む。

エロ女神然とした美女がこちらを見つめていたのだ。

「おいで」

手を広げるとトコトコと狭い歩幅で俺の胸元に入る彼女を抱きしめて、尻を揉む。

手にはまるでスライムのように柔らかい感触に、胸元では彼女の豊かな乳房が潰れる圧迫感に、思わず下半身に力が入った。

「……おちんちん、勃ってきたよ？」

顔を赤らめて顔を上げる彼女に「仕方ない」と笑みを浮かべると彼女がそつと俺の肉棒に手を添えた。

「トイレで抜き抜きする？」

魅惑的な提案だ。

しかし、プールに来てすぐにトイレで精を抜くのは男としてはどうだろうか。

ふとそんなことを思い浮かべて俺は首を横に振った。

「折角のプールなんだし、まずは楽しもうか。ほらお客さんも少ないしね」

俺の言葉通り、プールの客は7月上旬のまさに掻き入れ時にも関わらず閑古鳥が鳴いている。



円周がおよそ500mの流れるプール。

ここは、高級ホテルに隣接されたプールで今日は平日だ。

おまけに最近では感染症のパンデミックもあり、本来のメインな客層である外国人は入国出来ないのだ。

故に、東司が「ドーセ、エツチなことするんでしようからオススメの場所を教えてあげるわ」と怪しい笑みを浮かべてここを紹介してくれた。

おまけに、1週間はこのホテルの一室を予約し、料金まで払ってくれるというのだから、特級陰陽師様々である。

「あつ、ウォーターズライド乗ろうよっ！」

碧理が俺の腕を掴み先導するようにアトラクションへと足を向ける。

久方ぶりにこの目で見る彼女の天真爛漫さに思わず笑顔が溢れた。

「あつ、ちよ、ちよつと、タクミい、人が来ちやウツ」

結論から言うと、それなりにプールを楽しんだ後、俺たちは洞窟のようなオブジェの陰に隠れてお互いの唇を貪っていた。

「大丈夫だよ。ここ死角になってるし、お客さんも少ないから」

顔を赤らめる碧理の耳を噛んで、口を首筋から胸元へと動かす。

「ほら、それに碧理だって乳首勃ってきてるし」

白いビキニの中心がぶりつと盛り上がり、布の中身を主張している。

「だ、だって、久しぶりにちゆう出来たし……」

俯いて股を擦る彼女に「そうだね。会いたかったよ」と言葉返すと「アタシも！」と言って俺の首に手を回して抱きつく彼女。

「脚広げて」

俺の首をちゆうちゆうと音を立てて吸う彼女にそう告げると、徐に開かれる白魚のようにスベスベとした両脚。

「碧理は本当に全身が柔らかくて気持ちいいね」

右手を内ももへと伸ばし左手で胸の水着をズラす。

現れたサクラ色の乳輪を円をかくように舌をグルリと這わしながら、鼠蹊部を身長に摩る。

「んっ、ああ、き、気持ちっ、いいっ、よう」

身体に抱きつきながらビクビクと身体を震わせる彼女の腰紐を解き、下半身を露出させる。

「これはプールの水で濡れてるの？」

秘部に指を添え、割れ目をなぞるとドロリとした液体が指についた。

「し、知らないっ」

顔を背ける彼女に思わず口角が上がる。

「ふーん。じゃあ壁に手をつけて」

碧理の腰を反転させて尻を突き出させる。

その場にしゃがみ込み、聞き手の指を2本ぬぷりと挿入して中身を掻き出すように手を動かす。

「んっ、ま、まってーで、デちゃうっ」

手マンの音が洞窟内に響く。

くちゆくちゆとした音が次第にぐちゆっ、ぐちゆっ、とぬべり気が帯び、次の瞬間にはびゅっ、びゅっ尿道から潮を噴き出す碧理。

「こんなにいっぱい出して。碧理はエッチだな」

「ち、違うもんっ！」

顔を真っ赤にして振り返る彼女に「何が違うの？」と問いかけると「えっちなのは、タクミだモンっ！」と言い返される。

「へえ。でもさつきよりここヒクついてるのはなんでかな？俺の手マンそんなに良かった？」

膣壁を撫でるように手を動かせば「んっ」と甘い声を上げる碧理。

「そ、それはっ」

「うん？」

「……………もっど欲しいから」

「聞こえない」

「……………もう一回して欲しいから」

「よく言えたね。でもして欲しいならちゃんとおねだりしないとね」

人差し指だけじゃなく、中指も一緒に挿入して彼女の膻壁を押し上げた。

「おほっ♡」

間拔けな喘ぎ声で鳴いた碧理は俺の首に手を回ししがみついた。

「ほら、俺の指で碧理はどうされたいの？」

指先にざらざらとした感触を感じながら強くなでる。

「おぐっ♡、みっ、碧理の、碧理のエッチなおまんこを掻き混ぜてくたさいっ！」

涙目になりながらも懇願する碧理に「良く出来ました」と頭を撫でた。

「ひゃっ、あっ、あっ、あああっ♡」

指をカギ爪のようにして激しくピストンさせれば碧理の口から絶えることなく嬌声が溢れる。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

碧理が身体を弓なりに反らせ、絶頂を伝えるように潮がびゅっ、びゅっ、と噴き出し手のひらを濡らす。

「ああっ」

ズポリと指を引き抜くと切なげな声を上げる彼女がその場に崩れ落ちそうになるのを肢体を抱きかかえ支えてあげた。

「碧理は可愛いね」

そう言って彼女の額にキスをすると、荒く息吐く彼女が恥ずかしそうにこちらを見つめていた。

「ねえ、タクミい、アタシもう我慢できない」

碧理の視線が俺の股間に注がれ、その瞳の奥には情欲の炎が灯っている。

「いいよ。碧理が満足するまで付き合っただけ」

彼女を後ろ向きにさせて壁に手をつかせると、俺は背後から覆いかぶさる。

「相変わらず綺麗な尻だね」

片手で水着をずり下げ、もう片方の手で柔らかな尻肉を掴む。

パシンと強めに叩くと白亜のように白い彼女の臀部にほんのりと

赤みが差した。

「ビヤウンっ！」

尻を震わせて嬌声を吐くとぴゅっと彼女の股から体液が噴出する。

「ああ、碧理のこっこもトロトロだね」

碧理のマンコは既に愛液が溢れており、水着をずらしてさらけ出した肉棒の切先が軽く触れるだけでぬちよりと音を立てる。

「早くう」

甘えるような声で催促しながらじりじりと腰を落として挿入れようとすると彼女の髪をぐいと引っ張り耳元で囁いた。

「おねだりは？」

冷たい声音で囁くと彼女の身体が震え「んっ！」と声を漏らした。

「碧理は悪い子だから、そんなこともわからないのかな？」

「ごめんなさいっ！アタシの淫乱おまんこにタクミのおちんちんくださいっ！奥まで突いて、子宮口こじ開けて欲しいですっ！！」

俺の言葉に碧理は即座に謝罪を口にし、自ら腰を落して挿入していく。

「ああっ！きたあっ！！おおっ♡」

ぬぷり、ぬぷりとなんの引っ掛かりもなく鈴口が膣内へと入り、龟头を納める。

きたもなにも、自分から挿入しているだろう。

ぬぷりぬぷりとすべてを啜えこもうとする彼女の臀部を更に強く叩いて、彼女の腰を動かないように押さえつけた。

「こら、まだ挿入するなんて言っただろう」

俺の言葉に彼女は顔を振り向き眉を下げる。

「やだっ、やだっ、おちんちん入れてくださいっ、おまんこにつ、はやくっ！」

駄々を捏ねる子供のようになめく彼女に「本当にどうしようもない変態さんだよ」と言葉を浴びせて尻を叩いた。

「あんっ、み、碧理はへ、変態ですーど、どうか、碧理の変態ぐちよぐちよおまんこにご主人様のおちんぽを挿入れて精液びゅっびゅして下さいっ！」

必死になつて懇願する碧理に「よく言えたね」と言つて頭を撫でると嬉しさからか、亀頭を納めた膣壁がきゅつと締まった。

「じゃあお望み通り挿入れるね」

彼女の腰を掴み、一気に突き入れる。

「おッ♡」碧理は舌を出して獣のような喘ぎ声を上げながら潮を吹き出した。

「おほっ♡、おほっ♡、おほっ♡」

ガクンガクンと膝が笑い、立っているのもやつとな碧理の尻を叩き、抽送を始める。「ほら、しつかり立って」

「ひゃいひゃい♡」

ぱしん、ぱしんと乾いた音が響く度に碧理の口からは歓喜の音が上がる。

「碧理のここはいつも気持ちいいね」

碧理の弱点であるGスポットをカリ首でゴリゴリと押し潰すように擦る。

「おっ、おっ、あっ、あっ、あっ♡」

あまりの快感に身体を支えていた腕が折れ、べしやりと地面に崩れ落ちる彼女。

「碧理」

彼女の名を呼んで尻を叩くと「ひゃいひゃい♡」と甘い声で鳴きながら尻を持ち上げた。

従順に快楽を求める碧理に笑みを浮かべて腰を激しく前後する。

彼女の子宮口を何度もノックするように打ち付けると、そのたびに碧理の身体が痙攣し、秘部から潮を撒き散らした。

「あーっ、あーっ、あっ、あっ、あっ♡♡♡」

「そろそろ出すよ」

ラストスパートをかけるべく、碧理の腰を強く掴む。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ♡」

碧理は壊れた人形のように首を上下に動かし、俺の動きに合わせて声を上げる。

「イクよ」



「ちがつ！好きじゃなああああああつ！！」

碧理の言葉が無視して彼女のクリトリスを責め立てる。

「んおおおほおおおほ♡」

碧理は身体を弓なりにしなり、ぶしつぶしつと断続的に潮を吹いた。

「碧理、またイったの？」

呆れたような口調で言うも彼女はその場で息を吐くだけでもはや反応はない。

「じゃあそろそろ俺も楽しませて貰おうかな」

彼女のむりやり立たせてその柔らかい太ももを掴み上げてちんぽの切先を膣穴にあてがった。

「あ つ、あつ、あ つ、あ つ、あ つ、あ つ♡♡♡」

ずぶりと啜えこんだ瞬間、彼女が呼吸と共に嬌声を吐いた。

「ふっ、相変わらず凄い締め付けだね」

パンツ、パアンと肌同士がぶつかり合う音が響く。

「碧理、キスしようか」

碧理の身体を抱き寄せ、唇を重ねる。

舌を絡ませ合いながらピストンを続けていくと、碧理の膣内が痙攣し始めてきた。

「んっ、ちゅっ、れりゆう、タクミい、すきい、だいしゅきい♡」

碧理は甘えるように抱きついてくる。

「おいで。奥まで突いてあげる」

彼女の耳元で囁き、片足立ちしていた彼女のふとももにも手を伸ばすと、彼女はぴよんとジャンプする要領で俺に身体を預ける。

駅弁だ。

彼女の体重によりずぶりと更に膣内を蹂躪するちんぽに彼女が腰を震わせた。

「おほっ♡、おくきたあ♡」

碧理の子宮口をこじ開けるように何度も何度も突き上げる。

「あ つ、あ つ、あ つ、あ つ、あ つ♡♡♡」

碧理は目を虚にして快樂に溺れていた。

「おほおっ♡おほっ♡おほっ♡おほっ♡おほっ♡」

腰を突きあげながら、彼女の臀部を持ち上げては上下左右に揺らす。

その度に碧理の口から漏れるのは獣のような喘ぎ声。

「碧理、気持ちいいかい？」

「はいいいいいいい♡」碧理は蕩けた顔で返事をする。

「碧理は本当に可愛い子だね」

碧理の髪を撫でると、彼女の子宮がきゅんと締まった。

「碧理はマンコにちゃんとマーキングしなきゃね」

「はいいい♡碧理はご主人様のものでしゅ♡」

俺の言葉に碧理は嬉しそうに答える。

目にはハートマークを浮かべ口からは涎を垂らし、目には涙を蓄えている。

「そろそろ射精すよ」

射精感に身を任せるように腰の抽送を早める。

「はいいいい♡あああああああ♡しゅき♡これしゅき♡♡もつとぉーもつと、犯してください♡」

「きてえ♡碧理のなかにたくさん出してくださあいつ♡」

碧理の言葉に応えるように、俺は最奥まで肉棒を突き入れるとそこで果てた。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ♡」

射精の瞬間、彼女は大きく目を見開いて身体を大きく仰け反らせた後、ビクビクと全身を痙攣させながら潮を吹き出した。

「結局、エッチばっかだったじゃないの！」

プールからホテルの部屋に戻り、ベッドへとダイブした彼女がうつ伏せのまま俺に視線を向けて唇を尖らせる。

「まあ、久しぶりに会えたしね。それにシタかったらどう？」



俺の言葉に彼女が「うっ」と苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべたあと「知らないっ！」と顔を反対側に向ける。

「今日は今までの分、いっぱい犯してあげるからね」

彼女の横に座り、パンと張った臀部を撫でると彼女はビクンと腰を上げて押し黙る。

さて、あと何回できるだろうか。

彼女の痴態を想像し鼻の下を伸ばしながら俺は彼女の後頭部にキスを落とすのであった。

## 第五拾弍話 九尾

「タクミ……1人で平気？」

不安気な顔で俺を覗く碧理に「問題ないよ」と返して腰に佩いた妖刀 叢雲を抜刀し、空を見上げる。

天空に羽ばたく1匹の鴉。

怪異だ。

しかもそれは低級ではない。

特級たる、東司と田井中に降った討伐指令。

位階は九の天空を羽ばたく八咫鳥と呼ばれる化け物である。

奴が今、こちらを睨み咆哮と一緒に光の球を放つ。

「燃やし尽くせ 玉藻前」

紅い刀身から炎が吹き出し、やがて俺の身体を包む。

熱くはない。

それどころか、むしろ心地よい程に快適な炎舞。

「隴火」

背中に等身大ほどの火の玉をいくつか出現させて、向かう光線の斜線へと飛ばす。

——瞬間

衝突した瞬間、ボンッ、ボンツ、と小気味良い爆発音を響かせ爆風が吹き荒れるのも気にせず刀を振るった。

「不知火」

顕現される一匹の緋色の狐。

腰に跨り、空へ駆ける

「烽火」

刀を持っていない手をカラスへ突き出し、氣を混ぜる。

イメージは火炎放射器。

掌がジンワリと暖かくなつた瞬間、ゴウツツと音を立てて火柱が吹き出しカラスの翼を焼いた。

「退魔の太刀」

炎に包まれた妖刀を振り上げ、――― 一閃

接敵からおよそ15秒程度。

九位階の八咫鳥は鳴き声をあげて泡沫の如く消えた。

「化け物ね……」

空を見上げた東司さんがぼそりと漏らし、幸ゆきさんが「そうね」と短く答えた。

「すごい……」

空を見上げ、思わず感嘆とした息が漏れた。

また、差が広がったということをお知らせする余地のないほどに、彼は美しい。

「碧理さんも頑張りましょう」

師匠である幸が私の顔を見て優しく微笑む。

「はい。タクミの横に立てるようにこれからもお願いします。幸運」

私が頭を下げると東司さんが「はっ」と乾いた笑い声を漏らした。

「生半可な覚悟じゃ無理よ。彼はもはや特級クラスに足を突っ込んでいるから」

「特級」

今、目の前に立つ2人がまさにその上位を関する者たちが、タクミの実力を認めた。

別に驚いてはいない。というのが正直な感想だ。

彼はすごい。

強く、逞しく、美しく、優しい。

分かりきったことであり、私の一番大好きな救世主ご主人様なのだ。

「お疲れ様。タクミくん」

狐に乗って地上へと降りた彼に東司さんが笑顔を浮かべて声をかけた。

「流石ね。これは私がパイズリする日も近いわね」

彼女の言葉にピクンと眉が吊り上がった。

「ちなみに、何尾まで使えるのかしら？」

東司さんの言葉にタクミが一瞬驚いた顔を浮かべてから「四尾です。貴女はどこまで知っているんですか？」と苦笑いを浮かべた。

「四尾ってなんですか？」

隣に立つ幸に問うと彼女は厳しい顔つきでタクミを見つめたまま答える。

「伏見の妖狐は九尾と呼ばれる妖よ。彼女は尾の数だけ能力を持っているの」

そう答えた幸の声音は硬い。

彼女は祖母を賀茂家。とりわけタクミに奪われたと憎んでいる。

一緒に過ごす中で何度もその誤解を解こうとするも、彼女の考えを変えることはついで、出来なかった。

「四尾……坂本直柔なおなりでさえ三尾だったそうよ」

幸の言葉に首を傾げる。

「坂本龍馬よ」

私の疑問に補足するように答える彼女の言葉に目を見開いた。

「私のパイズリは沼よ。楽しみにしておくことね」

タクミがニタニタと笑う東司を連れ立って私の元に歩み寄る。

「……タクミ、お疲れ様」

手を挙げ、ハイタッチを求めるとパチンと乾いた音が響き彼が笑った。

「ありがとう。碧理」

未だ彼の後ろでは東司さんが「沼パイズリよ。沼パイズリ」と言い、胸の下で腕を組みその豊満なバストを上下に揺らす。

「……パイズリなんて、アタシ聞いてないけど？」

頬が引きつき、彼に言葉を向けると「言っただけ？」と苦笑いを浮かべた。

「まあ、それよりどうだった？玉藻の能力」

彼は目を泳がせながら話題を変えるので、ため息を吐いて応じる。  
「綺麗だったわ」

凄いとか、強いとか、そう言った感想の前に最初に感じた感想を彼に述べるとタクミは「碧理の方が綺麗だよ」と、調子の良いおべつかを述べて私の頬を撫でた。

仕方ない。

また、他の女に手を出そうしていたのも目を瞑ろう。

以前お姉ちゃんに言われた『独占欲は女の恥』という言葉を思い浮かべ、思わず破顔した。

「ありがと……。今日はパイズリでいっぱい抜いてあげるから覚悟なさい」

目は瞑るが、私にもプライドはあった。

私の言葉に彼は「上等」と返して嗤う。

修行の目処は未だ経っておらず、タクミと一緒に過ごせるのは残り5日間。

その間にできるだけ彼に甘えようと私は心の中で決意するのであった。

## 第伍拾参話 通告

「合宿するわよ!!ッ」

ある日の放課後。

夏休みが近くなり、日差しが照らす7月の頭。

部長のルルが水泳部のみんなを集めて声高々に叫ぶ。

「どこにつすか?」

日々の部活動の賜物か、小麦色に肌を焼いたクルミが眉をぴくりとあげた。

「沖縄よ」

副部長のナナが目を細めて答える。

先ほどまでプールで練習していた彼女達の肌は水気を帯びており、サポーターを履いていないのか、マン筋がピタリと線を主張している。

「沖縄って……」

ほかのみんなが顔を見合わせる。その表情はどこか不安気であった。

「部長く美優はお金ありませんよ」

寝ていることが多いからか、他の連中よりは幾分か肌の白い美優が手を挙げるとルルは胸を張って「無料だ。全部水川家がもつ」と答えると、恵が口笛を吹いた。

「さすが、天下の水川様々っ!ゴチになります」

ぴよんぴよんと恵が跳ねると、ビキニから柔らかい乳房が溢れそうになるほど上下した。

「いや、いつもながら貴女は競泳水着来なさいよ」

ナナが恵を諭すが彼女は「日焼け後がダサイからいやです」と唇を尖らせた。

「いつ、行くんですか?」

ハイレグタイプの競泳水着を着た美咲が手を挙げると「夏休み入つてすぐだな。私たちの引退試合も近いし」とルルが8月頭にある試合のスケジュールを伝える。

「俺も行っていいんですか？」

男子が少なすぎる営業で、高校生の大会で男子の部は存在していない。

俺はここ3ヶ月あまりはあくまでマネージャー的なポジションで、気が向いたら泳ぐだけであり、普段はムラムラしたら部員を抱くという乱痴気な部活生活をしているのだ。

念の為にそれをルルに確認すると彼女は鷹揚に頷いて「もちろん無料だ。と言うか、賀茂くんも是非来てくれ。場所が沖繩ということもあるが、それだけで三馬鹿はやる気になる」としたり顔で答えた。

「とりあえず夏休みに初日に全員が朝8時に学校前に集合するように。」

そこから先は全部私たちに任せてくれ」

ルルの言葉に各々が「はい」と間延びした声で返事を返して練習は解散となった。

「タクミくん、合宿ではウチの身体に日焼け止め塗ってね」

俺の腕を抱くように絡ませて恵が微笑む。

日焼け止めも何も、つい先日ローションを塗ったのプレイをしたので目新しさはないのだが……。

「討伐指令が無ければ同行しますね」

スライムのような乳房に挟まれる腕に下半身がピクピクとしだすのを無視して俺は微笑んだ。

夏は始まったばかりだ。

「いらっしやませ」

結局のところ、あれから一ヶ月あまり。

取り立ててこれといったイベントも起こらず、俺は五体満足で水泳部連中を連れ立って沖繩の、超《がつくほどの高級ホテルのロビーへと来ていた。

「お待ちしておりました。ルル様、ナナ様のご学友の方々。

本日より一週間。ごゆるりと本ホテルでお過ごし下さい」

ロビーに入った瞬間、十数人の従業員が左右に整列し頭を下げる。

「……すつげえ……」

クルミがぼそりと感想を漏らすと水川姉妹を除いた全員がこくりと頷いた。

「ここは、水川家所有のホテルなのよ。全部屋プール付きのスイートルーム。

ホテル内を移動する際はゴルフカートで移動してもらおうわ」

ロビー奥に並ぶカートを指差すナナ。

ルルがそこに「競技用プールもコースは少ないが一応あるからな。合宿にはもってこいということだ」と補足するが、一堂は周りをキョロキョロとするだけで彼女達の言葉には生返事を返した。

「あの、これって、普通は一泊いくらになるんでしょうか?」

美咲がおずおずと手を挙げるとルルとナナは顔を見合わせてから「知らない」と返事を返す。

「おひとり様、一泊およそ20万円ほどでございます」

まるで合いの手を入れるように全身黒スーツを着た妙齡の美人が前に出て答える。

「え、っ！なんでタチバナがここにいるのよっ!」

カエルを潰したように鳴いた後、ルルがあたふたとし出すと、タチバナと呼ばれた女性は「ルル様とナナ様のご学友。失礼がないようにと奥様からのご連絡がありましたので」とぺこりと頭を下げる。

「久しぶりね。タチバナ」

ルルと違い、ナナは笑顔を浮かべて彼女に近づくと、タチバナも「お久しぶりでございます。お元気そうで何よりです」とナナに微笑みかける。

「紹介するわ。水川家の家令のタチバナよ」

家令とは執事筆頭的な立ち位置の職位だ。

ナナの紹介にタチバナはぺこりと頭を下げた。

「普段はお母様と世界中飛び回っているから会うこと自体は珍しいけ



ど、皆も何かあれば彼女に頼って頂戴」

そう紹介を終えるとタチバナ再度頭を下げた。

「じゃあ、30分後に全員水着に着替えてロビーに集合で」

一通りのホテルの説明を聞き終えて、最後にルルがそう言うとき、係員の誘導に従ってゴルフカートに乗り込み別れていく。

「賀茂様はこちらでございませう」

どうやら俺の相手はタチバナがするらしい。

ゴルフカートに乗り込みゆつくりと走り出し、ロビーを抜けると空から熱い陽射しが俺の肌を焼いた。

「凄くいいところですね」

あたりを見渡しながら思わず感想を告げる。

一面に広がる緑色の芝生。

所々に南国を象徴するようにヤシの木がなっている。

「タクミ様はおサムライ様だとか……」

ハンドルを握り前を見据えながらタチバナが口を開く。

「そうですね。一応中級をやらせてもらっています」

彼女の硬い声音に思わず眉がぴくりと上がった。

「どうかこれを最後にルル様、ナナ様とは会わないようお願い致します」

タチバナの言葉に俺は思わず顔をしかめる。

「理由をお聞きしても？」

拳を握る力が強まる。

揺れるカートの空気に緊張が走った。

「ルル様は水川家の跡取り、ナナ様は次女でございませう。既に将来は婚約する相手もいらっしやいますので、何卒ご理解頂ければ」

こちらを振り向くことなく、前を見据えたタチバナ。

やがてカートは一つの平屋の前に止まった。

「タクミ様のお宿はこちらになります。御用があればいつでもお電話でお呼び下さい」

カートに積んだ荷物を取り扉を開ける。

白の調度品で整えられた室内。

廊下扉が開いており、室内を照らす大きな窓からプライベートプールの水面が光を照らし幻想的な光景を映し出していた。

「それで、詳しく教えてくれませんか？」

いくら幻想的な風景が目の前でくり広げられていようと、俺の目つきは変わらない。

俺の言葉にタチバナはペコリと頭を下げ、口を開いた。

「恐らくですが姦通をされていらつしやるのでしょうか？」

彼女の言葉に「それがなにか？」と剣呑に返す。

すでに身体を交えてはいるが、別にそのことについて否とする社会ではない。

俺の年齢が未だ16歳未満ということはあるが、それでは誕生日を迎えてから会えば良いのだ。

「愛がありますか？そこに」

頭を上げた彼女の眼はこちらを見据えていた。

「愛ですか？」

いつぞや聞いた美咲のセリフのような言葉に首を傾げた。

「無いのでしょうか？ルル様にも、ナナ様にも」

目を細める彼女に思わず歯を強く食いしばった。

「なぜ、あなたにそこまで干渉される必要がある？」

額に青筋を浮かべる俺をみて“はあ”と短く息を吐いてから、タチバナが室内に置かれた一つの茶封筒と俺に差し出す。

「差し出がましいでしょうか、水川家としてあなたを調査させていたできました」

中身をあげるとクラスの女子連中の写真がクリップに止められている。

「クラスメイトだけに飽き足らず、ルル様、ナナ様に同じ水泳部の方々。はては街に出では行きずりの女性とも逢瀬を交わしていらつしやる」

“随分とお盛んな方で”

タチバナの顔つきが次第に厳めしく変わり、牙をむく。

「ルル様にナナ様は卒業した暁には、結婚がすでに内々に決まっております」

「その相手に愛はあるので？聞けば第八夫人とかそれぐらいでしょう」

「無いですね」

「だったらっ！……」

俺の言葉に首を振った後、彼女がびしやりと告げる。

「しかし、ご結婚はされます。愛がなくとも」

タチバナの有無を言わせぬ覇気に俺は押し黙る。

「ご当主様。ルル様とナナ様のおかあ様から伝言です。この沖縄が最後だと」

そう言っつて最後に失礼いたしますと続けて彼女が部屋を辞する。

プールから反射する光が壁にもうもうとした光を放ち、俺は手にした書類をくしやりと潰した。

## 第五拾肆話 遠征討伐

「それじゃあ、僕は沖縄の退魔庁に行つてきます」

俺の言葉にルルが頷きナナは目を細めて「いつてらっしやい」と手を振った。

2人にタチバナの話はしていない。

最終的に、水泳部一同の見送りを受けてホテルのフロントより呼んでもらったタクシーへと乗り込み目的地の住所を告げる。

「お客さんはおサムライ様ですか」

運転手がルームミラー越しに視線を送り目を細めた。

「……はい。一応は」

一般人に討伐に関する話を話すのは厳禁である。

知り合いならばと口の軽い俺も、先のタチバナとの会話で考えることが多々あり、窓の景色に視線を移した。

「お勤めご苦労様でございます」

やや浅黒く焼けた肌をした運転手が微笑みを浮かべるのでとりあえずとばかりに愛想笑いと感謝の言葉を返す。

「愛”ねえ……」

ぼそりと呟き、真っ先に浮かんだのは母親の顔。

前世ではない。

彼女には少なくとも愛を受け取っていたことは理解している。

もちろんカナエとトモエの亡き姉たちも同様である。

腰に佩いた叢雲を鞘から抜き出し刀身を覗く。

「天邪鬼よのう」

ふと、玉藻に言われた言葉を思い出した。

愛という存在は知っている。

それは形のなく、意識した瞬間に胸が温かくなる現象である。

前世では感じることのなかったソレを今世で短いながらも実感することができた。

しかし、それと同時に儂く散ったという思いが胸中を埋め尽くす。

愛とはかくも儂いものか。

ふと、美咲の顔が思い浮かぶ。

「そこに愛はないじゃない。あるのは肉欲だけ」

美咲もまた俺との行為に愛を求めた。

では、碧理や蒼佳は？ちなみは？

彼女たちの顔が思い浮かんでソレについて考えるも答えは出ない。

彼女たちに対して俺は愛があるのだろうか？

そう考えた瞬間に訪れる前世の記憶と、ぬらりひよんに蹂躪された過去。

気がつくやうと晴々とした陽射しの中で猛烈な雨が窓を叩いた。

「狐の嫁入りですかねえ……」

フロントガラスのワイパーを動かした運転手がぼそりと告げた。

「……そうですね」

刀身を鞘に仕舞い込んでスマートフォンを取り出した。

ひとまずは仕事をしよう。

俺は考えることを放棄し、支部へチャットを送り到着予定時刻を告げる。

沖縄には現在有力な退魔師は存在しない。

2年前に首里城に現れた九位階の妖怪の侵攻により城は焼け、多くの退魔師が命を落とした。

「了解しました。道中お気をつけて」

どこかの連絡窓口の職員だろうか。

すぐさま返信があり、俺はスタンプだけ返して携帯を閉じる。

「とりあえず仕事しますか」

ふと、独り言を言う頃には窓を叩いた雨は止み、晴天が照らしていた。

「本日はお越しいただきありがとうございます。私、沖縄退魔支部の長をしております。我那覇 カオリと申します」

広い応接間に通されて、目の前で頭を下げる彼女に釣られてこちらも頭を下げる。

「こちらこそ、ご丁寧にありがとうございます。短い期間になります。顔をお借りしてお願いいたします」

顔をあげて向かい合うと浅黒く焼けて目鼻立ちがくつきりとした女性が笑みを浮かべた。

「いやあ、おサムライでここまで優しいのはなんか驚きますなっ」

恰幅の良く、樽のような年配の女性が快活に笑って机に置いてあった茶をぐびりとあおいだ。

「……それで、どのくらい滞在されるご予定で？」

ふと目を細める彼女に「一週間」と短く答える。

「それは、それは短いですね。こちらとしましてはおサムライ様は喉から手が出るほど欲しいお方ですから、是非移住を考えて下さればと思います」

「南国は良いですよ。常夏で夏はもちろん冬も過ごしやすい。そういう口を大きく開いて笑い声をあげる。」

「今のところはまだ高校生ですからね。転校も考えておりません」

苦笑いを浮かべて「沖繩はそこまで厳しい状況ですか」と続けると彼女は鷹揚に頷いた。

「ここは京より離れておりますからな」

そう言った彼女の顔つきは険しかった。

日本は現在大きく二分されている。

日本の首都である東京に、第二の都市である京都。

東京は政治都市として中心を指し、我々退魔師にとつての中心は帝がおわす京都なのだ。

故に大都市から離れれば離れるだけ地方を守る退魔師の総数は少なくなる。

尤も、怪異の出現率も地方にいけば行くほど少なくなるのでそこまで悲観することではないのだが……。

「こちらには奴らがおりますれば……」

我那覇が胸元から一枚のイラストを机へとおいた。

「……海坊主ですね」

青い肌をした剃髪頭の化け物。かたわらには幾人もの髪の毛の濡れた人のようなモノが描かれている。

「左様です。もはや厄災に相応しい野良の怪異です」

我那覇は付け加えるように「今もどこかの沖にでもいるでしょうなあ」と呟いてソファーへと背中を預けた。

海坊主。

突如して沖縄に顕現した十位階の怪異。

始まりはソレこそ2年前。

ある日沖より這い出たソレは幾人ものキムジナーと呼ばれる妖怪を使役し、首里城を焼いた。

討伐及び封印に当たった退魔師が迎撃に失敗して以降、コイツらは海に潜ったきりで目撃情報はなかった。

時折漁に出た漁師を喰らっているのか、遭難率がぐっと上がったのは最近の話だ。

「お陰で今年の夏も海は閑古鳥でしような」

扇子を取り出して己を仰ぐ彼女から一筋の汗が流れ落ちた。

「とりあえず出来る限りの討伐はさせていただきます。あ、黒バイ貸して下さい」

自分の分の茶をぐぶりと飲み干して俺は席を立つと彼女は重そうな腰をあげて頭を下げた。

「よろしくお願いします」

「はい、15匹目」

民家に隠れていた低級怪異を切り捨て泡沫へと変える。

まるでゴキブリのように斬っても際限なく現れるキムジナーと呼ばれる怪異。

位階で言うところ第三位階よりも下の、民間人に悪さをすることもあるが、直接的な死因にはつながらない低級達だ。

それらを斬り捨てながら搜索すべく鼻を鳴らした。

「……キリがない」

思わず、その場でため息を漏らす。

沖繩が何故こんなにも怪異がのさばっているかと言うとソレはすべて2年前の海坊主から始まっていた。

海坊主とキムジナー。

と言うかキムジナーと呼ばれる妖怪が特に厄介だったのだ。

奴らは結界に閉じ込めてもするりと抜け出して何故か陰陽師を狙う。

陰陽師に抱きつき自爆をするのだ。

故に結界師が陰陽師を守ろうと結界で護るも、キムジナーは結界をすり抜け目標へと到達してしまう。

では、サムライが援護すればと自然に思えてしまうが、海坊主は十位階の妖怪だ。

奴はそれを見越してかサムライに突進しサムライの動きを封じる。

故に沖繩は2年前の首里城炎上を期に圧倒的に退魔師が不足していた。

「……あつちにいるな」

醜悪な妖氣の臭いを感じて黒バイに跨がる。

キムジナーは対陰陽師を考慮して作られた怪異なのだろうか。

奴ら民間人を襲うことはほとんどない。

屋根裏に、洞窟に、井戸に隠れて陰陽師を見つけた時だけ目の色を変えて自爆へと興じる。

故に退魔庁としてキムジナーの討伐は後回しにしていたという背景もあり、いまや沖繩ではメジャーな妖怪へと変わってしまった。た。

「キヤキヤキヤ」

井戸の中に隠れていたキムジナーを見つけるとソレはサメのような歯を見せて嗤う。

「隴火」

火の玉を顕現し井戸に放つと一瞬のうちに燃やし尽くす。

「とりあえず今日はここら辺で切り上げるか」



時刻はすでに夕刻。

夕日を背に、その場で背伸びをして筋肉を解す。

出来れば自分も水泳部連中とプールでいちやつきたかったが、彼女達は真剣に合宿に来ている。

邪魔すべきではないだろう。

尤も、それは昼間だけであり、夜は……と考え思わず鼻の下が伸びた。

下半身がムクムクとし出すのを無視して俺はバイクに跨りアクセスを回す。

「あ、ルル先輩達のこと考えるの忘れてた」

ぼそりとした独り言が夕焼けに響いた。

## 第伍拾伍話 鉄梨

「頭でっかちー！」

ホテルに戻るとすでに練習を終えていたのか、一同がロビーへと集まりクルミが美咲を睨んでいた。

「クルミ先輩みたいに私は肉欲には溺れません。はしたない」  
どうやら揉めているらしい。

他の連中が「まあまあ」と彼女らを嗜めるが、クルミががると彼女へ牙を剥く。

「何かあったんですか？」

その光景を止めることなく一人ソファアールであくびをしていた美優に話しかけると彼女は「んー、いつもの喧嘩あ」と間延びした声で答えした後、再度口を開けてあくびをした。

いつもの喧嘩と言いつつも、2人を包む険悪な雰囲気はまさに一触即発にピリピリと張り詰めている。

「賀茂くん、止めてくれー！」

クルミを羽交い絞めしていたルルが俺に気がつき口を開く。  
「がんばってえ〜」

俺に向かつて手をヒラヒラとする美優に「先輩も来て下さい」と強引に腕を引つ張り立たせて輪の中へと入る。

「何があったんですか？」

美優を逃さないようにがっしりと腕を掴みながらルルに問うと彼女は目を泳がせた。

「ナナさん。解説お願いします」

こう言った時は彼女を頼るに限る。

ナナに視線を向けると彼女は頬に手を当てて「困ったわねえ」と呟いてから言葉を続けた。

「合宿中のタクミくんに関するルールを話し合っていたのよ」

ナナの言葉に眉がぴくりと上がった。

「俺ですか？」

全くの予想外というわけではないが、目の前で言われると首を傾げ

ざるを得ない。

「ええ。元々は部活の合宿なのだから昼間にタクミくんと性行為をすることを禁止しましょうと美咲ちゃんが言い始めたのだけれど、ソレについてクルミちゃんと恵ちゃんが反対してね。最終的に美咲ちゃんが「あなた達はセックスするためにここにきたんですか？」って火に油を注いじやったのよ」

思わず深く息を吐いて苦笑いが漏れた。

「2人とも……おちついて」

間に入ろうとした時にふとクルミがぼそりと呟いた。

「鉄梨てつなしのくせに」

彼女が吐き捨てるのと美咲が眉がぴくりと跳ね上がる。

「くるミン、言い過ぎ」

美優が彼女の口を塞ぐように手を被せた。

“鉄梨”

身持ちが硬い者を指す隠語であり、鉄壁のように本番は無しからきた隠語であるが、基本的には今世では男性に対して言う言葉であるが……。

「はい。今日はここまでにしておきましょう」

美咲が声を上げようとするのを遮って2人の間に入り手を叩いた。

「ちよつとータクミくんっ」

目を釣り上げる美咲を無視してルルへと視線を向けた。

「今日の夜ご飯はどこですか？」

急激な話題の変更にルルは苦笑いを浮かべながら「ホテルに併設された鉄板焼きだ」と言葉を返す。

「じゃあ、申し訳無いんですけど、俺と美咲の分だけ部屋に持ってきてもらえますか？」

俺の提案に再度口を開こうとした彼女の口を手で押さえるとルルはため息を吐きながらも了承の言葉を交わす。

「じゃあ、とりあえずそれで解散しましょう。いくよ。美咲」

ぎちりと彼女の腕を掴み止められたカートへと歩を進める。

彼女が手を離せと吐きながら腕を振り解こうとするも、伊達にサム

ライなどやっていない。

がっしりと掴んだ手が離れることなく、彼女をカートへと運ぶと諦めたのか不意に大人しくなり俺は自分の部屋にカートを動かす。

「なんで動かし方知ってるのよ」

横に座る彼女が睨むのを「親父にハワイで教わった」と訳のわからない言い訳を返しながら夕焼けの道を進んだ。

「……癩だけどありがとうと伝えておくわ」

部屋の三人掛けの白いソファーに腰掛けた美咲がこちらに頭を下げた。

「気にしないで。クルミ先輩には俺からも言っておくから」

ベッドの上であぐらを描いて叢雲を抜刀し打ち粉をつける。

「もつとも、俺が水泳部に入ったせいでもあるから、あまりキツくは言えないけどね」

切先を覗き、ふっと息を吹きかけてから刀を鞘に納めて彼女へと視線を向けた。

「それもそうね」

彼女は苦笑いを浮かべて頷くも表情はどこか晴れない。

「貴方はなんでサムライになったの？」

ふと告げられた質問に思わず唖ってしまった。

「なんで……か。初めから定められたとも言えるし、自分でなりたいと思ったとも言えるなあ……。まあ全ては『京都事変』のせいだろうね」

俺の言葉に彼女はおおよそ察したのか「ごめんなさい」と謝罪の句を返して頭を下げた。

京都事変により家族を亡くした家が多い。

故に行き着いたのだろう彼女の考えに俺は補足するように言葉を返す。

「姉の2人に、母さん、叔母さん、おばあちゃん。ほとんど全てを殺されてしまったよ」

「……ごめんなさい。変に思い出させてしまって」

何度目かの謝罪をする彼女を見て俺はぷつと息を吹き出し笑い声を上げる。

「よく考えれば君にここまで謝られたことなかったね」

深く付き合おうとしてこなかった。

彼女の嫌がる顔を見ながら手で抜いてもらうだけの関係だったため、こうしてゆつくり目的もなく話すことはなかったことをふと思いつ出した。

「いいよ。気にしなくて。だからサムライになったとも言えるし、元からサムライになる運命さだめだったとも言える。ほら。腐つても賀茂家だしね」

おちやらけた表情を浮かべる俺とは反対に彼女の顔は暗い。

「どうしてそんなふうに貴方は生きられるの？」

顔を上げた彼女が俺を見据えて口を吐く。

「前に言ったよね。サムライは君たちを守ることが仕事であってそれで怪我をしたとしても謝罪は不要だって」

俺の言葉に美咲が頷いた。

「俺は怪異のいない世界を創るために生まれたのだと思う。多分だけど」

「怪異のいない世界……」

反芻するように言葉を繰り返す彼女に俺は微笑みを浮かべた。

怪異の存在がポピュラーになった世界。

熾烈な生存競争を繰り広げるように人類は怪異を戦いに興じている反面、共存も出来ている。

それが鞍馬寺や玉藻のような封印される妖怪たちだ。

故に怪異のいない世界を夢想しながらも現実問題それは厳しいと俺は思っているし、そんなことが俺の本当の目的ではないのだ。

あくまで、今は彼女への好意を高める為に吐いた、虚実を混ぜ合わせた理想論にすぎない。

「君も、怪異に家族を奪われたクチ？」

彼女に問うと、一拍の沈黙を置いてから「ええ」と肯定の返事が返ってきた。

「……弟を殺されたわ。3年前に」

自らの太ももの上に置いた拳を強く握り肩を震わせる彼女に「そっか」と短く返事を返して押し黙る。

別に珍しいことではないのだ。

特に男児となれば比較的標的になりやすい。

「……怪異のいない世界……良いわね……」

ぼそりと呟いて顔を上げると瞼から一筋の涙が流れていた。

「期待させてもらってもいいかしら？」

笑みを浮かべる彼女に俺は頷きを返す。

「じゃあ、景気づけにキスして」

瞼を閉じて、ベッドに胡坐をかいたまま唇を突き出した。

「……いいわよ」

しばしの沈黙のあと、短く彼女が答え、衣擦れの音と共にちゅつと唇が重なる感触を覚えて目を開ける。

「でも今回だけよ。これ以上はしないわ」

身体を離して笑う美咲に俺は笑みを浮かべる。

攻略の道は長く、難しく、険しい。

「残念。あわよくば先っちょだけでも考えたんだけど」

俺の言葉に美咲は「普通はそれ女性のセリフよね」と笑みを浮かべて笑い合った。

リンリンとインターホンがなるまで俺たちはたわいのない会話で盛り上がる。

離れていた距離が少しづつ縮まってきている。

そう感じずにはいられなかった。

## 第五拾陸話 お仕置き♡

夜のプールは、まるで魔法にかけられたように美しく輝いていた。少し肌寒い水温の中、ぴたりと恵の豊満な谷間に挟まれ下半身がむくむくと起き上がる。

「ん……っ」

「あ、ごめんね」

「大丈夫です」

反射的に思わず離れようとするも、その前にぎゅつと腰を抱かれてしまった。

「おちんちん勃ってるでしょ？我慢しないで？」

そう言つて微笑んだ恵の顔はとても妖艶で、心臓が大きく跳ねる。そんなことを言われたら、もう歯止めはきかない。

もつとも、歯止めようとした覚えもないが。

「恵先輩……」

「ふふ、可愛いよ、タクミくん」

そのままちゅつと唇を重ねる。

そつと水着の中に手を差し込まれ下腹部に暖かい手を添えられた。

「……も気持ちよくなつていいんだよ？」

耳元で囁かれる甘い声音に、理性なんてものは簡単に吹き飛んでしまった。

「あつ、あんっ！だめえ！」

彼女の黒いビキニをズラして、桜色の大き目の乳輪をさらけ出す。

「その前に、恵先輩が気持ちよくさせますよ」

にやりと口角をあげて、埋まるように隠れている乳頭をほじくりかえすべく、口いっぱいに頬張った。

「ひゃううーやあんー！」

口をすぼめてちゅうちゅうと吸引すると、ピンッと硬くなった乳頭が顔を出して思わず甘噛みをするとビクビク震えながら俺にしがみついてきた。

「相変わらずお餅みたいに柔らかいですね」

反対側の乳房を揉みしだきながらその感触を楽しむ。  
柔らかさと弾力が絶妙でいつまでも触れていたくなる。

「し、潮でちやうようっ」

腰を震わせる彼女に「イっちゃダメですよ」と耳元で囁き乳首をつねる。

「んっ」

はあはあと息を吐く彼女の顔は月夜に照らされ妖艶さが増していた。

「ちよつと、私もいるの忘れてませんか？お二人さん」

ふとプールサイドにベンチに座るクルミが口を尖らせて声を上げた。

「クルミ先輩はお仕置きなのでそこで大人しく見てて下さい」

彼女は、先の美咲とのやりとりで少々オイタが過ぎたのだ。

あの後、俺と美咲でルームサービスをした後に2人を呼び出したのだ。

もちろん夜の相手はしてもらおうが、クルミについては暫し放置という始末である。

「あ、オナニーも禁止ですから」

俺の言葉に彼女は顔を歪めていた。「じゃあ、続きしますね」

俺は恵の股間に手を伸ばした。

「きゃっ！ちよ、そこは本当に無理だつてば！」

彼女の声を無視して、ぐいっと水着の中へと手を突っ込んで割れ目をなぞるとヌルツとした愛液が指先に付着した。

「あれ？なんか濡れてるんですけど？」

わざとらしく言う恵は真っ赤になって俯いた。

「クルミ先輩の前で恥ずかしいところ見られたくないなら我慢しないとね？」

意地悪な笑みを浮かべた俺に、彼女は瞳を潤ませてコクコクと何度も首を縦に振っていた。

「じゃ、始めましょうか」

そのまま彼女をプールの壁に押し付けて、両手を掴み拘束する。



「え？なににする気？」

不安そうな表情を見せる彼女だったが、割れ目をなぞりクリトリスに指が触れた瞬間喘ぎ声を漏らした。

「ひゃうんっ！」

くるくる円を描くように撫で回したり軽く爪を立てると面白いくらい反応し、仰け反り嬌声を漏らす。

「あっ！だめえ！それ、だめっ、イクっ、すぐにイっちゃうからっ！」

「まだ1分も経ってないよ？」

くすつと笑うと恵は快楽に耐えようと必死に唇を噛んで堪えている。

「それに、恵先輩は膣内派でしょ？」

人差し指を差し込み腹側のざらつとした箇所を押し上げる。

「ああっ！そこお！だめっ、イクっ、イツちやうからあ！」

ビクンと身体を大きく跳ねさせて、恵は大きく絶頂を叫んだ後、脱力し俺にしなだれかかる。

「もう、だめって言ったのに……」

肩で息をする彼女に俺は苦笑いを浮かべた後、挿れていた指を抜いてペロリと舐める。

「じゃあ、今度はパイズリしてください」

プールの縁に腰掛け、ズボンを脱ぎ、恵の目の前に隆々と勃起したチンポを見せつける。

コクン。と彼女は頷き胸を申し訳程度に覆っていたビキニを剥いで、俺の脚の間に収まった。

「相変わらず大きい……」

暫くその場で息を整えた彼女は躊躇することなくその豊満な胸の間に挟みこんだ。

「ん……、熱いね」

谷間から飛び出している亀頭をペロリと舐められ、それだけで射精してしまいそうになる。

「気持ちいい？」

腰を引いた俺に彼女が微笑みを浮かべてそのまま、自分の乳房を上

下に動かし始めた。

柔らかく滑らかな肌触り。

プールの水が潤滑剤となり、ぱちゅん、ぱちゅんとした音が響く。「もっと激しく」

込み上げる射精感を感じつつ、彼女の頭を撫でると「任せて」と微笑みを返し、頭を下げて亀頭を吸引する。

じゅるるるるるるるるるる。

頬をすぼめての吸引に加えて、上下別々に動く彼女の乳房。

じゅるる、じゅぽ、れろ、ちゅ。

ちんぽに集まったナニカを吸引するその動きに限界を察した俺はそのまま彼女へと精を放った。

「うっ、出るっ」

どぴゅ、びゅーつと勢いよく精液を吐き出し彼女の顔にぶっつけた。

「んっ、あはっ、すごい量だね」

白濁液まみれになった顔で満足そうに笑う彼女は、激しく動かしていた乳房の動きをゆるやかなスピードへと変えて、残滓を絞り取るように、

まるで乳しぼりをするかのように挟む乳房を押しつぶしながら下から上へと絞りあげる。

「いっぱい出たね」

満足そうな顔を浮かべて乳房の拘束を解いた彼女は谷間に付着した精液を指で拭いペロリと口元へやって更に破顔する。

「おいしい」

目にはハートマークを浮かべる彼女が最後に鈴口にキスをした。

「まだできるよね」

コテリと首を傾げる彼女に俺は「もちろん」と返して彼女をプールから引き揚げてベンチに座るクルミの前へと移動させて恵に尻を突き出すように指示を出す。

「ちよつと、ここでする気？」

俺らを見上げるクルミがじろりと目を細める。

プールに入っていない彼女の股からテラテラとした液体が溢れだしているのを無視して、俺は「そうですね？」とあっけからんと答えた。

突き出された恵の割れ目を広げながら言うとな彼女は諦めたようにため息を吐いて「さっさと終わらせてよ」と呟いた。

「た、たくみ君はやくっ」

すでに受け入れ態勢を整えている恵にクルミは映っていない。

尻をふりふりと左右に振って懇願する彼女に俺はずぶりとちんぽを挿しこみ、そのまま一気に奥へと突き立てた。

「ああああああっ!!」

叫び声をあげて膝を震わした後にぷしゃつと音を立てて潮を噴き出す。

ぱんっ!ぱんっ!ぱんっ!

挿入の瞬間に彼女たちがイクのはもはや定期路線である。

潮が身体にかかるものはや気にせず、恵の膣内を蹂躪するように力強く腰を打ち付ける。

「あっ、ぎ、ぎもぢい、気持ちいいよぉ」

背後から乳房を取っ手よろしく掴みあげ、感触を楽しみながら突き上げる。

「イ、っ、いつちやう、つ、また、またっ、いつちやう、」

頭を乱暴に左右に振るう恵に「いいよ。出しちやえ」と耳元で囁く。

「あ、っ、イグっ!イクううううっ!!!」

背中を仰け反らせて絶叫と共に本日2度目の絶頂を迎えた彼女に構わず俺は腰を振り続ける。

「まっ!待ってえ!!いま、イッてるのおおおっ!」

ガクンガクン身体を痙攣させながらも必死に耐えようとする彼女だったが、すぐに限界を迎えて盛大に潮を吹き、足元に湖を作り出す。

「恵先輩。俺がまだイってないのでちよつと我慢して下さいね」

潮を噴き出しすぎた膣内はぬめり気が減り、きゅっ、きゅっとした感触のせいかな、射精感がなかなかこみ上げない。



俺の言葉に反応することなく息を吐くクルミに思わず苦笑いを浮かべながら彼女をベッドへと押し倒すのであった。

## 第五拾漆話 連続絶頂♡

「は、はやくっ。もう無理なの。クダサイっ、タクミくんのおちんぽ下さいっ」

ガパリとベッドに座り脚を開脚して自身のマンコを指で広げる。

先ほどまで来ていた水着はいつのまにかはぎ取られ、彼女の褐色の肌に挿しこむ白い、水着で出来た日焼け跡が赤く染まった陰部を照らしていた。

ひくひくと膣穴が開いては閉じてを繰り返して、開くたびにどろりと愛液が溢れだす。

「早くう……」

そんな彼女の姿を見つめごくり、唾を飲みこんだ。

連射をしたばかりの俺のちんぽはいまだ出し足りない主張するように天を突き、先端からは透明な汁が漏れ出していた。

「じゃあ挿入れますね」

俺は自分のモノを、クルミの秘部にあてがった。

ぐちゃぐちゃになったマンコは熱く、柔らかく、ヌルついでいて……そしてとても狭かった。

「んふあっ！ きたあ……っ！」

ずぶずぶと俺のモノが彼女の中に入っていく。

腰を前に突き出すだけで肉棒が締め付けられる感覚に快楽を感じる。

まだ半分も入っていないというのに彼女はビクンと身体を大きく震わせ、軽くイツたようだ。

その証拠に彼女の顔はだらしなく緩んで、口からは舌が飛び出している。

「んひいっ!! はああっ！ イクッ、イキますうう!!」

そう言っただけで大きく震えて結合部から潮を噴き出す。

どうやら入れただけで絶頂してしまっただけらしい。

「はあーっ、はあーっ……」

息を整えながらこちらを見上げてくる彼女にキスをする。

舌を差し入れ口内を犯していくと、それに応えるように向こうからも絡めてきた。

しばらくお互いの唾液を交換してから口を離すと銀色の橋がなかった。

「動きますね?」

「はいっ、いっぱいっ、いっぱい突いてっ!」

彼女が言い終わると同時にピストン運動を開始する。

最初はゆつくりとじらすように動き徐々に速度を上げていく。

パンツパチュンパチュッと腰を打ち付ける度に結合部から水音が響く。

「あんっ、しゅごいっ、おちんぽっ、しゅごいっ!」

激しくなるにつれ喘ぎ声も大きくなっていく。

さらに快感を求めて彼女の腕が伸びてきて首の後ろに回される。

そのまま抱き寄せられ密着した状態でピストンを続ける。柔ら

かい胸がむにゆりと形を変え、乳首同士がこすれ合う。

「もっとお……んちゅっ、くちゅくちよってえ……」

彼女の望み通りに口内に舌を入れ、かき回すようぐるりと舌を這わす。

すると彼女もそれに応えようと必死に絡ませてきた。

「はあ、しゅきい……これ、だいしゅき……」

彼女の瞳にはハートマークが浮かんで見えるようで完全に蕩けてしまっている。

何度も唇を重ね、お互いに貪るように求めあう。

その間も腰の動きを止めることはなくむしろより速く動かした。

「あひっ!?! 激しすぎおっ! 壊れるうっ、おまんこめくれりゆううっ!」

そう言つて、ぎゅうぎゅうとちんぽを締め付ける膣内。

まるで精液を求めるかのように吸い付いてくるような感覚。

それに抗うことなく俺は一気にラストスパートをかけた。

「イキますっ!ー!」

「はいっ!ー! くださいっ!ー! 私の子宮にザーメンたくさん注いで孕

ませてくださあいっ！ んあああああっ!!」  
びゅーっどぴゅっどぶっどくんどくんっ。

勢いよく射精する感覚。

子宮の中でぶどぶどと貯蔵するように噴き出す精液の熱い奔流を感じ取ったのかクルミもまた盛大に潮を吹き出した。

「おぐうううっ、と、止まらないっ、イ、っ!!」

仰け反り、全身に力を込めたあと、暴れるように痙攣をおこし、絶頂を告げる。

「あひやあっ、イグウツ！ んおおっ、ま、まだ出てりゅ……」

長い潮吹きが終わるとようやく彼女は脱力してベッドに倒れ込んだ。

「はあーっ、はあーっ」

荒くなった呼吸を整えるためか深呼吸を繰り返す彼女を無視して横向きに反転させて側臥位の体勢で再度チンポを挿し込んだ。

「ふあっ!?! な、なんれっ?……ひああっ、だめっ！ いま敏感だからあっ！」

挿入された衝撃で再び軽くイッてしまったのか再度ぴゅっ、ぴゅっどと潮を噴き出す彼女の耳元で囁いた。

「お仕置きですからね。今日は限界まで犯してあげますよ」

俺の言葉に首を横に振るう彼女を無視して、彼女の乳房を掴み、腰を打ち付けた。

「ごっ、んあ、っ、ご、ごめんっ！ しゃいーごめんなひやいいい」

ちんぽが子宮口に当たる度に彼女の膣内が締め、身体を震わせる。

「そ、それだめえっ!ごりごりするやつ、だめっ!こ、壊れちゃうっ!」

叫ぶ彼女に俺は笑みを浮かべてお望み通り腰を打ち付けて子宮口を押し広げるように腰をぐりぐりと動かした。

「だめえ、っ、あ、あああああっ」

ぐぼり。

子宮口を突き破り最奥へと到達した感触を感じた後、クルミが更に叫び声をあげて身体を震わせた。



「んお おおおおおおおお っ!!」  
プシヤアアアツ!!

膣穴から大量に潮が噴き出し、やがて止まるころには彼女は気を失っていた。どうやら失神してしまったようだ。

だがそんなことは関係ない。

俺は彼女をうつ伏せにして尻をこちらに向けさせた。

「気絶しても無駄ですよ?」

そう言っつて寝バックの姿勢で腰を動かし始める。

意識を失っているせいか、先ほどよりも締め付けは弱くなっている気がするがそれでも十分に気持ちが良い。

「ほら、起きてください。まだまだ終わりませんよ?」

パチンと褐色と美肌のコントラストを描く彼女の臀部を力強くビシタする

「ん、あ、あれ?私、寝て……」

ぱんっぱんぱちゅぱちゅと音を立てて腰を打ち付けると彼女の目が覚めた。

「おはようございます。じゃあそろそろ本気だしますね」

俺はそういうと彼女の両脚の間に自身の足を挿し込み、無理やり押し広げた。

「えっ、きやつ、何すっ?! ちよ、ちよつと待って、まさかっ?! 嘘でしょ!! 無理だつてばあっ!」

彼女の制止の声を聞きながらも構わずにそのまま一気に押し入れ再度激しくピストンをほどこす。

「んぎいいいつつ!!! お おっっ! んぎいいいつつっ!!」

「あがあっ! おおっ! おぐうっ! んぎっ! おおおおおっ!」

パンツパチンパチユっパチユっと腰を打ち付ける度に結合部から水音が響く。

彼女の口から漏れるのは悲鳴と喘ぎ声の中間のようなもの。

「あひっ!! しゅごっ、おちんぼしゅごいいいつ! イクツ! イグウツ! イキまくりゆうううううううううううううううう!!」

ビクビクと身体を痙攣させながら絶叫する。

「おぐうっ！ イグの止まんないいいっ！ イギすぎておかしくなるうううっ！」

「またっ、またくるっ！すごいきちやうっ！ アクメ止まんなくなるっ！ 狂っちゃうっ！ 死んじやうううううっ！」

連続絶頂により何度も何度もイキ続けるクルミ。

その姿に興奮し、射精感がこみ上げ彼女の最奥へと精を放った。  
どびゅどびゅどびゅっ！

「んあああああっ！！」

子宮口に押し付けるようにして精液を流し込む。

それと同時に彼女は盛大に潮を吹き出して盛大に絶頂を迎えた。

びくんびくんと痙攣しながら放心状態の彼女からちんぽを引き抜くと栓を失ったことで膣内から大量の精子が流れ出てきた。

「さて、じゃあ綺麗にして下さい・・・」

シェイクされた体液により竿についた液体はメレンゲのように泡立っていた為、彼女の口元に近づけるべく移動すると、クルミは舌を大きく出して白目をむいていた。

「あれ、これっていつもの流れでは？」

そう思わずにはいられない。

だいたいいつも同じ流れで気絶する彼女たちに俺は苦笑いを浮かべながらクルミの綺麗な髪で体液を拭う。

「まあ、いいか。気持ちよかつたし」

未だちんぽは存在を主張するように勃起し続けていたが、とりあえず体液を流すべく気絶する二人を放ってシャワー室へと向かった。

「あつ、恵先輩、風邪ひかないといいけど」

湯を浴びて未だ外で気絶していた恵のことを思い出しながら、髪を洗う。

「まあ、馬鹿は風邪ひかないっていうし、せめてあとで回収だけしてあげよう」

プールの水でずぶ濡れのまま外での気絶。

合宿中に風邪などひいては目も当てられない。

乱暴に洗髪をしたあと、ガウンを羽織って外で大の字で地面に眠る

彼女を抱いてベッドへと放り投げる。

嗅き慣れた鼻につく体液の匂いに包まれながら俺も横になりそのまま眠った。

「明日、ルルさんのことを考えよう」

何度目の決心を呟くころには、俺の視界がまどろみへと落ちるのであった。

## 第五拾捌話 話し合い

「本日も討伐お疲れ様でした」

翌日の夕方。

今日も今日とて俺は部活に顔を朝だけ出した後、討伐に明け狂う。本日の目標数を終えて、退魔庁 沖縄支部に黒バイを返却すると、支長の我那覇を筆頭に職員一同が俺に頭を下げた。

「これも勤めですから」

討伐したのは2日間でのべ60体の低位怪異。

沖縄の退魔師不足から後回しにされていた怪異達の討伐だ。

そこまで危険度は高くない。

「どうでしょうか。もしよろしければ今晚食事でも」

我那覇が綺麗どころを前にして俺に伺いを立てるが丁重に断りを告げた。

「申し訳ないですが、夜はホテルに戻らなければなりません」

そう言つてペこりと頭を下げると彼女らは目に見えて落胆の表情を浮かべた。

「また明日来ますね」

我那覇の計らいにより、正面ロビーに停められたタクシーの乗り込み窓から手を振ると、最敬礼を返す彼女達。

我那覇が連れ立った綺麗どころに若干の名残り惜しさを感じつつも俺はホテルへと向かった。

後回ししていたツケ。

水川姉妹の詳細を決めるために。

外を覗くと空は夕焼けがさしこみ赤く染め上げていた。

「そう。タチバナから聞いたんだな」

夜半、夕食を一堂でホテルに併設されたバイキングで舌鼓を打って解散した後、ルルとナナが泊まる部屋に赴き先の件を告げる。

「実際のところわたしは厳しいと思っっているわ」

椅子に腰掛けた俺にコーヒートを渡したナナが頬に手を当ててこて

りと首を傾げた。

「私もだ」

同意するように向かいに座ったルルも頷き眉を釣り上げた。

「なにせ、同じ部活の部員だ。」

この合宿を最後に「ではさようなら」と言えば私の女が廃る」

前世風に言えば男らしい性格をした姉のルルだ。

首が頷くたびに彼女の紺色のポニーテールがゆらゆらと動いた。

「実際、結婚するのはまだ先のはずよ」

ルルの肩に手を置いたナナが目を細める。

「ああ、私も卒業してすぐに結婚など聞いてないぞ」

視線を合わせる彼女達。

それにしてもよくここまで似ているものだど内心関心してしまっ  
た。

髪色だけ言えば、紺色のルルと薄紫色のナナ。

ルルが右側を結ぶサイドテールにナナは左側を結ぶ同じくサイド

テールだ。

目つきはルルが厳しく、ナナは優しい。

それ以外は瓜二つの美少女達。

しいて違いをあげるとすれば胸の大ききさだろうか。

ルルはGカップにナナはHカップ。

もちろん外見に限った話ではあるが、ジロジロと観察するような視

線に2人が気づき俺の名を呼んだ。

「賀茂くん？」

「タクミくん？」

その声に不躰な観察をやめた俺は苦笑いを浮かべて言葉を返した。

「いや、本当にお二人はそっくりだなと思ひまして」

俺の言葉にルルは「似てないぞ！私が姉だ」と胸を張り、ナナは「よく言われるわ」と目を細めて笑った。

静と動の体現するかのような両極端な反応に乾いた笑いを浮かべ

た後、俺は前のめりとなり彼女達の顔を覗く。

「俺はタチバナさんの言うことは無視しようと思ってます」

声音に釣られたのか彼女達は真剣な表情でコクンと頷いた。

「理由は？」

ルルの言葉に「単に気に食わないからです」と笑顔を浮かべて返事を返す。

「俺は搾取抑圧される側には周りません」

俺の言葉に2人がコクンと頷いた。

「ルルさんのSEXが大好きでイチャラブが好きなどところも、ナナさんの実は極度のむっとりすけべで授乳手コキが好きなのも。知ってしまえば離れるつもりはありません」

俺の言葉に2人が慌てた表情を浮かべて言葉を遮ろうとするのを手突き出し敢えて制す。

「結婚してからは会うなど言われればなんとなくでも理解できます。

しかし、一方的に合宿が最後など通告されても納得できないのが本音です。なので京都に帰ったら水川家に。お二人のお母様に直談判をしに行きます。

2人は俺とのSEXを楽しんでるぞ！って言い

俺の言葉にナナが「ストローップ！」と声を上げた。

「できれば『授乳手コキ』の部分と『むっとりスケベ』な部分は訂正してくれないかしら」

普段の冷静さとは打って変わり顔を赤らめる彼女に俺は「なんで？」と首を傾げる。

「だって事実じゃないもの」

「事実でしょ」

秒速でツツコミを返した後に「俺は嘘をつけない性格なので」と特大ブーメランの嘘を吐いて笑みを浮かべる。

「私もできればSEXとイチャラブ大好きは濁してもらえるとありがたいのだが……」

ルルが苦笑いを浮かべてこちらを覗くので思わずため息を吐いて「仕方ないですね」と言葉を返した。

「その代わり」

ビシッと彼女達に指を刺すとそれぞれが同じ方向に首を傾げる。

「今からSEXしましょう」

俺の言葉に「なんで？」「なんでだ？」とそれぞれ言葉を吐くのも二ヤリと笑みを返した後に教えて上げた。

「もちろん。俺がムラムラしてるからです。さあ、姉妹丼で2人のまんこ比べをしましょう」

その場で服を脱いで全裸になると2人は顔を見合わせて同じように息を吐く。

「ほどほどにしてね」

ナナが苦笑いを浮かべて返事を返しルルが「同じく」と合いの手を告げて服を脱ぎ捨てる。

当面の対応は決まった。

タチバナの言葉を無視する。

俺は彼女達に近づき両手にそれぞれ抱き込んでベッドへと傾れ込んだ。

もう搾取はされない。

うつ伏せとなりシーツの中でクツクツと喘い、そのまま姉妹を蹂躪する。

「搾取するのは俺の方だ」

気絶するように眠った2人の間に挟まり天井を覗く。

ルルの程よく筋肉痛な腰を右手に抱いて、ナナのむっつりとした肉感を左手で感じながら瞼を閉じる。

まどろみの中でも感じる肉感。

ムクムクと再度膨張を始める下腹部を無視して俺はそのまま眠りについた。

## 第五拾玖話 勝負

朝方。

セミの鳴き声で目を覚ました俺は水川姉妹の部屋を出て、自室に戻り水着に着替える。

日課のトレーニングのために競技用プールに向かうとすでに先客がいた。

「あ、おはようございます」

プールサイドの監視台に座りあくびをする美優に近づき頭を下げると彼女は口に手を当てたまま微笑んだ。

「おはよう。たくみん。早いねえ」

いつもより眠そうな声音の美優がそう言つて自身の背中をポリポリと搔く。

「付き添いですか?」

俺の言葉に彼女はコクンと頷きを返した。

バシヤ、バシヤとプールでは美咲がバタフライで泳ぎ、華麗なターンを決めて折り返していた。

「昨日も一昨日もお盛んだったみたいだねえ」

目を細めてこちらに視線を映しながら彼女が意地悪く笑った。

「今日は美優先輩の番ですよ」

別に順番を予め決めていたわけではない。

しかし俺の言葉に彼女は「ちょうど生理明けたしねえ」と返事を返してまたあくびを放つ。

時刻は朝の5時。

普段の美優なら絶対に寝ているだろう時間帯に付き添っている彼女と美咲の関係。

美優と美咲は中学からの付き合いらしく、いつも2年生を『三馬鹿』と揶揄する美咲も、美優単体に対しては比較的懐いている。

なんでも、最近は美優と同じバイト先で働くようになったらしい。

「頑張り屋さんだよねえ」

頬に手をつけてプールを眺める美優がぼそりと言った。



「みさきさんはね、馬鹿正直なの」

彼女の言葉に「そうですね」と短く返して泳ぐ美咲を見つめる。すでに俺が来てから200mは泳いでるだろう。

尤も水泳部連中はウォーミングアップで1kmほどをノンストップで泳ぐ連中だ。

三馬鹿と揶揄される2年生も担当する種目が違えどトップクラスのスイマーらしく、その体力は驚嘆の域に入っている。

「たくみんはさ、ミサミサとエッチできた？」

ほら、一昨日の夜、一緒にご飯食べてたでしょ？

そう言葉を繋げる美優に俺は首を横に振った。

「残念だねえ。彼女、馬鹿正直な上に馬鹿真面目だからねえ」

そう言った美優の顔はどこか優しげだ。

「あの子はね、家族がいないんだ」

ぼそりとした美優の告白にピクリと眉が上がった。

「弟さんを亡くしたまでは聞いておりました……」

俺が答えると美優は少しだけ寂しそうな表情を浮かべて口を開いた。

「本当はね、お母さんもその時に死んじゃったの。元々親子仲は悪くてあの子は認めてないけどね。

だからかなあ。あの子やけに真面目になっちゃって、昔はもつと元気いっぱいの子だったんだよ」

美優の話を聞きながら美咲の方を見ると丁度泳ぎを終えたところだった。

プールから上がった美咲は肩で息をしながら俺たちのいる監視台へと近づく。

「おはよう……。タクミくん」

スイムキャップを外し、黒髪を掻きむしりながら彼女が言葉を吐いた。

「はい。お疲れ様。ドリンクあげるよお」

監視台の足下に置いてあったスポーツ飲料を美咲へと投げ渡す美優に彼女が「ありがとうございます」と受け取って頭を下げた。

「たくみんもどうぞ」

別に疲れてはいない。

美優に渡されたペットボトルを受け取り礼を言う。

「もう終わり？」

俺が尋ねると美咲は「うん」と小さく答えた。

「折角だし、一回競争してみようかあ。たくみんとミサミサ」

ふと意地の悪い笑みをニタニタと浮かべながら美優が提案する。

「俺は別にいいよ」

「……私もたくみ君がいいなら」

二人で顔を見合わせてお互いが首を傾げる。

「じゃあ私が審判やるねえ」

監視台で俺たちを見下ろす美優が笑みを浮かべた。

「どうせやるなら勝った方が負けた方の言うことを一つ聞くっていうことにしようかあ」

彼女の言葉に美咲が目を見開き、俺は思わずうなずいてしまう。

「面白いですね」

「いやよ……」

しかし共感したのはどうやら俺だけであり美咲は首を横に振った。

「どうせ、碌なお願いじゃないもの」

どうやらバレているらしい。

「ふうくん。じゃあミサミサはたくみんに負ける前提？」

美優の言葉に彼女がジロリと睨みを返した。

「そんなことは言っていない」

「じゃあ、問題ないよね。勝てばいいんだから」

美優がそう言うと言った彼女はため息を吐いて「わかったわよ」と不詳不詳と準備運動を始める。

「ほら。たくみんも準備運動して」

美優の言葉に返事を返して、関節を伸ばす。

「種目はフリー。距離は100m。準備はいいですかあ？」

監視台からプールの飛び込み台に立つ俺たちへと声がかかった。

「審判はボク！それでは位置についてえ〜」

彼女の声に従い、俺は前傾姿勢となり飛び込みを体勢をとる。

「よいい、ドン〜」

パチンつと手を叩く合図と同時に台を蹴り、頭からプールへと飛び込んだ。

流線状を意識するように飛び込み、勢いそのまま両脚で水をイルカのように蹴り進む。

(はやいな)

水中ではグングンと俺の前を泳ぐ美咲の後ろ姿が視界に移った。

氣を使えば容易く追い抜けるだろう。

しかし、この勝負にズルをするのは違うだろうと考えついて俺はがむしやらに前へ進むべく水を掻き分け、前進する。

「たくみーん、がんばってえ〜」

息継ぎの瞬間、ふと美優の声が聞こえる。

息継ぎを繰り返しながら、壁が迫りターンを決める。

既に美咲は俺のだいぶ先を泳いでいる。

ここまで差があるのならハンデをもらえばよかった。

もはや後の祭りである。

最終的に泳ぎ切るころには美咲はプールから上がり俺のコースの飛び込み台で待っていた。

「……。ハンデももらえばよかったよ」

勝負にすらならなかった。

俺は苦笑いを浮かべて彼女を見上げる。

「……でも綺麗な泳ぎだったわ」

どこか満足げな表情を浮かべながら彼女は腕を差し出した。

「約束、忘れちゃダメよ」

「わかっているよ」

彼女の手を取り、俺はプールから上がる。

「お疲れ様あ」

監視台に座っていた美優がこちらに歩み寄り、タオルを投げ渡し

た。

「はい。ミサミサも」

美咲にも投げ渡す美優はニコニコと笑みを浮かべて俺を見つめていた。

「なんですか？」

「いやあく、たくみんのあんな必死な姿、初めて見たなあと思ってさあ  
〜」

そう言いながら美優がケラケラと笑う。

「別に……」

美咲は少しだけ恥ずかしそうに頬を掻いた。

「いやあく、たくみんはカッコいいなあ。惚れ直したよあく」

美優がそう言うのと美咲が少しだけ驚いたような顔をして美優を見つめる。

「なに？ミサミサ」

「いえ……」

美優の問いかけに美咲が首を横に振った。

「そつかあく。じゃあ、たくみん。ボクとミサミサはもう上がるからね」

嬉しそうにはにかみながら美優が美咲の腕をつかみ「お先く」と更衣室へと向かう。

残された俺は笑みを浮かべながら彼女らの背中を見送る。

どこか似ている二人の後ろ姿に見た後、再度プールへ飛び込み、トレーニングを行うのであった。

## 第陸拾零話 ヒント♡

「お邪魔しまあ〜す」

合宿三日目の夜。

美優が一人で俺の部屋に訪れて当たりをキョロキョロと見渡した。

「VIP待遇だね。たくみん」

俺以外は2人部屋であり、ルルとナナ、恵とクルミ、美優と美咲という部屋わりになっており、こうして一人で部屋を使っているが故の彼女の感想なのだが……。

「まあ、一応男子ですからね」

俺の言葉に「そうだよねえ〜」美優がペロリと舌を出す。

「それじゃあ、今日はお願ひします〜」

自分で言っておきながら首を傾げる美優に思わず俺は苦笑いを浮かべた。

青色のショートカットボブに、モコモコとしたルームウェア。

半袖のパーカーとショートパンツの裾から伸びる肌は日焼けを知らないような白魚のように輝いている。

「……ちよつと、あまりじろじろ見られると恥ずかしいかなっ」

身体を縮めるように身をよじると、胸元より下まで閉じられたチャックより谷間が覗く。

「ごめんなさい。まあ、せっかくですから一度お茶でもしませんか？」

プールサイドを指さすと美優は「いいよ」と破顔してちよちよことプールへと歩み出た。

高身長が多い水泳部の中で、彼女は一番小さい。155cm前後の身長でちよちよこと歩く姿と恰好が相まって思わず、ペンギンを夢想してしまった。

「あ、猫舌だからあんまり熱くはしないでねえ」

彼女のリクエストに「OKです」と空返事を返してぬるめの紅茶を入れて、プールへと出る。

「……なんか、ロマンチックだねえ〜」

いつものように舌足らずの滑舌で喋りながら、手にしたカップを啜

り「あちつ」と顔をしかめた。

「ごめんなさい。熱かったですか？」

確かめるべく自分も飲むが、まったく熱く感じることはなく。むしろ人肌ほどには冷めている。

「大丈夫、飲めなくはないから」

そう言つて、カップを机に置いて、前のめりとなり俺の顔を覗いた。

「ミサミサの話が聞きたいんでしょお？」

いたずらっぽい笑みを浮かべる彼女に苦笑いを返してこくりと頷いた。

「好きなの？」

首を傾げる彼女に習うように俺自身も首を傾げる。

「好きという感情はよく分かりませぬね」

美咲に興味がないと言えば嘘になる。

ただ好きかと問われればわからないのだ。

碧理や蒼佳、水泳部連中にちなみ。それぞれを大事だと思ふ気持ちは常にある。

しかし、好きかと言われれば途端に脳内に靄がかかるように思考が濁る。

「母さんたちが生きていれば、分かったんだろうか」

ぼそりと吐いた俺の言葉に美優が「ん？」と首を傾げるのを「なんでもないです」と笑みを浮かべる。

母に二人の姉は間違はなく好きだった。一生そばに居たいと思うほどには。

しかし彼女たちはもう居ない。

「じゃあ、どんな子がタイプなの？たくみんってば」

興味津々と言つた様子で尋ねてくる美優に、少し考える。

実のところ、このような会話を今世ですることはほとんどなかった。

不意に問われる言葉に俺は眉を下げた唸り声をあげる。

「そうですね……」

言つたきりで後の言葉が続かない。

前に碧理に言われた言葉で「おっぱいの大きな女の子が好きでしょう」と言われたことを思い出すが、正直のところそれさえすでにどちらでも良い気がしたのだ。

うんうんと唸る俺に美優がぼそりと言葉を吐いた。

「ミサミサはね。きつと愛し合える人が欲しいんだよ」

そう言つて、美咲の家庭環境をかいつまんで話し出した。

幼少期から、彼女だけは厳しくしつけられ、反対に弟は甘やかされてきたこと。

故に、いつしか美咲と母親の関係が良好とは呼べなくなったこと。逆に弟は美咲に懐いてほとんど彼女の後ろについて回ったこと。

3年前に女の姿をした怪異に彼女を除き、ペット諸共殺されたこと。

そして現在はやや広めの一軒家に一人暮らしをしていること。

「あ、今日聞いたことはミサミサには内緒にしててね」

長い舌をペロリと出してお茶目にほほ笑む彼女に「もちろん」とこちらも笑顔を返した。

「そんなにシタかったら襲っちゃえばいいのに」

ふと美優がそう言つて俺の瞳を見据えた。

「なんだかんだ言つてもあの子も女の子だから、いざ襲っちゃえば獣みたいに喘いで楽しめると思うよ」

美優の言葉に「そうですね」と適当な相槌を打つて紅茶を啜った。

「まあ、たくみんはきつとそんなことしないだろうけどねっ」

彼女の言葉に首を傾げて「なんで？」と言葉を返した。

「だって君、優しいし」

イスを俺の横に持つてきて、彼女は俺の胸に手を置いた。

「優しいでしょうか？」

羽織つていた上着のボタンを外し、這い寄るように彼女の指先が乳首に触れる。

「うん。美優が知ってるどんな男性よりも君は優しいよ」

ツンツンと乳首を弾いた指が鎖骨を通り、顎に添えられた。

ちゅっ。

顔を強制的に横に向けられ彼女の唇と重なる。れるっ。ちゅっ、あむっ。

彼女の舌が口内に潜り込み、歯茎を舐めるように這う。唾液は甘く、喉の奥まで流れ込んでくる。

ごくりっ。

飲み干した瞬間、身体が熱くなり、下半身が熱を帯びる感覚がする。

「ねえ、しちやおう？」

どこで彼女のスイッチが入ったのだろうか。

唇を離れた瞬間に銀色の橋が俺と彼女の唇に掛かった。

「いいですよ」

俺は笑みを浮かべて彼女を抱いて、ベッドへ向かう。

「はは、さすが男の子」

お姫様抱っこの要領で抱かれる彼女が首に手を回しながらはしゃいでいた。

「さあ、どうぞ」

彼女をベッドの上に下ろし、服を脱ぐ。

「ええ〜……、なんかムードがないなあ〜」

そう言いながらも彼女は脱ぎかけのパーカーを放り投げ、ショーツパンツをゆつくりと降ろした。

「あれ？たくみん。もうおっきい？」

ボクサーパンツを押し上げる膨らみを見て、彼女は目を丸くした。

「生理現象ですからね」

先のやり取りで完全に膨張したボクサーパンツに美優が手をかけてゆつくりと下ろす。

「わお。大きいね」

ぺちんつと腹を打つちんぽに彼女は頬を紅潮させて笑みを浮かべた。

「じゃあ、いただきます」

長い長い舌を出して裏筋からじつとりと舐めあげる彼女。

「うっ」



思わず漏れた声に美優がくすりと笑みを浮かべる。

「気持ち良い？たくみん」

竿に絡みつく舌が一周して、まるで唾えられたかのように上下に摩擦される。

「気持ちいいです」

そう言うのと嬉しそうに笑みを浮かべる。

「じゃあ、もっと気持ちよくしてあげないよだね」

美優が龟头をぱくりと口に含んだ。

温かい口腔内で、ぬるりと唾液に塗れた舌がカリ首をなぞるように刺激する。

「くぅ……」

びくんと跳ねる腰を押さえつけるように太腿を掴まれる。

「んふっ。たくみん、可愛い」

ぢゅぽ、じゅぽ、ぶちゅ。

下品な水音が部屋に響き、興奮を掻き立てる。

「出そうだから、もういいですよ」

そう言って引きはがそうとするも、彼女は離れようとしなない。

「んふふ。いいよ。出しても」

美優がそう言っただ直後、我慢の限界を迎えた。

びゅるるるるるっ！

勢い良く飛び出した精液が彼女の口から溢れ、胸元に白濁色の液体が飛び散った。

「ぐきゅっ、ぐきゅっ、ぐきゅっ」

喉を鳴らし口へ出したものを飲んでいく。

「けほっ、こほ。うへえ、やっぱり青臭いや」

咳込みながら口をゆすぐように舌を動かす彼女に俺は彼女の頭を撫でる。

「美味しいですか？」

そう尋ねると美優は「うくん」と首を捻り言葉を続けた。

「でも、ちよつと苦いからやっぱり苦手かなあ……」

舌をべえつと出して「苦い苦い」と告げるもその顔が笑顔だ。

「でも、いっぱい出たね」

彼女はそう言って口元の精子を手で拭って再度口へ運んだ。

「うええ、口に出されるときと違って、なんかすごく苦味を感じるよ」  
顔をしかめる彼女が一瞬手を叩き、胸についた精液を拭って俺の口元に持つてくる。

「ほら、たくみんも舐めてごらん」

美優の提案に頬をひきつけながら丁重に断ると彼女が頬を膨らませた。

「ええ〜！ボクは飲んであげたのに、たくみんは飲めないの？」

彼女に「それはそれ。俺も貴方の愛液だったら飲めるのと一緒に」と返すと彼女ははにかんだ。

「うそうそ。そもそもクンニしてくれる男の子でさえ貴重というか創造上のことなのに、そこまで求めてないよお〜」

そう言っただけで彼女はベッドに寝転がり脚を開いた。

「だから、さっそくのボクもいいかな？おマンコ舐めてくれる？」

両脚をパカリと開き、ビラビラを手で開いた彼女から「くぱあ」という擬音が響いた気がした。

「はい。もちろん」

俺は美優の股間に顔を近づけ、割れ目に舌を伸ばす。

「んっ！」

ビクリと身体を震わせて控え目に喘ぐ彼女の声を聞きながら、膣内に舌を差し入れる。

「ひゃうんっ!？」

突然の異物感に驚いたのか身体を跳ねさせた彼女の反応を無視して、奥まで差し入れた舌をぐるりと動かす。

「あっ、そこっ、メッっ」

ザラザラとした部分に触れた瞬間に美優の身体が跳ね上がる。

「だめ、イクっ。んんっ」

美優の身体が小刻みに震え、ぐったりと身体力が抜ける同時にジュワリと潮を漏らす。

「ぐくっぐくっ」と喉を鳴らし口内に溜まったそれを飲み干していく。

「はあ……はあ……、たくみんのエッチい……」

呼吸を整えた彼女が起き上がり、俺の顔を両手で包み込んだ。

「ボクのお潮、美味しい？」

美優の問いに「もちろん」と笑顔を返し、手を払って皮から顔を出していたクリトリスを吸引する。

じゅぽぽぽぽぽ。

「ああんっ!!」

腰を引いて逃げようとする彼女を抱きしめ、吸い付き続ける。

「ああああああ!!!」

悲鳴のような嬌声を上げて仰け反る美優がガクガクと腰を揺らした。

「ああああ!!!」

ひと際大きな声で叫ぶと美優は果てた。

ぷしゅっ!と吹き出した透明な液体が顔にかかる。

びくんびくんと痙攣する彼女の腰を掴み、舌先でクリトリスを刺激する。

「あゝっ!あゝっ!あゝっ!」

壊れてしまったかのように声を上げる美優が何度も絶頂を迎える。

「あゝー!あゝー!あゝー!あゝー!!あゝあゝあゝあゝ!!!」 プ

シャツプシャツと断続的に噴き出す潮を余さず口に含む。

「あゝっ!まだ、イっでるっ!イっでるっ!イっでるっ!!!」

腰を浮かせ、背中を弓なりにして暴れる彼女の腰を押さえつけて最後の一滴まで絞り取った。

「はあ……はあ……」

息を切らしてぐったりとする美優から手を離し、彼女の頭を優しく撫でる。

「はあ……」

シャトルランを走り切ったようにこひゅ、こひゅと息を切らす彼女を落ち着かせるように優しく髪を撫で、息が整うのを待った。

「優しいは撤回……。やっぱり鬼だね……」

いくばくか呼吸を整えた後、彼女はジト目で俺の見上げる。

「美味しかったですよ」

顔についたしぶきを拭って彼女の唇にキスを落とす。

「うう、口の中、変な味がする」

苦虫を噛み潰したように表情を浮かべる彼女を無視して、枕に手を伸ばし、彼女の腰へ差し込んだ。

「ん？」

不思議そうにする美優に「美優先輩、奥好きですもんね」と告げると、彼女の顔が引きつった。

「え？いや、ちよつ、ちよつとまって、たくみん。一回落ち着こうねっ？」

慌てる彼女に「嫌です」と告げて、腰にさしこんだ枕の影響で挿入しやすく上を向いた膣穴にズブリとチンポを挿しこんだ。

「んぎゆうっ！」

くちゆり、と音を立てて簡単に飲み込まれたチンポを締め付けるように膣壁が絡みつく。

「タンマっ、待って、た、たくみん、あの動かないでっ」

首に抱き着き、彼女の細い脚が俺の腰に回り彼女が必死の形相で首を横に振る。

「大丈夫です。痛くないですから」

そう言つてゆつくりと動き始めると彼女は俺の耳元で泣き叫んだ。

「違うつ、ンぐっ！そ、そ、そうじゃないっ！ぼ、ぼくのおまんこ壊れちゃうっ!!」

ぐりぐりと子宮口をこじ開けるように押し付け腰を震わせる。

「ひゃうんっ!?!そ、そこっ、ダメっ、むりっ!んあ、っ！」

半狂乱で首を振る彼女。

「じゃあ、ここですか？」

カリ首を引つ掛けるようにして腰を引くと彼女はぶんぶんと勢いよく首を横へ振った。

「ち、違つ、んんんっ！そ、それもむりっ！めくれちゃうっ！めくれちゃうよおっ！」

膣内がヒダだらけになりそうなほどにギュウつと締まる。

亀頭ギリギリまで抜き、再び奥まで差し込む。

パンツ、パアンツ！ 肉同士がぶつかり合う音が響き、彼女の喘ぎ声の木霊する。

徐々に早くなるピストン運動に合わせて彼女の声も高まり絶叫のように声をあげた。

ずぶぶつ、ばちんっ！どすんっ！ 膣内で泡立った愛液が膣口から溢れ出し、シーツにシミを作る。

その淫靡な光景に興奮を覚えた俺は更に激しく動く。  
ぐじゅっ！ぐつちゅ。ぐぼっ、じゅぼんっ、ぐじゅ。

結合部から響く水音が加速する。

「あつ、あつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ」

リズムカルに上がる声に余裕はなく、ただひたすらに快楽を貪っているように見えた。

「そろそろイきますね」

どこか焦点の合わない彼女にそう告げて俺は更にピストンを早める。

「あああああああ！イ、イってえ！ングっ、ぐぎゅううううううっ！」

射精の瞬間、彼女の膣内が最大に締まり、きつくなった子宮へ精液が射出される。

「で、出てルっ！たくみんのミルク、出てるっ！熱いのがボクの子宮にどぶどぶ出てるよおっ！」

腰に絡めた脚の力を強めて首を抱く腕にも力が入った。

「ああ、きもちいいっ！」

お互いに乱れた息を整えるようにその場で固まり荒く息を吐いた。

「ねえ、たくみん」

はあと深く呼吸をしてから彼女が俺の肩をタップする。

「ミサミサはたくみんとエッチする私たちに愛はないって言うけど、ボクはそうは思わないよ」

首筋に唇を重ねてちゅうちゅうと吸引する彼女。

「たくみんも気づいてないと思うけど、こんな関係でも愛はあるよ」  
唇を首から話して彼女が俺の唇へとキスをする。

「だから、一回、美咲とゆっくり話してあげて」

普段見ない、真剣な水色の彼女の瞳。

俺はこくと頷くと、瞬く間にその瞳や、顔つきは二ヘラと崩れていつもの表情に戻った。

「お風呂いこ。ボクそろそろ眠たい」

彼女の誘いに応えるように身体を起こし挿入していたチンポを  
ゆっくり引き抜いた。

ごぼりっ。

大量の白濁が零れ落ち、シーツに新たな染みを作った。

「いっぱい出たね」

零れ落ちた精液をティッシュで拭いながら彼女はほほ笑んだ。その  
笑顔に釣られて俺も思わず微笑みを返すのであった。

## 第陸拾壹話 愛

窓から差し込む月明かり。

ベッドから半身を起こし外を眺める。

「愛……か」

空中に手を伸ばして握り拳を作るも、もちろん手の中は空気のみ。

隣で眠る美優はトレードマークのように今日に鼻提灯を浮かべながら大口を開けてイビキを描いていた。

「んんっ」

髪を撫でると眉を八の字に曲げて美優が寝返りを打ち俺の方に身を寄せる。

被っていた布団がはらりとほだけて、やや大きめな桜色の乳輪が現れる。

いつもならここで情欲を抱き眠る彼女を抱くのだが、不思議とそんな気分は起こらなかった。

前世では愛を欲した。

誰かに愛してもらえることを夢想し、愛に飢えていた。

今世では愛を家族から感じた。

5年という短い期間ではあったか一身に愛を受けたというし記憶が残っている。

しかし、それはもう無いモノだ。

家族を失った時に碧理が壊れた。

そして、その時に俺自身のナニカが壊れてしまったのだと今にして思う。

7歳の時にこの腐った世界を作り変えるという目標ができた。

そのために努力し、今は玉藻と契約するまでに至った。

それでも美咲に、美優に、タチバナの言葉が脳内を駆け巡り言い表せない不安が津波となり俺を襲う。

「結局、俺は愛に振り回されているということか」

感じるものが出来なくなつたその存在に、俺はその場で膝を抱えて顔を伏せる。

心が曇るように脳内に靄がかかり俺はそのまま意識を手放す。  
吹き抜けた風が不気味に生暖かく俺の頬を撫でた。

「おかあさんっ」

久方ぶりに見る夢<sup>過去</sup>の映像。

俺の目の前には絶望の表情を浮かべた母がこちらを見据えていた。  
目には涙を蓄えて肩を震わせている。

「た、たくみ……」

次の瞬間、しゃがみこみ、母が俺の肩を揺する。

「やめてー！まだ早いわっ！あなたは3歳なのよー！」

ブンブンと乱暴に幼児の身体を揺らす母。

お陰で視界が上下に激しく揺れ動き若干の気持ち悪さを覚えた。

「まだ、ママって呼んでてー！そんなに急に大人にならないで!!」

瞳から涙を溢れんばかりに流しながら彼女は叫んだ。

「お願い！私はまだママってタクミに呼ばれたいの!!!」

ああ。懐かしい。

子離れするつもりが垣間見えない母の乱暴さ。

俺は彼女の手を払いのけて頷いた。

「わ、わかったよ、ママ。」

次の瞬間には彼女は満面の笑みを浮かべて「はいっ！ママです！」  
と拳手をした後、がばりと俺の肩を抱く。

「もう、急に『おかあさん』なんて呼ばれるとびっくりするじゃないっ」

後頭部を優しく撫でられ、何故か胸の中からポワポワとした温かみを覚える。

「ご、ごめんなさい、で、でもくるしいっ」

撫でる頭とは対照的にぎゅうぎゅうと締め付けられ息が詰まり彼女の肩をタップする。

「あつ、ご、ごめんなさいっ！」

ガバツと身体を離して、優しく背中を摩る母の温もり。



息苦しさは瞬時になくなり、俺は彼女に笑いかけた。

「いいよ、ゆるしてあげゆ」

未発達の舌のせいで最後に噛むと彼女は「かーわーいーいー！」と先のことを忘れたかのように力一杯俺を抱きしめて頬にキスをいくつも落としました。

「あー！ママー！ずっ！こい！」

背後でそんな声が響いた後、ドシンと軽い衝撃が2度訪れる。

「たっくん！たっくん！たっくん！」

幾分か大人びた声の後頭部から響きそれに応えるように俺は「おかえり。カナエねえとトモエねえ」と振り向かずとも正体を告げる。

全方向からの締め付けに再度限界を告げるにはそこまで時間は掛からなかった。

「たっくん、聞いて！トモエねえ！好きな子出来たの！」

ある日、トモエと2人でおままごと遊びに興じている時、ふと彼女が笑みを浮かべて言った。

「どんな子なの？」

俺の言葉に彼女はえつとねーと指を立てて一つずつ折っていく。

「やさしくてえく、かわいくてえく、黒かみでさらさらしててえく、身長はたっくんと同じくらいでえく、名前もタクミって言うんだよっ」  
はい。知ってます。

トモエもカナエも立派なブラコンに成長中だと言うことを。

「だから、はいっ！今日はばれんたいんでーだから。たっくんにあげるっ」

そう言ってお菓子の詰め合わせの小袋をどこからか取り出して俺に突き出す。

「ありがと。トモエねえ」

俺が受け取ると彼女は満面の笑みで微笑んだ。

「どうしたの、カナエねえ」

場面が変わり目の前に長姉がすんすんと鼻を鳴らしてキッチンの前にしやがみ込んで泣いている。

「……た、たつくん。トモエに、カナエのプリン食べれたあ〜！」

鼻水や涙で顔がべちゃべちゃとなった彼女が俺の身体にしがみつき嗚咽を漏らす。

「た、楽しみにしてたのにっっ」

俺の服で体液を拭うように顔を擦りつける彼女の頭を撫でて息を吐く。

「いいよ。僕のたべたら？」

甘いものはあまり好きではないのだ。

俺の言葉にカナエが顔を上げて「ほんとっ!?」と目を見開く。

「うん。カナエねえにあげる」

俺が答えた瞬間、彼女は俺を抱き寄せ更に号泣した。

「ありがとう、ううう！たつくん大ずぎいい」

ワンワンと泣く彼女。

俺のプリンにありつけると期待した彼女だったが、この数分後には彼女の分よろしく俺の分もトモエに食べられていて絶望に暮れるのは一笑モノだ。

「タクミ、5歳のお誕生日おめでとーう!!」

パァンッとクラツカーを鳴らされ紙屑が宙に舞い、キラキラとした雪が部屋に舞う。

「ハッピーバースデー！たつくん！」

カナエとトモエが並んで俺にマフラーを差し出す。

「2人で縫ったんだよ！」

トモエが胸を張って自信満々に言うが、カナエは「ボロボロだけどね……」とどこか不安そうに表情を浮かべている。

「ありがとう。大事に使うね」

彼女たちからマフラーを受け取り早速首に巻く。

「タクミ、私からはこれよっ！」

母が満面の笑みを浮かべて一冊の本を俺に差し出した。

「これは？」

首をこてりと傾げる俺に母は「タクミ用のアルバムだよ！」

ずっしりと思い、厚さ10cmほどの裏表が皮で作られたソレを見てトモエが声を荒げる。

「私の時はもつと薄かったよ！」

彼女の主張に母は「ギクっ！」とわざとらしく声を上げた後、「ほら、タクミはお、男の子だったから」と返して向こうを見つめて口笛を吹いた。

そういえば、彼女たちからもらったプレゼントは今ももう無いことを思い出す。

京都市変の時に焼かれたのか、何故今まで忘れていたのか、俺は首を傾げた。

「もう！ママはいつつもたつくんに甘いんだからっ！」

頬を膨らませぷりぷりと怒るトモエにカナエが「まあまあ」と彼女を宥めた。

「あ、じゃあ写真撮ろう」

中々機嫌が治らない彼女に俺が提案するとトモエはまるで花が咲いたように笑みを浮かべた。

「じゃあ、幸恵さん呼んで撮ってもらいましょう」

母がそう言って幸恵を呼び、俺を中心に母とカナエとトモエが背後に立って肩に手を置く。

「タクミ」

「お誕生日おめでとう!!」

ピースとかでない掛け声の後、彼女たちが一齐に俺の頬や頭にキスをし、幸恵が持ったカメラがカシャリと鳴った瞬間に目を覚ます。

瞼を開けると映るのは朝日が差し込んだ天井。

久方ぶりに感じた胸の温もりの残滓を離さないように俺は身を丸めて胸に手を当てる。

少しだが、心の中に彼女達の存在を感じて俺は再び眠りについた。もう一度、夢で逢えることを期待して。

## 第陸拾弍話 怪我の功名

「ちよつと、起きなさいよーこの狸おんな！」

布団をガバリと剥がされ衝撃で目を覚ます。

「あ、おはようございます」

寝ぼけ眼に映る恵とクルミの姿に俺はその場で挨拶を交わすと彼女たちもおはようと返礼を返した。

「ん？いま何時ですか？」

二度寝の習慣は俺にはない。

夢はだいたい悪夢ばかりだ。

気がつけば眠ることを嫌っているフシがあり、久方ぶりに感じる爽快感。あくびをしながら時計を探すべくあたりをキョロキョロと見渡すもあいにく時刻が分かるものは辺りになかった。

「もう、12時で午前の練習は終わったわ！」

「おーきーなーさーいー！」

恵が答えてクルミが未だ俺の身体に張り付くように眠っている美優の腰を叩く。

あいにく二度寝で家族に会うことは叶わなかったが、それでも暖かさは消えることなかった理由をなんとなく理解した気がした。

「……………む、……………あと4時間……………」

腰を叩かれて眉を顰めて美優がぼそりと呟き顔をベッドへと押し付ける。

「どんだけ寝るつもりなのよー！」

恵が美優の尻をパシンと叩くと、「ひゃいっ！」と彼女が声を上げて飛び跳ねた。

「……………なにっ……………襲撃？」

どうやら、まだ寝ぼけているらしい。

あたりを睨みつけるように目を細めてキョロキョロと見渡す彼女にクルミが怒鳴った。

「ほらー！いい加減起きなさいよー！独裁部長がおかんむりだよっ！」

美優の手を引っ張り無理やり立たせようとするクルミ。

「……仕方ない……たくみんの人肌はまるで麻薬……ボクはまだ夢の中……」

そんなわけのわからないことを言いながら立たされた彼女の膾内からぼとりと溜まっていた精液が流れ落ちる。

「ほら、ワケの分らないこと言つてないでいくよ!」

まるで中世の王族のように恵とクルミに甲斐甲斐しく着替えられて三人はドタドタと部屋を去る。

「さてと、俺も仕事に行きますか」

昨夜の頃よりは幾分かスッキリとした頭で、俺はそのまま背伸びをして、シャワー室へと向かう。

どこか今までは違う。

そんな思いが胸に溢れていた。

「戻りました……」

「お、おかえりなさい……」

討伐を終えて、和食に舌鼓をうっていた水泳部連中と合流し、空いたスペースに腰を下ろす。

「ちよつ、大丈夫?!タクミくんっ」

横に慌てる美咲の肩にもたれるようにしなだれかかり俺は苦笑いを浮かべた。

「ちよつと、疲れた」

ズキズキと痛む肩を手で押さえるとじんわりとした暖かさと共に血が流れる。

「ちよつと、ケガしてるじゃない!」

「タチバナっ!救急車!」

周りの連中が顔を青白くさせて声を荒げるのを手を突き出して制す。

「……大丈夫です。これくらいならよくあることなんで。それより俺

も何か食わせてください。お腹が空きすぎて……」

実際、本当によくあることである。

肉が削がれることなど日常茶飯事。

沖縄では低級しか出くわすことはなかった為、油断していた。

まさか第七位階の妖を三体同時に襲いかかってくるとは思っても見なかった。

もちろん全て返り討ちにはしたが……。

「そ、それでもせめて止血しないとっ」

美咲がお手拭きを俺の肩に当てて、ぎゅっと圧迫するように抑えつけた。

「……飯を……」

テーブルに並ぶ色とりどりの寿司に手を伸ばし、俺はそのまま意識を手放した。

「……腹減った……」

空腹感に耐えかねて、目を覚ます。

「……おはよう……」

目を開けると視界いっぱいに映る美咲の顔に俺は「おはよう」と言葉を返し、後頭部に感じる柔らかい感触に若干の驚きを感じつつ「いま、何時？」と彼女に問うた。

「深夜の一時よ」

さわりと前髪を撫でる美咲の瞳はどこか揺れている。

「みんなは？」

静寂が場を支配しており、目を動かして辺りを伺う。

どうやらあの後、自室に運び込まれたらしい。

「みんな寝てるわ。美優さんが、膝枕して上げてって言ったきりみんなを連れて出て言ったから、もう寝てるんじゃないかしら」

ぐっちょぶ。美優。

脳内で彼女がしたり顔で微笑む姿が思い浮かんだ。

「邪魔なようなら膝枕やめるけど？」

美咲の言葉に俺は首を横に振って「もう少し」と伝えて彼女の太ももに頬を当てて柔肌の感触を享受する。

「エッチなことしたら叩くからね」

ペロリと舐めようとした瞬間に告げられた彼女の言葉に、俺は出していた舌を引っ込めて苦笑いを浮かべた。

「あ、手当してくれてありがとう」

肩を圧迫するように巻かれた包帯に気付き、彼女に感謝を告げるも、どうやら手当したのはタチバナを始めとしたこのホテルの従業員らしい。

流石に高校生だけではこうはいくまい。

それほどまでには丁寧な巻かれた包帯だった。

「一応、ご飯は部屋に運んでもらったわ。食べる？」

俺は首を横に振って「少しの間このままでもいいさして」と返すと彼女はコクンと頷いた。

「……よくあることなの？」

沈黙の後、美咲が俺の瞳を見つめながら問いかける。

「なにが？」

俺の言葉に彼女が「それ……」と肩に優しく触れた。

「うん。まあ生きてるだけ儲けものだね」

生命の危機を感じる程の相手ではなかったにしろ、この程度のケガであれば精気を纏うサムライからすれば1日、2日でキズは塞がる。

現に、今は痛みを感じなくなり始めてきている頃なので恐らく皮膚の癒着が進み始めて来ている頃だろう。

「……ありがとね……」

頭上から美咲がふとそんなことを言い俺は首を傾げる。

「なんでありがと？」

彼女のスベスベな太ももに手を添えて指先でフェザータッチをしようとするもパチンつと甲を打たれた。

「あなたたち、退魔師の方々に救われる人は多いわ……きつと」

そう言うと彼女は顔を見上げる。

「……でも君の弟さんは救われなかった……」

俺の言葉に枕にした太ももがピクリと動いた。

「どんな妖怪にやられたの？」

暫しの沈黙の後、彼女はぼそりと「ボロ布を被って前歯が突き出た男のような妖怪だったわ……」と言葉を吐いて続ける。

「そいつが急に家にやってきたの。」

律儀にインターホンを鳴らして」

彼女の言葉で妖怪の招待に粗方目星をつける。

「私が応対した時にそいつは嗤ってお腹を殴りつけてきたの。うずくまる私を無視して、土足で家に入り、食事をしていた弟の頭を齧ったわ」

身体がプルプルと震え出し頬に彼女の涙がかかった。

「……ネズミ小僧か」

位階は高くない。第7位階の人語を理解する妖の名。

告げる俺に彼女は「ええ。その後やってきた退魔師の人も同じことを言っていたわ」と答えて拳を強く握った。

「ネズミ小僧」

ヒトガタの怪異である。先の河童や、大天狗弁魔と同じ人語を理解するソレであるが、奴の場合、少しだけ異質だ。

退魔師の臭いに聴く、駆けつけようとすると即座に姿をくらます。

加えて種族として複数体は確認出来ていない。

恐らくぬらりひよんのように、個体数は1だと言われている。

希少性は高いが、退魔師が現れると即座に逃げるが故にカテゴリーは第七位階となっているわけだが……。

「タクミくん……」

ふと美咲が俺の名前を呼んで顔を見つめる。

「ん？」

「怪異のいない世界。本当に作れると思うっ？」

瞳に涙を蓄える彼女を見つめ返しながら俺はほほ笑む。

「作れるかじゃないよ。創るんだよ」

禅問答のように返事を返す俺に彼女は「……そう」と答えて頷いた。



「ねずみ小僧も、ぬらりひよんも龍や、鬼もすべての妖をぜーんぶ俺が殺すよ」

俺の言葉に彼女がうんうんと首を縦に振ると、いくつもの涙が顔にかかった。

「……無理はしないでね……」

ふと告げられた彼女の言葉に俺は笑みだけを返した。

「それより、もうお腹が限界かな」

ぎゅるるるとタイミングよく腹が鳴ると彼女がほほ笑んだ。

「多分冷めてるわよ」

彼女の太ももの感触に若干ながらの名残惜しさを感じつつ身を起す。

「いいよ。時間も遅いしこのまま食べるから」

ベッドから出て、食事が置かれたテーブルに向かい、イスに腰かけ手を合わせる。

「あ、そうだ。なんなら美咲が口移しで食べさせてくれる？」

俺の軽口に彼女は「嫌よ」と短く返すが、その表情はいつもと違い柔らかない。

「だよね」

笑みを交わし合う、彼女と俺。

以前のような剣呑さはなくなり、どこか暖かい雰囲気漂っていた。

「俺は君のことが好き……なのかもしれない」

冷めた天ぷらに手を伸ばしながらぼそりと呟く。

「急になによ」

いまだベッドに座りこちらを見つめる彼女は目を見開いていた。

「でも、分からない。君の言う“愛”というのがどんなものなのか。いくら考えても、分からなくなってしまう」

サーモンの寿司を口に運ぶと魚特有の甘さがじわっと口内に広がった。

「ルルさんや、ナナさん。恵先輩・クルミ先輩。そして美優先輩。」

他にもちなみや、碧理。君は知らないだろうけど碧理の姉の蒼佳。

クラスメイトもみんな、大事……だとは思う」

俺の言葉に美咲はただ押し黙っている。

「大事と思うのと好きだと思いうこと。そこに愛があるのかということ……。明確な答えは全くないけれど……」

“みんなと同じように君も大事に思っているよ”

俺の言葉に美咲がため息をついた後、ほほ笑んだ。

「とんでもない女たらしね」

「まあ、俺だからね」

大トロを口に運ぶと瞬時に泡のように溶けだした。

彼女との関係がまた一歩前進したと思わずにはいられない手ごたえに俺は破顔しながら、料理を平らげる。

「というわけではさ」

彼女をチラリと見つめると彼女は首を横に振った。

「エッチはしないわ。でも……フエラならしてあげる」

その提案にどこか悲しさも覚えるも俺の顔は明るい。

「じゃあ、さっそくお願いしようかな」

ごくりと水を飲み干して、俺は彼女のもとへ歩みよる。

びくびくと下半身が期待してか、大きく張りつめていくのを感じながら。

## 第陸拾参話 爆乳♡

ベッドに座り笑みを浮かべる美咲の前に立つ。

床に仁王立ちする俺と、ベッドにて女の子座りをする美咲。

彼女の長身も相まって、ちょうど良い高さとは言えず、彼女の頭が俺の胸元あたりに来ている。

「じゃあ、脱がしてくれる？」

俺の言葉に彼女は若干顔を赤らめてコクンと頷き手を伸ばす。

ベルトを外してチャックを下げる。

「えっと……パンツもだよね」

「それはもちろん」

そう言うと彼女はズボンを一度下げた後に、ボクサーパンツの腰紐に指を引っ掛けてゆっくりとずり下ろした。既に半勃起しているペニスがぶるんと勢いよく飛び出す。

「わっ……」

突然飛び出してきたそれに驚く彼女。

俺はそんな彼女に構わず指示を出す。

「じゃあまずは、ちゃんと勃起させてくれる？手は使わないでね」

折角フェラをしてくれると言うのだ。

手を伸ばそうとする彼女に鍵を刺すと美咲は戸惑いながらコクンと頷いた。

そして両手を太股に置くと、そのまま顔を寄せて亀頭に唇を当てる。

ちゅっ……

軽くキスをし、舌尖を出してペロリと鈴口を舐める。

ぺろっ……れろお……

最初は遠慮がちだったが、徐々に大胆になってきた彼女は、そのままパクリと亀頭を啜えた。「うおっ……」

暖かく柔らかい口内に包まれ思わず声が出る。

「うまふ出来てふ？」

ぎこちなく、亀頭を啜え込みながら俺の顔を見上げる彼女の黒く艶

のある髪を撫でて微笑んだ。

「うん、凄く気持ちいいよ」

正直に言えばもちろん下手くそであるが、俺の言葉に安心したのか、彼女はさらに深くまでペニスを飲み込んだ。

じゅぷう……！ 喉奥まで達しそうなほどに深く飲み込む。

「おおふいふなっつきふあ」

彼女の口の中でムクムクとチンポが腫れ上がりあつという間に臨戦体制へと移行する。

「ぐぼっ……ぐっぼー」

頬張ったまま上下運動を始める美咲。

慣れていないせいか、苦しそうな表情をしている。

だがその必死な様子はとても可愛らしく、見ているだけで興奮してくる。

くぼっ、ちゅぽ、チュパ。

ぎこちない動きなのに、興奮からか更に硬度をあげるようにビキビキとチンポに力が入った。

「おっ！？」

美咲の喉の奥に当たり、苦悶の声を上げる彼女。

「大丈夫？」

俺の言葉に啞え込んだままコクコクと頷く彼女の口から唾液がたらりと垂れてシーツを濡らす。

「そっか。ならもうちょっと激しくできる？」

彼女の髪を撫でて、後頭部へと手を這わせてぐいつと腰を突き出す。

「おっお！！」

喉奥へ一気に突き刺さり美咲は目尻に涙を浮かべた。

「うん。気持ちいいよ」

粘液にまみれた感触に思わず上を向いてしまう。

「もっと激しくできるかな？」

返答はない。その代わり、ぐぼりっ。ぎゅぽりっと彼女が音を立てながら頭を前後させる。

「ぎゅぽ、おごっつ、んぐっつ、ぐぶら」

美咲の口から抽送の音が響き、絶え間なくヨダレを垂らす。

「ぐぼっ、んっ、ぐぼっ、んぼっ、おぐえ……」

段々とスピードを上げていく彼女。

限界が近いのか目に見えて呼吸が荒くなり、鼻息も荒くなる。

ぎゅぽん、ぎゅぽんっどひよっどこのように口をすぼめるのは流石、逆転世界の女性だからか。

目には涙を蓄えながらも懸命な彼女の抽送にじわじわとこみ上げた射精感を美咲に伝えた。

「イキそうかも」

俺の言葉に彼女は目を細めて、太ももに置いていた手を腰に回して更にストロークを早める。

「おごっつ、おごっつ、んぼっ、ぐぶら……!」

ぐぼっ!ぐぶっ!ぬぶぶぶ!! 激しいピストン運動に俺は彼女の頭を押さえつけて腰を押し付ける。

びゅっ! びゆるるるるるるっ。

喉奥に大量の精液を叩きつけ、それを受け止めた彼女は、ビクビクと体を震わせる。

「うげっ……!えほっ、ぐぼっほっ……!」

押さえつけていた手を無理やり外して、勢いよくチンポを吐き出した彼女がベッドに倒れ込んでせき込んだ。

口からはヨダレと精液が混ざった白濁としぬめりと粘液性の高そうなナニカを吐き出して唇を濡らしている。

「ごぼっ、ゴホ、げぼっ」

せき込む彼女の背を撫でて落ち着くのを待つ。

「あー……ごめんね」

背中をさすってやると、美咲は首を横に振った。

「だ、だいじよぶ……」

口に手を当てながら手をフリフリと動かす彼女。

しばらく時間を置くころには息も落ち着き始めこちらに視線を向ける。

「……一回じゃ、さすがに満足できない……わよね……」

未だ、ギンギンと起つ俺のチンポを見て彼女が目を細めた。

「まあ、そりゃあねえ」

俺は苦笑いして彼女の肩に両手を置いた。

「パイズリできる?」

俺の言葉にしばし沈黙する彼女

「……わかったわ」

頷きと共に言葉を返すも彼女は「やり方が分からないわ」と答える。

「大丈夫。取り合えず上の服を脱いで」

俺の言葉に彼女が無言で見つめると、決心したのか、羽織っていたシャツから肩を抜き、黒のタンクトップ姿へと変わった。

「ちよつと、あまり見ないでよ」

じろじろと脱衣する様を見ていた俺に彼女がジロリとした目つきで睨んだ。

「ごめん、ごめん」

視界を外し後ろを向き、背後で感じる衣擦れの音。

ごくりと彼女が唾を飲み込んだ音が聞こえた後、「もういいわよ」と声が掛かる。

振り向くと、両手で乳房を隠すように手ブラをした美咲の姿に思わず唾を飲み込んだ。

碧理よりも大きく、パンつと張った彼女の胸部。

手ブラで圧迫しているせいか、隠す手のひらの上下左右から肉がはみ出しており円形を形どる。

「大きいね……」

思わずそんな感想が漏れた。

初めて見る彼女の乳房に俺のチンポがビクンと跳ねる。

「出来れば手をどけてくれる?」

どうせ断られるだろう。そんなことを思いながら提案すると彼女が一瞬フリーズした後、頬を赤らめながら「分かったわ」と言っつてゆっくりと手を離れた。



ぎゅむ。

柔らかな弾力がチンポを挟み込み、彼女の体温を感じながら、抜いては奥へと挿しこまれる。

くちゅ。くちゅ。

柔らかい肉押し込み、引き伸ばす感覚。

粘液で肌を引いては押しつけてを繰り返すたびにくぐもった音を響かせる

「どうかしら？うまく出来てる？」

心配そうに見上げてくる彼女。

正直、とても良い。まるで挿入しているように全方向を覆う彼女の乳圧。

「きもちいいよ」

そう言つて、彼女の頭を撫でると彼女は嬉しそうな顔をして、更に動きを早めていく。

ぐっちよっ！ぐっちよっ！ぐっちよっ。

引かれるたびにカリが擦られ、押されるたびに鈴口を圧迫する。

「ごめん、もう出そう」

拙いはずの彼女のパイズリに早々に俺は限界を告げてそのまま奥へと精を吐き出した。

びゅーびゅーと射精する精液は彼女の谷間から溢れ出し、その勢いで彼女の胸を白く染め上げた。

「きやつ……ちよつと……！」

突然のことに驚いた美咲が声を上げる。

びゅるるっ。びゅるっ！

それでも止まらずあふれ出る精液。気が付けば彼女の谷間に白濁とした湖を作った。

「……もう、いきなり出さないでよ」

挟んでいた乳房の拘束を外して彼女が俺を見上げた。

「びっくりしたじゃない」

口を尖らせる彼女に「ごめん、ごめん」と申し訳程度に謝罪を告げる。



「それで、すつきりしたの？」

谷間に付着した精液をベッド脇に置いていたティッシュで拭う彼女に「いや、まだ出そう」と言葉を返す。

はあつと長いため息を吐いた彼女に「もう一回お願いしてもいい？」と問うと、彼女は「今さら一回も二回でも好きにしなさいな」と言って再度俺との距離を詰めた。

「じゃあ、次は俺もベッドに寝転がるから、そこでパイズリして」

俺の言葉に彼女が「ただだけ胸が好きなのよ」と突っ込みを入れるのを笑顔で躲して、俺はベッドへと寝転がった。

「そうそう、それで挟んでみて」

彼女の太ももに腰を載せて、谷間の中心点に未だ、腹に付くように硬くなったチンポを合わせる。

「……わかったわ」

彼女がそつと、チンポを掴み、90度に曲げて、乳房で挟んだ。

「唾液垂らして」

俺の言葉に「注文が多いわよ」とジト目で睨んだあと、彼女は口を開けてタラリとヨダレを龟头と谷間へと垂らした。

ねつとりと粘つく液体が谷間に垂れ、俺と彼女の体液が混ざり合う。

「これでいいかしら？」

未だジト目で俺の顔を覗きながら尋ねる彼女に「大丈夫だよ」と声をかけ、俺は彼女の乳房に手を伸ばす。

両手に感じるずつしりとした乳房を持ち上げる、ゆつくりと下へ下ろしていく。

「んんう……」

彼女の口から漏れる甘い声を聞きながら、ゆつくりと、下げていき、やがて、先端が谷間から顔を出す。

「ちよつと、触っていいとは言っていないわよ」

目を細める彼女を無視して、こちらに切っ先を向けていた彼女の小さな乳輪を親指ではじいた。

「ん、あ、っ。あつ、ちよつとっ！」

ビクリと身体を震わせる彼女を無視してグニグニと彼女の乳首を刺激する。

敏感な部分に擦れる刺激に、彼女は必死に歯を食いしばった表情をしていた。

徐々にぼつちを主張するように硬くなり始める彼女の乳首。

小指の爪先よりも小さいソレを引っ張ると彼女が身体を震わせた。

「んん、ーっ」

じゅわりとした音が挿しこまれた腰から響いた。

「や、やめなさいっ！」

つまんだ指をパチンと叩きこちらを睨みつける彼女。

呼吸は荒く時折肩を震わせる。

「ごめんね。つい。ね」

手をひらひらとさせる俺に「次同じことやったらおちんちん噛み切るわよ」と脅し文句を告げて、谷間を押さえつけゆっくりと上下に動かした。

怒っているのだろう。

やや乱暴に激しく上下に動く谷間からぐちより、ぐちよりと小刻みに濁音が響いた。

「さっさとイきなさいっ」

ぱんっ。ぱんっと肉の打ち合う音が響く早い上下の動き。

それがかえって俺のチンポを刺激し、じんわりと3度目の射精感が脊椎を通りこみ上げてくる。

「うっ、気持ちいいよ。そろそろ射精そうなんだけど、出るとき口で受け止めてくれる？」

顔を歪める俺に彼女は「わかったわ」と返して更に圧迫を強めてピストンを施しながら首をもたげて、谷間より時折顔をだす鈴口にチロチロと舌を這わした。

「射精るっ」

瞬間、彼女がぱくりと亀頭を頬張り口内いっぱい精液を飛ばした。

どびゆううう。

「んぶうっ」

勢いよく噴出する精液で一瞬にして彼女の頬がリスのように膨らんだ。

「んっ。ぐくっ……。んぶっ。ぐくっ」

ドクドクとあふれ出る精液を直接嚙下する音が響き、やがて吐精が止まると彼女はちゅぽんっとな音を立ててチンポから口を離れた。

「苦いわ」

ぼそりと感想を漏らした後、口元にあふれた精液を手で拭いたあと、再度チンポを啜えこみ優しく舐めあげる。

「まだ出したいんでしょ」

手を添えて竿を上下させ敏感となった鈴口に舌を挿しこむ。

しゅっ。しゅっ。しゅっ。

フェラやパイズリと打って変わり上下させる彼女の手コキを実に気持ちよかった。

伊達に手コキをさせていた成果がここで異端なく発揮され俺の腰がビクビクと震え始めた。

「いいふあよ。だふいなふあい」

じゅぽ、きゅぽ、じゅるるる。

ひよっところ口になるように吸引しながら口を引いた瞬間に竿を握る手が上下する。

「うっ」

呑み込みが早すぎる。

彼女の手管に俺は4度目の精を放つと彼女は動きを止めてぐくぐくと喉を鳴らしそれを飲み込んでいく。

「はい。これでおしまい」

チンポから口を離れた彼女は俺から離れてほほ笑みを浮かべた。

「病人はもう寝なさい」

いそいそとどこか慌てるように服を簡単に着直した彼女はあつという間に部屋を出ていく。

彼女が座っていたベッドは大きく水跡を残し、色を変えているのに

気づく、俺は一人残された部屋で静かに笑う。

さすがに短時間での4連発にチンポも徐々にしなしなしなど頭をさげると同時にそのまま眠気に身を任せて眠りについたのだった。

## 第陸拾肆話 団欒

「タクミくん。よかったらオイル塗ってくれないかしら」

ビーチパラソルを砂浜に挿し、マットにうつ伏せになったナナからそんな魅惑な提案が飛ぶ。

「喜んで」

上のブラ部分のホックを外して押し潰されるようにはみ出た横乳をチラチラと見ながら俺は彼女の背中にオイルを塗りたくる。

ぬちゃ。ぬちゃ。

粘性の高いオイルを彼女の柔肌に塗り込みながらムラが出てはいけないと、腰紐の内側に手を差し込んで臀部の割れ目までオイルを塗りたくった。

「もお。そこは焼けないでしょう?」

きやつきやつと声を上げながら身を振る彼女に「念の為ですから」と笑顔を交わしながらナナの柔肌を楽しんだ後は、美咲を除いた他の連中が諸手を上げて我も我もと迫るのを俺は笑顔を返して皆をうつ伏せに並ばせオイルを塗りたくる。

前世からすればまさに極楽と呼ばれるに相違ないスタイル抜群の美女達がうつ伏せになり尻をこちらに向ける。

「ほんとに……よくやるわね」

日焼けするのを厭わないといったふうにビーチソファアに腰掛け、サングラスをかけたまま小説を読んでいた美咲がそう漏らした。

「あつ、あつ、あつ、あつ」

その傍らでは腰を浮かせてビクビクと震える女性達。

それぞれ、オイル塗りよろしく手マンをして膣内まで塗り込んでやったのだ。

ビシャビシャと潮を吹きながらアへ顔をさらす5人に美咲はため息をついた。

「ほんとに人が居なくて幸いよ」

彼女の言葉通り、沖縄の夏なのに、ビーチには俺たちを覗くと誰も居ない。

これはもちろん海坊主の影響による風評被害なのだが、ルルが最終日で折角沖繩に来たのだから海に行こう。

海坊主？賀茂くんがいるから大丈夫だろっ！

と謎の主張により成立したことなのだ。

故に念の為俺は砂浜に叢雲を置いている。

「美咲もする？」

合宿は明日で終わる。

俺の提案に「遠慮しておくわ」と答えて彼女は本に目を向けた。

あれから彼女ともだいぶ距離は縮まった。

もちろん性交までには及んでいないが。

それでも、今日の前で他の女性との乱痴気騒ぎを見ても「愛が」と

叫んで雰囲気壊すようなことはない。

「タクミくん。お、おちんぽお。おチンポちようだいっ」

恵が俺に尻を突き出し、両手で割れ目を開く。

「いいですよ。ゼーンいん今日は青漢乱交しましょう」

俺は水着を脱いでパンパンにはった肉棒を恵の膣内へと突き立てた。

「お疲れ様」

全員に膣内射精をキメる頃にはすでに昼を過ぎており、連中は砂浜に寝転がりアへ顔を晒している。

「……ありがとう」

美咲より差し出されたジュースをちゆるちゆると飲んで喉の渴きを潤した。

「あなた、ほんとに性豪なのね」

不意に彼女が俺の顔をジロジロとみてそんな感想を漏らす。

「やってみる？」

すでに何度も振られているが、そんなこといちいち気にはしない。

彼女は「もちろん答えは”No”よ」と答えて微笑んだ。

「とりあえず、お腹減ったね。タチバナさん呼んでくる」

俺は飲み切ったグラスを美咲に返して未だ震えている連中に声を掛ける。

「そろそろお昼なんで、今からタチバナさん呼んで来ますね。いい加減復帰しないと恥ずかしいと思います」

それだけ告げてすごそこのホテルへと踵を返した。

そう。人が少ない理由がもう一つある。

ここはホテルのプライベートビーチなのだ。

「いただきます」

ホテルの従業員達によ。テキパキと設営された砂浜の上のダイニングテーブル。

日差しを避けるように運動会で観客席に使うようなテントの中で俺たちはシエフが焼いた肉を頬張った。

「え、うまつー！」

クルミが唾を飛ばしながら叫ぶと、控えていたタチバナが「沖縄の特産のアグー豚でございます」と品目を告げる。

クルミの言葉通り、口に放るとジュワツと肉特有の甘味が広がり、瞬時に溶け出す。

口当たりもさっぱりで胸焼けをしないように品種改良されたソレは正に絶品だった。

「おっ、ウインナーも美味いぞー！」

ガツガツとテーブルの肉を頬張るルルが声を上げるとタチバナが彼女に近づきペシリと頭を叩いた。

「いつてえっ！なにすんだよ！タチバ……ナ……さん」

アイアンクローを彼女のこめかみに決めながらタチバナが冷たい口調で「美味しいではありません。『美味しい』ですよ。ルル様」と凄んだ。

「っ……この、おウインナー、じ、実に美味しくよ……オホホ」

ギチギチと音を立てながらルルがぼそりと人形のように返事を返すとタチバナが手を外してにつこりと微笑んだ。

「はい。その調子です」

そう言って彼女はツカツカと砂浜なのに足音を刻むように礼儀正しくホテルへと戻っていく。

「はあ、やっと思つたな」

タチバナが去つた瞬間ルルが忌々しげに呟き、ナナがぼそりと「おバカ」と彼女を非難する。

「もう少し、賢くなりなさいよ」

ナプキンで口を拭うナナは正に堂に入っていた。

「タクミくん！見て！おっぱいサーバー！」

ふと肩を叩かれ声のする方へと顔を向けると恵が乳房を曝け出し、必死に乳搾りするようにグラスに切先を向けている。

「いや、無理でしょ。恵陥没してるし」

焼かれた肉をおかわりしながらのクルミのツツコミに恵が「ああ？」と凄んだ。

気がつけばルルはナナと、恵はクルミと言い争いを始め、美咲は黙って黙々とご飯を平らげていき、美優はいつものごとく首をかくん、かくんと揺らし今にも眠りそうになっていた。

「ほんとに、馬鹿ばっかりだな」

以前に感じた水泳部の和気あいあいとした雰囲気を感じそんな感想が漏れた。

「ん？たくみん。なんで泣いてるの？」

一度、ガクンっと思いつき揺れた後に顔を上げた美優が俺の顔を見つめて首を傾げる。

「大丈夫？」

反対側で美咲を食べていた手を止めてじつとりと俺の顔を見つめていた。

「なんでかな？俺もよくわからないや」

気がつけばタラタラと瞳から頬を伝い涙が流れ落ちていた。

「……」

いつしか言い争っていた声も止み、一同全員で俺の体調を憂う声を上げて、ルルに至っては俺の側へよるべく身体を寄せてきた。



「な、なんか……懐かしくなって……」

ぐじゅりと鼻を吸る音が響く。

こんな賑やかな食事風景はいつぶりだろう。

以前感じた家族の団欒のような雰囲気当てられてかなのか、涙が溢れ、気がつけばその場で嗚咽していた。

「大丈夫だよ。たくみん。よしよし」

美優が俺に抱きつき胸元に顔を沈ませ頭を撫でる。

俺はそのまま、暫し彼女に甘えて涙を流すのであった。

「お騒がせしました！」

ひとしきり泣いた後。瞼が赤く腫れて開けていることさえ億劫になるのを感じながら俺は笑みを浮かべて皆に頭を下げた。

「タクミくん大丈夫？」

いつも冷静さを醸し出している美咲でさえ、その瞳は心配だと物語っていた。

「ほんとになんかよく分かりませんがどスッキリしました」

嘘ではない。

どこか晴々とした気持ちを抱き、どんよりと重くなった空気を変えるべく、冷めてしまったウインナーに箸を伸ばして大袈裟に感想を告げる。

「もう大丈夫です！ほら。皆さんも食べちゃいましょう！折角の料理が冷めてます」

足早に俺が話すと皆が一瞬押し黙るもルルが「そうだな!!ほら食うぞ！お前ら！」と声を上げると各々が切り替えて食卓に箸を伸ばした。

すぐさま、食卓に温かい空気が流れ込み皆の顔に笑顔が浮かぶ。

団欒をとる俺たちを睨みつける視線を俺はこの時、気がつくことができなかつた。



## 第陸拾伍話 海坊主

暑い日差しがさし、沖縄の青い海を照らす昼下がり。

「ちよつと、たくみん、手つきがエッチだよお」

バーベキューを終えて、俺と美優の二人は浮き輪に捕まり波に身を任せていた。

彼女が溺れないように浸かる水面の中で彼女の臀部に手を回していたが、無意識にむにむにと大福のように柔らかい彼女の肌を堪能してしまう。

俺の顔を覗き、頬を膨らませる彼女の頭を撫でると猫のように目を細める美優。

「さすがに、海の中ではボクはちよつとどうかと思うなあ〜」

そう言つて浮き輪から手を離れた彼女が振り返り、俺の首に両手を回した。

「午前中にあんなにみんなとエッチしたのに、また大きくなってるね」足を絡みつかせると、自然と張りつめた肉棒が彼女に当たり、美優は笑った。

「海は危ないから、せめて砂浜にあがろう?」

首を傾げる彼女に俺も頷き離れようとしている浮き輪へ手を伸ばした。

現在の沖縄の海は本来遊泳は自己責任とされている。

いつ海坊主が現れるか分からない関係上、夏と言えどもビーチ全体には閑古鳥が鳴いている始末だ。

そこまで思い当たり「これはフラグか」と呟いた時、美優が沖の一部を見据えて声を震わせた。

「た、たくみん。あの、あれってなに?」

もももこと沖の一部が盛り上がり大きな波紋を打ち上げる。

「すみません。完全にフラグでした」

舌打ちを一つ。彼女を力強く抱き、脚に精気を込めて水を蹴りつける。

「あ、ちよつ! ああ」

彼女の言葉を見無視するように水面上がり、地面を走るように走り抜け、皆がくつろいでいた砂浜へと駆け寄った。

「避難してください」

シートに美優を優しくおいて、立て掛けておいた叢雲を手にする。あたり一面を漂う醜悪な妖気の臭いに思わず顔がこわばった。

「え？急になんかしたの？」

サングラスを掛けてベンチに寝そべり日焼けに興じていたクルミに「怪異です」と短く告げると周りの連中の息を呑む音が響いた。

「ルルさん、ホテルに戻ってタチバナさんに退魔庁へ連絡するように伝えてください。その後は、安全が確認できるまで待機を」

鯉口を切り、鞘を抜いて刀身を表へと出す俺に「あなたは？」と美咲から声が掛かった。

「二応、サムライだからね。なんとか食い止めるよ」

沖からこちらを見据える二つの眼。

全身を黒々とした肌に水面からあがった顔のサイズはあまりにも大きかった。

「う、海坊主」

近くにいた従業員が怪異の名を呼んだあと、その場から飛び跳ねるように背を向けて逃走を始める。

「さあ！早く行って！」

声をあげると皆が力強く頷き、足早にホテルへ踵を返した。

「せっかくの合宿を台無しにしやがって」

ザブン、ザブンと音を立てて、水面から上半身を出したソレを睨みつけながら俺は嗤った。

先鋒隊か。

いまだ沖からこちらを見据える巨軀とは別に、数十体のキムジンナーと、全身ずぶぬれとなり頭髪がワカメのように濡れた女型の怪異が2匹。

「磯女……」

メジャーなヒトガタの怪異である。

位階は七相当の妖怪である。

「燃やし尽くせ 玉藻前」

叢雲を抜刀し鞘を後方に放り投げる。

「喰え。不知火」

刀を振り下ろし顕現させる焰を纏った狐の使いが二匹。

クオンと遠吠えをあげて磯女へと喰らいつく。

「朧火」

目の前に立つキムジナーの数、およそ50か。

同数程の火の玉を背後から顕現させて、ライフルの弾丸の如く射出する。

着撃の瞬間、じゅぼつと音を立てて瞬く間に消滅する怪異。

断末魔の声を上げることなく一瞬で燃やし尽くす業火だ。

「天狗弁慶や妖狐玉藻以来の十位階の怪異。

俺はその場で膝を地につけてクラウチングスタートの体制をとる。

磯女は不知火に任せて問題ない。

もし、狐火が消されようとも所詮は七位階。

つま先に力を込めると同時に精氣を送り込む。

ビキビキと筋肉が膨張するようにふくらはぎの血管が痙攣を起こ

し始めるのを無視してその場から沖へと駆け込んだ。

「邪魔アッ！」

水面を駆ける俺を引きずり込もうと顔を出したキムジナーの頭を

踏み潰し、蹴飛ばしながら海坊主との距離を詰める。

人間のサイズを遥かに凌駕する巨体。

海面から出ている上半身だけで優に50mを超える。

大気が震える雄叫びを上げ、近寄る俺に巨軀が腕を振り上げて風を

切る轟音をあげて下される。

ふくらはぎに力を込めて、跳躍し攻撃を交わすと爆音と一緒に水柱

は天を突いた。

海水が泡立ち高波が浜辺に迫る。

「碧理が居てくれれば」

津波のように流れるそれを見て思わず彼女のことを夢想する。

舌打ちをつけて踵を返し、高波を切りつけ、分断された水を「現火

“で蒸発させて俺はため息を突いた。

“隴火”と“現火”

俺自身が玉藻に難儀した火の玉の術式。

氣を喰らう焰と現実を燃やす焰。

それでも撃ち漏らした高波が砂浜を飲み込み浜辺にたつホテルを襲うのに、思わず顔つきが険しくなってしまった。

長期戦をこの場所で行うのは厳しいと言わざるを得ない。

海坊主が動いた時に水面は揺れて波を上げる。

奴を睨みながら暫し思索して一つの妙案が浮かびスマートフォンを手に俺は目的の人物へと電話を繋いだ。

「どうしたのよ」

どこかつつけんどんな対応に思わず苦笑いが浮かんだ。

「あ、もしかしてオナってた？」

俺の言葉を聞くや否や、ブチリと電話を切られしまい、乾いた笑いが漏れた。

「ごめん、ごめん。冗談。ちょっと護符使うから、陽氣消費に気をつけて」

再度掛け直すと、碧理は暫く沈黙した後「どんな怪異と戦っているのか」と問う。

「海坊主」

そう一言だけ呟いて、電話を切り空中に手を伸ばして亀裂を意識すると次元が割れるように暗闇が目の前に現れた。

「便利なものだ」

東司の能力の一部である収納空間にそんな感想を漏らして手を差し込み目的のブツを取り出した。

ポケットに仕舞い込んだスマートフォンが震えるのを無視して、掴んだ護符を海坊主に突きつける。

「怪物決戦といこう」

特級結界師に教えを乞う碧理が新たに作成した結界護符。

護符に込められた彼女の氣は短い間にも関わらずより緻密に濃厚に込められた氣配を感じて思わず感心してしまった。

「空蟬の世に迫りし不浄、玄武の力を借りて常闇を照らせ」

「防護結界　「結」」

祝詞を終えると護符が燃え尽き四方500mを囲うように結界が展開される。

「本当に成長したな」

俺と海坊主を囲うように展開される結界の広さに東京で怒り狂っているであろう碧理に讚美歌を送った。

「土産にちんすこうでも買っつけていこう」

ぼそりとそう呟いて全身の精孔を開き氣を噴出させる。

結界に自らも閉じ込める形にしたのでもはや背後に憂いは無い。

全身から白い湯氣を立て、四肢が白く染まる。

刀を構え、睨む目は赤く充血し、視界が狭まった。

「燃やせよ。玉藻」

叢雲に声をかけると対話に答えるように刀身から白い炎を突き出しカタカタと震えた。

思わず嗤いかけ、その場で弾丸のように海坊主目掛けて弾け飛ぶ。

視界を映る景色が一瞬で奴の眼前へと変わり横風が目玉を切りつ

け、顔に足をつけて空を舞う。

「神樂」

氣を再現なく噴出した身体を駆使して攻勢をする俺を見て玉藻が前にそう言った。

「まるで舞っているようじゃ。さしずめ神樂かのう」

言い得て妙な彼女のセリフを思い出しながら後頭部を切りつけて、飛んできた掌底を躲し、ついだとばかりに指を切り落とす。

無理な肉体の反動からか、左膝がパキリと音を立てるのを無視して耳を削ぎ落とし、顎の腱を斬りつける。

身体を自由落下に任せて回転しながら顔から胎に目掛けて切り付ける頃には海坊主は叫び声を上げて天を仰いだ。

「おい、そろそろケリをつけてやれ」

ふと、玉藻の声が脳内に響くのを残滓し、思わず「はいはい」と返事を返す。

悪い癖だ。

妖狐と契約してから時折こうして無駄に怪異を痛めつけてしまう。

「呑まれるな」

いつぞや聞いた曾祖母の言葉を思い出す。

彼女は次に「復讐」という単語をつけていたが。

「退魔を滅す破魔の剣。悪鬼を燃やす業火の刃」

手にした叢雲を天に突き出すと刀身を紅白の靄が包み込む。

「今こそ我が苦行より解き放とう！」

ムクムクと包む靄が天へと伸びてやがて凝固して一本の長い刀身が空に伸びた。

「喰らえよ。玉藻」

「滅却せし、退火の刀」

刀を振り下ろすとブワンと、遅れて音を立てる。

斬撃が空を向く海坊主の脳天に突き刺さり、サクリと具材を包丁で切るような感触を経て左右に別れる。

「隴火」

別れた半身を火の玉で燃やすと轟音を立てて焰が包みこんだ。

「やり過ぎじゃ。阿呆めが」

再度玉藻の声が脳内に響くのを無視して俺は刀を担いで嗤った。

「討伐完了」

浜辺に落ちた鞘を拾い納刀する頃には海坊主の身体は完全に泡となり、やがて蒸発する。

「阿呆め」

玉藻の声が再度響いた気がした。



## 第陸拾陸 凶刃

「ただいま……う？」

静けさが支配するロビーを通り、部屋を回るも人っこ一人いないホテル。

やつとこさ、食堂に人の気配を感じて開口一番、笑顔で帰還を伝えるも言葉尻に疑問符がついて暫しその場で硬直する。

「は？」

目の前に広がる光景に思わず顔を顰める俺に柱の影から現れた布を被ったナニかがクツクツと笑い声を上げながら手を叩いた。

「死んではいけませんよ。全員ね」

男性の声音で話すソレの顔は布をフードのように被り伺い知るところとは出来ない。

食堂には水泳部連中に、ホテルの従業員も含めて皆がまるで眠るよう床に倒れ伏していた。

「怪異か」

目の前にしてもヤツから醜悪な妖気を感じることが出来ないが、それでも荒唐無稽な現場を前に腰に佩いた叢雲に手を当てた。

「何者だ。おまえ」

眉を吊り上げて問う俺にヤツは暫しの沈黙の後、「察しは突いてるでしょう？」と答えながら俺との距離を詰める。

「鼠小僧。貴方、ニンゲンがそう呼ぶ妖ですよ」

被っていたボロ布を剥いで顔を見せる。

人間のような顔つきに、ゲシ類を彷彿させる突き出た前歯。

口角を上げる鼠小僧に俺は目的を問う。

ホテルに戻りロビーにて避難していた水泳部一堂に手を挙げると皆が顔を見合わせて絶句している。

「ちよっ、け、ケガは!？」

美咲が声を上げると恵とクルミが恐る恐ると言った様子で近づいた。

「あ、これ全部海坊主の返り血」

全身を染める怪異の血。

人間のように真っ赤な俺に「そ、そう」と顔を引き付かせる彼女。  
「たくみん、勝ったのー?」

美優の言葉に「もちろん」と笑顔を浮かべると遠巻きに見ていた従業員が声を上げる。

沖縄出身者だろうか。

あまりの歓声ぶりに俺は手をあげて応えようと割れんばかりの拍手が空気を支配した。

「お疲れ様」

美咲が一步、歩み出て俺の顔についた血をハンカチで拭う。

「今日はもうお開きですか?」

クルミがルルに視線を向けるとルルは考えこむように腕を組んだ。

「あ、俺は一旦沖縄支部に討伐の報告に向かいますね」

報連相は基本なり。

俺の言葉に遠巻きで見ていたタチバナが「その必要はないかと」と冷静な声音が返ってきた後、遠くに響くサイレンの音を耳が捉える。

「海坊主出現の報はすでに沖縄支部に連絡をしておりますので」

いくつもの音が重なったサイレンが次第に大きくなりやがて止まる。

どうやら大量の退魔師を連れて来たのだろう。

どたどたとした大勢の足音と一緒に退魔師特有の氣の匂いが鼻を

刺激した。

「華岡。お客様をご案内しなさい」

タチバナが自身の横に立つ従業員に指示を出すと、華岡と呼ばれた女性が背筋を伸ばして返事を返した。

「その前に、私はこちらからご挨拶させていただきます」

はて、このような人物いただろうか。

灰色のロングヘアの女性。

華岡と呼ばれた従業員がツカツカとヒールを鳴らし俺に近づく。

「改めまして、この度は誠にありがとうございました」

ぺこりと頭を下げたから彼女は右腕を俺に突き出す。  
握手を求めている。

咄嗟に判断して俺は差し出された手を握り「どーも」と言葉を返すと彼女がニイッと口角を上げた。

「ツカマエタ」

ぎゅと握る力を強められると全身を襲う虚脱感。

「ッ!?!」

握られてない手で相對するその顔を殴りつけようとするも空を切った。

身体から力が抜けて膝から崩れ落ちるも尚も離れることのない手。

「華岡！あなたなにをしているのっ！」

タチバナの怒声が響く中、猛烈な睡魔が俺を襲い、瞼が重く閉じようとしている。

「離しなさいー！」

ドンッ。

美咲の声と共に身体側面に感じた衝撃と共に俺は吹っ飛び、掴まれていた腕が離れた。

「邪魔をするなアー！」

受け身を取ることも億劫に感じる中で、怒声が響く先程まで居た場所に視線を向ける。

「美咲ッー！」

誰かが彼女の名を叫ぶ。

華岡の手が鋭くナイフのように尖り彼女の胸元から腹にかけて切り傷を作り、血が宙に舞った。

瞬間、未だ弛緩を続ける筋肉に精氣を送り込みその場から華岡の胸元まで跳躍する。

「ふざけんなアッー！」

拳に氣を纏い右ストレートを彼女の腹部に放つもぬらりと紙のようにかわすソレが笑う。

「あの方に見染められるだけのことはありますね」

腕をにゅいつと俺の顔に伸ばすのを払い除け、叢雲を抜刀し横薙ぎに切りつけるも、実体を捉えることは叶わずただ空気を斬るだけに終わる。

「……玉藻前とも契約するだけはあるようですし」

華岡が自身の顔に手を当てるとまるで仮面を取るように、顔つきが変わる。

「鼠小僧か」

禿げた頭に突き出た前歯。

それだけで、凡そ正体に当たりをつけながら俺は倒れ伏す美咲を抱えて後方へと跳躍する。

「動かないで。いま止血する」

顔を顰める彼女にそう声をかけて切り裂かれた傷口に精気を当てがう。

「……か、……こころ……す」

俺の肩を掴む彼女の手がぎゅつと締まる。

美咲の家族の仇がいま目の前に現れている。

「任せて」

彼女に微笑みを返し、再度鼠小僧に視線を向ける。

「目的は？」

俺の言葉にハゲ頭がきよきよきよと肩を震わし嗤った。

「察しはついているでしょう」

「まあね」

どうせ俺だろう。

叢雲に氣を送り正眼に構える。

「ルルさん、みんなを連れて退避して下さい。タチバナさん。我那覇支部長、他退魔師をここに案内してなるべく早く結界を構築して下さい」

コイツは並の怪異ではない。

直感がそう告げていた。

いまのいままで気がつかなかった潜伏技術。

そして、先程なにかをされてから氣を纏うのがどこかきこちない影

響にこの現状。

戦局は第二局へと移行する。

鼠小僧に睨みつけながら俺もまた嗤っていた。

## 第陸拾漆話 鼠小僧

刀と爪がかちあい火花を散らす。

振り下ろされる爪を避け、その腕を切りつけるようと振り下ろす。ガキリと金属音を立て、手応えの感じない攻防に思わず舌打ちを漏らした。

「ある程度期待しておりましたがこの程度でしたか」

奴がニイと口角を上げると、瞬間さらに動きが早くなり爪の連弾が俺の皮膚を切り裂いていく。

「ふざけやがって」

誰だ。鼠小僧の位階を七とした阿保は。

今まで対応したどの化け物より素早く、頭が回る。

地の身体能力といい、切り付けられる度に霧散するように消失していく俺の氣に思わず舌打ちを放つ。

海坊主など目ではない。

ソレこそ、ぬらりひよんや玉藻クラスの化け物に思わず笑みが溢れた。

食卓に置かれたナイフをいくつか掴み鼠小僧に投げつける。

難なく全てを叩き落とされるももちろん期待などしていない。

「玉藻。寿命5年だ」

握る叢雲に声をかけると刀がカタリと震えた。

「生命の献上」

契約者の器を超える妖氣を借りるに必要な贄。

それだけ、目の前に立つ鼠小僧のえも言えぬ不気味さに俺は即決で贄を捧げる。

「早く寄越せ」

カタカタと震える刀に再度言葉告げると瞬間叢雲が紫色の光を放つ。

「あの方ってのはお前もぬらりひよんの使いか？」

光が靄へと変わり全身を包む。

腰から玉藻のような尾が4つ。

小麦色の耳が頭部に二つ現れる。

「あの方をハゲ坊などと一緒にするでないわ」

飄々と笑みを浮かべていた鼠小僧の顔つきが憤怒に変わり、ピクピクと頬を引き攣る。

「まあ、いい。待たせたな。第二形態といこう」

「半人半妖」

混ぜてならない。本来相反する精氣と妖氣が体内で完全に混ざり合い、俺は寧猛に笑って脚に力を込める。

「ぶっ殺してやるよ」

精氣のみの運用とは訳が違う莫大なエネルギーから生み出す刹那の跳躍。

まるで瞬間移動するように奴との距離を詰めて、その右頬に拳を放つ。

「ほう……」

感嘆の声を上げながら、鼠小僧はその一撃を避けることなく頬で受ける。

轟音を響かせ壁へと激突した奴が瓦礫を退けながら快活に笑った。

「いいですね。実に素晴らしい素質」

ぱちぱちぱちと拍手を打ちながらこともなげに悠然と立つ鼠小僧。

「そりゃ、どーもっ」

即座に追撃に移るため再び地を蹴り奴へ迫る。

紫色に光る叢雲を振り下ろすとガキンと爪と刃が交錯する。

弾かれる勢いをそのままに二撃、三撃と互いに撃ち合う。

骨が軋み、反動で肉が裂かせながら、互いの身体に切り傷を付け合う。

「そんなもんか」

お陰でスピードはやや俺の方が優勢になり、一太刀浴びると二太刀斬りつけ、ついには奴の片腕を切り裂いた。

「調子になるなよ」

衝撃で腕を引いた鼠小僧が切断された切り口を抑えた。

「復活はさせない」

隴火を傷口に飛ばし、焼き切る。

妖怪に対してある種天敵な、氣のみを燃やす火の玉。

着弾した瞬間ふわっと火の手が上がり鼠小僧は舌打ちをついて、自らの腕を肩から切り裂いた。

「だから調子にのるなど言っているだろう!!!」

跳躍し距離をとった鼠小僧が怒髪天をつくように叫び声を上げて氣を吹き出す。

切り裂かれた肩口がぎゅもぎゅもと不愉快な音を立てると中心から腕が再生された。

「人間風情が!」

咆哮を放つ奴の身体を四足のモンスターへと姿を変える。

突き出た前歯鋭利に尖り、全身紫色の鱗が身体を包む。

「コチラガ下手に出れば調子ツキヤガッテ!」

獯猛に唸り声を上げるクリーチャーの頭上から尻尾にかけて伸びるトサカ。爬虫類のようか眼球がギョロリとこちらを睨んだ。

「そっちの方が化け物らしくて俺は好きだぞ」

刀の峰で肩を叩き、挑発するように手で招く。

「無理に人語なんて話すなよ。」

化け物は化け物らしく叫んでな」

俺の言葉に怒り狂う怪物が鋭い爪で襲いかかってきた。

「玉藻、もう1年分だ。出し惜しみすんなよ」

そう言っつて、振り下ろされる爪を受け止めると刀で弾き返す。

刀身が更に輝きを放ち、形を太刀へと変化させる。

「化け物に変わっても対してスピード上がってねえなあッ!!」

ジリジリと押し合う中、俺が嗤う。奴の攻撃を刀でいなしながら、空いた脇腹に蹴りをぶち込む。

「グガッ!」

鈍い音が響き、吹き飛んだ奴の口から血が吐き出され、壁に激突す



る。

「ほら。もう1発」

朧火、現火、2種の火の玉を空中に作り出し壁にめり込む化け物へと射出する。

連続的な爆音が響き壁を壊し、更に奥へとめり込んだ。

「いっぺん死んどけ」

大穴を開けるソレに、刀を槍投げの如く後ろに掲げ渾身の力で投げ飛ばす。

ビュっ!!

光の如く射出された刃が穴の中心を通り鼠小僧の心臓へと突き立った。

「ギィヤァァアッ!!!」

断末魔の悲鳴と共に爆発が巻き起こり、辺り一面を炎で包みこむ。大気を燃やし、周囲の温度が跳ね上がるような灼熱の空間。

「これで終わりじゃねーよな?」

爆煙を睨みつけながらぼそりと呟く独り言にまるで返事をするように煙の中で跳ね上がる妖氣。

「まあ、そうだよな」

やはりというか何と言うか。

アレくらいでは殺せないらしい。

「全く。少しは大人しくして死んで欲しいものだな」

ゆらり。陽炎のように揺らめく影。

そこから現れた鼠小僧の姿を見て、思わず苦笑いを浮かべる。

胸に突き刺さった叢雲をそのままゆらり、ゆらりと歩み寄る足取りは力強い。

「辞めダ。オマエはクロス」

殺意に満ちた視線を向ける鼠小僧に俺は呆れたように溜息を漏らした。

「殺せんのか？そんなナリで」

腕を横に払うと呼応するように突き刺さった叢雲が火の手を上げる。

「退魔の火炎の一種だ。煉獄の焰に焼かれて消え失せろ」

「ニンゲンガアアアアアア!!!」

怒声を上げる怪物を包む焰が肥大し、瞬く間に全身を包み燃え焦がす。

一瞬にして天を着くほど火柱を上げて、瞬く間に小さくなる炎。

気がつけ空間には未だ紫色に輝きを放つ叢雲だけが残されていた。

「逃げたか」

手応えはない。

地に落ちた叢雲を取り上げてぼそりとその場で呟いてから瓦礫転がる床に仰向けに倒れ伏した。

「鼠小僧、やっぱいわ。あれぬらりひょんレベルじゃん」

口元に手を当ててクツクツと唾う俺は、そのまま、まどろみへと意識を手放した。